『死』を断定する少女

自殺志願

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『死』を断定する少女

【Ｎコード】
Ｎ９５６６Ｎ

【作者名】
自殺志願

【あらすじ】
唯一無二にして絶対的な能力を持つ少女は普通のごく普通の生活をおくっていた。いつもどおりに、バイトに行こうとすると、そこには銀世界が広がっていた。
暗躍する魔王と歪んだ勇者の王道ストーリ。
処女作です。見苦しところもあると思いますが。完結を目指し頑張りますのでどうぞよろしくお願いします。
総合ＰＶ２０万突破。

プロローグ（前書き）

この小説の主人公の性格や口調が話が進むにつれどんどん変わっていきます。
一応ちゃんとした理由はありますので、変わってきたと思ったら活動報告の方をお読みください。
それでは、歪んだ勇者と暗躍する魔王の物語をお楽しみください。

プロローグ

”それ”に気づいたのは7歳の時だった
その頃、少女は学校でいじめを受けていた。
数人の同級生から、机に落書きをされたり、教科書を取られたり、時には直接的な暴力をうけたりもした。
当時少女は両親が亡くなっていたため親戚の家に住んでいた。
この親戚も少女をよく思っておらずある程度のお金を渡すだけで特に世話を焼くこともなかった。
故に少女の精神ははどんどん追い詰められ、ふとしたときに「死んでしまえばいいのに。」と思った。
そして、次の日少女をいじめていた同級生が「原因不明で亡くなった」と担任の先生に告げられ少女は歓喜し「神様が助けてくれたんだ。」と舞い上がっていた。
しかし、それから数ヵ月後もともと悪かった親戚の夫婦の仲がさらに悪くなり少女への虐待を共通のものとした離婚ぎりぎりの関係になっていた。
また、前々からお金をもらうとき、「金食い虫」だの「早く死んでしまえ」なのど暴言を受けていたがこの頃からは暴力もうけるようになり、さらにもともとは少女の親の遺産からでていたお金も渡す量が減っていき叔父の酒代や叔母の衝動買いによって、遺産はどんどん減っていった。
少女は目に見えるようにやつれていき、小さくない怪我も多々負うようになっていた。
さらに、怪我を負うようになったことによりそれをからかう同級生が現れ再びいじめをうけるようなっていた。
担任の先生もいじめに関してわかってはいたが”自分のクラスでいじめがあっている”
というのは自分の評判が悪くなるのであえて無視していた。

助けようとした同級生もいたが同じようにいじめを受けたくないため少女に関わらないようになり少女は独りになっていた。
　そんな日を送っていたある日、叔父が酔った勢いで少女を犯そうとしていた。
その瞬間叔母も近くにいたがにやにやと見ているだけだった。
当時7歳だった少女が大の男から逃げらるはずもなく、少女は簡単に捕まった。
この時、再び少女は「死んでしまえ」と強く思った。
次の瞬間、急に抑えている力がなくなりすぐさま少女は逃げた。
何事かと思い叔母が近付き叔父の様子を見てみると瞳孔が開き、心臓の動きが止まっていた。
はっとして叔母は少女のほうを向くと少女は血走った眼で叔母をにらんでいた。
「ひっ！」
叔母はその眼に恐怖を抱き逃げようとしたが
「死んでしまえ！」と少女が叫ぶと叔母は糸の切れた人形のようにその場に倒れこんだ。
それを見て少女は自分の能力を自覚した。
「ははははは、あはははははははは！！」
少女は狂気に満ちた眼で高く嗤っていた。
「私を苦しめるものは皆すべて死んでいしまえ！」と大きく叫んだ。
その場には狂ったように笑う少女と動かなくなった肉塊、そして死んだような空気が漂っていた。
次の日少女をいじめていた同級生、また担任の先生も原因不明で死んでいた。
それから、親戚が死んだことにより少女を保護できる人がいなくなり施設に預けらるようになった。また、少女に関わりのある者ばかりが死んだことにより、警察は少女を疑ったが
原因不明の死や、アリバイがあることによりすぐに解放された。
この頃から、少女に関わったものは死んでしまうという噂が流れ誰

一人として少女に関わらなくなっていった。

８年後、少女は中学を卒業しそれと同時にバイトを始め施設を出ていくことになった。

「お世話になりました」そう言って頭下げ施設から新しく住むことになるアパートに移動した。

アパートに着くと管理人に挨拶をし、部屋に入って荷ほどきを始めた。

荷物といっても少量の衣類と、何冊かの本だけだった。

あれ以来、最低限の会話しかすることがなく他にすることもないので読書が唯一の趣味となっていた。荷物の中から本を取り出し読み始め気付いた頃には朝になっていた。

「バイトいこ」そういって少女はバイトに向かった

朝から夕方までバイトをして朝まで本を読むこれが少女の生活となっていた。

なぜ、寝なくていいのかというと、少女の能力は概念をも殺すことができ、また自分の能力をある程度コントロールすることできるようになっていた。このことに気付いた時の状態をを常に保てるように『自分の体の時の流れ』を殺し、殺した瞬間の体が固定した。（例え首を飛ばされても１秒後には固定されていた状態に戻る。）

故に、食事も睡眠もとる必要がなくどれだけ激しい運動をしても常にその時の状態を保つことができるので疲れることもない。

このことに気付いたのが１３歳のときであったがあまりに成長しないと不信がられるので止める必要はないとおもっていたが、施設を出ても行くとこがなく親の遺産も親戚にほぼ使われてしまっていてあまりお金がなく、しかたなく止めてしまった。

しかし、いまだに身長が小さく、もう伸びることがないと分かっていたが、どうにかならないか悩んだが結局どうにもならず１か月ほど落ち込んだ。

このような生活を送ること数カ月いつものように朝まで本を読みバ

イトに行こうと扉を開けた瞬間、
「あれ？」
一面に銀世界が広がっていた。

第1話（前書き）

第1章　旅立ち編の始まりです。

第1話

「ええっと、ここはどこなんでしょうか？」
あたり一面銀世界、少女が住んでいた地域は雪は降るもののここまで積もるものではないしなにより季節は夏であった。
「確か、バイトに行こうとして部屋から出たはずだけどいつの間にこんなところに？
これは夢、いやいや夢も何も私は1年以上寝てないし」
と呟きながら出てきたであろう扉を確認するために後ろを振り返る。
しかし、そこには何もなくやはりあるのは一面の銀世界。
「とりあえず適当に歩きますか。ここにいてもどうしようもないし。」
と言って適当に歩き始めた。
しかし、あたりに積もった雪は少女の膝元位まであり歩くのも困難である。
「ああもう、めんどくさいな。死ね」
そう呟くと少女が進む進路の雪がすべてなくなった。（正確にはなくなったわけではなく雪としての存在を殺され水になった）
「よし。これで歩きやすくなった」
そういうと再び歩き始めまた雪が邪魔になると雪を殺して歩き続ける。
そうして歩くこと1時間ようやく雪が足首位の高さまでになり
「おお、村だ。ようやく状況確認ができる。しかしほんとにここどこだろ日本ではないようだけど。まぁ、考えても仕方ないか、とりあえず村にいこう！」
と村に入った。
しかし、そこで予想斜め上の状況になっていた。
狼みたいな生き物が１０匹程村の中にいて村の人を襲っていた。
周りは狼に喰われたのか人の残骸がそこらじゅうに転がっており腐

臭がしていた。
「うわぁ。これ実際見ると意外と気持ち悪いなぁ。死体なんてどれも同じだと思ってたけど、やぁ、やっぱ違うなぁ。」
とのんきに呟いていると。狼がこちらに気付いたのか襲いかかってきた。
「死ね」
と短く呟くと３mはある巨体が少女の目の前で動かなくなった。
「はぁ、せっかく人がいるかと思ったのに無駄足かなぁ」
と相変わらずのんきに独りごとをいっていると
「きゃあああああ」と女の声がした。
「おっ。まだ生きている人いたんだ。ラッキー♪」
そう言って声のするほうに向かった。
少女の周りには狼に囲まれているがそんなことはどうでもいいかとばかりに声のほうに向かっていく。
もちろん狼は少女めがけ一斉に襲っていくるその数は3匹、普通の人ならその場で走馬灯が流れるところだかこの少女にそんな常識など通じるはずもなく。
「邪魔だなぁ。死ね」
やはり短く呟くと3匹の狼は動かなくなった。
そして、声のするほうにいってみると１５歳くらいに見える少女と着けている鎧がボロボロになり満身創痍となっている男が１０匹の狼に囲まれており、その周りには同じ鎧を着た人が何人も死んでいた。
「あれってお姫様かなぁ。死んでる人騎士っぽいし、でもなんで物語のお姫様って可愛いいのかな？　なんでも他のひとにやらせて豪華な食事とったら太るでしょ？　世の中の女性に喧嘩売ってるよね～。」
と必死になっている女の子と鎧をきた男に喧嘩を売るってるかのようにのんきに呟いていた。

「まぁ、状況確認するまで死なれても困るし助けますか。」
そういって狼が囲んでいる2人のもとに歩いていく。
そして鎧の男が気付いたのか
「君、早く逃げなさい」
と叫ぶ。
「いやいや、そうやって狼の意識こっちに向けないで下さいよ。いってることとやってること矛盾してますって。」
と軽口を叩きながらどうどうと狼が囲んでいる輪の中に入っていく
「ところでここってどこですか。」
ともう狼の存在など眼中にないかのように話す。
「何を言っている!なんで逃げなかった!」
「うるさいですね。質問に答えてくださいよ。もう一度聞きますここは「ガァーー」うるさいですね。今、お話中なので黙ってください。」狼が一斉に襲いかかっているというのに心底めんどくさそうに言う。
「くっ!お譲さまお逃げください。おい君!「なんですか」お譲様と一緒に逃なさい!少しだけ時間を稼ぐ」
そう言って鎧の男は狼に突っ込み先頭の狼に持っていた剣で斬りかかる。
「燃えつきろ!」鎧の男が手をかざすと炎の塊が狼たちを焼きつくす。
しかし、それでも2匹程度しか殺せない。
「おおぉ!今の魔法ですか!ファンタジーですか!剣と魔法の物語ですか!」
若干興奮気味に言う。
「何をしている!早く逃げなさい!」
切羽詰まった状態だというのに無駄に興奮している少女に怒鳴る。
「そんなことどうでもいいです。もう一回さっきのやってくださいよ。」
読書好きな少女にとって魔法は生きている間に（とはいっても体の

時間が固定されているので基本的に死なないが）一度は使って見たいといつも思っていた。
少女の能力も十分に魔法だが。
「いまので最後だ！いいから早く逃げなさい！」
「しょうがないですね。今度またみせてくださいね」
そういうと。
「死ね」
と少女は呟く。
そして、狼はすべて動かなくなった。
鎧の男は何が起きたのかわからずに呆然としているところに、相変わらずのんきに
「というか、いい加減質問に答えてくださいよぉ。」
鎧の男ははっとして
「君はなにをした」
驚愕と若干の恐怖を含んだ声で言った。
「そんなことどうでもいいじゃないですか。さっさと質問に答えてください。
殺しますよ」
わずかだが苛立ちながら言った。
「あ、ああ。ここは、クレンド王国の最北端の町フェｎ「ああ、もういいです。」えっ！」
「はぁ、日本ではないと思っていましたが、まさか地球ですらないとは。はぁ～。
まぁ、落ち込んでても仕方ないので今からのことを「おい」考えましょう。
とりあえず食事の心配はありませんし「おい」体は固定されているので特に寒くもありませんし、あぁ、でも魔法はつかってみたいｋ「おい！」なんですかさっきから。」
「君が何度も無視するからだ。そんなことより頼みが「ヤです。」
頼むから最後まで聞いてくれ。」

「だか断る！。」
ときっぱりいい。男の顔に落胆の表情が出たかと思えば。
「きゃ～、このセリフ一度使ってみたかったですよね～。よし満足しました。で、なんですか。」
と真面目に話している人を心底馬鹿にしたようなことを言う。
「ああ。さっきのホワイトウルフを倒した腕前を見込んで頼みたいことがある。」
すでに怒る気力もなくなったのか、諦めたような口調で言う。
「なんですか？。めんどくさいのはヤですよ。」
結局あれだけ人を馬鹿にしても、やっぱり断る気しかない少女であった。

第2話（前書き）

ようやく主人公の名前が登場

第2話

「めんどくさいのはヤですよ。」
「私はこのとおりもう残された時間が長くありません。そこで、あなたにお嬢様を国の中央にあるリゼンという町の御屋敷まで護衛「めんどくさい」してもらいたいのです。」
いちいち突っ込んでは負けだとわかったのか少女の言葉を無視していった。
「もちろんお礼は致します。」
「誰が」
「「私が」と言いたいところですが私はもうすぐ朽ちる身お嬢様に話を通しておきます。
護衛が終わり次第お嬢様より受け取ってください。」
「めんどくさいです。」
「そこをなんとかお願いいたします。見たところ、ここがどこかわかっていないご様子ですしお嬢様の護衛を受けてくだされればお嬢様が町まで案内します。」
「ぐぅ～。分かった。分かったよ。受けます。受けます。受けさせていただきますよ。」
お礼などどうでもよいが、この世界の常識など全く分からない少女にとって案内してくれるのはかなりありがたいので不承不承ながらも依頼を受けた。
「ありがとうございます。お嬢様。」
「！」びっくと体を震わせこちらにやってくる。
「お嬢様。私はもう動けません。だからこの先この方に護衛をお願いしました。条件としていろいろありますが、それはこの方から聞いてください。」
「オスカー！」
泣きながら叫んでいるお嬢様の頭をなでながらこちらを向き。

「後は、お願いします。」
「はいはい。1度受けたからにきっちり守りますよ。」
少女が今までになく真剣な表情でいう。
「最期にあなたの名を教えてくれませぬか。」
もう限界が近いのか息も絶え絶えな声で尋ねる。
「沙耶よ。神凪沙耶。あぁこちらではサヤ・カンナギになるのかしらね。」
「サヤ殿、お嬢様を頼みます。」
「お嬢様。後のことはサヤ殿にお任せします。強く生きてくだされ」
そういうと眼を閉じ静かにその生命を終えた。

ーーーーー数時間後ーーーーーーーーー

「もう大丈夫なの?」
「はい。オスカーの死を無駄にしないために生きて御屋敷に帰ります。」
先ほどまで泣き崩れていたものとは思えないくらい強い眼をしていった。
「そう。ところでまだ名前を聞いていなかったわね。私はサヤ・カンナギ、あなたは?」
「わたしは、エルー、エルー・ツェッティと申します。」
「そう。よろしくね、ツェッティさん。」
「はい。こちらこそよろしくお願いしますサヤさん?。ええと、なぜ家名で?。ここは流れ的に名前で呼び合ってあいさつを交わすのが物語の定番では?」
「いや、初対面の人といきなり名前で呼び合うの恥ずかしいし／／／／」
今まで、噂の存在があり学校では友達などおらず、むしろ噂の存在

を知りながらあえてちょっかいを出す輩がおり軽口や挑発などは得意であったが、善意をもって接してくる人は今までに誰一人としておらず、そういう人に対するコミュニケーション能力は皆無である。そんな沙耶に善意をもって接しなおかつ、初対面、自分の常識が通用するか分からない良家のお嬢様、これだけの条件がそろったエルーとコミュニケーションをとることは沙耶にとってもはや不可能と言っていいほど難易度が高かった。

しかし、そんなことは全く知らないエルーはサヤに詰め寄り手を握り顔を覗き込んで

「いや、名前で呼ぶだけですよ！　どこが恥ずかしいんですか！　というか目を合せてくださいよ！　サヤさん。」

「いやああー！！。やめてそんな純粋な目で私を見ないで。名前で呼ばないで。手を握らないで～／／／／／／／／」

いつも漂々として、掴みどころがない沙耶がどんどん追い詰められていく。

距離を置くどころかさらに顔を近づけ、手を強く握り

「サヤ。サヤは私を守ってくれるんでしょ。なら私と目を合せて話す必要があると思うの。

オスカーから聞いた条件も聞く必要もあるし。それに私サヤとお友達なりたいの。ね。サヤはどう思う？」

もはやあと少し近づけるだけでキスすらできる距離でとどめの一撃を放つ。

首をみてなんとか目を合わせずに後ろに後ずさりながら

「う、うん。わかった。分かったから。オスカーさんと約束した条件を話すからちょっと離れて／／／／」

顔を真っ赤にしながらなんとか答える。

「サヤ目を合せて話して。それにお友達になりたいっていう質問には答えてないわよ。」

顔を固定し、すでにＬＰ０の沙耶に追い打ちをかける。

この時のエルーは、状況を知らない人が見たら１００人中１００人

が見とれるような笑顔をで、状況を知っている人がいたら新しいおもちゃを見つけた子供のような笑顔で沙耶の顔をみつめていた。
顔を真っ赤にしながら少しだけ目を合わせようとする。
そして、目が合った瞬間
ボンという効果音が発生したかのようにさらに顔を真っ赤にして拘束から逃れようとする。
「無理。無理無理。無理無理無理無理。無理無理無理無理

１５年生きてこれ以上ないくらい切羽詰まった勢いで叫んだ。
「そう。じゃぁよろしくねサヤ。」
「よろしく。ツェｔ「キスしよっかな～」エ、エルー／／／。」
この日沙耶に初めての友達?ができた。

おまけ

「ところでサヤいつまでそうしてるの。もしかして誘ってる?」
今の沙耶の状況は上の服は着くずれ、下のスカートからは下着がちらちら見え
全身を赤く火照らせ、呼吸を乱し、涙目上目使いでエルーを見ている。
ロリ○ン趣味の人なら間違いなく襲いかかるような格好である。
沙耶は瞬時に服を元に戻し起き上った。
「ん～。もうちょっとみてたかったのになー♪」
エルーには逆らわないでおこうそう誓った日でもあった。

第2話（後書き）

若干やりすぎかなぁと思ったりしますが、後悔はしていない！
感想お待ちしています。

設定資料

神凪沙耶（かみなぎさや）

性別　女

年齢　１５歳

身長　１５０ｃｍ

体重　？？？

外見　　イメージ的にはひ○らしのにぱー☆とか言う腹黒狸。

好き（得意）なこと（もの）
読書、言語の習得（現在英語、ドイツ語、フランス語を習得）

苦手（嫌い）なこと（もの）
エルー　めんどくさいこと

性格
幼いころに虐待やいじめを受けその相手を殺してしまったことによって、死に対する恐怖感が全くない。一時期殺してしまった罪悪感囚われることあったが悩んでも仕方がないと思い現在では人を殺すことに罪悪感を感じない。あの事件以来能力で生き物を殺したことはないがやるときめたら容赦はせず殺す。また、沙耶に関わると死ぬという噂のせいで善意をもった人と接する機会がなくそういう人とコミュニケーションをとることが苦手。逆に敵意をもった相手には軽口、挑発、毒舌を容赦なく相手を滅多打ちにする。

ささやかな悩みとして成長を止めてしまった体がもう少し大きくならないかとおもっている。

能力
死の宣告
あらゆるものに死を与えることができる。
射程距離などはなく沙耶が認識できさえすればどんなものでも殺すことができる。
沙耶は自身の時の流れを殺しており、当時の体から時間が流れず固定されている。
故に全力で走っても全然疲れない。例えば何か食べても飲み込んでしまえば消えてしまう。
また、概念すら殺すことができる。例えば剣で斬ろうとした時その剣の”斬る”という概念を殺してしまえば斬ることは不可能になる。
この能力で自身を殺すことはできず、また固定されているので、実質沙耶は不老不死。
しかし、この能力は手加減は一切できず殺すことしかできない。

エルー・ツェッティ

性別　女

年齢　１６歳

身長　１６０ｃｍ

体重　？？？

外見　某運命に出でくる、切れると髪が白くなり黒い笑みを浮かべる人

性格

少し内気な性格だがやる時にはやるといった芯が通った強い少女、父が国の中でかなりの発言力を持っている父を尊敬している。しかし、家が有名なせいで同年代の友達はおらず、周りの大人は自分を利用しようとするものばかりなので友達がおらず、異世界から来て何も知らず普通に接してくれる沙耶の存在が嬉しく無理矢理友達にした。もとは内気なのだが沙耶など可愛い娘をいじるときには口調が変わり若干S気がでる。

好きなこと（もの）
沙耶　両親　可愛いもの

苦手（嫌い）なこと（もの）
自分を利用しようとする大人

世界

中央に大きな大陸がありそれをクレンド王国と、アトラス王国で2分割している。
中央の大陸から南西の方向に一回り小さい大陸がありカルーンという国がある。
中央の大陸から北の方向にも一回り小さい大陸があり、この大陸には多くの魔物や魔族が住んでいるため、人は住んでいない。
クレンド王国、アトラス王国には人族が大半を占めており、他の種族が少しだけ住んでいる

カルーンには人族以外の様々な種族が住んでおり、政治はそれぞれの種族の代表が行っている。

世界観

１００年前まで人族と他の種族の連合軍が戦争を行っており、約８０年前に終戦した。
この戦争は２０年間続き両方の軍に多大な被害を及ぼし、この戦争を切っ掛けに当時平和主義であるクレンド王国と非平和主義であるアトラス王国に分かれた。
現在ではアトラス王国も平和主義となり他の2国とも友好な関係を結んでいるが、しかし、一部の人間はいまだに戦争を起こそうとしている。
５０年前に北の大陸に魔王と名乗る魔族が現れ、中央の大陸に攻め込んできたが、
全ての種族が力を合わせ撃退、北の大陸に封印した。
現在は大陸そのものに結界が張られそこに住む魔物も魔族もでることはでない。。
この戦いをきっかけに、種族間の差別は減ったが、人族は他の種族を奴隷にしたり
他の種族は他の種族で力の弱い種族を差別したり、いまだに根強く残っている。

魔法

この世界の魔法は火、水、風、土、雷、光、闇、無、の８つの属性があり
どの属性の魔法も使うことができるが得手不得手がある。
発動方法としては、イメージしたものを魔力で放つといったもので詠唱などはイメージを安定めるためにするもので中級魔法以上の時

にしか使わない。
魔法の階級としては、初級、中級、上級、精霊、といったものがあり上級魔法は才能＋膨大な魔力がないと扱えず、精霊魔法は精霊の一部を召喚する魔法。その力は絶大で精霊魔法を扱えるものは１人でドラゴンを倒せるほどの力をもつ。人族の中で扱えるものがおらず、扱えるのは、各精霊の眷族の一部の者だけである。

ギルド

階級はF～Sクラスまであり、クラスを上げるには同じクラスの依頼を１０回、一つ上を5回、２つ上を3回、３つ上を1回、どれかひとつこなす必要がある。
Aランク以上は２０人おらずSランクに至っては5人いない。
Aランクの依頼はドラゴンの討伐など国を挙げてやるレベル。
Sランクの依頼はドラゴンの中でも最上級である古龍種などを討伐するレベル
これは天災クラスの強さを持ち、Sランクの依頼が起きるとSランクの者はすべて集められ
すべての国が一丸となって挑むレベル。
Sランクの依頼が起きたのは過去魔王が現れた時のみである。

常識

銅貨＝百円　銀貨＝千円　金貨＝１万円　白金貨＝百万円
白金貨は貿易などのときなどにしか使われず、普通は、金貨までである。
時間は地球と全く同じ1日２４時間、１年３６５日。
町並みは中世ヨーロッパのようなところで科学ではなく魔法が発展しており
当時の地球より若干栄えている。

第3話

リゼンに向かおうと村の残骸を漁っているときに、ふと思い
「ところで、いまさらなんだけどなんでこんなとこにいるの？」
「本当にいまさらですね。」
若干呆れ気味に答えた。
「まぁいいじゃないですか。おっ！食糧発見。他に何かないかな～」
村の人たちや騎士たちの死体をそのままにしておくのはいくらなんでも可哀そうだと思い沙耶が肉体の存在を殺し分子レベルまで分解した。
なので、今この村で存在しているのは沙耶とエルーだけである。
そして、旅立とうとしたのだが、何も持たずにリゼンに向かうのは沙耶は可能だが普通の人間であるエルーには厳しいなので申し訳ないが村の人たちの家から物資をいただこうと沙耶が提案した。
そして、沙耶はこれぞＲＰＧだといわんばかりに家の中を漁っている。
それを見て、呆れているエルーだが実際には自分のためなので割り切ってエルーも家の中を見て回ることにしていた。
「はぁ～。私はこの村に望んきたわけではありません。隣のアトラス王国のパーティーに招待されて帰る途中に襲われたのです。」
「それで？」
「襲われた当初は他にも騎士たちがいたのですが、何度も襲撃を受けどんどん北へ追いやられんです。それでも、国境を越えれば安心だと思っていたのですが、何故か行く先々で待ち伏せをされていて、これでは埒が明かないと護衛隊長が二手に分かれ片方がおとりになり片方が北から迂回してリゼンに向かおうと言い出したんです。」
「でもそれって逆に危なくない？　戦力の拡散なんてその状況でやることじゃないでしょ？。それに、リゼンに近づけば町の人たちに助けてもらえるわけだし。」

「はい。オスカーもそう進言したのですが護衛隊長が無理矢理に意見を通し、私たちが北から迂回することになったんです。それから、この村に来るまで襲われることもなく無事に帰ることができると思ったら突然ホワイトウルフの群れが襲ってきまして、本当にサヤが来てくれなかったらあそこで死んでいたと思います。」
「ふ～ん。でも、ホワイトウルフってそんなに群れて行動するの？　こんなに簡単に村の人が殺されるってことは、群れるとしてもあまり被害がなかったんじゃないの？」
もうすでに住む人がいなくなったとはいえそれでも数日前まで人が住んでいた家である多少の常識があれば少しは遠慮するのだが、沙耶にそんな常識は通用しない、何の遠慮もなしに家を漁りながら質問を繰り返す
「ホワイトウルフの習性はわかりませんが確かにあれだけの脅威に対して何の対策もとっていないのはおかしいですね。もしかしたら魔物使いでもいたのかもしれません。」
そんな沙耶を見てなにかふっきれたのかエルーも必要なものを探し始めた。
「ということは、やっぱり隊長さんが裏切り者？」
「はい。確証はありませんがだぶんそうなのでしょう。他にも数名いたと思います。」
「狙われる心当たりは？　こ、これは／／／／」
「私のお父様はクレンド王国でもかなり発言力のある貴族です。なので娘の私が狙われる理由は山ほどあります。ところで何か見つけたんですか？」
「い、いやなんですよ。でも、それなら殺そうとせず誘拐しようとするんじゃないの？」
若干挙動不審になりながら話題をそらす。
「いえ、そうとも言えないんです。お父様は不正を行っていた貴族をいくつも暴きだし
いくつかの貴族を没落させているんです。だから、復讐のためとい

う線も考えられるんです。なにげに話をそらしましたね。」
ちゃっかりと追及するエルー。
「なるほど、じゃあ今の段階では何も言えないわけか～」
エルーの追及を無視しながら話を切る。
「ええ、だから今はとにかくリゼンに帰り、このことをお父様に報告しなければいけません
サヤ何か隠し事してますよね。いったいなにをみつけたんですか。」
物色するのはやめ沙耶のほうに近づいていく。
そして、あからさまに焦りながら
「い、いやほんとになにもないから！！」
「そんなに慌てて何もないわけないじゃないですか♪」
S気のある笑みをうかべながらさらに近づいていく
「ほ、ほら珍しいものみつけたから。」
誤魔化すように変な生き物が入っているビンを出す。
「あぁ、これはだしをとってるんですよ。何だ見つけたのはこれだったんですね。」
なおもS気のある笑みを浮かべながら答える。
「う、うん。あっちじゃ珍しいから。」
沙耶は異世界からきたとすでにエルーに伝えている。
最初は戸惑っていたエルーだが来ている服や不思議な力をもっていること、この世界について何も知っていないことから今はこのことを信じている
「そうですか。こっちじゃ有名なんですけどね。」
「そ、そうなんだ」
誤魔化しきれたかと安堵したとき、エルーは沙耶が後ろに隠している物を素早く取った。
「あっ、ああ！！」
慌てて取り戻そうとするが、身長の差は歴然とし手が届かずもがいている。
「これは、本ですか？　なんでこんなものを？」

そういって、本のページを開く。
その本の中身は猥本だった。
沙耶は顔を赤くしながら下を向いた。
「へぇ～。サヤってこういうのに興味あったんだ～。」
口調が変わりいかにもこれからいじりますよという雰囲気をまとう
「／／／／／／」
沙耶は恥ずかしすぎて何も言えず下を向いている。
そこに、Ｓモード全開で
「サヤったら、友達なんだからいってくれればいいのに。大丈夫サヤも年頃なんだからこういうのに興味を持つのは何の不思議もないわ。」
沙耶の顔を両手で包み顔を上げる。
顔を真っ赤にし涙目で見上げてくる。
それを見てさらに加虐心が湧いたのか
「ふふっ。ここに書いてあることを実践してあげよっか♪」
顔を耳元に近づけ囁く
「／／／／／／／／／／／／」
囁かれた瞬間すぐさま手を振りほどき逃げようとする。
しかし、その行動を読んでいたのか腕をつかみ押し倒す。
（ああっ、可愛い、可愛すぎます。ほんとにやってしまおうかしら）
エルーは暴走気味な思考を浮かべ押し倒した沙耶の顔を見る。
（ダ、ダメ～／／／。エルーは嫌いじゃないけど、あれ？　嫌いじゃないなら別にこのままされても／／／／／／）
沙耶は沙耶で状況についてゆけず混乱し自暴自棄になりかけていた。
沙耶の顔は真っ赤になり、目はうるうると涙を浮かべ、息を荒くし熱っぽい視線でエルーを見つめている。
そんな沙耶をみてプチンと何かが切れ
「サヤ、キスするね。」
そういって、沙耶の顔に手を添え顔を近づける。
沙耶は混乱しているのか抵抗せず目をつぶった。

そして、だんだんと顔が近づきお互いの吐息が感じられる距離に近づいた時
「きゅ～」
沙耶が混乱のあまり気絶した。
「サヤ、サヤ！　ちょっとからかいすぎちゃいました?」
気絶した沙耶ををゆするが返事がない。
（はぁ～。危なかった。沙耶が気絶しなかったら今頃／／／／）
のりのりでやっていたが意外と初なエルーであった。

第3話（後書き）

沙耶とエルーの関係はこの辺りまでで止めておくべきか、行くとこまでいってしまうか悩みます。感想とアドバイスをお待ちしております。

第4話

「さ、さてだいたい物資は集まったしそろそろいこうか／／」
「そ、そうですね。行きましょう。」
沙耶が目を覚ました後、お互いどこか気まずく、ぎくしゃくしていた。
沙耶に至っては、先ほどのことを思い出しては顔を赤くし、まともにエルーの顔をみれないでいた。
エルーはエルーでそんな沙耶を見ては
（可愛い！　可愛いですよサヤ。）
などと興奮し押し倒してしまうかと考えてしまうが、それでは先ほどの二の舞になってしまうので必死にこらえている。
「ところでサヤ、こんなに多くの荷物どうやって持っていくんです？　馬車なんかありませんし、私は身体強化すれば持てないことはないですけど、1時間持ちませんよ。」
「それに関しては考えがあるから大丈夫。」
ようやく立ち直り、村の外にでる。
「それで、どうするんですか？」
「うん。今から私に合わせて歩いて。」
「はぁ。」
「いくよ。」
二人同時に歩きだす。
「えっ！？」
数歩歩いただけなのに景色が変わり後ろを見ると先ほどまでいた村が遠くに見える。
「よそ見しないで、きちんと合わせないと危ないよ♪。」
いつも、からかわれているので、エルーの驚いた様子が嬉しいのか機嫌がいいらしく、さらに驚かせようと先に歩いてゆく。
「ちょ、ちょっと待ってください。」

慌てて沙耶を呼び止めるが、
「ほらほら、早くリゼンに着きたいんでしょ♪」
もうすでに先ほどまでいた村は見えなくなり周りの雪もほとんどなくなっている。
「お願いです。ちょっと待ってください。」
「だめだめ♪」
さらに機嫌が良くなりどんどん調子に乗っていく。
「サヤ。」
沙耶の背筋に寒気が走り歩みを止め恐る恐る後ろを振り向くと
「サヤっていたずらっ子なんですね。」
笑顔でいっているが目が全く笑っておらず、
「そういうことをするんでしたら、こちらだって考えがありますよ。」
絶対零度の声が沙耶の体硬直させる。
「ご、ごめんなさい。私が悪かったです許してください。」
「はい♪　ところでさっきからなにをやってるんですか？　ただ歩いているだけなのにもう雪がないところまできてますけど。」
「ごめんね。これぱっかりはエルーにも教えられない。」
いつになく真面目な声で言う。
「・・・分かりました。無理矢理には聞きません。でもいつか教えてくださいね。」
「時が来たらね。」
そう閉めると再び歩き始めた。
やはり、数歩歩くだけで距離にして２ｋｍほど進んでいる。
これは、沙耶が、現在地と目的地にある空間を殺し世界が歪みを正そうと現在地と目的地の空間をつなげているためである。そのため１歩歩くだけで殺された空間分を歩いていることになり瞬間移動をしたかのように目的地までたどり着けるというわけである。
（補足すると現在地と目的地の空間を繋げそのあと空間を伸ばすこ

とにより世界は歪みを正している。）
しかし、これを説明するには沙耶の能力を説明しなければ、説明は無理であり、
まだ、能力の説明をためらっているので教えることができずにいた。
「ところで、街道を沿って歩いているけどこれでリゼンに着くの？」
「はい。途中でアムールという町を仲介し、リゼンに向かいます。」
「あとどれくらいでアムールに着けそう？」
「さぁ。こんなにペースが速いと正確にはわかりませんがたぶんあと１０分くらいで着くんじゃないでしょうか。」
「近っ！　荷物必要ないじゃん。」
「当たり前です！　３秒で２？も移動するならそれくらいで着きます！」
「ご、ごめんなさい。で、でもこれ他の人がいると使えないよ。」
「なぜですか？」
「そういう仕様なんで。」
ちなみに人がいるところで使うと空間ごと人を殺してしまうためである。
「はぁ～。わかりました。詳しくは聞きません。」
「ありがと。」
そういって歩き続ける。
「そういえば、魔法って誰にでも使えるの？」
「はい。魔力さえあればあとはイメージすれば使えます。」
※魔法の説明は資料で確認してください
ーーーー説明中ーーーーーーーー
「なるほど、ちなみにエルーはどれくらい魔力あるの？」
「私は、魔法使いの平均的な魔力量と同じくらいです。ちなみに得意な属性は闇と水です。
どちらとも、攻撃するような魔法は苦手ですけど・・・。」
「どんなことができるの？」
「水に関しては、治療です。闇に関しては相手を呪うことができま

す。」
「えっ！」
少し距離を置くようにエルーから離れる
（やっぱり、腹黒いからかなぁ。見事に表と裏がある。）
「なにか失礼なことをかんがえませんでした。」
「いえいえ！！なにも。」
「そうですか。ちなみに呪いといっても相手を殺すようなものは使えません。
使えるのは、目をみえなくした、動きを止めたりするもので、どれもあまり長く効果はありません。」
「へぇ～。じゃ、私ってどれくらい魔力あるの？」
「さぁ。私より大きいということはわかるんですけど、正確にはギルドで測ってもらわないとわかりません。幸いアムールにもギルドはありますからそこで測ってもらいましょう。」
「そうだね。でもそろそろ人が見えてきたからこの移動法は使えないみたい。」
「それなら仕方ありません。ゆっくり歩いていきましょう。この辺りはもう寒くもありませんので寝ても大丈夫そうですのでしょう。」
「エルーって野宿して大丈夫なの？」
「経験はありませんが非常時なので我慢します。」
「そっか。じゃ、もう少ししたら休もうか。少し荷物貸して身体強化してもってくから。」
「できるんですか？」
「想像力ならだれも負けない！！」
幼いころから本ばかり読んでいるので想像力は豊かであるが
「あれ？　なぜ？　かからない。」
「おかしいですね。程度の差はありますけど魔力さえあれば子供でもできるんですが。」
「はっ！　まさか！」
何度か繰り返し身体強化をかけようとするが

「だめだ～。くそぅ、体の時間の流れ止めなきゃよかった。」
体が固定されているせいで、身体強化かけてもすぐに元に戻ってしまう。
さらに、何気にまずいことを言っているが激しく落ち込んでいるため気にせずぶつぶつ呟いている。
（体の時間を止める？　サヤの能力のことでしょうか？　考えても分かりませんし、教えてくれるまで待つことにしましょう。）
「サヤ。私が持つから大丈夫ですよ。」
「うぅ～。お願いします。」
泣く泣く荷物を渡す。
「いいですよ。サヤは私を守ってくるんですから、これくらいは私がやります。」
「うぅ～。ありがとうエルー。」
それから1時間くらい歩き
「今日は、これくらいで休もうか。」
「そうですね。もう魔力も尽きかけてますから助かります。」
「エルー、火起こせる？」
「はい。それくらいなら。」
そういうとテニスボールくらいの火の玉をだし焚き火に点火する。
「ちょっと待っててね！　ご飯作るから。」
小さいころからお金だけを渡されていたので必然的に料理はできるようになっていた。
「お願いします。ちょっと疲れたので休みます。」
「わかった。できたら起こすから。」
そういうとエルーはすぐに眠っていしまった。
「ずっと荷物もってたからな～。よし！　おいしいご飯作ってあげよう。」
気合を入れ持ってきた荷物から食材を取り出す。
「あれ？　これどうやって調理するんだろ・・。」
幸先不安な料理の始まりだった。

第４話（後書き）

次話は教授に更新します。

第5話

「よし、後は煮込むだけ。」
調理が終わり完成を待つだけになった料理を眺めながら座っていると
「そこの女。金目の物を全部出しな、そうすれば命だけは助けてやるよ。」
数人の男たちが現れいかにも盗賊ですよといわんばかりの格好とセリフを言う
「３５点です。格好とセリフがあまりにもありきたりすぎます。出直してきてください。」
そういうと鍋のほうをみて完成を待っている。
そんな様子に簡単に沸点を通り越し
「あぁ！！。調子にのんじゃねーぞ！！」
またもありきたりなセリフを放つ
「いい加減にしてください、寝てる人がいるんです。それと１０点です。学習してください。」
若干苛立ちながら、しかし、採点は忘れずに言い放つ
「もう我慢できねぇ、ぶっ殺し「０点です。あなた馬鹿ですか？」ぶっ殺してやる！！」
怒りのあまり顔を紅潮し言いなおしてもありきたりなセリフを叫ぶ
「はぁ～。めんどいですね～。」
のんきに呟く沙耶に盗賊Ａが剣で斬りかかる。
「死ねやー！！」
剣が沙耶に触れる直前
「は？」
いきなり剣が真っ二つに折れる。
これは、沙耶が剣としての存在を殺したために起きたことだが、そんなことが盗賊たちに理解できるはずもなく
「てめぇ何しやがった！！」

「はぁ～。いい加減に切れますよ。何回言えばいいんですか！！
セリフがありきたりすぎます！！　いい加減にしないと採点しませんよ！！」
沙耶は真剣なつもりなのだが、盗賊たちは馬鹿にされているとしか思えず
「てめらぁー！！　こいつを殺「もう黙ってください。」・・・」
もう言葉に出せないほどブチ切れて一斉に襲いかかるが先ほどと同じように剣やナイフは
真っ二つに折れる。
「そうですね～。何度言っても理解しないあなたたちには、魔法の実験台になってもらいましょう。」
そう言って立ち上がり
「う～ん。どれにしますかね～。「死ねー！！」よし、決めました。」
一斉に襲いかかってきている盗賊のほうを向いて
「ライトニングバインド」
雷でできた輪っかで盗賊全員を囲み放電
「「「ぎゃあああああ！！」」」
そこそこの魔力量をもつ沙耶は全魔力をつぎ込み放電を続ける。
本来なら全開でいけばすぐに魔力切れで消えるのだが、沙耶の体は時間が流れてもすぐに
固定された状態に戻る、これは魔力にも適応され全力で使ってもすぐに全快の状態に戻るので初級の魔法でも多大な魔力をつぎ込むことによりかなりの威力になる。
普通の人から見れば中級魔法を使ったほうが圧倒的に効率がよいのだが、
現在中級魔法は教わってなく、代用としてこの方法でどれ位の威力が出るか試したかったが魔物も現れずいたので試せずにいたのだが、そこで登場した盗賊たち、
しかも、ありふれたセリフを連発、これぞ神の思し召しそう思い容

赦なく放電を続ける。
「「「ぎゃあああああ！！」」」
「やっぱりありきたりですね。もういいです。「フレイムボム」」
かなり大きな炎の塊をしびれている盗賊めがけ投げる。
強烈な音と爆風が盗賊たちを襲いポケ○ンに登場するロケッ○団のごとく星になった。
「ふむ。やっぱり魔法の名前は言ったほうがイメージしやすいですね。「サヤぁ」あっ、
エルーちょうどよかったご飯できたから食べよ。」
あれだけ盗賊たちが大声を出していたのに全く起きる気配がなかったエルーは、かなり
寝起きが悪いらしく、まだ目をしょぼしょぼしていた。
「はい。エルーあったかいうちに食べて。」
「いたたきます」
ようやく覚醒してきたのか料理を受け取り食べ始める。
「ん。おいしい。あれ、サヤは食べないの？」
「私は食べなくても大丈夫だから」
「ダメ！！　ちゃんと食べなさい！！」
「いや、だから「食べないと口移しで・・」はいわかりました。いたただきます。」
「よろしい。」
こうして、旅立ちから1日目の夜は更け行く。

おまけ

「ところでサヤ？　なにかあったの？」
「あぁ。ありきたりなセリフばかりを吐く盗賊たちがいたので魔法の実験台になってもらいました。」
「へぇ～・・・。「もぐもぐ」ってええー！！」
「食べながら話すのは行儀がよくないですよ。」

「あぁ。ごめんなさい。じゃなくて盗賊！！　大丈夫だったのサヤ。」
「はい。最後は星なりました。」
「はぁ～。なんで起こしてくれなかったの？　私だってちょっとくらいは戦えるのに。」
「いや。あれだけの音で起きないってどんだけ眠り深いんですか。」
「えっ、そんなに大きな音なってた／／。」
「はい。これ位。」
そう言ってフレイムボムを作り、空間を殺し５００ｍくらい離れたところに投げる。
それだけ離れていてもかなり大きな音が聞こえてくる。
「・・・ごめんなさい。」
「いえ、いいですよ。護衛がするのが私の本来の役目なんで。」
「で、でも可愛いサヤに傷でもついたら・・。」
「／／／／いきなりそんなこと言わないで！！」
「ふふっ。照れてるの？　やっぱり可愛い♪」
「／／／／／／」
こうやって夜は更け行く。

第6話（前書き）

ついに、黒幕の登場です

第6話

ｓｉｄｅ：？？？

「さて、これはどういうことだ？」

全身を覆う黒いマントに、目もとまで隠すようにフードをかぶった男が沙耶たちが去った村を見て独り言をいっている。

「ふむ。ホワイトウルフを２０体ほど貸して、連絡が途切れたので来てみればお嬢様の死体どころか死骸の一つも見つからないとは。いったいどうなっている？」

男は考え込むようんでみるがこのような状況にどうやったらなるのか全く思い浮かばず

「ここから一番近い村はアムールか。もし、生きているのならそこから、リゼンに向かうはず

一応追跡してみるか。」

そういうと、すでにそこには男の姿はなくなっていた。

そして、沙耶たちが野宿の準備をしているところから１ｋｍほど離れた地点に男はいた。

「まさか生きているとは。隣にいる少女が助けたのか？」

ホワイトウルフは単体ではＣランクの人間が倒せる魔物であり、その数が２０体となればＡランクレベルの実力がなければ倒すことは難しい。

「やっかいだな。Ａランク程度ならどうにでもなるが、もしＳランクだとやっかいだ。

計画に修正が必要だな。それに、あの少女が脅威ともなりかねん。

情報が必要だが・・・

確か、アムールにはやつがいたな。」

そう呟くと、男の姿は消えあたりには静寂が漂っていた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「よし、出発しようか。今日中にアムールに着きたいしね。」
「そうですね。では行きましょう。」
夜が明け沙耶たちはアムールに向け歩きだした。
「朝早くだからかな、人がいないね。」
「この時間はみなまだ寝ているのでしょう。」
「それならあの方法でいくよ。」
「はい、わかりました。」
そういうと、一気に２ｋｍ以上進み、さらにどんどん進んでいく。
「あれ？　馬車だ。こんな朝早くからごくろうさまですね～。」
沙耶がのんきに言っていると
「いえ！　あれは私を護衛していた馬車です！」
「ということは、あれが裏切り者？」
どんどん馬車は近づいてゆき１０人程人が降り、１人の男が前に出て
「まさか、本当にいていたとはな。」
（本当に？）
「まぁいい。生きていたのならここで死んでもらおう。」
そう言うと後ろにいた兵士たちが前に出てきた。
「エルー、後ろに下がって。」
「で、でも。」
「大丈夫。私、結構強いから」
そういって沙耶は前に進んでいく。
「そこの人ちょっと聞きたいことがあります。」
先ほどまで前に出ていた男を指さす。
「これから死ぬ者に教えることはなにもないが？」
「ぐだぐだいわないでください。素直に答えれば殺さないであげます。」
「ほぉ。面白いことを言う。お前らそこの女から殺せ！。」
そういうと兵士たち3人が襲いかかる。
「邪魔です。ライトニングバインド。」

雷の輪を出現させ3人を囲み放電するが
「はっ。この程度の魔法でやられるか！」
相手は腐っても護衛を専門とする兵士、普通の戦士なら先の一撃で沈んでいたが
相手が悪く、雷の輪を無効化し突っ込んでくる。
「残念です。できれば殺さず無力化したっかのですが、しかたありません。
苦しくないように殺してあげます。死んでぐださい。」
死の宣告たる、言葉を言い放ち、死の宣告を受けた兵士たちは例外なく死んだ。
「「「っ！！！」」」
沙耶を除く全員が驚く。
「質問です。あなたは先ほど『本当に』といいましたね。それはつまり、誰かから私たちのことを聞いたわけですよね。私たちがここに来るまでは盗賊と他は馬車が通ったぐらいですしかもその馬車の人たちには顔を見られないようにしましたし、盗賊もエルーの顔を見られる前に撃退しました。いったい誰からその情報を聞いたんですか？」
「その質問に答える必要はない！」
今度は全員で襲いかかってくる。
「死にたくない人は今すぐ立ち止りなさい。」
そう静止をかけるが誰一人止まらない。
「そうですか。残念です。死んでください。」
そういうと、1人を残し全員死んだ。
この状況にさすがに危機感を覚えたのか踵を返し逃げようとする。
「逃がしませんよ。」
そういうと、逃げていた男が急に倒れる。
「ぐあああ！！　足が！　足がー！！」
あまりの痛みに叫ぶ。
男を見下ろし、感情のこもっていない目で見降ろし、尋問を続ける

「質問に答えてください。答えなければ次は目を潰します。」
「わ、わかった。黒のローブに身を包んだやつだ。顔もフードを深くかぶっていたからわからねぇ。こ、これでいい「次の質問です。」な、なんだ。」
「なぜ、エルーを狙ったのですか」
「金だよ！　そこのお譲さんを殺せば大金をくれるって言ったんだ。」
「なぜそんな話を信じたんですか？　エルーが死ねばあなたの立場がないでしょう。
裏切られると思わなかったんですか？」
「その男が雇い主に合わせてくれたんだよ！」
「それは誰ですか？」
「それは、アトラス王国の・・・ぐあああ！！！」
突然叫び声あげ心臓を抑える
「どうしたんですか！！」
慌てて尋ねるがすでに死んでいた。
「これはいったい。」
「サヤ。」
後方から声をかけられ、はっとして
「エルー、大丈夫だった。」
「え、ええ。でも、今のは？」
「・・・・」
「ねぇ、サヤ答えて。」
少しおびえた様子で尋ねる
「・・・わかった。でもまずこの馬車でアムールに向かおう。馬車の中で答える。」
エルーの表情からだいたいの能力はばれているだろうと思い、これ以上は無駄だと思った沙耶はついに自分の能力について話すことにした。
（これでエルーとの友達も終わりか・・・。）

諦観とやっぱりこうなったかという達観した表情を受けべ馬車の中に入って行く。

第6話（後書き）

第7話

馬車の中でエルーと沙耶は向かい合い
「もう、だいだいの察しはついているとおもうけど、私の能力は『死』を与える能力。」
そう、言い始め、この能力に目覚める前から今までのことを全て話した。
「ちなみに、さっき逃げようとした男がいきなり倒れたのは、私が足としての機能を殺したから、多分それで足のあらゆる骨や神経がズタズタになったんだと思う。ほかにもあの村で死体が消えたのは、死体の存在を殺したから、実際は分子レベルで分解してあのあたりにあると思うけど。」
一度、一息を入れ
「これが、私の能力のすべて。ごめんね。怖いかもしれないけどリゼンまでは送り届けるから、安心して、とは私がいる限り無理だと思うけど、オスカーさんとの約束は果たすから。」
そういうと沙耶はエルーに背を向け馬車の外に出ようとするが
「待って!!」
エルーが呼び止めると
「なぁに?」
無理矢理に笑顔をうかべ振り返り聞き返す。
「サヤ。なぜ能力のこと隠してたんですか?」
「それは、知ったらエルーが怖がると思ったから。」
「なぜ、怖がらせたくなかったんですか?」
「それは・・・。」
そこで黙ってしまう。
エルーはサヤの目をまっすぐ見据え
「もしかして、知ったら私が沙耶から離れていくのが怖かったからからですか?」

「っ！！」
見透かされたような目で見られることに耐えられず逃げだそうとする。
「待って！！」
エルーが正面から沙耶を抱きとめる
「放して！！」
じたばたと暴れ逃げようとする沙耶に
「ごめんなさい。」
「なんであやまるんだよ！！」
「サヤにあんなことをいわせてしまったからです。」
「別にあんなことどうでもいい！！　私から離れていくなんて当たり前なんだ！！
変な同情なんていらない！！」
さらに、強く暴れる
「私は！！　裕福な家で、優しい家族がいます！！」
エルーが叫ぶ
「だから、何！！　自慢話なんて聞きたくない！！」
「だから、サヤの痛みも苦しも私にはわかりません。私には「つらかったですね」とか「頑張ったんですね」なんていう安易な慰めの言葉は言えません。きっと、それはサヤの人生を軽くしてしまいます。でも！！、これだけは言わせてください。」
沙耶の暴れる力が少し弱まる。
「守ってくれて、ありがとう。」
「…っ」
押し殺したようなこれが漏れ、暴れることをやめる。
「サヤは罪悪感を感じないと言いました。でも、罪は背負ってるんでしょう。だからこそ、その重さを知っているからこそ、これまで生き物を殺さなかったんじゃないんですか。」
あの事件が起きてから沙耶は自分のやってことについて罪悪感を感じ悩んでいたが、誰も本当に沙耶がやったと信じるわけもなく、罰

を与えられず、贖うこともでず免罪符もえることができなかった。
「……っ……ぐすっ」
泣くのを必死にこらえながら言葉の続きを待つ
「サヤは優しすぎます。普通の人なら正当防衛と思って忘れてしまいます。だぶん、私だってそうでしょう。でもサヤは忘れずに背負ってきたんですよね。」
なら、せめて殺した人のことは覚えていようと、幼いころから重い十字架を背負ってきた。
「サヤが向こうの世界で背負った罪はサヤの物です。これはもうどうしようもありませんし、サヤが背負うべき物だと思います。でも、この世界で背負った物は違います。1人で背負わないでください。それは私を守るために背負ったものです、だから、その罪は私にも背負わせてください。」
そこに、憐れみや、同情などなく、ただ、沙耶の理解者であり、平等な関係でいたいというエルー、そんな人がいてくれる。それこそ沙耶が求めていた救いであり、願いであった。
「……ひっく……っ」
泣くことを我慢できなくなったのか少しずつ泣き声が漏れる
そんな、沙耶を強く抱きしめ
「それから、サヤ。これからも友達でいてくださいね。」
「ほんとに？　ほんとに、まだ友達でいてくれるの？」
すがるような声で尋ねる。
「はい。サヤがサヤでいてくれる限り、ずっと友達です。」
「うっ……ひっく…」
「サヤ、もう泣いてもいいんですよ。」
泣き声を必死に抑え
「で、でも。ぐすっ、私は理由はどうあれたくさんの命を奪ってきた。そんな私に泣く資格なんて。」
「それでは、私のかわりに泣いてください。私はサヤが友達でいてくれることが泣きたいほど嬉しいんですから。」

「…ひっく…ありがとう。」
それから、しばらくエルーは沙耶を抱きしめ、沙耶は泣き続け
「エルー、ずっと友達でいてね。」
「はい、もちろんです。」
こうして沙耶に本当の友達ができた。

第8話

ｓｉｄｅ　???

黒いマントをまとっている男は沙耶たちが戦っているところから１ｋｍ以上離れて場所から視力を強化し見て、護衛隊長である男には通信用の符を持たせ盗聴していた。

「しかし、なんだあれは？　あんな魔法は見たことがない。そもそも、あれは魔法か？　雑魚とはいえ、何もしないであの人数を殺せるとは。」

男は信じられないものを見て驚きを隠せないでいるが、さらに信じられないことが起きた

「次は、足を潰したか。あの力はなんなんだ？　あの少女サヤといったか。なかなか頭も切れる、それにあの力……お前が私の敵か。」

忌々しげに、しかし、どこか嬉しそうに、沙耶は男の計画の最大の障害と認定した。

「っち！　馬車に移動したか。　もう少しであの力のことを聞けたというのに。まさか、盗聴に気付かれたか？」

沙耶たちは馬車で移動し始めた。

「っち！　あの力が分からない以上こちらから近づくのは危険すぎる。　お嬢様の殺害は難しいか。まぁいいだろう、最低限目的は果たした。次の段階に進めるとしよう。」

男はそう呟くとその場から消えた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

あれから、数時間後沙耶たちはアムールに到着した。

「へぇ〜。結構大きな町なんだね。」
「はい。アムールはクレンド王国の北の拠点ですから。」
沙耶にとってこの世界最初の大きな町であり見渡すところ全て見たことがないものばかりなのできょろきょろと周囲を見ている。
「エルー！　あれはなに？」
「あぁ。あれは・・・」
こうやっていろいろなところを回り数時間が経過した頃
「サヤ、これからの行動について話したいことがありますので、そろそろ宿に行きましょう。」
「分かった。」
そして、宿に向かい部屋に入る。
「それで？　これからってまっすぐリゼンに向かうんじゃないの？」
「当初はそのつもりでしたが、サヤにはもう少し魔法の腕をあげてもらうために数日ここに留まろうと思います。」
何が言いたいのか分かったサヤは
「ありがとう。でも大丈夫。罪の重さにもう潰れたりはしないから。」
「ダメです。サヤにはもう人を殺させたくはありません。あれを使わず、敵を無力化できるぐらいまで強くなってください」
「でも、早く帰らない「これは、私のエゴでわがままです。自分勝手とも分かっているつもりです。それでもサヤにはこれ以上私のために罪を背負ってほしくありません。」・・・」
「本当にいいの？　家族が心配してるよ。」
「いまさら、帰るのが数日遅れてもたいして変わりはないでしょう。それより、私はサヤのことが大事です。」
「分かった。ありがとう、エルー。」
「お礼を言うのはこちらです。私のわがままを聞いてくれてありがとうございます」
沙耶はこんなにも自分を思ってくれるエルーがいてくれることに、また泣きそうになったがぐっと堪え

「それで、これからどうするの？」
「まずはギルドに行きましょう。そこで、依頼を受けて経験を積みましょう。それに、馬車が手に入ったので荷物の量も増やせます、そのための資金も稼ぎましょう。」
「分かった。さっそくいこうか。」
「そうですね。」
そして、宿からギルドに向かう。
そこで、沙耶はこの世界で一番の衝撃を受けることになる。
「ギルドに登録をしたいんですけど。」
沙耶が受け付けの人に尋ねる
「では、こちらの紙に書かれていることを読んでサインをお願いします。」
「わかりま・・・」
「どうしたんですか？　サヤ。」
固まってしまった沙耶に声をかける
「文字が、文字が読めない。」
この世のすべてに絶望したような声でうめき、膝をつく。
あまりの沙耶の落ち込みに焦り
「サ、サヤ。大丈夫ですよ。私がかわりに読みますから。」
そういってフォローしようとするが
「文字が…本がよめないなんて…死のう…」
「お、落ち着いてください、サヤ。」
「もういいんだよ、エルー。本が読めないんて、生きている必要がない。エルー、ごめんねオスカーさんとの約束果たせそうにないや。後は頑張ってね。」
「落ち着いてください、サヤー！！」
数時間後ようやく落ち着きを取り戻し
「では、サヤ・カンナギ様でよろしいですね。」
「はい。」
「では、こちらがギルドのメンバーカードになります。これを紛失

いたしますと再発行には金貨2枚必要になりますのでお気お付けください。ギルドの説明は必要ですか？」
「お願いします」
※ギルドの説明は設定資料でご確認ください
ーーーーーー説明中ーーーーーーーー

「今日はもう遅いので帰りましょうか。」
「ちょっとまって。ここで魔力測定できるんだよね。」
「あっ！　そうでしたね、魔力測定は2階でできますから行きましょう。」
そして、魔力測定を行い出た数値は９８４２だった。
「すごいじゃないですか！　軍の魔法使いの平均でも８０００程度ですから、最初からこれはすごすぎますよ！！」
「ふーん。」
「あれ？　不満気味ですね、これって一般魔法使いの４倍に当たる数値なんですけど。」
「いや、よくある異世界ものって異世界に来たら覚醒して国くらい簡単に落とせますよぐらいのチート能力のはずなのに。何か微妙・・・」
もともと備わっている能力がチート過ぎてあまり喜べない沙耶に
「へぇ～。そうですか。それで微妙なんですか。私の5倍くらいあるのに。それは才能のない私に対するいやみですか。」
沙耶の言葉を聞いてふてくされてしまい、慌てて
「い、いや、その、えっと、ごめんなさい。」
「もういいです。」
「大丈夫だよ。これから伸びるって。」
なんとか機嫌を直そうと励ますが
「ふ～ん。どうせ、今のサヤににだって一生勝てませんよ。」
「いや。多分一生もう伸びないから・・。」
はっとし、自分の失言に気付いたのか

「ご、ごめんなさい。」
「ううん。いいよ、エルーがそういう意味で言ってないってわかってるから。」
沙耶の時間は止まっている、そのためすぐに固定した時の状態に戻ってしまい、いくら努力しても決してこれ以上伸びることはない。
「それではこれで、おあいこといたしましょう。」
「うん。じゃあ部屋に戻ろうか。」
そして部屋に戻ると
「サヤ、もう寝ましょう。」
そういってベッドに誘う。
「…この部屋に入ってから気付いてたけど、なんでベッドが一つしかないの……」
「それは、ここしかあいてなかったからです。」
「……他の人みてないんだけど。」
「きっと、でかけてるんですよ。」
もちろんそんなわけではなく、ただエルーが沙耶と一緒に寝るためにこの部屋を選んだだけで、そのことに気付いていた沙耶は
「この世界の言語を勉強するから今日は寝ない。」
「!!!!　だ、だめです。きちんと寝ないと体に悪いですよ!!」
「大丈夫。寝なくても疲れないから。」
「で、でも。」
なんとか喰い下がってみるが
「本が読めないのは私にとって睡眠をとることより大問題なの!!」
「う、うぅ〜。で、では明日は一緒に寝てくださいね。」
「明日も勉強する。」
「うぅ〜。サヤの意地悪。」
「はいはい。おやすみいなさい。」
「……おやすみなさい。」
そういうとエルーは疲れていたのかすぐに寝てしまった。
(はぁ〜、諦めてくれてよかった。あのまま流されてたらいまごろ

／／／／／）
内心ドキドキしていた沙耶であった。

おまけ

「ふむふむ。これがこうで、なるほど。これがそういう意味で・・・」
前からいろいろな国の本を読むため言語の習得は得意である沙耶はかなりのスピードでこの世界の言語を習得し5時間後には子供向けの本を読めるようになっていた。
「こっちの子供向けってちょっと刺激が／／／／／」
ちなみにこちらの世界では14歳から結婚でき、それより下の時からでも許嫁などが決められていることが多く、早い段階から性の知識を得ている。
なので沙耶にはかなり刺激が強く、しかし、続きが気になって読むことを止められない。
（うわ～。こんなことまで／／／／）
想像力豊かな沙耶は自分の想像で悶えていた。

第9話

一晩中本を読み漁り、だいぶ読めるようなり夢中で本を読んでいた。
「あれ、もう朝か。」
すでに、日は昇り時間を見ると１０時を過ぎていた。
「エルー、エルー。だめだ、全く起きない。ここでフレイムボムは使えないし・・・」
そうやって考え込んでいると
「サヤぁ～。」
「えっ」
寝ぼけているのかいきなり手をつかまれベッドに引きずり込まれて抱き枕にされてしまう。
「エ、エルー。寝ぼけてないでいい加減に起きてよ／／／／／」
必死に起こそうとするが
「ふふっ、サヤぁ♪」
そういって、耳を甘く噛み息を吹きかける。
「ひゃっ／／／　エルー！！　いい加減に起きてー／／／／／」
これ以上はまずいと思い拘束から逃げ出そうとするが
「ふふっ。可愛い♪」
どんな夢を見ているか分からないが沙耶にとって早く逃げ出さないとまずいということはひしひしと伝わり
「エルー！　エルー！！　エルーってば！！！」
何度も呼びかけるが一向に起きる気配はなく
小さく膨らんだ山に手が伸び
「あっ／／　だ、だめ／／／　そこは触らないでー／／／／／」
貞操の危機に必死に叫ぶが
「ふふっ。ここがいいの？」
相変わらず寝ぼけて？いるのか　沙耶の服の中に手が入りこんでいく。

「んっ／／……はぁ…はぁ／／／……エ、エルー…おきてぇ／／／／。」
だんだんと声が艶っぽくなり、体が赤く火照り、逃げようとする力がどんどん弱まっていく。しかし、エルーの手の動きは緩まるどころか逆に強くなっていき
「ひゃう…も、もう、らめぇ／／／／　エ、エルー、んっ／／／／　お、ああっ／／／／　お…きて／／／／」
最後の力を振り絞り起こそうとするがそれもむなしく止まらない。
さらに、エルーの手は山の頂上に伸びて行き
「ひゃああっ／／／／」
ひときわ大きな声を上げ、喘ぎ続ける。
そして、山の頂上を軽く潰すと
「んあああああ／／／／／／／／／」
瞬間体に電流が走りビクビクッと跳ね、達してしまう。
「はぁ…はぁ…はぁ／／／／／」
口からは涎が垂れ、目は潤み、口からは艶っぽい吐息が漏れ、体はいまだに震えている。
「ふふっ。サヤぁ～。ほんとに可愛い♪」
再び手の動きが再開される
「らめっ／／／／／、これ以上はほんとにらめ、頭おかしくなっちゃう／／／／／」
しかし、手の動きは止まらず
「らめぇぇぇ／／／／／／／／／」
これから３０分以上攻め続けられエルーが目を覚ました時には
「あれっ。サヤったら結局寝ちゃったんですか。ふふっ、可愛い寝顔です。
でも、なんだか色っぽいですね。　体も真っ赤ですし、風邪でもひいたんでしょうか。
それなら、このまま寝かせて安静にさせておきましょう。」
沙耶が目を覚ました時には、昼をすぎていた・・・

おまけ

沙耶が目を覚まし、なぜか自分が近付くと離れてしまう沙耶を不審に思い

「サヤ？　ほんとうにどうしたんですか？」

「エルー／／／　ほんとに心当たりないの／／／」

気絶する前のことを思い出したのか、顔を赤くして答える。

「さっきから、いったいなんのことですか？」

寝ぼけて？いいたため　何のことか全く分からないエルー

「お、覚えてないならいいから／／／／／」

「そのいいようからするに私が何かしたんですね。サヤ、教えてください。私がどんなことをサヤにしたんですか。もし、サヤに迷惑がかかっていれば申し訳ありません。」

「い、いや。ほんとにたいしたことないから／／／／／／」

「それでもです。サヤはすぐに我慢しちゃうんですから、今更遠慮なんて私たちの間にはなしですよ。」

「わ、わかった。ちょっと耳貸して／／／／」

「なんでですか。ここには2人しかいないんですからべつに「いいから／／／／」わかりました。」

沙耶に耳を向けると、小さな声で今朝起きたことを話した。

「えっと、それ本当ですか。」

「／／／／／／」

顔を赤くしながら頷く。

「ごめんなさい！！。」

すぐに頭を下げ謝る。

「いや、もういいよ。エルーも寝ぼけてたみたいだし。」

「ううっ。でも、「ほんとに、もういいから。」最初は、自然にキスをして、それから舌を入れて、「えっ！」サヤは始めはびっくり

するんだけど、それでも、ぎこちなく舌を絡めて来て唇を離すとそこに銀の橋ができてて「エ、エルー！！」それから、サヤが私に甘えてきて私がいろんなところを愛でて顔を真っ赤にして、それでも健気に快楽に耐え、そして私の手の中で達したサヤとキスをするつもりでしたのに、しかも、その上そのことを覚えていないなんて。」心底悔しそうに、心の声を大暴露する。

「／／／／／／／／」

エルーは地面に崩れ落ちかなり落ち込んでいる。

沙耶はそんなことを思われていたのかと知り

（エルーってそんなことを私に／／／／／／で、でも、もういっぱいやられちゃったし／／／／／／で、でもでも、あれは寝ぼけてただけだし、あれはノーカウントだよね。うん、そう。きっと、そう。だから、エルーが言ってたこと／／／／／／はっ、わ、私なんてことを／／／／エルーは女の子なのに、でもでもエルーのことは好きだし／／／／／）

といった感じに暴走しているなか、エルーはというと

「……キスしたあと「気持ちよかった？」って聞いて、顔を真っ赤にしながらこくん、て小さく頷くサヤに「じゃあ、もう一回っしよっか」っていって押し倒して、それから、それから・・・・」

落ち込みが深すぎたのかこちらも暴走し思っていたことを全部口に出していた。

両方の暴走が収まったのは日が暮れる頃だった・・・

第9話（後書き）

おまけがながい・・・

第１０話（前書き）

初めの戦いらしい、戦いです。

第１０話

あれから立ち直った2人は
「もう遅いから、依頼を受けるのはあしたにしよっか・・・」
「そうですね。明日こそは頑張りましょう。」
今日一日を無駄に使ってしまったため、次の日こそは！と意気込む二人。
「とりあえず、どうやったらエルーを起きるの？、それができないと今日の二の舞になるよ。」
「…そうですね。サヤのフレイムボムでようやく起きることができるくらいなんですから、
普通にやっては無理ですね…」
さすがに落ち込んでいるのか声が暗い
「でも、ここでフレイムボムを使うわけにもいかないし。」
フレイムボムは音もすごいが、それに伴う爆風もすごい。ここで使おうものなら、爆風で部屋が吹き飛ぶことを覚悟する必要がある。
「音だけなら、遮音の結界を張ればいいんですけど…」
「えっ、そんなのがあるの？」
「はい。まぁ結界の質が悪いとすぐに盗み聞きされますけど。それさえ気にしなければ音はほとんどカットできますよ。」
「それだ！」
「でも、爆風はどうするんですか。」
「それは、私の能力で。」
「なるほど！　それなら行けそうですね。」
「ちなみに、遮音の結界って術者が寝てても発動したままなの？」
「はい。いったん作ってしまえば、解除するか壊れるまでそのままですよ。」
「そっか、じゃあ、エルー寝る前に結界を張ってね。」
「わかりました。ところで、今日も勉強ですか？」

「うん。早く本を読めるようになりたいから。」
「わかりました。」
「では、起こす時はおねがいします。」
結界を張り終わると、エルーは眠った。
さすがに、反省しているのか今回はベッドに誘ったりはしなかった。
（少し違和感があるな、これが結界かぁ。）
空間の違和感を感じ、これが結界かと思い、しばらく違和感を感じ
「よし！　勉強を始めよう。」
そうして、また一晩中本を読み漁り、言語の習得に励む。
そして、日が昇り始めたころ
「よし、そろそろ起こすか。フレイムボム」
手のひらサイズの炎の塊をだし、耳栓をはめ
「よし。行け！」
エルーの耳元に投げつける。
そして、爆発した直前に爆風を殺し音のみを残す。
すさまじい、音が鳴り響きそれだけども窓ガラスが軋みをあげる。
「んっ…ん～。」
それだけの音でようやく半覚醒までしか至っていないエルーを見て、
沙耶は戦慄した。
（エルーの耳壊れているのでは？　普通、あの距離であんな音が鳴ったら鼓膜破れるよ…）
そんなふうに呆れていると
「ん～。…んっ…」
エルーは再び眠りにつこうとしている。
「ちょっとエルー！　また寝ないでよ！！」
それから、１０分間の呼びかけによりようやくエルーは起きた。
「起きれたみたいですね。」
「そんな他人事みたいにいわないでよ。エルーって前からそんな感じなの？」
「さぁ？　いままでは、メイドの方々が起こしててくれたので分か

りません。」
（このエルーを毎日起こす！！　そのメイドさんすごすぎでしょ。）
「ま、まぁ、とりあえず起きたんだし、ご飯食べてギルドにいこう。」
「そうですね。昨日は一日無駄にしてしまいましたし、今日は頑張りましょう。」
そして、朝食をとりギルドへ向かう。
「どんな依頼にする？」
「そうですね。できればこの町からあまり離れず、討伐系の依頼が好ましいです。」
「じゃあ、これにしよう。あっ、これもついでに、あとこれも。」
「そんなに受けるんですか？」
「場所は同じところみたいだし、さっさと上のクラスに上がりたいから。」
そういって受けた依頼はDランクの依頼を3つ。
内容は、畑を荒しにくる魔物の討伐（猿やイノシシみたいな魔物）、近隣の森に生息している薬草の採取、オーガの討伐。
「たしかに、全て近くの森のあたりですね。」
「うん。これなら歩いて行けるから、早く終わらせよう。」
依頼を受け、森に向かう。
「先に薬草を探しましょう。探しているうちに魔物も見つかるでしょう。」
「そうだね。でも、エルー薬草の見分つくの？」
「はい。これでも学校には通っていますし、よく使われるこの類のものならわかります。
そういうサヤは大丈夫ですか？」
「うん。勉強してるうちに薬草や魔物に関するものがあったから大丈夫。」
「そうですか。では、いきましょう。」
そうして、薬草を採取し、次の場所へ移動していると

「あれが討伐する魔物みたいです。」
３０ｍぐらい先に魔物の群れがあり、その足元には農作物の食べ残しがあった。
「そうみたいだね。よし、じゃあいってくる。」
「はい。気をつけてくださいね。」
そういうと沙耶は魔物の群れに突っ込み
「アーススパイク」
地面から土の槍が現れ魔物たちを貫いていく。
魔物たちも、沙耶に気付き襲いかかってくる。
「もういっちょ、アーススパイク」
さらに、魔物たちを倒していくが数が多く倒しきれず接近されてしまうが、
「はっ！」
袖に仕込んでいたナイフに魔法をかけ切り裂く。
身体強化こそできないが沙耶だが、向こうの世界で暴力から身を守るため、我流ではあるがそれなりに戦うことができ、あまり力を使わず、相手の力や動きを利用する戦いが得意であり、考えなしに突っ込んでくる魔物はやりやすかった。
また、体力切れの心配はないので常に全力で動くことができる。
「っち！」
しかし、数の暴力には勝てず後退するをよぎなくされる。
「それなら！」
襲いかかってくる魔物に対し、沙耶は自分の足元の地面を一瞬だけ盛り上げ高く飛び
「聖なる光よ、悪しきものを射抜く矢となれ。」
魔物たちは沙耶が落ちてくるのをまっているのか、上を向いている。
そこに
「貫け！！　セイントアロー！！」
光の矢が降り注ぎ、魔物たちを次々と貫き、殲滅する。
沙耶のすべての魔力がこめられた魔法は沙耶が地面に落ちるまで止

むことなく降り注ぎ着地した頃にはすべての魔物が死んでいた。
「ふぅ。エルー終わったよ。」
隠れていたエルーが沙耶のもとに駆け出していく。
「サヤ！！　いつの間に中級魔法を使えるようになったんですか！？」
「いやぁ。この世界の言語を勉強しているうちに魔法の本もあったから、ついでに覚えておこうと思って…」
「うぅ。私だって中級魔法は得意な水と闇にしか使えないのに…」
「で、でも、まだまだ制御とかできてないし、エルーの方がすごいって。」
「ふふっ。いいんですよサヤ、さっきのは冗談です。それに制御できないとはいえ、あれだけの威力を出せれば十分です。」
「ありがとう。　それじゃ、依頼の続きにいこっか。」
「はい。薬草は十分集まりましたから、後はオーガの討伐だけすね。」
「うん。あと一つ頑張ろう。」
そうして、オーガを探していたが、なかなか見つからず途方に暮れていると
「見つからないね。」
「見つかりませんね。もう遅いですし、ここらへんで切り上げましょう。」
「そうだね。」
そうして帰ることになり、森を抜けようとすると、突然背後から
「■■■■■■■■■」
オーガが雄たけびを上げ、上から襲いかかってきた。
「エルー！！」
とっさにエルーを突き飛ばし
「がっ」
沙耶が身代わりとなりオーガに吹き飛ばされた。
「サヤ！！」

「大丈夫。それよりエルー気をつけて！」
３mはあろうかという巨体に吹き飛ばされた沙耶だが物理的な攻撃は沙耶にとって意味をなさず、すぐに回復する。
「■■■■■■■■」
「くらえ！！、サンダースピア！！」
雷でできた槍をオーガに向け投擲する。
しかし、オーガの肉体は固く沙耶の魔法をはじく
「はじいた！？、なら「サヤ、少しの間オーガの目を潰しますからその隙に」わかった。」
「闇よ我が敵より光を奪え、ブラックアウト！！」
「■■■■■■■■■」
突然視力を失い、誰もいないところに攻撃している、そして、その隙にオーガの頭上へ跳び
「ここに、すべてを焼き切る炎の剣を！！　フランジュベル！！」
炎でできた剣を振り上げオーガの頭上へと振り下ろす。
そこから、真っ二つに切れ、切れた所からは焼き切れたにおいが漂う。
「はぁ～。やっと倒した。」
「サヤ、大丈夫ですか。」
「うん。このとおり。」
「まさか、木の上にいるとは思いませんでした。」
「だね。あんなでかいのがどうやって木に登ったんだか。まぁとりあえず依頼は全部終わったし今度こそ帰ろっか。」
「はい。」
こうして初めての依頼が無事終わり、いろいろと手ごたえをつかみ一つ強くなった沙耶であった。

おまけ

朝食時、本を常に読んでいる沙耶に

「サヤ、ご飯食べないんですか？」
「えっ、別に食べる必要ないし。」
「また、そういって食べられないわけじゃないんだからきちんと食べなさい。」
「だって、今本読んでるし。」
「そんなもの後でも読めます！！　それともサヤは私と一緒に食事をとりたくないというわけですか？」
「いや、だから「つべこべいわないで食べなさい！！」…はい。」
ご飯を食べようとしない子供に、食べさせようとする母親みたいな会話が繰り広げられ
「サヤ、これおいしいですよ、はい、あ～ん。」
「っ！？　そんなことできるわけないでしょ！！／／／／／／」
「はやく、あ～ん。」
「いや、だかｒ「あ～ん」・・・」
もう逆らっても無駄だろうと思い
「あ～ん／／／／」
「はい。おいしですか？」
「う、うん／／／」
（なに、なんなのこの羞恥プレイ。）
周りには人がちらほらこちらを見ている。
そんな、なかでこの状態、沙耶の羞恥心は限界まで来ていた。
「ごちそうさま。」
「もういいの？」
残念そうに尋ねる
「うん。もうおなかいっぱいだから。」
「そうですか。」
ほっとしたのもつかの間
「なんて、そんな嘘にはごまかされませんよ。」
「いやほんとに、おなかいっぱいで「あ～ん」エ、エルー。」
「嘘をついた罰です。あ～ん」

「い、いや。ほんとに「サヤ、口移しで食べさせますよ」あ～ん／／／」

朝食が終わり、ご機嫌なエルーと憔悴した沙耶であった。

第11話

2人はオーガを倒した後、アムールに戻りギルドを訪れていた。
「ごくろうさまです。これで依頼は終了となります。Dランクの依頼を3つこなしたことによりランクが上がりますので、ギルドカードをお願いします。」
そういわれ、沙耶はカードを渡した。
「これであなたのランクはEランクとなりました。それと、これが依頼の報酬です。」
そういって、金貨11枚、銀貨3枚を渡された。
「これからも頑張ってください。」
そして、2人は宿に戻った。
「はぁ～。別に肉体的な疲れはないけど、精神的に疲れた。」
「初陣です、しかたありませんよ。」
「さて、本読もう。」
「サヤはいつもそれですね。」
「これが、私の唯一の楽しみなの。」
「そうですか。では、これで本でも買ってください。」
そういって、先ほどギルドからもらった報酬を出した
「えっ！　それって旅の資金にするんじゃないの？」
「それについてきちんと引いてるので大丈夫です。それにこれはサヤが稼いだものですから。」
「そういうことなら、ありがたくもらっておくね。」
「はい。明日からも頑張ってくださいね。」
「まかせて。本のためなら！！」

それから、数日間ギルドの依頼をこなし、ランクがDランクまであがり、その夜
「サヤ、そろそろリゼンに向かおと思います。サヤの魔法の腕もだ

いぶ上達しましたし、お金もだいぶ貯まりましたから。」
「そうだね。そろそろ帰らないと、エルーの家族もずっと心配かけっぱなしじゃかわいそうだし。」
「明日ここを立ちますので、準備をしておいてください。」
「わかった。」
「では、おやすみなさい。」
そして、ここ数日間でおなじみの遮音の結界を張り就寝した。

そして、一夜明け、いつも通りフレイムボムで、起こした。
その手際は数日間で鍛えられ、初めは、半覚醒してから１０分以上かかっていたが、今では１分程度で起こせるようになった。
「おはようございます。」
「おはよう。」
あいさつを交わし、朝食をとるために部屋を出る。
「サヤ、準備はいいですか。」
「うん。ばっちり。」
「そうですか。しかし、数日でかなり本の量が増えましたね。」
「あはは。ごめんなさい。」
依頼を受け始め、帰りに本を買いその日の夜に読み終え、次の日も、と繰り返していたため本の量が数日で２０冊以上になっていた。
「まぁ、それだけ本が好きなんですからしょうがないです。」
「理解してくれて嬉しいです。」
話をしながら馬車に乗り込み、走らせる
「ここから、リゼンまで、約２日かかります。途中に村があったりしますが、今回は急ぎのため立ち寄らず、まっすぐリゼンに向かいたいと思います。」
「２日もかかるのかぁ」
「サヤの移動法が使えればもっと早く行けるんですが、流石に人通りが多いですから。それより、あれ以来私を狙いに来ませんけど、諦めたんでしょうか。」

「だぶんね。護衛隊長さんを仕向けてきたということは、私が不確定要素だと思ったからだと思う。たぶん、遠くから見ていたと思うし、兵士の誰かに盗聴の符でも持たせて私のことをさぐろうとしていたんでしょ。」
「だから、あのとき馬車に入ったんですか。」
「まぁね。話を戻すけど、あれを見たぐらいじゃ、私の能力は看破できないだろうし、もし、できていたらなおのこと仕掛けてこないと思う。絶対とは言い切れないけど、護衛隊長さんが言っていた黒いマントをした男は仕掛けてこないでしょ。」
「サヤって凄いですね。」
「慣れだよ、慣れ。」
幼少時代より、いろいろとあったので、それを最小限で抑えるために、こういった状況はなれていた。
（それより謎なのは、なぜエルーを殺そうとしたかだ。あのとき、アトラス王国といっていた。ということは、復讐という線は消える。たぶんだけど、護衛隊長さんたちを雇ったのは、アトラス王国の貴族、それもそれなりの地位にいる人間のはず。ならなおさらエルーを殺そうとする意味がわからない。そもそも、そんなことをすれば、戦争の引き金を引くことになる。いや、それこそが目的か？　それに、黒いマントをした男、エルーが生きていると思ったということは、あの村に行ったからだろう。そこからの行動には隙がない。はぁ、問題は山済みだな。）
そこまでで、思考を中止し
「エルー、本読んでていい？」
「はい。馬車は私が見てますから、大丈夫ですよ。」
「ありがとう。」
そう言って、本を読み始めた。
それから、夜になるまで走り続け、野宿の準備を行い、今はご飯を作っている。
「～♪」

「サヤってなんでもできるんですね。」
突然エルーが口を開く
「えっ。」
「魔法はもう中級まで使えるようになってますし、接近戦もできますし、文字を覚える早さや敵に対する考察からみるに頭も相当いいですし、おまけに料理もできますし。」
「魔法以外は向こうで必要だから得たものだから、だれだってやろうと思えばできるよ。」
「しかも、性格もいいですし、なにより可愛いですし。」
「エ、エルー、その、そういうことはっきりいわないで／／／／／」
「あぁもう可愛いです。」
そういうと、いきなり沙耶を抱きしめる。
「エ、エルー！！／／／／／／」
「いいじゃないですか。最近こういうことしてないんですから。」
「／／／／／／／」
（まぁいっか、それにあったかいし／／／／）
それから、数十分抱き合い
「そろそろ、ご飯にしましょうか。」
エルーが食べる準備をする。
「もちろん沙耶も食べるんですよ。」
「わかってるよ。でも、なんで、そこまでして食べさせたがるの？」
「それは、友達と一緒に食べたいから、という理由ではいけませんか。」
沙耶はその答えが予想外だったのか、少し驚き
「ううん。全然悪くないよ。」
とてもうれしそうな顔でいった。
「「いただきます。」」
食事を終えエルーは寝てしまい、沙耶はいつも通り、見張りも兼ね、本を読んでいる。
一週間でこの世界の言語を習得した沙耶は、この世界の人でも読ま

ないような難しい本をよんだり、この世界の歴史、生態系、魔法についてなどいろいろな知識を会得していった。
そして今はというと
「へぇ～。こんなのがあるんだ。」
魔具が載っている本をよんでいた。
魔具とは名の通り、魔法の効果を持っている道具であり、効果は千差万別である。
「さすがに、作るのは難しそうだなぁ、リゼンに着いたら、こういうの見て回ろう。」
こんな感じで本を読んでいると朝日が昇り始め。
「もう、こんな時間か、もう少ししたらエルーを起こそう。その前に、朝食をつくりますか。」
朝食の準備をしているときに、1人の女の子がやってきて
「助けてください！！」
女の子がやってきた方を見ると、数人の追手がやってきている。
（はぁ～。また面倒事か。）
なかなかに苦労人な沙耶であった。

おまけ

「しかし、なぜこんなに料理ができるんですか？　この食材はこっちの世界のものでしょうそれなのに、こんなにおいしいなんて。」
食事中にあまりのおいしさにエルーが尋ねる。
「調理法は本に書いてあったから、それをまねただけだよ。」
「それでこんなにおいしくなるわけありません！！」
「まぁ、少しはアレンジしたけど・・」
「なぜ、そんなことができるんですか？」
「経験かな。」

「サヤ、私のメイドになりません？」
「なぜ？」
「料理はできますし、知識も豊富、その上ボディーガードもできる、なにより可愛いからです。」
「だ、だから、面と向かってそういうこと言わないでってば／／／／」
「私はかなり本気で言ってるんですけど、本当に私のメイドになりません？」
「うぅ～ん。やっぱり遠慮し置くよ。」
「そうですか残念です、では、私の嫁になってください。」
「ぶっ！！」
「大丈夫ですか。」
「ごほっ…ごほっ…なにいってるの、エルーは女でしょ！！／／／／／」
「大丈夫です。クレンド王国では同性婚は認められています。」
「いや、でも、私たち出会ったばっかりだし、そういうのはもう少しお互い知り合ってからでないと／／／／／」
「愛に時間は関係ありません。私と結婚してください。」
沙耶の手を握り、プロポーズする。
「／／／／／／」
いきなりのプロポーズに顔を真っ赤にし俯く。
「やっぱり嫌ですか？」
一歩引き答えを待つ
「いや、えっと、別にエルーのことは好きだけど、やっぱりそういうのは違うっていうか、だから、その、えっと「ふふっ。」エ、エルー？」
「冗談ですよ。同性婚なんて認められてませんよ。」
「エルー！！／／／／」
「驚きましたか？　でも、同性婚のことについては嘘ですけど、サヤならお嫁さんにしたいのはほんとですよ。」

「も、もうからかわないでよ／／／／」
「ふふっ。」
（うぅ～、もう、エルーったら！！　でも、告白されたときすっごく嬉しかったかも／／／／／）
意外とまんざらでもない沙耶であった。

第１２話（前書き）

ようやく新キャラ登場

第12話

「たすけてください！！」
必死に助けを求める少女
「ごめんなさい。めんどいです。」
「ええっ！！」
そんな会話を交わしていると
「ようやく見つけたぞ！！」
追手が追いつき、こちらに迫ってくる。
「てめぇはなにもんだ？」
「通りすがりの旅人です。どうぞお構いなく。」
「そんな、助けてくださいよ！！」
「これ以上面倒事に巻き込まないでください。」
「おい、こっちにもいい女がいるぞ。」
「ほんとじゃねぇか、こいつも連れてくか。」
「つかぬことをお聞きしますが、エルーをどうするおつもりで？」
いますぐ殺してやりたい衝動を抑え怒気を交えた声で聞く
「ああ？、もちろん売るに決まってんだろ。」
「なるほど。」
「ん、よくみるとおめぇもなかなかのもんじゃねぇか。その手の奴に高く売れそうだ。抵抗するなよ商品をキズものにしたくねぇからな。」
「頭、今日はいい日ですね。上玉が3人も手に入るなんて。」
「もう黙ってください。」
「あぁ。なんだｔ」
瞬間に空間を殺し男の目の前に移動し、
「エナジーブラスト」
魔力の塊をそのまま炸裂させ吹き飛ばす。
「てめぇ、やりやがったな！！」

男たちは突っ込んでくるが
「エルーに手を出した時点であなたたちは死刑です、と言いたいところですが、エルーと約束してますから、半殺しで許してあげます。」
「なめんなぁ!!」
1人の男が剣で斬りつけようとするが
「遅いですよ。」
紙一重でかわすと、足払いをかけ男を転倒させる、そして
「エナジーブラスト」
地面を陥没させる威力で放つ、あっけなく意識を奪う。
その隙に後ろの男が魔法を放とうするが
「死ね!!　エアーランス。えっ?」
男の魔力をすべて殺し魔法の発動を止める、魔法が発動せず驚いているところに、空間を殺し接近し
「さようなら。エナジーブラスト」
あっという間に3人を沈めると
「てめぇ、動くな!!　この女殺すぞ!!」
エルーの首筋にナイフを当て、脅すが、
「なっ!!」
すぐさま、ナイフを殺す。
ナイフは跡形もなく消滅し、驚いている隙にエルーを助け
「エルーに触れた罪を重いですよ、あなたには、簡単に寝かせません。」
「ひっ!!」
男は逃げようとするが。
「逃がしませんよ。ライトニングバインド」
雷の輪で拘束し電流を流す
「ぎゃあああ!!」
「しばらくそうやっててください。他の方、まだやりますか?」
まだ、残っている人に問いかける。

そう問うと、一目散に逃げて行った。
「逃げるのはいいんですけど、こいつら回収してくださいよ。」
寝ている男たちを空間を殺し、逃げている男たちの上とつなげ、寝ている男を蹴り飛ばし、逃げている男たちの上に落とす。
「ようやく掃除が終わりましたか。さて、エルーを起こしますか。」
「あっ、あの。「フレイムボム」きゃああ。」
少女は声をかけようとするが、とてつもない音が襲い耳を慌ててふさぐ。
「エルー、朝だよ、起きて。」
そんなことはつゆ知らず、何事もなかったようにエルーを起こしている。
「んっ。おはようございます、サヤ。」
「おはよう。」
「あっ、あの！！」
完全に無視されている少女が叫ぶ
「あぁ、まだいたんですか。もう追い払いましたから大丈夫ですよ。はい、エルー、ご飯。」
「ありがとうございます。今日もおいしそうですね。ところでその方は？」
「奴隷商人かなにかに追われていて、私に助けを求めてきたんです。無視したんですけど、そいつらがエルーにも手を出そうとしたんで、半殺しにして追い返した。」
「そうですか。約束守ってくれてるんですね。ありがとうございます、サヤ。」
「い、いいよ。私もあまり人を殺したいわけじゃないんだし／／／／」
「照れなくてもいいじゃないですか。それに私のために戦ってくれたんですし。」
「う、うん／／／」
目の前でもう眼中にないかのように、いちゃついている2人にどう

したらいいか分からなくなり、とりあえず
「あの、ありがとうございます。」
お礼をいった。
「いいですよ別に。ついでですし。」
そういうと、また食事に戻る。
そうして、食事が終わると
「さぁ、いきましょうか。」
「そうだね。今日中にリゼンに着きたいし。」
2人とも目の前にいる少女が見えていないのか、完全無視である。
「あの～。ちょっといいですか？」
恐る恐る話しかけるが
「もう捕まらないでくださいね。では。」
そう言い残し、出発しようとするが
「ま、まってください。」
「なんですか。急いでるんですけど。」
「あのリゼンに向かうなら、私も連れて行ってください」
「めんどいです。」
「そこを何とかお願いします。」
「めんど「まぁまぁサヤいいじゃないですか。」エルーがそういうなら。」
なんだかんだでエルーに順応な沙耶であった。
「ありげとうござ「いいから、のってください」は、はい。」
こうして、旅の仲間が一人増えた。

おまけ

馬車で移動中
「ところで、名前はなんていうんですか？」
少女が沈黙に耐えられなくなり、質問する。
このとき、エルーは馬車を操作していて、中では沙耶が黙々と本を

読んでいる。
「サヤです。サヤ・カミナギ。」
「私は「いいですよ別に。覚える気ありませんし。」あの～。」
沙耶は基本人嫌いなので、態度がとげとげしい。
「なんで、そんなに態度が冷たいんでしょうか？」
「これが普通です。読書の邪魔しないでください。」
「え、え～と。」
完全に相手にされる気配はなく、どうしようか迷っていたが
「私は、ティア・ノートっていいます！」
迷っても仕方がないと結論を出し名前を言いきったが
「・・・・・・・」
何の反応もなく
「あの～。サヤさん？」
「なんですか？」
読書の邪魔をされ、いらいらした声で反応する
「な、なんでもないです・・・」
「そうですか。」
ティアが沙耶の心を開くにはまだまだの様子であった。

第１３話

リゼンに向け、移動している最中
「ねぇ、サヤ、追手と戦ってた時、エルーが人質にとられたじゃない。その時ナイフが消えたのってサヤの魔法？」
「そんなことどうでもいいでしょう。それと、気安く名前で呼ばないでください。」
本読みながら反応する。
「それに、魔法使おうとした奴も、魔法使えなくて驚いていたし、あれも沙耶の魔法？」
「・・・・・・」
「ねぇ、サヤ教えてよ。」
多少、強引にいかないとサヤの心を開くのは無理だと思ったティアは、無視されようが、邪険にされようが、話しかけようとしていたが
「あぁもう、うるさい！！　読書の邪魔するな！！」
ついに切れ、口調が変わる
「やっと、敬語じゃなくなったね。」
「っ！！　ふん。」
完全に無視する方向に変わった沙耶をみて、さすがに、これ以上はと思い、エルーに話しかける。
「エルーって、あの魔法のことについてしってる？」
「はい。でも、私からは教えられません。」
「む～。私だけ仲間はずれ？」
そんなこんなで、数時間後
「サヤ、そろそろ着きますよ。」
「ん～。お～、やっぱり首都は大きなー。」
ようやく、リゼンに到着し
「では、屋敷にいましょうか。」
「うん。」

「屋敷？　エルーってお嬢様か何か？」
「はい。ツェッティ家、聞いたことありませんか？」
「ええっ！！　それって公爵家じゃん！！　なんで、そんなお嬢様がここに！？」
「いろいろありまして。」
「早く行こうよエルー。家族に早く会ってあげないと。」
「そうですね。では、ティアさん、これでお別れですね。」
「さようなら。」
「うん。連れてきてありがとう。また今度。」
そう言って去っていった。
「「また？」」
「またって、どういうことでしょう？」
「まぁ、いいでしょ。それより、早く行こう。」
こうして、エルーの屋敷に帰ると
「エルー！！」
いきなり、母親がエルーを抱きしめてきた
「ただいま戻りました、お母様。」
「本当に無事でよかった。」
「すみません。ご心配おかけしました。」
「いえ、あなたが無事ならそれでいいのです。」
泣きながら抱きしめている母親の後ろから
「エルー、本当に無事だったんだな。」
「はい。お父様、ただ今戻りました。」
「よく戻ってきてくれた。ところで、後ろの少女は？」
「彼女が私をここまで護衛してくれたんです。」
「そうか、礼を言う。名は？」
「サヤ・カミナギと言います。」
「サヤ殿、私は、ルドガーという。あらためてお礼を言わせてくれ。私の娘を守ってくれて本当にありがとう。」
頭を下げお礼を言う。

「そ、そんな、頭を上げてください。それに、オスカーさんとの約束を果たしただけすよ。」
「そうか。詳しい話を聞きたい、とりあえず中にはいりたまえ。」
「失礼します。」
「そうかしこまらなくてもよい、君はエルーの命の恩人だ。」
そして、屋敷に入り、これまでのことを話した。
「そうか、オスカーは逝ったか。わかった。約束の通り報酬を払おう。」
「いえ、結構です。」
「なぜだね？」
「私は、エルーからいろいろなことを教わりましたから。」
「サヤ、でも。」
「いいんだよエルー、最初は報酬とこの世界の常識のためだったけど、いつからかわからないけど、本当に私が守りたくなったから、それに、友達どうし助けるのは、当たり前でしょ。」
「サヤ。」
少し照れ気味に言う沙耶に、その言葉に感動しているエルー
「サヤ殿。これを受け取ってくれ。」
そう言って、差し出したのは、白金貨3枚だった。
「だから、受け取れません。」
きっぱりと、拒絶するが
「サヤ殿、友達というのは助けあうものだろう、ならば、こちらからも援助させてくれ。」
「そうです。サヤ、私もあなたを助けたいんです。」
「エルーは、私を救ってくれたよ。」
「ならばサヤ殿、これからエルーは、ルクセント学園というところに通うことになる。そこは、全ての種族が通うところだ。もちろん、このクレンド王国からもだ。先の一軒の後だエルーをそこに通わせるのはやめようかと思っていた。しかし、サヤ殿、エルーの護衛として、同じ学園に通ってくぬか。そして、その報酬の前金としてこ

れを受けっとてほしい。」
「サヤ!!　私からもお願いします。」
「エルー・・・わかりました。お受けします。」
「そうか、ありがとう。娘をよろしく頼む。」
「はい。お任せください。」
「サヤ!!」
エルーが感極まり抱きついてきた。
「エルー!?／／／／」
そんな様子をエルーの両親はほほえましく見ていた。
そして、その後、屋敷に泊まることになり、エルーとその両親と一緒にご飯を食べ、エルーの父から呼び出された。
「一体何の御用件ですか?」
「まぁ、座りたまえ。私に聞きたいことがあるのではないかね?」
あたりが静まり、沙耶が口を開く
「はい。いくつか聞きたいことがあります。まず、ルドガーさんが死ぬことで得をする人間はいますか?」
「それは、数え切れないほどいるな。」
「では、その中にアトラス王国の人間はいますか?」
「いや。私は主に行政と内部調査が担当だ。外交は私の分野ではない。」
「なるほど、では最後に、ここ最近何か変わったことはありましたか?」
「ああ、脅迫状が届いた。それ自体は頻繁にあることだが、問題は内容だ。」
「どのような内容でしたか?」
「「次はお前だ」というものだ。つまり、これはエルーを襲うことを指示した人間ということになる。サヤ殿の話を聞く限り、相手はアトラス王国のものだろう。それが解せん。私を殺したところで、向こうには何の得もないはずだ。」
「なるほど、それは確かに妙ですね。相手の狙いが分からない。私

の持っている情報からすると、相手はアトラス王国のそれなりの地位にいる貴族です。」
そう言って。護衛隊長と交わした会話のことを話した。
「確かに、状況的には、その確率が高いな。そうすると、ますますわからん。」
「はい。ですから、とりあえず身を固める必要がありますね。」
「ああ。だが、私は何度も命を狙われたことがある、しかし、優秀な護衛のおかげでこれまで生きている。おそらくそれくらい相手のほうも分かっているだろう。それなのに、何故脅迫状を送ってきたのか。」
「それは、今の段階では分かりません。しかし、もしもの時があります。しばらく、休みを取られては？」
「ああ、そうしよう。警備もいままでより強化するとしよう。」
「そうですか。では私はこれで。」
「ああ。有力な情報、感謝する。」
そうして、１日が終わる。

ｓｉｄｅ　？？？
「ツェッティの娘を取り逃したと聞いたが？」
「はい。ですが心配はいりません。最低限の目的は果たしております。あの娘の殺害はできればいいという程度ですので。」
ある部屋の一室、豪華な服を着ている貴族と思わしき男と黒いマントで身を覆った男がいた。
「そうか、計画の方は？」
「順調です。先日、脅迫状を送りつけました。」
「それで、わざわざ報告のために来たわけではあるまい。」
「はい。腕の立つ暗殺者を数名貸していただきたいのですが。」
「いいだろう。つれていけ。」
「ありがとうございます。もうすぐあなたの願いはかないますよ、ウォルター伯爵。」

「ああ。期待している。ところで君のことは、何と呼べばいいのかね？」
「そうですね・・・・では、魔王と。」
こうして、再び黒幕が動き出す。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

おまけ

エルーと、その両親と一緒に食事をとっている時
「お父様、そういえば、お兄様方は？」
「ランドは、まだお前を探しまわっている。メリルは、一度戻ってきたが、数日ほど前に学園に行ってしまったよ。」
「そうですか。久しぶりにお会いしたかったのですが。」
「ランドはすぐ帰ってくるだろう。メリルにも連絡は入れておいた。」
「それは、楽しみです。」
嬉しそうにしている、エルーに
「エルーって兄妹いたんだ。」
「はい。ランドお兄様とミレイナお姉さまです。ランドお兄様は、学園でも屈指の強さをもっていて、ミレイナお姉さまは学園トップクラスの頭脳をもっている、私の自慢の兄妹です。」
「へぇ～。」
どこかおもしろくなさそうに返事をする沙耶に
「もしかして、妬いてるんですか？」
「な、なんで私がエルーの兄妹に妬かないといけないの！！／／／／／」
焦りながら言っても説得力はなく

「いいんですよ、サヤ。私は、家族を愛していますが、本当の愛はサヤの物ですから。」
「エ、エルー／／／／／」
「あらあら、サヤちゃんは、エルーのお嫁さんなのかしら？」
「な、なにを「ふむ。確かに愛に性別は関係ないな。よし、同性婚をこの国に認めさせよう」はぁ！！」
「ありがとうございます、お父様！！。」
「ちょっと、まｔ「あらあら、結婚式はどこで挙げましょうか。」だから／／／／」
「まかせろ、エルー、きっと最高の晴れ舞台にして見せよう。」
「聞きましたか、サヤ！！　これでもう私たちを阻むものはありません、今夜さっそく「うわあああああ／／／／／」からかいすぎました？」
「ふむ、やりすぎたか。」
「私は、本当でもよかったのに。」
「うぅ～／／／」
親子３人にかわかわれまくった沙耶であった。

第１３話（後書き）

第一章、旅立ち編終了
次回より第二章、リゼン編が始まります

第１４話（前書き）

リゼン編開始です。

第１４話

沙耶たちがリゼンにたどり着いた翌日
「サヤ、お買い物に行きましょう。」
「えっ、今本読んでるだけど。」
エルーが屋敷の書庫に連れて行ったとき、沙耶は目をキラキラさせ、
一晩中本を読み、エルーが訊ねなければ、そのまま、数日は引きこもるつもりであった沙耶に対し
「駄目です！！　本ばかり読んでいないで、街を案内しますから行きましょう。」
「わかったから、ひっぱらないで。」
こうして、街を出あることになった沙耶たちは、
「何か見たいものとかあります。」
「う～ん。あっ、魔具が見てみたい。」
「魔具ですか、それならこちらです。」
そう言ってきたのは武器屋であった。
「いらっしゃいませ。」
「魔具を見せてほしいんですけど。」
「こちらになります。」
案内されたところには、剣や槍などの武具もあれば、ブレスレットや指輪などアクセサリーもあった。
「へぇ～、いろいろあるんだねぇ。」
「魔具は冒険者には必須ですから。」
「これは？　それは、魔力をためる指輪です。」
後ろにいた、店員が答える
「どれくらい溜められるの？」
「数値にすると2万程度です。もちろん、放出すれば減りますが。」
「どうやって溜めるの？」
「呪文を唱えれば溜まっていきます、逆に止めたい時も同じです。」

「どれくらいの速さで溜まるの？」
「１秒で３０００程度でしょうか。」
「ふ～ん。よし、これ二つ頂戴。」
「２つで、白金貨３枚ですが、おまけして、白金貨２枚と金貨６０枚にしておきます。」
「ありがとう。」
「サヤ、プレゼントです。」
「えっ！！」
そういって、手渡されたのは一本のナイフだった。
「これは？」
「それは、魔力が通りやすいナイフです。」
やはり、後ろにいた店員が答える、一組の客にここまでべったりしていいのかと思ったが店内はがらっとしていたので納得した。
「でも、いいの？」
「いいんですよ、そんなに高くはないですけど、私からサヤにお礼は、まだしていませんでしたし。」
「そういうことなら、ありがたくもらっとくね。」
「はい。では、次に行きましょうか。」
「うん。」
そして、一日中、街を見て回り
「そろそろ、戻りましょうか。」
「うん。」
屋敷に帰ることにした沙耶たちに
「や、御二人さん」
後ろを振り向くと
「「ティア！！」」
「お久しぶりって言っても、昨日別れたばっかだけど。」
「なんでここにいるんですか？」
「私は、一応ここ出身だからね。もっとも、親は死んで１人暮らしだけど。」

「で、一体何の用？」
「相変わらず、態度が冷たい。まぁいいや、私もギルドの一員で今度エルーの屋敷を警護することになったの。」
「ちなみに、ランクは？」
「Dランク。」
「そんなに下で大丈夫なの？」
「さりげなくひどいね。まぁ、守ってくれるなら誰でもって感じだったから、他にも結構いるよ。報酬もそれなりだったし。」
「へ～。」
「というわけで、屋敷でまた会うことになるけど、よろしく。」
「こちらこそ、よろしくおねがいします。」
「まぁ、頑張って。」
「サヤ～、もう少し心開いてよ。」
「無理。」
「ふふっ。」
そうして、ティアと別れ、屋敷に戻る。
ティアの言っていた通り、警備が前より厳重になっており、冒険者もちらほらいた。
「なにかあるんでしょうか？」
「エルーが狙われたから、少し神経質になってるんだよ。」
今、混乱させるわけにはいかないので、さりげなく嘘をつく。
「お父様も心配性なんですから。」
「それだけ、エルーが大事だってことだよ。」
それから屋敷に入り
「ただ今戻りました。」
「お帰り、エルーくん、リゼンはどうだったかね？」
「流石に首都だけあって大きいですね。」
「そうかそうか。そうだ、エルー、今から少しの間、警備を固めるが、できるだけサヤくんと一緒にいなさい。」
「はい。わかりました。」

「あ、そうだエルー、これあげる。」
「これは、サヤが買った指輪ですか？」
「うん。魔力は全快までためて、さらに加工済みだから、これで魔力が少ないって嘆く必要はないよ。」
「でもいいんですか。これ高かったのに。」
「うん。エルーにもらってほしんだ。」
「ありがとうございます／／／／」
沙耶に似合わない、直接的な言葉に照れるエルー。
ちなみに加工済みとは、指輪の時間を止め、壊れることはなく、いくら使っても魔力は減らなくしたものである。
「あらあら、婚約指輪？」
「お母様！！／／／／／／」
「／／／／／／／」
珍しくエルーが動揺し、沙耶は、さっきの言葉を聞いて顔を赤くしていた。
「冗談よ。サヤちゃん、これからも、エルーのことおねがいね。」
「はい。エルーは、私がまm「エルー！！」・・・」
「お兄様！！」
いかにも熱血野郎的な雰囲気を出したイケメンがいた。
「本当に無事だったんだな。よかった。」
「心配をおかけしました。」
「いやいいんだ。それより、父上、表の警備はどうされたのですか？」
「ああ。それについては、夜説明する。」
「ところで、そちらの方は？」
「彼女がエルーをここまで守ってくれた者だ。」
「そうでしたか。エルーを助けてくれてありがとう。」
ランドが帰還し、事態が動き始める。

おまけ

ルドガーとの対話が終わりどうしようか迷っている時、エルーが屋敷の書庫に沙耶を連れいってくれるということで、書庫に向かっていた。

「エルー、書庫って大きいの？」

「はい。それに、いろいろな本もあります、ここです。」

扉をあけるとそこには見渡す限り本の棚が広がっており、その広さは、下手な書店より大きいほどである。

「どうですかサヤ？」

沙耶の方を見てみると、目をキラキラさせ、子供みたいにはしゃいでいた。

「エルー！！　さっそく読みに行っていい！！」

「え、ええ、どうぞ。」

エルーが少し引くほど興奮しており、もうすでに、自分の背より高いくらいに本を積んで読み始めていた。

「サヤったら、本当に本が好きなんですね。」

そんな様子を、愛しそうにに見ていた。

第15話

ランドが帰還し、次の日の夜
「侵入者だ!!」
そとにいた、冒険者の集団の1人が叫んだ。
「ついにきたか。」
沙耶は、ルドガー、ランド、エルー、ミレイナ（エルーの母）と屋敷の中にいた。
「お父様、これは?」
「大丈夫だ、心配するな。」
「でも。」
不安を隠せないエルーに
「大丈夫だよ、エルー、私がいるから。」
「サヤ。」
見つめあう二人、そこに
「そうだぞ、俺もいる。」
空気が読めないランドがいた。
「はい。お兄様。」
面白くない顔をしていた沙耶だか、すぐに切り替え
（しかし、本当に来るとは。相手は相当腕に自信があるのだろうか？　しかし、それならなぜ見つかった？　いくら、冒険者といっても、中にはティアみたいな人もいる。それに、戦闘においてはプロでも、警備となれば素人だ。それなのに現に見つかっている。ならば、こちらは囮か。）
「ルドガーさん。」
「わかっている。警備の者はドアの向こうにいる。」
そうして、しばらく外では、冒険者が暗殺者を追っていた。
（おかしい、なぜこない。これでは、もし囮が成功しても、警備が戻ってしまう。その油断を突く気か？　いや違う、まさか！）

「ルドガーさん！」
「どうした？」
「この国でルドガーさん以上の地位を持っている人は、どれくらいいますか。」
「なぜそんなことを・・・そうだな、私と同じ地位の公爵家これが残り２つあるが、これはリゼンにはいない。残るは王だ。」
沙耶が意味もなくそんなことを聞くわけがないと思い、問いに答える。
「まずい！！　ルドガーさん、いますぐ、王のいるところに案内してください。」
「そういうことか！！。わかった。」
「ランドさん。念のためここをお願いします。」
「あ、ああ。分かった。」
「サヤ？」
何が起こっているのか理解できないエルーたち
「エルー、絶対ここから動かないで。」
「サヤくん。」
そして、全力で王の寝室に向かう。
「これは！！」
「やっぱりか！！　急ぎましょう、ルドガーさん。」
その通路には、兵士たちと、暗殺者の死体が転がっていた。
「そこだ！！」
ルドガーが扉を指さす。
そこに、沙耶が扉を破壊し部屋に入る。そこには、壁際に押しやられ、腹部から出血している王と全身を黒いローブで覆い、とどめを刺そうとナイフを振りかぶっている暗殺者がいた。
「やらせるか！！」
すぐさま、ナイフを殺す。
「！！」
驚いて隙ができている暗殺者に向け

「シャドウチェーン」
中級魔法を指輪にこめていた魔力で無理矢理に制御し、無詠唱で放つ。
影から現れた鎖が暗殺者を拘束しようとするが
「なっ！！」
暗殺者はそれをレジストし、王にとどめを刺そうと、魔法を放とうとする。
「っち！！」
今度は魔力を殺し魔法の発動を止める。
暗殺は無理だと判断したのか、暗殺者は逃げようとするが
「逃がすか！！」
足の機能を殺し、転倒させる。
「捕まえた！！」
暗殺者に近づき情報を得ようとするが
「くそ！！」
すでに自殺していた。
「王、大丈夫ですか。」
はっとし王の方に向かう。
「なんとかな、腹部を刺された。回復魔法を使えるものを呼んでくれ。」
「わかりました。」
そういって、でようとするが。
「駄目です。まだ完全に安全というわけではありません。怪我は私が治します。」
「確かにそうだな、頼む。」
「癒しの風よ、この者の傷を癒せ、ヒールウインド。」
温かな風が吹き、傷をふさいでゆく。
傷がふさがると、緊張が解けたのか気を失う。
「ありがとうサヤくん、君のおかげで王が死なずに済んだ。」
「いえ、もっと早くきずくべきでした。エルーが襲われたことから、

全てはこのための囮だったと。」
「やはりそうだったか。」
「はい。おそらく、ある程度の地位を持っているものならだれでもよかったんだと思います。それがたまたまエルーであり、そして連続性を装い脅迫状を出し、意識をこちらに向け、その隙に王を襲撃する。見事にだまされました。」
「だが、王は死なずに済んだ。不幸中の幸いだ。」
「そうだといいのですが。」
「どういうことだ?」
「エルーが襲われたのはアトラス王国。そして、今回のことを企んだのも同一人物でしょう。そうなれば、アトラス王国の者がクレンド王国の王を暗殺しようとした、そんなふうに考える人がでてくるでしょう。これが問題になる。」
「まさか!!」
「おそらくその通りです。これで2国間に亀裂が入ります。下手をすれば戦争が起こるかもしれません。これが目的なのでしょう。」

side　魔王

「うまくいったようだな。」
魔王と名乗った男は、クレンド王国の薄暗い場所にいた。
「それに、サヤの力についても、大方の推測はついた。厄介な力だがどうにでもなる。」
魔王は薄暗い中を歩き、広い空洞に出る。
「これか。」
そこには、大きなクリスタルがあった。
「では、仕掛けを仕込ませてもらおう。」
クリスタルに、魔法をかける。
「もう少しだ、ようやく私の願いが叶う。」

大空洞の中に笑い声が響いた。

side out

第16話

先の事件から数日は経過し、現在クレンド王国、アトラス王国の代表者による話し合いが行われていた。
そのなかには、王の命を救い、エルーを救った沙耶の姿もあった。
現在の状況は、お互い冷静さを欠き国際会議とは思えない状態になっていた。
「そちらの国の者が王を暗殺しようとしたのだろう！！」
「どこにその証拠がある？　それに私たちには目的がない！！」
「目的だと、ただ戦争を起こしたいだけだろう！！」
「何だと！！」
このような会話が延々と繰り返され、これでは思いのままにされているなと思った沙耶は
「すみません。私の話を聞いてくれませんか。」
「誰だね君は？」
その問いにルドガーさんが答える
「彼女は私の娘をここまで守り、先日、王暗殺を食い止めた者だ。」
「ふん。それで何の話だ。」
小娘の言うとおりにするのが気に食わないのか、両国ともに不満気味である。
「私がこの国に向かっている時、ルドガーさんの娘さんを襲撃した元護衛隊長が現れ、それを撃退、そして彼から話を聞くことができました。内容はアトラス王国で黒いマントで全身を覆っている男が交渉を持ちかけたそうです。そしてその男は貴族の使いだとも言ってました。名前を聞こうとしたら、呪いが発動し死にました。」
沙耶の持つ情報を流すと、ざわざわと周りがどよめく、つづけて、
「しかし、それが本当のことかはわかりません。ですから、まず黒いマントの男を捜索すべきだと思います。その男が本当にこの計画に関わっている者なら、報告をするために頻繁にどこかに訪れてい

るはずです。」
「確かにそうだなここで話し合っても埒が明かぬ、アトラスの王よ、そちらに調査団を派遣してもよろしかな。」
「しかたないな。許可しよう。」
こうして話がまとまり、場を治めることができた。
「サヤくん、ご苦労だったね。まさかあの場を鎮めることができるとは。」
「ありがとうございます。でも、まだこれからですよ。」
「わかっている。戦争を回避するために全力を尽くそう。」
こうして、国際会議が終わった。

屋敷に戻りエルーに会いに行く
「どうでした？」
「とりあえず戦争は回避できそう。」
「そうですか。しかし、お父様ったらサヤまで連れて行くことないでしょうに。」
「しょうがないよ、私いろいろやっちゃったし。」
「そうですよ。サヤは私の護衛なんですからね。」
独占欲、丸出しのエルーがすこし怒った声で言う
「ごめんね、でも学園ではずっとそばにいるから。」
「絶対ですよ。」
周りから見れば、百合の花が満開に咲き誇っているだろう。
そこに、
「あの～。いいところで悪いんだけど私を無視しないでくれないかな～。」
すぐそこにいたティアがこの空気に耐えられなくなり、声をかける
「なぜここにいるんですか？」
「それは私が暗殺者の第一発見者だから、そのときの状況を説明してたの。」
「へぇ～。意外に役に立ったんだ。」

「以外って何よ！　そりゃ囮だったけど私だって頑張ってるんだから。」
「それで暗殺者は捕まえられたの？」
「・・・・・・・・・」
「あれだけの人数で？」
「仕方ないじゃん！！　みんな手がらがほしくて、我先にてな感じだったんだから。」
「あっそ。エルー、学園っていつから行くことになるの？」
「あと一月後です。」
「学園て、ルクセント学園？」
「そうだけど。」
「私も今年からそこに入学するんだ、よろしくね。」
「え～。」
「お願いしますから。もう少し態度を軟化させてください。」
「ふふっ。」
「そういえばランドさんは？」
「お兄様は一足早く学園にお戻りになりました。」
「無視しないでよ！！」
「わかったから。向こうでもあったら適当によろしく。」
「よし、その言葉が聞きたかった。じゃまたねー。」
「騒がしい奴。」
「いいじゃないですか。それより」
いきなりエルーが沙耶を抱きしめ
「エルー！／／／／」
「最近、何かと忙しそうだったので、なかなか機会が回ってこなかったのですが、ようやく二人っきりになれましたし、サヤ分を補給させてください。」
「サヤ分って／／／／／」
「駄目ですか？」
「駄目じゃないけど。」

「では。」
さらに強く抱きしめる
（あったかい。エルーだけは何があっても守ろう。）
そうして、沙耶もエルーに身を任せ、存分に堪能していた。
「サヤ、あまり無理しないでくださいね。」
「うん。でもエルーを守る時は無理でも無茶でもするからね。」
「サヤ・・・」
「エルー・・・」
沙耶とエルーが抱き合いながら見つめあう。
そして、顔がどんどん近付いていく、しかし
「エルー・・・・」
ミレイナが現れ、２人はその場に固まってしまった。
「ごめんなさい。ごゆっくりどうぞ。」
ミレイナが部屋から出ていくと２人とも顔を赤くし、離れた。
（危なかった、もうすぐでエルーと／／／／／）
（もうすぐで、サヤと・・・、もうお母様ったら。）
だんだん、２人の距離が近づいているのであった。

おまけ

ｓｉｄｅ　エルー

サヤとのキスが未遂に終わった夜
「はぁ～。サヤとキスですか。」
その時のことを思い出し顔を赤くし
「最初はただのいたずらだったんですけど、いつの間にか本気になってました。」
沙耶への思いが強くなり、今すぐにでも沙耶にキスしたいという欲望が強くなる

「でも、今でもお父様とお話してるんでしょうか。サヤったら頑張りすぎです。」
父に少し嫉妬するが
「まぁこれから学園に通うことになりますし、機会はたくさんあります。覚悟してくださいねサヤ。」
学園に通うことになったら沙耶を自分の物にしてやろうと、意気込むが
「そういえば、サヤは私のことどう思ってるのかしら。」
ふと、沙耶のことを思い出すが
「たぶん、私のこと好きでいてくれてると思いますが、明日少し確かましょうか。」
周りから見れば、周囲が引くほどのバカップルに見えるのだが自覚がないのか見当違いなことに悩んでいるエルーであった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第17話

side　魔王

クレンド王国から調査団が派遣され数日がたったある日
「これはどういうことだ!!」
今の状況に納得がいかず怒鳴る
「計画では戦争が起き、君からもらったこの兵器が役に立っているころだろう!!」
「おちついてください伯爵、心配せずとも戦争は起こして見せます。現在、2国間にあった平和には亀裂が入り何かあればすぐにでも起きるでしょう。」
「ふん。それでこれからどうするつもりかね?」
少し落ち着いたのか、次の計画について聞く
「調査団を利用します。今、黒いローブで全身を覆った男を探しているでしょう。なのでそんな恰好をした男を用意し、貴族の屋敷に出入りさせ、その屋敷に兵器を置いておけば、調査団が調べ、今度こそ戦争が起きるでしょう。」
「そうかそうか。それで、どの屋敷にするつもりだ?」
計画を聞いて機嫌が良くなる
「その前に、報酬のことについて確認したいのですが?」
「ああ、そのことか。調べておいた、ついてきたまえ。」
「ありがとうございます。」
そして、ウォルター伯爵の案内のもと、城の地下にある大空洞に移動する。
「君が求めていたのはこれか?」
「そうです。すばらしい、これが私の祖先の作品です。」
「ほう。これは北の魔大陸の結界を維持している物だと記してあったが、それを君の子孫が、なるほどそれならばあの兵器にも納得が

いく。」
「本当にありがとうございます。」
「もういいだろう。ここは本来立入禁止なんだ。もちろん誰にも気づかれずに来たつもりだが人が来ないとも限らない。」
「えぇ、本当にあなたは役に立ってくれた。」
「なにをいって・・・ぎゃあああ。」
瞬間、魔王がどこからか取り出した剣で腹を突きさす。
「き・・さま、なにをする！！」
いきなり刺され、驚愕と怒りに染まるが
「あなたは、このクリスタルを探してもらうために利用したんですよ。」
「ふ・・ざける・・な」
血が止まらず、意識が朦朧としている
「あぁ、あなたの望みである戦争は起こしてあげますよ、計画の通り黒いローブで体覆っている私が貴族であるあなたの家に出入りし、兵器はもうすでに準備しています。そして、最後にあなたの死によって戦争を起こします。」
「お・・・のれ」
「では、さようなら。」
剣を突き刺しとどめをさす。
「さて、これにも細工をしておかねばな。これであと2つ。」
大空洞にて、再び魔王の笑い声が響きわたる。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

調査団が派遣され1週間がたち、進展があり再び国際会議が開かれた。
「調査団の報告によると、アトラス王国のウォルター伯爵の屋敷に黒いローブで体中を覆った男が何度も訪れていることが確認されています。そして、伯爵の屋敷を調査しようとしたところ、その日伯

爵は出かけていて不在、出かけた場所をだれにも告げずておらず、後日訪れてましたが不在。これにより、地元の憲兵と協力、屋敷の近くの森に伯爵と黒いローブの男の死体が発見されました。また、屋敷の中には新兵器と思われるものが多数発見されました。報告は以上です。」

「これで決定的だな。アトラスの代表者よ何か弁解はあるか。」

「弁解だと、そちらの調査団が我々に罪をなすりつけるために、兵器を置き、邪魔だった伯爵を殺害したのだろう!!」

「何を言っている!!　では黒いローブの男はどう説明する。」

「そもそも、そんな男いるかどうかも怪しいではないか!!　証言したのはどこのだれかもわからぬ小娘だろう!!」

前の会議とは比べ物にならないくらいにお互いが殺気立っている。

（まさかそんな方法でくるとは!!　黒いローブの男の死体はおそらく偽物だろう。しかし、それを証明する手立てがない。どうする、どうすれば戦争を回避できる。ん、誰にも告げずに?）

「調査団の人、ちょっと聞きたいことがあります。」

「貴様は黙っていろ、これ以上場を乱すな!!」

両国から罵声が飛んでくるが

「黙らぬか!!」

クレンド王国の王の一言で一瞬にして静まる

「発言を許可する、聞きたいことはなにかね?」

「ありがとうございます。それでは伯爵がどこに行っていたかわかりますか。」

「アトラス王国の城に1人でいるところを発見されています。しかし、それからの行動は確認されておりません。」

「それはおかしいですね、城ともなればかなりの人がいるはずです。そんな中だれにも見つからずどうやって移動したんでしょうか?」

アトラスの貴族に尋ねるが

「ふん。そんなもの人がいないところを通ればよかろう、城といっても隠し通路なんかもある。そこを通れば誰に会うことはない。」

「では、伯爵は隠れて移動しなければならなかったということになります。そこまでして城で何をするつもりだったんですか？」
「そ、そんなこと私たちがわかるわけなかろう！！」
「そうですか。しかし、それではおかいしいですね。殺される前日には城にいて誰かとあっていたんですよね。」
「何を言っている！！」
「黙らんか！！」
アトラス王が貴族たちを黙らせる
「続きを。」
「調査団は伯爵の行方を調べたから伯爵の行方を知っています。それまで、伯爵がどこにいるか知らなかった。もし、伯爵を殺したのが調査団の誰かなら、あらかじめその誰かに陰で会う約束をしていたということになります。しかし、調査団を連れ城をうろつくにしてもあまり意味がない。もし、伯爵が罪をなすりつけるために、調査団に他の人間を調査してもらうつもりなら直接言ったほうが遥かに効率できです。故に調査団が殺したわけではないでしょう。ここからは私の推測になりますが、伯爵は黒いローブの男を城に招きたかった。そして、城のあるところに案内をし、その場、もしくは城から出たところで殺害したのでしょう。そうして、死体を放置、こちらを混乱させるため黒いローブの男の代わりの死体を用意した。」
「なるほどど。たしかに筋は通ってい入るが証拠がないぞ。」
「わかっています。しかし、この推測が正しければ戦争を起こせば黒いローブの男の思うがままです。なので、戦争を起こそうとしているなら考えを改めてください。」
「・・・・よかろう。このたびの件は後日話し合いを行う。それでよいか、クレンド王よ。」
「了解した。」
「ではこれにて解散。そこの娘はここに残れ。」
全員が会場から去り、両国の王と沙耶だけが残った。
「礼を言う。おかけで戦争を起こさずに済んだ。」

「いえ、戦争は私も起こしたくありませんから。それより、伯爵が城で起こした行動について何か心当たりはありますか？」
「城の宝物庫は何の被害はない。他には地下の大空洞だな。」
「そこにはなにが？」
「北の魔大陸の結界を維持しているクリスタルがある。しかし、何の変化も起こってはいない。」
「そのクリスタルは全部でいくつあるんですか？」
「全部で４つだ。それぞれの国、そしてルクセント学園にある。」
「ありがとうございます。」
「いや。久しぶりにいいものが見れた。こっちの国に来ぬか？　我が側近にするが。」
「いえ。私には守るべきものがありますので。」
「そうか。では、名は何と言う？」
「サヤ・カミナギです」
「サヤか。その名覚えておこう。ではな。」
こうして、何とか戦争を回避することができたサヤであった。

おまけ

2度目の国際会議が起こる数日前
「あっ、サヤ！！」
エルーが声をかけると、その隣にはルドガーがおり
「それで、今の状況は？」
「ああ、今は・・・・・」
「そうですか。では・・・・・・」
「ふむ、そうなれば・・・・・・」
「それならこうしたほうが・・・・・・」
会議に向け、情報を整理しできる限りの手を打っておこうと、ずっと話し込んでいた。

「ん。エルー、ごめんね。ちょっとルドガーさんと話しておかなきゃいけないことがあって。」
「そうですか。」
残念だが、これも国のためと思い諦めるが、それから会議始まる次の日まで、ずっと話し込んでおり、我慢の限界にきたエルーは
「サヤ！！」
話しあっているところに乗り込み
「ど、どうしたの。」
いきなりの登場に慌てるサヤとやはりこうなったかと少し嬉しそうなルドガーがおり
「お父様、少しサヤを借ります。」
「ああ、サヤくんも休憩が必要だろう。」
「いや、でも明日は大事な会議が。」
「いいから来てください！！」
無理矢理引っ張っていき、自分の部屋に連行すると
「ど、どうしたのエルー。」
いきなり連れてこられ困惑するエルーに
「どうもこうもありません。サヤは私の護衛ですよ！！　それなのに関係のない会議にばっかりに集中して、私のことほったらかしにしないでください！！」
そういうと、強く抱きしる。
エルーの言葉を聞いて、確かにここ数日間エルーと会話らしい会話していないことに気付き
「ごめんねエルー。」
「しばらくこうしてくれなければ許しません！！」
有無を言わさず抱きしめ続け、２０分程度が経過し頭が冷えてきたのか
「ごめんなさい、サヤはこの国のために頑張ってるのに・・・」
先ほどの行動を悔いているのか小さな声で謝る。
「謝らないでエルー。私もエルーとこうしたかったから。」

「サヤ。」
「ずっとほったらかしにしてたけど、一番大事なのはエルーだからね、エルーのいる国をまもりたかったから頑張ってたんだ、って言っても言い訳になっちゃうかな。」
「いいんです、私が分かってなかったんです。サヤが私のことどれだけ大切に思ってくれてるか、それなのに私ったら勘違いしてしまって、サヤが私のこと置いていってしまうかと思ってしまって。」
「そっか。それじゃ、これからは信じててね、私が一番大事なのはエルーなんだから。」
「はい。サヤ。」
それから、数十分抱き合い続け、エルーが眠ってしまうと
「絶対守って見せるからね。」
そういって、会議に向かい最後の打ち合わせを行った。

第１８話（前書き）

第２章リゼン編完結
第３章学園編上の前の幕間です。

第18話

2度目の会議から数日後、3回目の会議が開かれこれら事件は何者かの陰謀の可能性が高いとして、お互いが見張りあうという結論で執着した。
そして、沙耶は会議に出席し戦争を起こさずに済んだことに安心し、久しぶりに書庫で本を読み漁っていた。
「ここにいたか。」
「ルドガーさん？　なにかようですか？」
さすがに本を置き話を聞く
「いや、用というほどのものではないのだが、とりあえずお礼を言いたい。戦争を回避してくれてありがとう。」
「よしてください。戦争を回避できたのは私のみの力ではありませんから。」
「では、せめてこれは受け取ってくれ。」
そういって、渡されたのは多額のお金だった。
「こんなにうけとれませんよ。」
「いや、君はそれだけの活躍をした。王も感心していた、ぜひ私の側近に欲しいとも言っていた。それに、これは私だけのものではなく王からのものでもある。」
「では、これだけもらいます。」
多額のお金の中から白金貨5枚を抜き取る
「全く君はどうしてそう無欲なのだか。」
「私は、本さえ変えれば基本的にお金は必要ありませんから。
「そうか、邪魔して悪かった。それと、エルーが寂しがっている、できれば外に出かけて上げてくれないか。」
「そうですね。ここのとこごたごたでしたから、息抜きに行こうと思います。」
「娘を頼む。」

「はい。」
こうして、陰謀渦巻く2国間の争いが終わった。

「エルー。」
沙耶はエルーと街に出かけるためエルーのところを訪れた。
「どうしました？」
「暇なら、街に行こうかと思って。」
「はい、ぜひ。」
そして、街へと出かけて行った。
「さて、街にきたのはいいけどなにする？」
「私、ギルドに行ってみたいです。」
「どうして？」
「サヤからもらった指輪の効果を試してみたいんです。もしサヤが近くにいなかったら最低限自分の身を守れるようにしておきたいんです。」
「そういうことなら、行こうか。」
そしてギルドに向かい、エルーの登録を終えCランクの討伐の依頼を受けようとした時、
「あれ、サヤとエルーじゃん。こんなとこで何してんの？」
振り向くとそこにはティアがいた。
「なにって、依頼を受けようとしてたんだよ。」
「へぇ～。エルーと一緒に？　どんな依頼・・・ってこれCランクじゃん。並みの冒険者レベルだよこれ！！。最初っからこれ？」
「大丈夫ですよ。サヤも一緒に行きますから。」
「う～ん。受付のお姉さんこれって定員何人まで？」
「４名までです。」
「じゃ、私もついていく。」
「はぁ！！　来るな！！　１人で他の依頼を受けてろ！！」
「いいじゃん別に減るもんじゃないし。」
「報酬が減る。」

別にお金がほしいわけではないがあまり人に見られたくないものなので、拒絶するが
「じゃ、報酬はいらないからついていく。」
「何のためについてくるんだよ！！」
「エルーがどれだけ戦えるか見てみたいから。ついでにサヤも。」
「そんなもの、学園に行ったらいくらでも見せてやるからどっかいけ！！」
「なんでそんなに邪険にするの？　いい加減心開け！！」
「お前なんかに心開くか！！」
「ま、まぁサヤ。別にいいじゃないですか。」
「でもエルー。」
「やったー。流石はエルー。そこのちっこいのとは器が違う。」
ぎろりと睨むが、気にした様子はない
そうして、ティアが同行することになった。
依頼をこなすために、指定された場所に向かう途中
「それにしても、いきなりサーベルタイガーはやりすぎなんじゃない。あれってCランクの中でもそれなりに強い方でしょ。」
サーベルタイガーとは頭に鋭い刃のような角を持ち、チーターのような速さをもつ魔物であり、そのスピードから頭上にある刃で攻撃してくるので、なかなか厄介な魔物である。
「怖いんだったら帰れば。」
「ふん。サヤだってDランクじゃん。私と同じのくせに生意気な。」
「喧嘩はいけませんよ。」
そうしている内に、サーベルタイガーが潜む山に入る。
「それで、どうやって見つけるの？」
「それは任せてください。魔法で索敵します。」
「へぇ～。そんなに広範囲の索敵ができるんだ。」
「では行きます。きままなる風よ、その声を聞かせたまえ、ウインドソング。」
そして、風の中級魔法を発動させる。

エルーは、水と闇属性が得意だが、制御だけならばサヤよりも上手であり、そこに指輪の魔力を加えることで、どの属性の魔法でも中級までなら発動可能となっていた。
「あっちですね。」
いどうしたさきにはサーベルタイガーが居座り、こちらにきずくと臨戦態勢に入った。
「いきます。水の濁流よ、すべを押しつぶせ、スプレッド。」
大量の水が上から押し潰そうとするが、サーベルタイガーは自慢の俊敏さでかわし、エルーに向かって突進してくる。
「闇より生まれしものよ、我が命によりここに現れろ、ダークネストルーパー。」
闇を具現化しいくつもの兵士を作り出す。
そして闇より生まれし兵士たちは、サーベルタイガーへと襲いかかるが、次々と倒されていく。
「ねぇ。これってちょっとやばくない？　そろそろ手助けした方が・・・」
「あれは囮、本命は次だよ。」
サーベルタイガーが闇の兵士たちに手間取っている間に次の詠唱を始める
「深淵よりいでし闇よ、汝が闇はすべを包みこみ、すべてを凍てつかせる。今ここに闇の祝福を与えたまえ、ダークネスフリーズ。」
闇と水の混合上級魔法、実際の上級魔法より威力は低いが、様々な属性を組み合わせることができ汎用性は上級魔法より高い。しかし、その分制御は難しいのだが、見事に制御しサーベルタイガーの周を闇が包み込み、次の瞬間サーベルタイガーが一瞬のうちに凍りつき絶命した。
「は～。やりましたよサヤ。」
「エルーって混合上級魔法使えたんだ。」
「はい。たくさん勉強しましたから。」
「いやいやいや！　なんでお嬢様がそんなもの使えんの！！　そん

なのCランクの魔導師でも使えるかわかんないレベルじゃん。」
「それは内緒です。」
そして、依頼が終了しギルドへと戻る。
「お疲れさまでした。エルーさまは、Eランクに上がります。これは報酬です。」
「ありがとうございます。ティアさんこれを。」
「いや今回私何もしてないし、いいよ。」
「いいんですよ。私もあまり必要じゃないですから。」
「そう、じゃありがたくもらっとく。」
「はい。学園でよろしくお願いします」
「こちらこそ。」
「ほら、サヤも。」
「・・・・よろしく」
「こちらこそ、よろしくねサヤ。」
こうしてエルーの初めての戦いが終わった。

第19話

学園に入学するまで、残り半月程度になったある時、
「では、いきます。」
「いつでもいいよ。」
エルーが地面を蹴り、エルーに肉薄しナイフを横から一閃。
沙耶はしゃがんでかわし、そのまま足を払おうとする。
エルーはバックステップで下がりかわし、体制を整えようとするがいつの間にか接近していた沙耶が腕をつかみ、相手の力と自分の体のばねを使い投げる。
「また負けですか。」
「エルーは、背が高いんだからナイフじゃなくて、剣類の方がいいかもね。」
「それも考えておきましょう。」
何故こんなことをしているかというと、それは沙耶がどれだけ強いか試すために、ティアがいきなり襲いかかるが、それを軽く投げ飛ばしノックアウトし、それを見たエルーが自分も魔法だけでなく少しは接近戦もやれるようになっておきたいと言い出し、沙耶が教えることになったのである。最初は体術だけだったが、どんどんエスカレートしていき武器有りの模擬選まで行うようになった。
「エルー、もうこれぐらいで大丈夫じゃない？　襲われることがあっても、並大抵の相手なら距離置くことくらいできると思うよ。」
「でもサヤなら、距離を置くどころか勝っちゃうじゃないですか。」
「私はエルーの護衛だからそれくらいやれなきゃ駄目なの。」
「でも。」
「エルーは魔法では制御は私より上で指輪のおかげで魔力の方も問題なし、最悪私がいなくても身体強化と中級魔法さえあれば、並大抵の相手なら逃げるどころか勝つこともできるよ。」
「わかりました。今日はこれぐらいにしておきます。」

「だから～。」
向きになっているエルーを何とか諦めさせようとするが
「ほう。エルーもなかなかやるな。その調子で頑張りなさい。」
「ルドガーさん、なぜ火に油注いでるんですか！！」
「はいお父様。私頑張って強くなります。」
そんなに強くなってどうするのかと沙耶は思ったが本人の強い希望もあり、強く断れない。
「サヤ、ギルドに行きましょう。
「わかったから、引っ張らないで！！」
初めての依頼をこなしてからギルドに通うようになり、すでにDランクまで上がっていた。
そしてそれに付き添っていた沙耶はCランクに上がっていた。
また、実戦経験を積むことにより、エルーはめきめきと実力をつけていった。
「さて、今日はどれにしましょうか。」
本人が楽しそうにしているので、止めることができず、何かあったら困るのでサヤも付いていく。
最近はこれの繰り返しである。
しかし、流石にこれ以上は危険だと判断し
「エルーもう駄目だよ。これ以上は危なすぎる。」
「大丈夫ですよ。エルーだっていますから。」
「エルーがそこまでする必要はない。今のままでも自衛はできるよ。」
「でも・・・」
「エルー帰ろう。遊び半分でこれ以上依頼を受ける必要はないよ。」
そういって連れ帰ろうとするが
「遊び半分じゃありません。」
「えっ。」
「私は守られてるばかりは嫌なんです。それで沙耶が傷つくのは見てられないんです。あの事件の時私は何もできなかったどころか、

沙耶の行動を縛っていました。そのせいで、また沙耶は人を殺すとこだったんでしょう。最初に行ったはずです。サヤには私のために罪を背負ってほしくないって言ったはずです。」

「それでもエルーがこれ以上危ない目にあうのは見てられない。」

「それはこちらのセリフです。サヤは結局のところ自分のせいにばかりして、自分を傷つけたばかりじゃないですか。今度の事件も「自分の考えが甘かったせいで」と考えて自分を責めて、そんな傷ばかり負うサヤを見ているこっちの身にもなってください。だから、私は強くなってサヤの心を守って見せます。」

「・・・・・」

「だから、ここは引けません。どうしてもというなら私一人でも行きます。」

「エルーはどうしてそこまで私のために何かしようとするの?」

「それは、サヤが好きだからです。例え世界が敵になっても、私はサヤを信じます。」

「私がエルーの家族を殺しても?」

「はい。サヤが意味もなく殺すわけありませんから。」

一片の迷いなく言い切る。

「分かった。私はエルーを守って見せる。例え世界を敵に回しても、世界を殺してエルーを守る。」

「それでは、私はサヤが世界を殺し後、傷ついた心を癒し、守ります。」

2人は世界を敵に回してもお互いを守りあうと誓った。

「では、許してくれますよね。」

「駄目と言いたいけど、しょうがないか。でも私が一緒にいること、それだけは守ってね。」

「はい、もちろん。」

そして、また半月がたちいよいよ学園入学の時が目前に迫る。

おまけ

誓いが終わり、依頼を受け討伐の最中
「冥界の神ハデスよ、我が呼びかに応じ汝が力を我もとに、魂すら焼きつくす冥界の炎よ我に仇なすものを焼きつくせ、ジェノサイドフレイム」
オーガよりさらに大きい、ギガンテスを相手に火と闇の混合上級魔法を放つ。
ギガンテスの足元から大きな火柱が現れ、すさまじい熱量で巨体を焼きつくしている。
まさしく魂すらも焼きつくすように燃え、骨の一片すら残さず焼きつくした。
そんな光景を見て
（私を護衛にする意味あるのかなぁ？）
自分の仕事の意味に疑問を持つ沙耶であった

第２０話（前書き）

活動報告にも書きましたが私の勘違いにより一部設定を変更します

エルーの母をミレイナとして姉をメリルに変更します。

ご迷惑おかけしてすみません

第２０話

学園入学までのころ3日となり、エルーの体術もようやく形なり、沙耶ともそこそこ戦えるようになっていた。
そして、学園入学が近くなりエルーは準備をしているが、沙耶には持っていくものはほとんだなく、いつもの通り書庫で本を読んでいた。
最近はエルーに付き合っていたのでなかなかゆっくり読む暇がなく、久しぶりに取れた時間なので思う存分読んでいた。
今読んでいるのは、この世界の歴史である。
「へぇ～、こんなことがあったんだ。そして戦争がおきたのか。ここら辺は向こうとあんまり変わんないな。」
独り言をつぶやきながら、読んでいたが安息の時間が終わりを告げる。
「サヤ、準備できました？」
「準備も何も持っていくものないし。」
「そういえば着替えは？」
「服の時間止めてるからいらない。」
沙耶はこの世界に来てから一度も着替えていない、ずっとそばにいるのに気付かなかったエルーは逆にすごい
「それなら今から服を買いに行きましょう。」
「いいよ、それより本読みたい。」
「だめです。学園には他にも人がたくさんいるんですよ。ずっと同じ服だったら変じゃないですか。」
「うぅ。」
「ではいきましょうか。」
あっさりと言い負かされ、服を買うために街に出る
そして着いたのは、街で一番大きい店だった。
「ここに服なんてあるの？」

「ここはなんでもありますよ。」
そう言って中に入り服を見て回る
「サヤ！！　これ着てみてください。」
渡されたのは、いわゆるゴスロリだった。
「こんなの着て、登校する人なんていないよ！！」
「そんなことありません！！　たぶんですけど。」
最後の方は小さな声になり、とにかく服を着せようとするが
「帰る。」
「わー。待ってください、冗談ですよ！！　本当はこっちです。」
そう言って渡されたのは、普通の服だった。
「最初っからこっち渡してよ。」
「でもサヤの可愛いところを見たかったんですよ。」
「もうその手には引っ掛からないからね。」
「前のサヤならここで顔を赤くしながら慌ててたのに。」
沙耶の成長に肩を落とすエルー。
「まだ見て回る？」
「折角来たのでいろいろ見て回りましょう。」
それから、食料品や生活必需品、何故か武器まであったのでついでに見ていき
「そろそろ帰りましょうか。」
「うん、あっ！！　ごめん。買い忘れた物があったからちょっと買ってくる。そこで待ってて。」
「それなら私も行きましょうか？」
「いいよ。すぐに終わるから。」
そして、5分程度いなくなり、戻ってきたら屋敷に帰った
「ところで、買い忘れた物ってなんだってんですか？」
「投擲用のナイフ。」
物騒なもの平然と言うが、エルーは気にしない。
屋敷に着くと、買った服、投擲用のナイフ、お金をカバンの中に入れ準備を終える。

そして
「ほんとに恥ずかしい、でもエルーが喜んでくれるなら／／／／／／」
服を買っていたときにエルーが持ってきたゴスロリを着て鏡の前に立っていた。
なんだかんだいっても、エルーは沙耶にとって最も影響力を持つ存在なので、可愛いと言われたら着てみたくなってしまう。お忘れかもしれないが沙耶も年頃の少女なのだ。
そして、見せようか見せまいか迷っていたが、決心しエルーの部屋に向かう。
そのさいだれにも見つからぬよう細心の注意を払いエルーの部屋まで向かう。
「エルー、今大丈夫？」
「はい、どうぞ。」
扉を開けエルーの前に立つ
「サヤそれって！！」
「う、うん。エルーが喜んでくれると思って／／／／／」
「はぁ～。サヤ可愛すぎです。」
神を拝めるように、沙耶の姿を目に焼き付けるエルー。
「そ、そのあんまり見ないで。恥ずかしい／／／／」
照れて顔を開くさせる沙耶に、エルーの理性が切れかかる。
それでも、何とか耐えるために目をいったんそむける。
「エルー？　どうしたの？」
そんなことなど知らず、エルーに近づく。
そのさい、沙耶の身長の都合上見上げる形になり、先ほどまでの赤面が戻っておらず少し涙目。そんなものを見せられ理性が切れる。
「サヤ！！」
沙耶を押し倒す。
「エ、エルー！！」
「沙耶がそんな恰好で、私を誘うからいけないんですよ。」

「誘ってるわけじゃ／／／／」
「もう私止まれません。サヤ・・・・」
「エルー・・・・」
いつかの再現のように顔を近づけるが
「エルー、ちょっと学園のことで・・・・」
再びミレイナ登場、今の状況は、沙耶がゴスロリの服を着ていて、
それをエルーが押し倒し唇を奪おうとしている。
「お邪魔しました。それとエルー襲うのは駄目よ。」
そう言い残すとすぐに消えた。
お互い頭が冷えてきて
「まだ準備の続きがあるから／／／／」
慌てて部屋から出ていく沙耶、
「お母様、どこかで見てるのではないでしょうか。」
あまりのタイミングに疑問に思うエルーであった。

おまけ

エルーの部屋から逃げ帰った後
「まだ、心臓がバクバクしてる。もしあのままミレイナさんが来なかったら／／／／」
ＩＦのことを想像し妄想にふける沙耶であった。

第２１話

ついに、学園に移動することになり、
「お世話になりました。」
「行ってきます。お父様、お母様。」
「サヤくん、君はもう家族も同然の存在だ。そんな他人行儀の挨拶などしなくていい。」
「そうよ、将来はエルーのお嫁さんなんだから。」
「では、行ってきます。」
「あぁ、元気に暮らすんだぞ。エルー、サヤくんに頼ってばかりにならないようにな。」
「エルー、サヤちゃんみたいな子はなかなかいないからしっかり捕まえておくのよ。」
「はい。任せてくださいお母様。」
最後なのにしまらないあいさつを交わし、そして時間になり
「お父様、お母様、どうかお元気で。」
「ルドガーさん、ミレイナさん、短い間でしたが、初めて家族というものを持てた気がします。これからもよろしくお願いします。」
「こちらこそ、君みたいな聡明な子が後継ぎになるなら、いつでも引退できる。」
「サヤちゃん、エルーのことよろしくね。」
こうして、リゼンを旅立ちルクセント学園へと向かう。
そして、移動中
「私の家族はどうでしたか？」
「本当にいい人ばかりだった。ちょっとうらやましいかな。」
「そうですか。でも、これからはサヤも私たちの家族ですよ。」
「うん。あらためてよろしくねエルー。」
「はい♪」
ルクセント学園は、中央大陸と南の大陸の中間地点の島に存在し、

3つの国がそれぞれお金を出し合い経営している学園であり、いろいろな種族があつまる世界で一番大きな学園である。　なのでいったん港に向かい、船で学園まで移動する。
すでに港には、今年から入学するであろう生徒が多く着ており、中にはエルーと同じく貴族と思われるものもいた。
「ではルクセント学園まで移動します。新入生は乗船してください。」
船長が声をかけると、ぞろぞろと移動する。
ざっと見て６００人はいる人を乗せる船は当然大きく、どうやって動いているか疑問に思った沙耶は後で調べておこうと思った。
そして、移動中
「やっ、お二人さん。」
「ティアさん。本当にルクセント学園に通うんですね。」
「もしかして疑ってた?」
「いえそういうわけではないんですよ。」
「目をそらして言われも・・・」
少しへこんだティアであったが
「まぁそんなことはどうでもいいや、それより貴族もたくさんいたねー。なかには偉そーにしてるやつもいてさ、全くエルーを見習えっての。」
「たまにはいいこと言うんだな。」
「たまにって何よ!!」
「まぁまぁ。」
「それで、どれくらいで学園に着くの?」
「話をそらしやがって・・・だいたい3時間程度かな。」
「じゃ本読もう。」
そういうと、本を読み始めた。
「どっからだした。」
「禁則事項だ。」
そんな会話を交わしていると

「そこの君、僕が通るんだ今すぐ道を開けろ。」
いかにも、貴族ですといった格好をして、偉そうに座って本を読んでいた沙耶に命令する。
「・・・・・・・・・」
読書に集中し、全く聞こえていない沙耶に
「おい！　聞いているのか。」
無視されたことにいら立ち、怒鳴るが
「・・・・・・・・・」
早くも沸点を過ぎ
「いい度胸だ、炎の貴公子と呼ばれた僕を無視するとは覚悟はできているな！！」
厨二くさいセリフを言っている陰では
「炎の貴公子って誰？」
「さぁ、聞いたことがありません。」
「でもあれ貴族でしょ、ほんとに知らないの？」
「はい。社交界にはそこそこ参加しているんですが。」
「てことは自称、ぷっ・・笑いが止まんない。」
そんな会話を交わしているが聞こえた様子はなく、沙耶に襲いかかろうとするが
「うるさいですね。」
「は？」
襲いかかってきた男を見事に投げ飛ばし、また読書に戻る。
「貴様ぁ、もう許さん。　渦巻く炎よ・・・」
「こんなとこで魔法使う気！？」
「さすがにあれはまずいですね。」
そんことを気にせず沙耶は読書にふけっている。
「あらゆるものを巻き込み焼きつくせ、フレイムトルネード。」
「あぶないですよ。ウォーターキューブ。」
沙耶を覆い尽くそうとしている炎を、水で囲み鎮火する。
「なっ！！」

自慢の魔法を無力化されたこのに驚いている。
「さっきの、中級魔法じゃん。詠唱破棄なんてよくできたね。」
「あれは中級でも最低レベルのものですから、相手の魔法もそれくらいですから。」
さりげなく、ひどいことを言っているが、それまでサヤの相手をしていたエルーにとってあの程度の魔法は何の脅威にもなっておらず、指輪の魔力を使うまでもなかった。
「邪魔をするな!!」
今度は、エルーに向かって襲いかかるが
「じゃ、次は私が・・・」
ティアが迎撃しようとしたが
「エルーに触れるな。」
エルーに危害を加えようとしたのが沙耶の逆鱗に触れてしまい
「がはっ」
魔力を足に魔力をまとい、飛び蹴りを放ち蹴り飛ばす。
身体強化をできない沙耶は、体に魔力を通すのではなく、魔力を部分的に纏うことによって身体能力の差を埋めていた。
「大丈夫だったエルー」
「はい。でもあれくらいだったら私でも対処できましたのに。」
「私の出番が・・・」
出番を奪われ落ち込んでいるティアを無視し
「ところであいつ誰?」
「分かりません。」
いまだに落ち込んで会話に参加しないティア
「まぁ、いいか。」
「そうですね。」
気にしない方向に決定し再び読書を始める。
「出番・・・・」
そして、ルクセント学園の姿が見え始める。

おまけ

沙耶たちを見送ったツェッティ夫妻
「いったか。」
「寂しくなりますね。」
「3年後には帰ってくるさ。」
「そうですね。帰ってきたらどうします。」
「どうとは？」
「エルーとサヤちゃんのことですよ。気付いてない訳ではないんでしょう？」
「ふっ。2人に任せるさ。もし本当に一緒になりたいというなら、同性婚をこの国に認めさせる。」
「あなたもたいがい親バカですね。」
「当然だ。エルーはもちろん、サヤくんも私たちの娘のようなものだ。」
「そうですね。本当にいい娘でしたし、養女にしましょうか。」
「それは、まだ気が早い。あの二人の結論を聞いてからにしよう。」
「ふふっ。2人の行く末に祝福がありますように。」
2人の娘を送った夫妻はこれからの2人のことを思い、祈りを捧げた。

設定資料2

ティア・ノート

性別　女

年齢　１５歳

身長　１６３ｃｍ

体重　???

イメージ　まじこ◯のワン子

性格

何事も深く考えないタイプ。
ただし、身内に害をなすものには結構容赦ない。

備考

いろいろあり沙耶に助けを求め、助けたもらった。
それから、沙耶の心を開こうといろいろとやっている。
現在はそれなりに心を開いてきておりそこそこ仲良くやってる
得意な魔法属性は炎、この属性なら上級まで使うことができる。
魔力量は検査の時は誤魔化しているが沙耶以上。

能力　炎の支配者

炎なら相手が放った魔法でもコントロールできる。

しかし、沙耶が放ったルミナスフレアのよう光属性の魔法で現れる炎はコントロールできない。
最高では精霊魔法でさえもコントロールすることができるが、眷族ではなく突然変異型なので精霊魔法は使えない。

ルドガー・ツェッティ

性別　男

年齢　４５歳

身長　１７３ｃｍ

体重　７５ｋｇ

性格

自分に厳しい性格でクレンド王国で絶大なる発言力を持っている。
かなり頭が切れ、とても優秀な政治家。
身内には甘く、沙耶も娘のように扱っている。

能力　なし

ミレイナ・ツェッティ

性別　女

年齢　？？？

身長　１６０ｃｍ
体重　？？？
性格
おっとりした性格で家族を愛している。
本気で沙耶とエルーをくっつけようとしている。
ルドガーに負けず身内には甘い。
ミレイナも沙耶のことは娘のように思っている。

カイン・アトラス
性別　男
年齢　１９歳
身長　１７８ｃｍ
体重　６７ｋｇ
イメージ　Ｄ．Ｎ．ａｎｇ〇ｌの黒い羽をもっている人
性格
気性は荒く、相手が気に入らないとどちらが上かわからせるまでしつこい。
生徒会の一員で仲間からの信頼は厚い。

備考
学園生の中での実力は5本指に入るほどの強さ。
使う武器は刀で、得意な魔法属性は風。
実際の風魔法は中級が限度だが、刀に魔法を乗せて放つことで上級並みの力を放つ。
魔力量は6千程度。

能力　矢よけの加護

視認できる飛び道具はすべてかわすことができる。

シエル・フォード

性別　男

年齢　１８歳

身長　１７０ｃｍ

体重　６５ｋｇ

イメージ　ツバサクロ◯クルの魔法を使わない魔法使い

性格
基本的には静かな性格だが、カインを止めるときは少々荒っぽい。
また、生徒会の参謀の地位を得ており腹黒いところもある。

備考

カインには及ばないもののかなりの実力を持ち学園内で１０本指に入る。
フォードの一族は雷の精霊ヴォルトの眷族であり雷の魔法が得意。
精霊魔法を使えばカインすら倒すことができるが、詠唱が長く普通は前衛が時間を稼いで唱えるので一対一では使えない。
魔力量は５万以上と破格だが、沙耶やエルーのように魔力が無限ではないのでほいほいと強い魔法は放てない。

能力　ヴォルトの加護

フォードの一族ならだれでも持っている能力。
しかし、その力はすさまじく、加護の効果としては魔力量の増強、雷属性魔法の強化、雷魔法の耐性の強化などがある。

ミシェル・セイン

性別　女

年齢　？？？

身長　１６７ｃｍ

体重　？？？

イメージ　空〇境界の主人公が務める所の所長

性格

かなり大雑把な性格で結構短気。

備考

ルクセント学園で学園長を除くと最強。
とあるエルフの一族で、かなりの天才。
しかし、いつもの態度のせいであまりそんなふうには思われていない。
特に得意な魔法属性はなく沙耶と同じくオールラウンダーなタイプ。
魔力量は１０万以上で世界でもトッププクラス。

能力　なし

追加要素

魔法

中級と上級の中間に位置する混合上級魔法。
複数の属性を組み合わせて放つ魔法で、一つの属性しかもたない上級魔法より威力は劣るが汎用性が高い。

世界

ルクセント学園

ルクセント学園は魔王を封じた後、このようなことが起こったときに対抗できるように教育するところだったが、２０年くらい前からいろいろな学科を設立し、現在では世界一大きな学園となり３つの国がお金を出し合い経営している。

なので世界中から人が集まってくる。

第２２話（前書き）

第三章学園編上がはじまり、これから続々と新キャラが登場します

第２２話

「ルクセント学園本島に到着しました。」
ルクセント学園は島一つ丸ごと学園にしているが、そのほかにも、周りの島も敷地内である本島は安全のため魔物はいないが、周囲の島には訓練のために魔物が存在する。
新入生一行は、本島に上陸しそれぞれの寮へと向かう。
「大きいね～。下手するとエルーの屋敷より大きいかも。」
「それは、学園生全員が済むんですから大きいのは当たり前ですよ。」
「部屋割りってどうなってるの？」
「基本的に２人１組だそうです。サヤは私と一緒です。」
「そうなんだ。」
基本人嫌いなサヤはそのことに心配したが、杞憂に終わった。
「そういえばティアさんは？」
「自分のルームメイトを確認しにったんじゃない。」
「そうですか、では私たちも部屋に向かいましょうか。」
そして寮に着きさっそく部屋に入る。
２人が暮らすには十分な広さがあり、調理場、風呂、トイレも完備してある。
もちろん学食はあるが自分で作りたい場合は、島で材料を購入して作ることもできる。
「なかなかいい部屋だね。」
「そうですね。では荷ほどきを始めましょうか。」
そう言ってエルーは荷ほどきを始めるが、サヤは持ち物が少ないのですぐ終わってしまい部屋の中を見て回る。
「通学するのって明日からだよね。」
「はいそうですけど、それがどうかしましたか。」
「島を回ろうかなぁと思って。」

「それはいいですね。鍛錬ができるところも見つけたいですから。」
「じゃ、行こうか。」
「はい。」
そうして、寮を出て街の方に向かう、街の品の品質はリゼンのそれと劣らず、むしろ各国から集められているのでにぎわいとしてはこちらの方が上だった。
「結構なんでもあるね。」
「学園生が3年間通うところですからね。最低限必要なものは売っているんでしょう。」
「ほんとだ、武器まで売ってある。」
「少し見ていきますか?」
「う~ん。そうだね見て見よっか。エルーにも武器が必要だし。」
いろいろな武器や魔具があるがどれもエルーには合いそうにない。
そんな中
「これは?」
沙耶が見つけたのは、銃型の魔具だった。
「それは魔力を流し込むと、圧縮し放つ魔具です。」
後ろの店員が説明してくる。
前にも思ったが、1組の客にべったりしてていいのかと思ったが、数人の店員が残像を残すような勢いで、説明している。
後ろにはすでに店員はいない、これは気にしては負けだと思い気にしない。
「これなら、エルーでも使えそう。値段は・・・・」
白金貨3枚だった。
「う~ん。ギリギリだなぁ。」
現在沙耶が持つ金額はルドガーさんから受け取った白金貨3枚、エルーの修行のために受けた依頼の報酬金貨50枚。
「何かいいものありましたか。」
「うん、これなんだけど。」
魔具の説明をする。

「でもこれ高いですね。」
「できれば二つ欲しんだけどお金が・・・・」
「それなら大丈夫ですよ。お父様からこんな時のためにもらっていますから。」
「えっ！！」
「サヤが報酬としてもらってくれないから必要な時に渡してくれって、私が預かってたんです。」
「ルドガーさんも抜け目ないな、でもこれで買うことができるからいっか。」
支払いを済ませると
「はいエルー。」
魔具を渡すと
「これってサヤが使うんじゃないんですか？」
「私は、接近されてもある程度はカバーできるけどエルーはまだ怪しいからね。それなら、乱射すれば距離を置けるし、牽制にも使えるから。」
「それなら、私が支払いをするべきでしょう。この指輪といい私ばかりもらいすぎですよ。」
「それだけエルーには感謝してるの。」
「では、私も何か見つくろうことにします。」
そういって、いいものがないか探し始める。
「別にいいのに。」
「それでは私の気が済みません。これにします。」
そう言って手に取ったのはブレスレットだった。
「それは？」
「魔法制御の手助けをしてくれるものです。」
後ろを振り向くとすでに店員はいなかった。
「サヤは制御が少し苦手そうなので、これはちょうどいいでしょう。」
「ありがとう、エルー。」

そうして、新しい魔具を手に入れ、鍛錬ができる場所を探す。
「なかなかいいところがないね。」
「そうですね、できれば人が少ないところがいいんですけど。」
2人は街から外れ寮の近くを散策していた。
そして、広場が見つかり出てみれば
「はっ！！」
「くぅ。」
2人の男がはたから見てもかなりのレベルで戦っていた。
片方は刀で魔法すら切り裂き接近しようとするが、もう片方は魔法を使いながら二刀の刀で翻弄しながら戦っている。
「エアロブラスト」
「はぁ！！」
中級魔法をものともせず、一気に接近し一閃するが防がれ残ったもう片方で反撃する。
しかし、それを鞘で防ぎ再び一閃。
片腕で抑えきれなくなり片方の刀を弾き飛ばす。
体勢を崩されながらも残った片方を投擲する、それは簡単にかわされるがその隙に
「落ちろ天雷、サンターボルト。」
空から雷が降ってくるが。
鞘に刀を収め神速の一撃に魔力のせ上に放つ、お互いの魔力が拮抗するが神速の一撃が雷を打ち消す。
「はぁ、また負けか。」
「いや、最後のはなかなか危なかったぜ。」
模擬戦が終わったのか、戦いを振り返っている。
「すごいですね。最後の中級でもトップクラスの魔法ですよ。それをあんなに早くうてるなんて。」
「あっちのほうも、それを打つ消すなんて。」
レベルの高さに驚いている2人に
「ところでそこのお二人さん、のぞき見はいい趣味とはいえねぇぞ。

」
「いつから気付いてましたか。」
先ほどの戦いを見ても怖気づかず、逆に質問する
「気付いたのはさっきだ、お前ら新入生かならしょうがないか。」
「あなたたちは？」
「僕たちはこの学園の生徒だよ。」
「ここの生徒は皆あれぐらい強いんですか？」
「いや、俺たちはこの学園でもトップクラスだからな、それでも上には上がいるが。」
この人たちより強いなんてどんな人外だろうと想像していると
「ところでこんなとことでなにしてやがった？」
「鍛錬できる場所を探してたんです。」
「なるほどな、ならここを使え。俺たちがたまに使ってるかもしれねぇが他の生徒はあまりこの辺りには来ないから。」
「それはどうも御親切に。」
「はっ！！　新入生でそれだけ口が叩ければ上等だ。鍛錬するんだろ２対１でいい、かかってこい。」
先ほど雷を切り裂いた男が挑発する
「そうですね。では胸を御借りします。エルーいける？」
「大丈夫です。」
「加減はいらねぇ。殺す気で来い！」
そいうと、沙耶と男が駆け出した。

第２３話

先手は男の一閃、軽く音速を超えているが沙耶もこれまでそこそこの経験を積んでいるので受けるの無理だと判断し、地面の壁を盛り上げる。
しかし、男の一閃は壁ごと両断しようとするが、すでにそこには沙耶はおらず
「フレイムボム」
音と爆風によって、動きを封じようとするが
「甘ぇ！！」
そんなものをもろともせず、接近してくるが
「っち！！」
エルーが弾丸を放ち接近を防ぐ、いったん止まった男の懐に潜り袖に仕込んだナイフで斬り裂こうとするが
「俺が刀だけと思うなよ、ウインドボム」
当然男の周りに爆風がおき、沙耶が吹き飛ばされる。
しかし、そこでエルーも経験を積んでいるので、この隙を見逃さない。
「闇を縛る鎖よ、影より現れろ。シャドーチェーン。」
男の影から鎖が飛び出し拘束しようとするが
「こんなもので捕まえられると思うな！！」
先ほど見せた神速の一閃を放ち、鎖を切断しそのままエルーを狙うが
「なめないでください。アースウォール。」
詠唱破棄の中級魔法を放つ、中級でも中間ランクに入る土の壁を目の前に展開する。
シャドーチェーンで威力を殺され土の壁を両断できずに止まる。
「どこを見てるんですか。」
エルーに気を取られていた男は再び沙耶の接近を許し
「っち！！　ウインド「遅い！！」がっ！！」

魔法を発動される前に飛び蹴りで男の顔面を蹴り飛ばす。
「ははははっ！！　やるじゃねぇか、俺に一撃を入れたやつはなかなかいないぜ。ここからは本気で「ストップ！！」なんだよ。」
気分が出てきて本気でいこうと思った瞬間、もう一人の男が止める。
「「なんだよ」じゃない。新入生相手に本気でいってどうするつもりだ。」
「大丈夫だ。こいつらは新入生レベルじゃないのは見てわかるだろう。」
「それでもだ。これ以上は見逃せない。」
「っち、わかったよ。今日はここまでだ、運が良かったなお前ら。」
「それはこちらのセリフですよ先輩。」
しっかりと挑発する沙耶
「てめぇ！！　ぶっ殺「だから駄目だってば！！」放せ！！　あの新入生には思い知らせてやる。」
「全く、こんな女の子二人に本気になるなんて大人げない人ですね。」
「お願いでから挑発しないで！！」
「は・な・せー！！」
「サヤもこの辺で終わりですよ。」
お互いのブレーキ役が止めようとするが
「はっ！！　2人係でようやく一撃入れたぐらいで調子に乗るんじゃねぇぞ！！
「最初に2人係で来いっていたのはそっちですよ。それに胸を借りるつもりでいったのに簡単に一撃入れられてしまうなんて、もう少し謙遜という言葉を覚えたほうがいいですよ。」
沙耶は挑発することやめず、男の方はブチ切れ
「上等だてめぇ！！　格の違いを見せてやる。」
「返り討ちにしてあげます。」
ブレーキ役を跳ねのけ、再びぶつかり合う
「すべを巻き込み斬り裂け、ソニックエッジ」

神速の一撃に魔力ではなく魔法をのせ放つ、その威力は木をやすやすと切断し沙耶に迫る。
「荒ぶる自然の猛威よ、この地に災害を引き起こせ、ヴォルテックス。」
雷と風の混合上級魔法を放ち、大嵐を出現させる。
お互いの魔法が拮抗し辺りに被害を及ぼす。
「あの馬鹿、新入生相手に本気になってどうする。仕方ない、エルーさんでしたか？　これを止めたいと思いますが僕だけでは少々厳しい手伝ってくれますか？」
「分かりました、片方は私の連れでするので。苦労してますね。」
「ご理解してくれてありがとうございます。ではいきますよ。」
「いつでもどうぞ。」
「雷神トールよ、我祈りを聞き届け、全てを打ち砕く雷の槌を振り下ろせ、トールハンマー」
「全てのものを凍てつかせ、その生命を止める世界よ、いまここに現界せよ、ニヴルヘイム。」
雷の上級魔法、水と闇の混合上級魔法が、天災を巻き起こしている魔法にぶつかる。
ニヴルヘイムが動きを止め、トールハンマーで打ち砕く。
「邪魔すんな!!、セシル。」
いきなり横やりを入れられ憤る男だが
「黙れ。いくらなんでもこれはやりすぎだ。後で先生方に報告する、処罰はその時に。」
「ちょっと待て!!　喧嘩売ってきたのは向こうだぞ。」
「最初に挑んできたのはそっちじゃないですか。」
「サヤは後でお仕置きですからね。」
「なぜ!!」
「はっ!!　ざまぁみろ。」
「お前もだよ、カイン」
「俺は悪くねぇだろ!!」

「この惨状を見てそれが言えるか？」
４人がいる周囲の森は木々が斬り裂かれ、吹き飛ばされ、まさに天災が通ったようになっていた。
「分かったか。先生方も新入生がやったといっても信用しないと思うから、責任はすべてカインに負ってもらうよ。」
「くそ。」
「ご愁傷様ですね、先輩。」
落ち込んでいるカインに追い打ちをかけるが
「サヤ、責任は先輩に取ってもらいますが、きっちりと罰は受けてもらいますよ。」
「うぅ。」
落ち込んでいる2人を置いて
「ありがとうございます。新入生にこんなことをやらせてしまってすみません。」
「いえ。サヤの人嫌いはいつものことですから。」
「そう言ってもらえると助かります。では、私たちはこれで後始末もありますので。最初に言った通り鍛錬はここで行ってください」
「ありがとうございます。私はエルー・ツェッティと言います。」
「ランドの兄妹ですか？」
「兄をご存じで？」
「いろいろ有名ですからね彼は。僕はセシル・フォード。ルクセント学園にようこそ。」
こうして、島に来て初めての戦闘が終わった。

おまけ
ようやく立ち直りお互いの目が合うと
「てめぇ、名前は？」
「名前を聞くときは自分からって教わりませんでしたか。」

「いちいち癇に障る野郎だな「私は女ですよ。その目は飾りですか。」・・・カイン・アトラスだ、俺をここまで怒らせたのはお前が初めてだ。・・・・いつか殺す。」
「王族の方でしたか。　王は立派だというのに子息がこれとは・・・」
「父上に会ったことがあるのか!!」
「えぇ、立派なかたでしたよ、あなたと違って。」
「てめぇ、一体何もんだ?」
「教える義理がありません。」
「名乗ったんだから、てめぇも名乗れよ!!」
「お断りします。馬鹿に名乗る名はありません。」
「殺す!!」
「そんな言葉しか言えないのですか?　可哀相な頭ですね。」
再び構えるが
「カイン!!」　「サヤ!!」
再び止められる。
「頼むセシル、後生だあいつを殺させてくれ。」
「落ち着け、いい加減にしないと退学になるぞ。」
「っち!!　名前を名乗りやがれ。」
「人に頼む態度がそれですか?」
「サヤ、いい加減にしてください。」
「・・・サヤ・カミナギ。」
渋々答える
「サヤだな「気安く名前で呼ばないでください」学園であったら覚えておけよ。」
そうして2人は去っていた。

「さて、サヤお仕置きの時間です。」
黒い笑みを浮かべ、沙耶に近づく
「ゆ、許してエルー。」

小動物のように震える沙耶
「大丈夫、もしかすると新しい性癖に目覚めるかもしれないけど。」
久しぶりのSモードになり口調が変わる
「ひ、きゃあああああああああ」
寮のはずれで絶叫が響き渡った。

第２４話

カインとの戦いから次の日、学園の入学式が行われていた。
現在学園長が歓迎の言葉を述べている。
「みなさんご入学おめでとうございます。これから3年間それぞれの分野で頑張ってもらうことになります。つらいこともあるでしょうが新しい友人たちと乗り越え無事卒業できるよう願っています。」
学園長の話が終わり、学園のルールや必要事項を説明している。
「学園長若かったねー。」
「あれは魔法でごまかしているらしいですよ。」
「てことは実は結構年いってるのかな。」
「たぶんそうですけど、女性の前で年の話をするのは駄目ですよ。」
そんな会話をしている内に説明が終わりそれぞれの教室に移動している。
ちなみにエルーと沙耶は総合学科で文字どうりあらゆるものを広く学ぶ学科である。
他の学科は、戦闘を専門に学ぶところや、政治、研究、学問など様々なところがある。

教室に移動すると、すでにいくつかのグループができており種族別にできているようだった。
「席についてー、出席とるわよー」
このクラスの担任と思われる先生が入ってきて、皆を席に着かせる。
「はい、よろしい。とりあえず入学おめでとう。ここでは、いろんなことを幅広く学んでいくところよ。政治から戦闘訓練までやるから覚悟しといてね。」
見たところ二十代前半と思われ、なかなかの美人だった。
「ちなみに私の名前はミシェル・セインよ。ミシェル先生と呼びなさい。私が担当するのは戦闘に関することよ、私は学園長を除くと

この学園で最強よ。」
自信満々に言い放つだけあって、隙がなくどこから襲われても迎撃できるだろう。
それから、このクラスのことについての説明があり、今日は解散となった。

学園から寮に戻り、やることがないので鍛錬をすることにした2人はあの場所に向かう。
「あの人たちいないみたいだね。」
「えぇ、この前は大変でしたからね。」
「う。うん。」
お仕置きのことを思い出し顔を青くする
「では、はじめましょうか。」
「いつでもいいよ。」
2人が構え、エルーが先手に二丁の銃から魔弾を放つ。
沙耶は最小限の動きでかわし、かわせないものはナイフで斬りエルーへと接近するが
エルーはさらに魔弾を放つ。
「無駄だよ!」
目の前に迫る魔弾を斬るが
「なっ!!」
斬った瞬間炎が迫り視界を覆う
「甘いですよサヤ、魔力に性質を持たせればこれくらいはできます。」
視界を炎で覆われこちらの姿が確認できない沙耶に魔弾を放つ。
「くっ。」
ナイフに魔力を流し魔弾をしのぐが状態が悪く何発か命中してしまう。
しかし、沙耶はすぐに回復しエルーに接近しようとするが、一瞬目をそらしたすきに目の前から消え

「ウォーターキューブ」
どこからか魔法を放ち沙耶を水の中に閉じ込めようとする。
「こんなもの！！」
水に電流を流し水を分解、それに伴う熱で瞬く間に脱出するが
「闇を縛る鎖よ、影より現れろ、シャドーチェーン。」
今度は闇の鎖が拘束しようとする。
それを沙耶は
「闇を祓え、ルミナスシャイン」
対闇の光魔法でレジストする。
しかし、魔法に集中し隙を見せた沙耶に魔弾を放ちながら接近する。
沙耶は魔弾を捌くが接近を許してしまい近距離からの魔弾を放たれる。
流石にこの距離からはかわせないと判断し距離を置こうとするが
「甘いです！！」
沙耶がバックステップで後ろに飛ぶと黒い鎖が飛び出し沙耶を拘束する。
「なっ！！」
驚いている沙耶に銃を突きつけ
「これで私の勝ちですね。」
「まさか、設置式の魔法を使うなんて・・・・」
「それは、正攻法じゃ勝てないですから罠を張らせいただきました。」
「はぁ。私の負けか。」
「ふふっ。初めて勝ちました。この魔具のおかげですね。」
「属性によって弾を変えられるとは驚いたよ。」
「私も思いつきでやった見たんですけど成功してよかったです。」
「次は負けないからね。」
「私も負けませんよ。」
鍛錬を終え帰えろうとすると
「いやがったな。」

カインが突然現れ
「てめぇ、なんで戦闘科に所属してねぇんだよ！！」
「それはこちらの勝手です。」
「ざけんな！！　それだけの実力があんなら戦闘科に転科しろ。」
「却下です。それに私はエルーの護衛ですから。」
「ならそいつも転科すりゃいいじゃねぇか。」
「エルーはお嬢様なんですよ、戦闘なんて専門的に学ぶ必要はありません。」
「さっきまで戦ってたんじゃねぇのかよ。」
「あれはあくまで自衛のためのものです。」
話は平行線をたどり
「今すぐに俺と戦え、俺に負けたら転科しやがれ。」
「却下です、私は平穏に過ごしたいんです。」
そうして、去ろうとする沙耶に
「逃げんのかよ！！」
「あなたは馬鹿ですか、そんな安い挑発に乗る人なんかあなた以外にいませんよ。」
挑発に乗らず逆に挑発する沙耶
「やっぱりてめぇは気にいらねぇ。ここで「なにやってんだこの馬鹿！！」がっ！！」
後ろからセシルが思いっきり殴る。
「なにしやがる。」
「どうもこうもあるか！！　お前昨日どれだけ怒られたのか忘れたのか！！」
「あいつが戦闘科にいないのが悪いんだよ！！」
「子供みたいなわがまま言わないで帰るよ。」
「だから、ここで決着を「黙れ！！」・・・・」
ボディーブローを決め意識を刈り取り
「ご迷惑をおかけしました。」
「まったくです、貴方もそれの保護者ならきちんと躾といてくださ

い。」
「本当にすみません。この馬鹿にはきちんと言い聞かせておくので、この辺で勘弁してください。」
「次に襲ってきたら先生にこう伝えます。いきなり襲いかかってきて自分の思い道理にしようとしたと。」
一応嘘は言っておらず、これをそのまま伝えれば犯罪者になり退学させるぞと軽く脅す。
「それは怖いですね。カインを退学にはさせたくありませんので肝に銘じておきます」
「話が分かる人で助かります。」
「ではこれで。」
カインを抱え去っていた。
「はぁ～。疲れた帰ろうかエルー。」
「そうですね。でもあんまり挑発しては駄目ですよ」
「善処する。」
学園初日が終わった。

おまけ
セシルに抱えられたカインが意識を取り戻し
「ここは？」
「目を覚ましたカイン。君も生徒会の一員なんだからもう少し考えて行動してよね。今回は見逃してくれたけど次は退学になるよ。」
「ふん。なにかあってももみ消せば問題ない。」
「しかし、彼女はおまえお父様とも面識があるみたいだし、それにかなり切れる。下手のことをすればカインでもまずいよ。」
「くそ。なんであのレベルの奴が戦闘科じゃねぇんだ。久しぶりにまともにやれる相手だったのに。」
「彼女には彼女の都合があるんだよ。いつもカインの思う通りになるわけじゃないんだよ。」
「しかし、あいつとは決着をつけなきゃ気が済まん。」

「だから、考えて行動してよ。今回は僕に考えがあるからその通り動いてよ。」
「またお前の策かよ。相変わらず腹黒いな。」
「そう。ならやめることにしよう。」
「悪かった。その策を教えてくれ。」
「はいはい。じゃあまず・・・・」
こうして新たな厄介事に巻き込まれる沙耶であった。

第２５話

次の日の朝、もはや恒例となった寝ているエルーを起こすための行為。
屋敷にいた時に聞いたのだが、やはりメイドさんもエルーを起こすことにてこずっていたらしい。
しかし、流石に慣れ、最初は３０分かかっていたが今は3分で起こせるようになった。
「エルー起きて。」
「ふぁ～。おはようございます。」
「おはよう、今日から授業だからしっかりしてね。」
「はい。では朝食に行きましょうか。」
朝食をとり、通学の準備を終え学園に向かう。
「そういえば、ティアさんってどこの学科なんでしょうか？」
「さぁ。ギルドで頑張ってるみたいだから戦闘科じゃない。」
「そのとおり。」
突然現れるティアになんのリアクションもない２人
「あれ、もう少しリアクション取ってもらえると、うれしいなぁと思うんだけど・・・」
「飽きた。」
「ワンパターンですね。」
「最近エルーの毒舌ひどくない。」
「そんなことありませんよ。」
笑顔で答える。
「ま、まぁいいや。それより、２人とも戦闘科に入ると思ってたんだけど違ったんだね。」
「私はいろいろなことを知りたいですから。」
「私はエルーの護衛だから。」
「私も総合科にすればよかった。」

そして学園に着くと
「じゃまた。」
ティアは戦闘科の校舎に向かっていた。

沙耶とエルーは教室に入りＨＲを受けている。
「今日はいろいろな測定やるわよ。まぁ、身体測定やら魔力検査などがあるから移動しろ。」
説明も適当だが、生徒たちの扱いも適当であるミシェルに
「あれが担任でいいのか？」
「そこ聞こえているわよ。」
「・・・なんのことですか？」
「私が担任にふさわしくないって言ってたでしょ。」
「いえ正確には、ミシェル先生に担任が務まるか疑問に思っていただけです。」
「いい度胸だな、名前は？」
「担任なのに生徒の名前を把握していないんですか？」
「う、うっさい。生意気な生徒ね。立場を教えてあげようかしら。」
「ここの人はみんなそんなに沸点が低いんですか？」
「ここの人？　もしかして、カインと戦ったのってあんた？」
「あの短気な刀使いのことですか？」
「なるほど、確かにこれはあいつが切れてもおかしくないわ。運がよかったわね、カインが見逃さなきゃあんた死んでたわよ。」
「そうですか。それは運が良かったみたいですね。」
学園に来て３日目、すでに２つ目の問題を起こした沙耶
「サヤ！！　すみませんミシェル先生、この子ちょっと人嫌いなんで悪気はないんです。」
「はぁ～。分かったわよ、しっかり押さえておきなさいよ。」
ミシェルが去りピリピリとした空気が弛緩する。
「まったくサヤ！！　簡単に挑発しては駄目ですよ。」

「ごめん。」
「よろしい。ではいきましょうか。」

そうして、まずは身体測定がおこなわれ、エルーはしっかりと成長しているようだが、もちろん沙耶は成長などしておらず羨ましそうな目でエルーを見ていた。
「私ももう少し身長がほしい・・・」
「駄目です。サヤは今のままが一番可愛いんですから。」
「／／／／／」
次は魔力測定がおこなれ、エルーの魔力がかなり上昇していた。
「見てくださいサヤ！！　５２３１ですよ。半年前から3倍近く上がってます。これも地道な努力の成果ですよ。」
沙耶との鍛錬による成長の証が現れ興奮している。
「よかったねエルー。これからも頑張ろう。」
「はい♪」
それから、いろいろな検査を受けこの日は終了した。

そして次の日
「今日は、あんたらがどれだけ戦えるか見るから闘技場まで来い。」
「昨日内に言っとけよ駄目教師め。」
「聞こえてるぞ、カミナギ。」
「すみません。本音が出ました。」
「いい度胸だ、闘技場に来い！！　一度しめてやる。」
「どうぞお手柔らかに」
昨日の再現をやってのけた沙耶に
「サヤ。お仕置きが足りなかったんですか。」
黒い笑みで沙耶にお仕置き発言をするエルー
「い、いや、あれはその・・・」
「今夜はお仕置きです。」

「ゆ、許してエルー！！」
「駄目です。今度という今度はその人嫌い少しは矯正します。」
「うぅ～。」
今夜のことを想像し顔を青くする沙耶であった。

そして闘技場に移動した生徒たち、そこには戦闘科の生徒もいた。
「今日は戦闘科と合同だからね。怪我はしないように。トーナメント方式でやるから、順番は各々確認しておくこと。では一時解散。」
生徒は自分の番号を確認したり、武器の整備を行っている。
「サヤは何番でした。」
「一番最初。いきなり戦闘科の奴とやることになるみたい。」
「それはまた、なにかしらの陰謀を感じますね。」
そういってミシェルの方を見るとにやにやと笑っていた。
「まぁ、たぶん大丈夫でしょ。」
「カイン先輩より強いということはないと思いますので大丈夫ですね。」
総合科の生徒は戦闘科の生徒とあたって嘆いているが、２人はどうでもよさそうにしている。
そして、一回戦が始まった。
「では、最初の生徒は出てきなさい。始める前に学科と名前を宣言すること。いいわね。」
「戦闘科、ラーロン・イリウス。」
「総合科、サヤ・カミナギ」
「では、始め！！」
戦闘が始まり、ラーロンが剣を振り下ろしてくる。
サヤは紙一重でかわし、
（こいつどっかで見たような。）
「よくかわしたな。炎の貴公子と呼ばれた僕の一撃をかわせるなんて誇っていいぞ。」

「あぁ！！　あのときの。」
「何を言ってるんだ君は？」
ラーロンはあの時顔を見る前に意識を失ってしまったので沙耶のことことが分かっていない。
「いや覚えていないならいいです。それより早く来てください。まさかと思いますがさっきのが全力ですか？」
しっかりと挑発は忘れない沙耶、そんな安い挑発に
「・・・・いいだろう、後悔するなよ。渦巻くほの「馬鹿ですかあなたは」ぐはっ」
詠唱中に隙だらけとなったラーロンを蹴り飛ばし意識を刈り取る。
「勝者、サヤ・カミナギ。」
「っち！！　戦闘科だったから当てたのに駄目だったか。」
初戦敗退した沙耶を馬鹿にしようと思っていたが思惑が外れイライラしているミシェル。
「ごくろうさまです。」
「相手が雑魚すぎて、準備運動にすらならなかったけど。」
そしてエルーの出番が回り
「では行ってきますね。」
「怪我しないでね。」
「心配しすぎてすよ。私だってここ半年頑張ってきたんですから。」
そういって舞台に上がる
「戦闘科、レイン・シーファです。」
「総合科、エルー・ツェッティです。」
エルーの相手は水色の長い髪を腰のあたりまで伸ばした小柄な少女だった。
「では、始め。」
先手はエルー、魔弾をレインに向け放つが
「ウォータキューブ」
水の塊を出現させ魔弾を防ぎ
「コールド。アタック。」

出現させた水を凍らせ、その氷をエルーに向け放つ。
エルーは炎の魔弾を放ち氷を砕こうとするが
「バースト。」
魔弾が当たる前に氷が砕け散り、破片がエルーへと襲いかかる。
「くっ。」
氷の破片がエルーに当たり、切り傷ができる。
「あの女殺す。」
沙耶はエルーが傷つけられ殺意を抱くが、さすがに乱入はしない。
「魔弾は無駄みたいですね。では。」
身体強化をかけ、接近戦に持ち込もうとするが
「アクアレーザー」
いくつもの水の塊がエルーに襲いかかるが
「なめないでさい。」
最小限の動きでかわしさらに接近する。
流石にかわされるとは思っていなかったレインは次の魔法を放とうとするが
「遅いですよ。」
ここで魔弾を連射する。
「っ、ウォーターキューブ。」
とっさに水の塊を出し魔弾を防ぐが
「そこです。」
レインの横に移動していたエルーが銃で殴りつける。
「ぐっ」
なんとかガードは取ったがダメージは少なくない、さらにエルーは追い打ちをかけるように魔弾を放つ。
水の塊を出そうとしたが痛みで集中ができず、被弾し気絶する。
「勝者、エルー・ツェッティ。」
「ふぅ。危なかったです」
勝利を収め沙耶のもとへと駆け寄っていくエルー。
「まさか、シーファの一族が破れるとは、なかなかやるじゃないか。

」
ミシェルが嬉しそうにつぶやく。
それから、沙耶とエルーは順調に勝ち進み、ベスト8まで勝ち進み、
沙耶の次の相手はティアだった。

おまけ

沙耶が順調に勝ち進んでいる中
「何やってんのよ!!　戦闘科のくせにあんな小娘にいいようにやられちゃって、これじゃ私の計画が・・・・」
ミシェルが負けた沙耶を馬鹿にするために、戦闘科の生徒ばかり当てていたのだがどの生徒も3分持たず意識を刈り取られていた。
「っち。いうことだけはあるってことかしら。どうやらセシルから聞いたことは本当なのかもしれないわね。」
ルクセント学園の生徒会役員であるものは生徒の中でもトップクラスの人間が集められ学園を自治している。
それなのに、新入生がまともに戦いあの惨状になったと裏でセシルから聞いていたが、当然信じていなかったがここにきて、それが真実かもしれないと思い始めた。
「面白いじゃない。私が直々にやろうかしら。」
また沙耶が勝利しているところ見て、そう思ったミシェルであった。

第２６話

「戦闘科、ティア・ノート」
「総合科、サヤ・カミナギ」
「開始。」
2人が名乗りを上げ戦闘の合図が上がる。
「エルーが相手とは運が悪いなぁ。もう負けも同然じゃん。」
「実力を隠して何を言ってる。」
「なんのことかなぁ？」
ニヤニヤしながら聞く。
「最初に私に投げ飛ばされたのはわざとだろ。あれで私をだませたと思ってるなら心外だな。」
「やっぱりばれてたかー。じゃぁ、今度は全力でいくね。」
瞬間、ナイフを投擲してくる、その速さは音速を超えさらに魔力を乗せ威力上げている。
「くっ！！」
沙耶もナイフを投擲するが、威力が違い方向を変えることができる程度だった。
「よそ見してると危ないよ。」
いつの間にか沙耶の後ろにいたティアがナイフを振り下ろす。
「なめるな！！」
指輪の魔力を開放し、沙耶の周りに爆風を作り出す。
「さすがにやるねー。」
「当然だ。」
今度はサヤが責める
「サンダースピア、狂乱」
本来雷の槍を作り出し投擲する魔法なのだが、少し想像を働かせ自動で相手に向かうように改良し、さらに相手を囲むように何本も作り出す。

「殺す気？」
「これくらいじゃ死なないだろ、行け。」
手を振りかざし、雷の槍をティアに向け一斉に発射する。
「まったく厳しいなぁ。まぁ、期待にはこたえるけど。フレムトルネード。」
ティアを貫こうとあらゆる方向から向かってくる雷の槍に対し、炎の竜巻を作り出し雷の槍をかき消す。
「ここに、すべを焼き切る炎の剣を、フランジュベル」
それに対し沙耶は炎の竜巻ごろ焼き切ろうとする。
「一応これ結構魔力使ったんだけどなー」
炎の竜巻を切り裂き、その切っ先がティアを襲う
「けど炎の扱いなら負けないよ。」
「なっ！！」
フランジュベルの炎を掌で抑え込み無力化した。
「そろそろ決めるよ。　紅蓮の炎よ、我翼となりて我道を阻む物を焼きはらえ、バーストウィング」
ティアが紅蓮の翼を纏い、先ほど抑えた炎をフランジュベルの形に戻す。
「死なないでね、サヤ」
そういうと、紅蓮の剣を構え、紅蓮の翼を広げる。
「ならこちらも本気でたたき落とす。死ぬなよティア。光はずべを包み込む、時に優しく、時に無慈悲に。破滅の光よ無慈悲なる力を振りかざし世界を焼きつくせ、ルミナスフレア。」
一度に2万もの魔力を使用し、回避不能の光の炎がティアに襲いかかる。
ティアは回避不能だと分かると紅蓮の翼を羽ばたかせ、一気に距離を詰め紅蓮の剣を振りかざす。
光の炎と紅蓮の炎がぶつかり合い、闘技場はその余波でひびが入っている。
数秒後、お互いの魔法が収まる。

「どうなったんだ。」
周りがどよめき始め、舞台を覆っていた煙が薄れていく。
そしてそこで立っていたのは沙耶だった。
「勝者、サヤ・カミナギ」
その瞬間周りから大きな歓声が上がる。
「ごくろうさまです。やっぱりティアさん実力隠してんですね。」
「気付いてたんだ。」
「サヤは私を侮りすぎです。」
「いやー、やっぱ強いねサヤは。」
「当然だ。ティアなんかには負けない。」
「そこは、「最後のは危なかった」位の事はいってよ。」
「ふん。」
「可愛くないなー。」
「これでもサヤはティアさんのこと認めてるんですよ。」
「エルー!!」
「照れなくてもいいじゃないですか。人嫌いのサヤがまともに話せる人なんて私か私の家族とティアさん位のものですよ。」
「それほんと?」
「ふん。」
「そっか。素直じゃないなぁ。」
少し頬に朱が混じりながら言う。
そんな様子をエルーは微笑ましそうに見ていた。
そして次の戦いとなるところだったが、闘技場がぼろぼろになり、次回の戦いからは明日になった。

「まさかここまでとは。」
目の前に起きたことがいまだに信じられないかのように呟く
「シーファ家の者を倒しただけでも驚きなのに、何だあの二人の戦いは、闘技場が使用不能になるなんて3年の生徒が本気でぶつかってもそうそうないぞ。」

あれだけの戦闘を行ったばかりだというのに、沙耶の方はすでに回復している。
「サヤ・カミナギとティア・ノートそれにエルー・ツェッティか。あいつらのレベルはすでにカインたちに迫りつつあるな。今年の生徒はなかなか楽しめそうだ。」
口にうっすらと笑みを浮かべ生徒の成長を楽しみにしているミシェルの姿あった。

おまけ

闘技場が使用不可能になり、解散となり寮に帰っている最中
「ティアさん、ちょっとお話がありますのでいいですか。」
「なに?」
「あっ、サヤはすみませんが先に帰っておいてください。」
「どうして?」
「どうしてもティアさんと二人で話したいことがありますので。」
「わかった。ティア、エルーに何かしたら殺す。」
物騒な捨て台詞を決め、1人寮に帰る。
「それで、何の話?」
「サヤのことです。サヤはティアさんに心を開きつつあるのでこの調子でサヤと付き合ってくれませんか。」
「そんなことか。大丈夫だよ私もサヤとは仲良くなりたいし。」
「ありがとうございます。」
「エルーも大変だね、あそこまで人嫌いなサヤの面倒を見なきゃいけないんだから。」
「いえ、私はサヤのことが好きですから、何の苦痛もありませんよ。」
「えっと、それはｌｉｋｅだよね。」
「いえ、ｌｏｖｅの方です。」

「まじ？」
「本気ですよ。在学中には落として見せます。」
「そ、そうなんだ。頑張ってね・・・」
「はい、ティアさんも友達までならいいですけどそれ以上は駄目ですよ。サヤは私の物ですから。」
少しどころか、どん引きしているティアに堂々と言い放つ。
「私はノーマルだから大丈夫だよ・・・・」
「それは安心しました。サヤはあれで押しに弱いですからね。無理矢理にでも迫ったら簡単に押し倒せますから。」
「それならなんで、押し倒さないの？」
あまり深く考えてはいけないと思い適当に返す
「やっぱり最初はお互い同意の上でやりたいじゃないですか。」
「さいですか。」
「話がそれましたが、これからもサヤのことよろしくお願いします。」
「それに関しては任せて。」
「では帰りましょうか。」
そして、寮に向かい歩き始める。
（サヤも大変だなぁ）
そんなことをしみじみ思い、２人のことを見守っていこうと思ったティアであった。

第27話

次の日最初の戦いはエルーの出番だったが昨日の戦いのレベルが高すぎたせいか盛り上がりはいまいちでエルーが圧勝し準決勝戦になった。
沙耶は魔法と体術を巧みに操り決勝戦へと勝ち残った。
そして再びエルーの番になり
「総合科、エルー・ツェッティです。」
「戦闘科、ジーク・フォード」
「開始。」
戦闘開始の合図が鳴りお互いが構える。
「フォードさんですか、もしかしてセシル先輩とは御兄弟ですか。」
「そんなことはどうでもいいだろう、よそ見してるとすぐに終わるぞ。」
話しかけたエルーの問いに電撃を飛ばしてくる
「せっかちな方ですね。」
しかし、エルーも沙耶と同等レベルの実力者簡単にかわし魔弾を放つ。
ジークもここまで残っていることはあり、魔弾をはじく。
「そんな攻撃じゃ、この壁は貫けないぞ。」
雷を全身に纏いはたから見ると鎧を着けているように見える。
「ではこれはどうですか?」
炎の魔弾を連射するが
「無駄だ。」
やはり貫くことはできず、ジークは反撃に出ようとするが、すでにそこにエルーはおらず
「相手から目を離すなんて油断しすぎですよ。」
レイン戦と同じように弾幕で相手の視界から消え接近し銃で殴りつけるが

「それも無駄だ。」
雷の壁に阻まれ、いったん距離を置く
「やっかいですね。」
「空に浮かびし雷雲よ、天雷の裁きを下せ、サンダーボルト」
セシルより遅いがそれでも十分に短い詠唱でサンダーボルトを放つ。
「渦巻く闇よ、全てを飲み込め、ダークネスホール」
闇の塊が現れ、降り注ぐ天雷を飲み込もうとするが、流石に中級の中でも上位に入る魔法だけあって防ぎきれず少し感電してしまう。
「降参しろ。総合科のやつがここまでやれただけで十分だろう。」
「これくらいなんともありませんよ。私も少し調子に乗りすぎていたみたいです。魔具だけで勝てるなんて思いあがりをしていました。」
エルーはほとんどの戦いで銃だけで勝ち上がり魔法はほとんど使わなかった。
「では、こちらもそろそろ魔法を使わせていたたぎますね。」
「無駄だ。この壁を貫けない貴様に勝ち目はない。」
「では試してみましょう。しっかりと防御してくださいね。」
「なに？」
「我闇は世界を侵食し、誰もその闇からは逃れられない。世界の光を消しさり開けない夜は始まる、アブソリュートダークネス」
エルーの体から闇が噴き出し闘技場から光を消しさる。
「何が起きている！！」
ジークは何も見えなくなり混乱している
「終わりですよ。」
「がっ！！」
闇がジークを雷の壁ごと押し潰す。
殺さないように手加減し光を開放する。
「勝者、エルー・ツェッティ。」
数人を除くと何が起こったのかまったく分からずに呆然としている。
「エルー、お疲れ様。」

「エルーって結構えげつないね。」
「失礼ですね。あれでも手加減したんですよ。」
「エルー、決勝戦は負けないよ。」
「私もですよ。」
お互いが舞台に上る
「総合科、サヤ・カミナギ」
「総合科、エルー・ツェッティです」
「開始。」
先手はやはりエルー、魔弾をこれまでの戦闘とは比べ物にならない密度と速度で連射する。
しかし、何度も戦ってきた沙耶には通じず、すべてかわされるか、はじかれる。
「やはりこの程度では駄目ですか。」
「もう指輪の魔力を完全に制御してるね。」
「それは、サヤからの贈り物ですから。」
「こんなところでそんなこと言わないでよ／／／／」
魔弾を捌きながらいつもの会話を交わす
「そろそろこっちからも行くよ。サンダースピア、狂乱」
放たれた槍がエルーに襲いかかるが
「ウォーターキューブ」
すべて水の壁に阻まれる
「ここにすべてを焼き切る炎の剣を、フランジュベル、獄炎」
いつものフランジュベルにさらに魔力をつぎ込み、黒炎の大剣を振り下ろす
「水の濁流よ押しつぶせ、スプレッド」
「その程度じゃ防げないよ。」
「分かっていますよ。」
水の濁流を瞬く間に蒸発させる。
「一陣の風よここに吹き抜けろ、エアーブラスト」
「くっ！！」

沙耶が風に吹き戻される。
「魔法が防げないのなら、サヤごと吹き飛ばせばいいんですよ。」
「いつのまにそんなに強くなったんだか。」
「すべてサヤのおかげです。サヤを守るために手に入れた力ですよ。」
「私もこの強さはエルーを守るために手入れた力だから、負けるわけにはいかない。」
「それはこちらもです。」
お互いに譲れないものを言い合い、大きな魔法を打ち合おうとする。
「螺旋に吹き荒れる風よ、汝に我焔を宿せ、スパイラルフレア」
「紫電の雷よ、我が示す道筋をたどれ、アクアボルト」
風と炎、雷と水の上級混合魔法がぶつかり相殺する。
「大地の檻は咎人を捉え、天の雷は咎人に裁きを下す、バインドオブアース。」
「風の盾はすべてを吹き飛ばし、水の盾はすべてを包み込む、レイジングエアー。」
エルーを大地の檻が捉え、捌きの雷を下そうとする。
しかし、風が檻を破壊し、水が雷を通さない
「世界を照らす光よ、汝は灼熱の炎を纏いし太陽の剣となる、今ここにその力を示せ、ガラティーン。」
「天に浮かびし月は湖に映される。月の光を受けし水は湖の剣なる。今ここにその力を示せ、アロンタイト。」
太陽の剣と湖の剣がぶつかり合い昨日とは比べ物にならない衝撃に目を開けて入れるものは数人しかおらず、衝撃が収まっても倒れた者はいない。
「これで最後にしようか。」
「そうですね。楽しかったですよ。」
「光よ、我元に収束せよ。汝は希望となり世界の開闢を。開闢の光よ永遠の希望を灯せ、　ルミナスノヴァ。」
「闇よ、我元に収束せよ。汝は絶望となり世界の終焉を。終焉の闇

よ刹那の絶望を示せ、ダークネスノヴァ。」
お互いが持つ最強の魔法を放つ。
光と闇がぶつかり合い闘技場が崩壊していく。
しかし、光と闇は収まることを知らずお互いを消しあう。
そして、ようやく収まるがまだ二人は立っていた。
「やっぱりサヤは強いですね。」
「エルーを守らなきゃいけないからね。」
「ふふっ、それは嬉しいです。」
「お休みエルー。」
「勝者、サヤ・カミナギ。」
勝者が決まったが歓声はない。
それもそのはず、先ほどの戦闘の余波で生徒はティアを除く全員が避難していたからである。
こうして戦いが終結した。

第２８話

闘技場を半壊させた力を見るためのトーナメント戦が終わった、次の日
「あんたら二人戦闘科に行きなさい。」
いきなりなお言葉が飛び出す。
「断固としてお断りします。」
「トップ二人が総合科でのほほんとしてるんじゃない！！　３年すればあんたたちは世界でもトップクラスの強さになる。」
「興味ないです。」
「すみません。いろいろなことを学びたいので。」
「そんなもん、後からでもできる。成長期の今伸ばさないでいつ伸ばすのよ！！」
教壇を思い切りたたき、大きな音が鳴る
「私はエルーさえ守れればそれでいいので。」
「私もサヤの隣に立てればそれでいいです。」
「それならなおさら、戦闘科に行くべきでしょうが！！」
教団が壊れるほどに強く叩き、衝撃で前の生徒がのけぞっている。
「戦闘科で私たちとまともに戦えたのはティア１人だけじゃないですか。」
「たしかにそうですね。なら総合科にいても問題ないのでは？」
いろいろなものが切れる音がして
「だ・か・ら！！　これから伸びるって言ってんでしょうが！！」
教室の窓が震える
「うるさいですね。さっさとＨＲ終わってくださいよ、次の授業が詰まりますよ。」
「カミナギ、やっぱり一度思い知らせてやろ「ミシェル先生、一体何をやってるんですか？」学園長！！」
「まったく、他のクラスから苦情がきてますよ。それに授業が始ま

るのにいつまでＨＲやってるんですか。」
「しかし学園長、あい・・あの生徒が生意気なんですよ。」
「はぁ。事情を説明するために学園長室に来てください。」
「お断りします。」
「拒否権はありませんよ。」
「ならここで説明します。担任のミシェル先生が無理矢理転科を迫ってきたので、お断りしていたらいきなり暴れ始めただけです。」
「それは本当ですか。」
ミシェルをぎろりと睨む。
「うっ、しかし、カミナギは先生に対して礼儀のなってない言葉づかいを「敬語は使っていましたが」くっ。」
「ミシェル先生とカミナギさん、あとで学園長室に来なさい。」
「うぅ。」「何故ですか。」
正反対の反応を示す。
「あなたにも何かしら問題があったんでしょう?」
「証拠もないのに疑うんですか?」
「では生徒のみなさん、先ほどの状況を見てカミナギさんに問題はありませんでしたか?」
クラスがざわめき始め
「確かに敬語だったけど、挑発はしてたよね。」
「そうそう、すでに3回目だからな。」
クラスからはあまり良くない言葉が飛び交っている。
「では来てもらいますね。」
「・・分かりました。」
「サヤ。」
「心配しないでエルー、ちょっと事情を詳しく話すだけだから。」

「なるほど。」
学園長室において詳しい説明を行う。
「これでよろしいでしょうか。授業を受けたいのですが。」

「相変わらず生意気なこと。」
「ミシェル先生、事情を聴く限りあなたが全面的に悪いのですが。」
「すみません。」
「しかし、確かにそれだけの力を持って総合科にいるのは危険ね。」
「何故ですか？」
大体の予想はついているが、事態をこじらせないために分からないふりをする。
「総合科に戦闘科の生徒を超える者がいれば、調子に乗った生徒が挑んでくるかもしれません。それも、同学年だけでなく上級生からも。」
「それをどうにかするのが先生の役目なのではないですか。」
「私たちも万能ではありませんから、それに上級生を抑えつけるには戦闘科の先生でなければ難しいのですよ。」
「そちらの事情をこちらに押し付けてもらっては困ります。私たちはいろいろなことを勉強をしに来たんです。戦闘を専門に学びたいわけではありません。」
「それなら総合科の戦闘の授業の時は戦闘科の方に出てくれないかしら。」
「それでは、ますます先ほどのことが起きますよ。」
「いえ。戦闘科の授業は全学年合同の場合が多いですから。授業の時なら近くに先生がいるのでこちらの方が安全です。」
「それでもこちらが受けるメリットがありません。」
「より高度な戦闘訓練が受けられますよ。」
「先ほども申しましたが、私はエルーさえ守ることができればそれ以上の力は必要ありません。」
「今の力で守れると？」
「普通に暮らしていれば問題ないでしょう。」
「しかし、あなたが守るといった相手は貴族ですよ。それも公爵家、あなたより強い者が狙ってきたらどうするんですか。」
「今の私たち2人を相手に勝利するなら、最低でもAランクレベル

の強さが必要になります。それに私たちは毎日鍛錬も欠かしていません。3年後ならSランクの強さを持たないと厳しいはずです。」
「では、私たちが敵に回ったらどうするつもりですか？」
「学園ごと滅ぼします。」
「そんなことができるとでも？」
「できないと思いますか？」
ピリピリとした空気が漂い、何も知らずこの部屋に入ったら間違いなく素で逃げだす程のものだった。
「いいでしょう。戻りなさい。」
「失礼します。」

「どうでしたかサヤ！！」
教室に戻るなり駆け寄ってくるエルー。
「問題なかったよ。事情を説明したらここに残っていいってさ。」
「そうですか。私はサヤが相手を殺してしまわないか心配で・・」
「エルーとの約束は守るよ。エルーに危険がない限り。」
「それなら私はもっと強くならなければいけませんね。」
「私が守るから大丈夫だよ。」
「駄目ですよ。それで傷つくのはサヤなんですから。」
「うん。一緒に頑張ろう。」
周りを気にせずいちゃつく二人をクラスメイトはどうしようか迷っていた。

ｓｉｄｅ　ミシェル

サヤが退室した後
「学園長、何故戻らせたんですか。」
「もともとこちらの我が儘です。あれ以上強制するわけにはいかなでしょう。」

「しかし、あの二人の力は生徒会のメンバーに匹敵します。」
「黙りなさい！！　あの子たちは学ぶためにここにきてるんです。それをあれ以上強制することはできません。」
「すみません。」
「それに、あれ以上強制していたら今頃死んでいたでしょう。」
「それは言いすぎですよ。確かに強いですが私たちにはまだまだ及ばない。」
「たしかに魔法では私たちが上ですが、私の勘があれ以上はまずいといっていました。」
「しかし・・・」
「それに、戦闘科への転科は諦めましたが他にも方法はあります。」
学園長室から不気味な笑いが漏れていた。

おまけ

「はぁ～。サヤたちがいないとつまんないな～。」
1人戦闘科に所属しているティアが退屈そうに授業を受けていた。
ティアはサヤたちと同じクラスになるため戦闘科に入ったのだが当てが外れ、やりたくもない戦闘訓練をやらされていた。
おまけにサヤとの戦いで本気を出してしまったので、先ほどから戦闘の申し込みが後を絶たなず、いい加減面倒になってきていた。
「転科しよっかな～。」
転科するにはそれなりの手続きが必要になるが、この状況よりはましだろうと思い転科しようと決意するが
「お前が、サヤとまともに戦えたやつか？」
「どちらさまで？」
「生徒会の者だ。」
「そんな人が私なんかに何の御用で？」
「あいつを戦闘科に転科させたい。そのためにお前にはサヤに勝っ

てもらう必要がある。」
「なぜ？」
「お前が負ければ悔しがって、転科してくるかもしれないだろう。」
「はぁ～。それは素晴らしい計画ですが、私総合科に転科しますので。」
「なに！！　おまえ今年の戦闘科でトップクラスの実力持ってんだろ。なぜ転科する必要がある。」
「私はサヤたちがこっちだと思ったから来ただけで、きたくて来たわけではないんですよ。
それに、戦闘の申し込みが多すぎて面倒ですから。」
「ふざけるな！！　せめて俺の計画を実行してからにしろ。」
「他の人に当たってください。これから手続きしなきゃいけないんで。」
「おい待て！！」
しかし、ティアはそれを無視して手続きに向かう。
「くそ！！」
「落ち着けカイン。」
「セシルか。しかしどうするつもりだ。」
「彼女、学園長に喧嘩を売ったらしい。学園長も何とかしようとしてるみたい。」
「それでどうなったんだ。」
「拒否されたそうだ。」
「学園長の指示をか！！」
「正論でごり押し、取り付く島もなかったらしい。」
「くそ！！　これじゃ決着がつけらねぇ。」
「だから落ち着け、学園長がこちらに着いた。これで最大の不安要素が取り除かれた。」
「それは本当か！！」
「これで準備は整った。あとは実行するだけだ。」
学園長を味方につけた生徒会が沙耶に襲いかかろうとしていた。

第２９話

学園長に呼び出されてから数日、沙耶たちは不気味なほど平穏な日々を送っていた。
まず、学園の図書館に行き沙耶が暴走し、エルーがそれを抑え、何冊かの本を借り部屋で読んでいた。
エルーも沙耶に影響され読書が趣味となっていた。
「これおもしろいですね。」
「でもその作者の本は当たり外れがあるからなぁ。」
「次はどれを読みましょうか。」
「これはお勧めだよ。」
「そうですか。では・・・」
本を受け取ろうとした瞬間、勢いよく扉が開かれ
「やほー。元気してる・・・何その冷たい目。」
いきなり現れたティアに、冷たい視線を向ける。
「エルー、はいこれ。」
「ありがとうございます。これはどんな物語なんですか。」
「それはね・・・・・」
「ごめんなさい。もうしませんから無視しないで。」
「ふん。最初から謝ってればいいんだ。」
「ありがとうサヤー!!」
あっさり許してくたことに感激し抱きつく。
「うっとしい!!　は・な・れ・ろ!!」
「いいじゃん。友達なんだからこれくらい。」
「私はお前と友達になった記憶なんてない。」
「照れなくてもいいじゃん。私と沙耶の仲じゃん。」
「いい加減に離れろ!!」
「いやよいやよもすきのう「ティアさん。」・・・」
べたべたと沙耶にくっつき、本人はスキンシップのつもりだったが、

エルーの目にはそう映らず、極寒の声が発せられ、恐る恐るエルーの方を向く。
「ふふっ、ティアさんサヤが嫌がってますよ。少しは甘く見ますがやりすぎはいけませんよ。」
「すみません。もうしません。」
すぐさま沙耶から離れ全力で謝罪する。
「そうですか。でも次同じことが起きたら・・・・」
「あのー、次はどうなるんでしょうか、本気で怖いんですけど。」
「大丈夫ですよ。痛みなんて感じさせませんから。」
「あははは。」
徐々にヤンデレ化してきたエルーに、二度と怒らせないようにしようと誓ったティアであった。
「それで一体何の用だ。」
「相変わらず冷たいお言葉。はいこれ。手紙が来てたんだけど、2人ともいなかったから私が預かってたんだ。」
「誰からですか。」
「あぁ、これは保険だよ。」
「なんの？」
「これから起こることに対しての。」
2人とも何のことかわからずに首をかしげていた。

それから数日後、再び学園長からの呼び出しがあった。
「何の御用でしょうか。そう何度も呼び出されてはいらない噂がたってしまいそうで怖いんですが。」
オブラートに包んではいるが、直訳すると、何度も呼び出すなと言っている。
その意味を理解しているのか
「すみません。しかし、2人には聞いてもらいたいことですから。」
今度の呼び出しにはエルーも含まれていた。
そして、学園長の後ろにはカインとセシルがいる。

「一体なんでしょう？　学園長直々に言い渡されるようなことは何もしていませんが。」
「それは、後ろにいる生徒会の生徒が話してくれます。」
そういうと、後ろに立っていたセシルが前に出てきて
「サヤ・カミナギ、エルー・ツェッティ両名を生徒会役員に任命する。」
「えっ！！」
「これはどういうことですか。」
驚いているエルーに対し、冷静に答える沙耶。
「言ったとおりですよ。お二人には生徒会に所属してもらいます。」
「それはおかしくありませんか？　確か学園のルールでは、生徒会役員は生徒による選挙で決められるはずですが？」
こんなこともあろうかと、学生証を隅から隅まで読んでいた沙耶が反撃する。
「確かにそうだが例外があります。それは、学園長が指名した場合です。」
「そういうことですか。やってくれますね。」
基本的に生徒会役員に任命された者は拒否できない。
権力に物を言わせ、生徒会に引き込もうとするが
「お断りします。確かに生徒会役員は基本的に拒否できませんが、それなりの理由があれば拒否できますよね。」
「どんな理由かお聞かせ願いますか。」
「そこの人に私は襲われています。そんな人がいるところに所属することは怖くてできません。」
「何だと！！」
「カイン。そのような事実がどこにあるんですか。」
前に出ようとするカインを抑え、冷静に聞き返すセシル。
「白々しいですね。あなたがそこの人に責任を負わせたのではないですか。」
「何のことでしょう？　カインが暴れて森の一部を破壊してしまっ

たのは、カインの暴走の為ということでカインはすでに罰を受けていますが。」
あの時のことはカイン1人のせいにされており、いまさら沙耶がやったといってもその罰として生徒会役員にされてしまうため、いいわけは封殺された。
「それでは、生徒会役員になってくれますね。」
「残念ですがお断りします。」
「何か理由が終わりですか?」
すでに勝ちを確信しているセシルが余裕を持って発言する。
「学園長、これを。」
そう言って沙耶が差し出したのは、ティアが預かっていた手紙だった。
「これがどうかしましたか。」
「いいから開けてください。」
「これは!?」
「どうしました学園長? 今更どのような手を使おうと生徒会に所属するのは決定していますが。」
セシルはその手紙をただの悪あがきだと思っていたが
「「サヤ・カミナギ、エルー・ツェッティ、ティア・ノートの三名は現在追っている犯罪者の重要参考人としていつでも帰還できるよう、あらゆる組織に所属することをアトラス王、クレンド王の名において禁ず。」・・・これがこの手紙の内容です。」
「なっ!! 偽物ではないんですか!!」
「いえ、両国の王印が押されています。」
「そんな馬鹿な!!」
「では、用件は済みましたか。いい加減戻りたいんですが。」
「・・・戻りなさい。」
「失礼しました。」
学園長と生徒会の連合は完全敗北を決した。

「しかし、いつのまにあんなもの請求したんですか。」
「初めて呼び出された次の日。」
「相変わらず、とんでもない先読みですね。」
「慣れだよ、慣れ。」
「それにしてもティアさんまで入っているのは意外でした。」
「一応、私の身内だと思われてるみたいだったから、巻き込まれたら可哀相だし。」
「そうですか。」
（サヤに新しい友達ができるのは嬉しいんですけど、行きすぎないか心配ですね。早めに落とさないと。）
「エルー、何かとんでもないこと考えなかった？」
「なんのことですか？」
「さっき、とんでもない寒気が・・」
「それは大変です！！　今日は暖かくするために一緒に寝ましょう。」
「だ、だめだよ／／／／」
いつも通りの会話を交わしながら帰路に着いた。

第３０話

ｓｉｄｅ　学園長

沙耶たちが去った後、学園長室には重い空気が流れていた。
「まさか、あんなものを出してくるなんて。」
予想外すぎる結果に呆然としているセシル。
「俺が父上に頼んで撤回させやる。」
「落ち着きなさい、アトラスさん。」
「しかし！！」
「そんなことをしても無駄です。確かにアトラス王だけならどうにかなったかもしれませんが、クレンド王も関わっているとしたら、この決定を覆すのは不可能です。」
二つの国の王が認めているこの状況で決定を覆せば、ただでさえ不安定な関係が崩れてしまう可能性もあり、この決定を無視しようものなら、３国の援助で経営している学園であるルクセント学園への影響力はカルーンが一番大きいと理解されかねない。そうなれば援助はうちきられ、経営すら厳しくなる。そこまで計算して打たれた手にどうすることもできない。
「しかし、学園長これからどうするおつもりで？」
「この件が失敗に終わったということは、彼女に一つ大きい貸しができたことになります。下手な手を打つことはできません。」
もしこの件がばれれば学園全体に生徒会役員の決定権が学園長に集中していると思われ、不信感を持たれかねない。
「できるだけ彼女たちには干渉しないように、おそらく暴走した生徒が彼女たちに戦闘の申し込みが殺到するでしょうが彼女たちはそれを受けないでしょう。先に彼女たちが手を出してくれればそれを理由にどうにかすることができますが、大衆の中、誤魔化しが効かないように正当防衛を主張してくるでしょう。そして、それを止め

られなかった責任はすべて私たちに来ます。なので、できるだけ生徒会と先生方で食い止めてください。」
「・・・・分かりました。」
「了解です。」
渋々ながら返事をするカインと忠実に仕事をこなそうとするミシェルが返事をする。
「厄介な問題ができましたね。」
一斉に溜息が吐かれる。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

学園長からの呼び出しから次の日、沙耶たちは普通に通学し、授業を受けた。
あれから、ミシェルもこちらにあまり干渉しようとせず平穏無事な生活を手に入れた。
「エルー、今日は何が食べたい？」
「サヤが作ってくれるなら何でもいいですよ。」
新婚夫婦のような会話を交わしながら帰っていると
「お前らが総合科で、戦闘科の１年を倒したってやつらか？」
「どなたですか？」
「戦闘科の２年だ。少し付き合ってくれないか。」
「お断りします。」
それが言うと、再び帰ろうとする。
「そういうわけにはいかないな。」
そういうと周りからぞろぞろと戦闘科の２年生と思われる生徒が出てくる。
「どいてくれませんか？」
「１年トップの力を見せてくれたら解放してやるよ。」
「戦闘科の生徒は同じ科の生徒以外に戦闘を挑んではいけないはず

ですが。」
「なに少しくらいなら問題ないさ。」
「なるほど。校則違反と分かってやっているんですね。」
「そういうことだ。さっさと構えな、出ないと怪我するぜ。」
目の前の男が構え、周りの人間はそれを観戦しようと周りを固める。
他にも気づいた生徒はいたが、巻き込まれたくないのか知らないふりをする。
「拒否します。さっさと道を開けてください。夕食の準備があるんです。」
「何にするか決めたんですか？」
「うん。帰りに材料買って帰ろう。」
「その前に本を借りに行きましょう。」
「そうだね。そろそろ借りた本読み切っちゃうし。」
目の前で構えている男を無視して帰ろうとするが
「1年がなめんじゃねぇぞ。少し強いからって調子に乗ってんじゃねぇ！！」
無視されてことによりあっさりと沸点を超え、沙耶たちに襲いかかる
「先に手を出したのはそちらですよ。」
沙耶が襲いかかってきた男の手をつかみ投げ飛ばす、そこにエルーが魔弾を打ち込みあっさりと無力化し何事もなかったかのように帰ろうとする。
「次は俺だ。」
そういってぞくぞくと出てくる。
「堂々と校則違反をやろうなんて、あなたたちは馬鹿ですか？」
そう言って挑発してやると、簡単に乗ってきて一斉に襲いかかってくるが
「そこまで！！」
いきなり大声で止められ振り返るとミシェルが遅かったかと諦観の表情を浮かべ
「あんたたち全員、生徒指導室に来なさい。」

そうして、全員連行され、沙耶とエルーが取り残された。
「遅くなって、悪かった。」
「いえ、気にしてませんよ。次からは気おつけてくださいね。」
あまりにも常識的な言葉に驚いた表情を浮かべるミシェル。
「では失礼します。」
そう言って去っていく二人を見て、助かったと一息ついたとき
「これで2つ目ですよ。学園長に伝えておいてください。」
沙耶が振り返り彼女らしい言葉を残していく。
「はぁ～。本格的にやばくなってきたな。」
1人取り残されたミシェルが呟いた。

side　ミシェル

あれから学園に戻り戦闘科の生徒に罰を与え、このようなことがないように釘をさし、学園長室に向かった。
「そうですか。」
沙耶の言葉を伝えると重い溜息をつく。
「どうしますか？　これでは被害が増えカミナギへの借りが増えていきますが。」
「授業の時、一応釘をさしておいてください。それくらいしか今のところ対策がありません。それに、また問題が発生しました。」
そういって1枚の書類が渡される。
「ティア・ノートの戦闘科から総合科への転科届！！」
「1年のトップ3すべてが総合科に集まり、さらに問題が深刻化します。」
「これは受理を拒否できないのですか？」
「基本的に転科届は、手続きを行えば誰でも出来ますから、ノートさんだけとはいきません。それにそんなことをすれば彼女たちが反発してくるでしょう。」

「やっかいな生徒を敵に回してしまいましたか。」
「えぇ。まさかここまでやってくるとは思いませんでした。」
2人のため息が学園長室に重く漂っていた。

side out

おまけ

「エルー、これの皮剥いといて。」
「はい。そっちの準備はしておきましょ。」
「ありがと。」
沙耶とエルー2人で台所に立ち料理をしていた。
もともとは沙耶一人でやっていたが、エルーも料理を覚えたいということで、戦闘訓練を始めた時から教わり、今では、一般人並みにはできるようになっていた。
「エルー味見お願い。」
「今日も美味しいです。」
「じゃ、食べようか。」
最近は寝るとき以外、ほとんどべったりな状態で新婚さんのような生活を送っていた。
「しかし、今日は大変でしたね。まさかもう来るなんて思いませんでした。」
「予想はしてたけど、確かに早かったね。」
「これからどうするつもりなんですか？」
「基本的に今までどうりに過ごすよ。止められない学園側の責任だし。」
「サヤったら本当に容赦ないんですから。」
「平穏な生活を送りたいからね。」

「そうですか。サヤ明日デートしましょう。」
「さっきの話の流れから何故そんな話に！！」
「いいじゃないですか。こっちに来ていろいろありましたから息抜きに行きましょう。」
「別にいいけど、女同士でデートとは言わないよ。」
「愛さえあればそれはデートですよ。」
「か、からかわないでよ／／／／」
「ふふっ。」
こうしてなし崩しにデートの約束を取り付けたエルーであった。

第３１話

「さぁ行きましょう、サヤ。」
「分かったから引っ張らないで！！」
沙耶とエルーは約束通りデートに出かけようとしていた。
「それにしても、珍しく一人で起きられたね。」
「それ程楽しみだったたんですよ。」
今日は沙耶が起こさずとも、自然に起き逆に沙耶を無駄に早く起こしたぐらいである。
「それでどこ行くの？」
「ひとまず街を見て回りましょう。」
そして、島の繁華街をうろつき
「サヤ、これ面白そうですよ。」
「どれ？　確かに面白そうだね。」
「サヤの方はどうでしたか？」
「こっちもいろいろあったよ。」
とりあえず本屋を見て回り、それぞれ面白そうな本を見つけお互いに見せ合っていた。
「本は荷物になりますから帰りに買って帰りましょう。」
「そうだね。まだまだ時間はあるし。」
最初は恥ずかしがっていたサヤもデートを楽しんでいた。
それから服や装飾品などを見て回り、久しぶりに女の子らしいことをしていた。
「サヤこれなんかどうですか？」
「それはちょっと、露出が多いから。それよりこれなんかエルーに似合いそうだよ。」
「確かにいいですね。それならこれはどうでしょう？」
「それはいいかも。ちょっと試着してくるね。」
「私も行きます。」

そうして2人とも着替えお披露目会をしていた。
「似合ってるよ、エルー。」
「サヤもとっても可愛いですよ。」
「それじゃあこれ買おうかな。」
「では、私もこれをいただきます。」
存分にデートを楽しみ、いろいろなお店を見て回っていたが
「てめぇら、よくも昨日はやってくれたな。」
昨日、戦闘を申し込んできた男たちが現れた。
「昨日の借り返してやるよ。」
せっかく気分よく楽しんでいた2人は空気を読めない男たちに対し
「今すぐ消えてください。さもなくば痛い目を見ますよ。」
「私もいい加減にしてくれませんと怒りますよ。」
2人にしては珍しく怒りをあらわにしていた。
「はっ!!　お前ら2人でこの人数相手に何ができる!!」
ぱっと見ても20人はいるが、正直なところ2人でも十分に対処できるが、時間が掛かるためできるだけ戦いは避けたかったが、いい終わるとすぐに襲いかかってきた。
「しょうがない、少し痛い目をみて「やほー、お二人さん」ティア!!」
「何だお前は?」
突然現れ、間に入り一時的に戦闘を止める。
「2人の楽しい時間を無粋に邪魔するKYどもを黙らせようと思いまして。」
「ふざけんな!!」
「それはこちらのセリフだっつの。」
突っ込んできた数人を一撃で叩き伏せた。
沙耶やエルーと違って、大きな魔法を使わなければ隙をついて戦う2人と違い、圧倒的な力で戦うティアの一撃は重く、1年先に生まれている程度では埋められない力の差があった。
「ここは、私がやっとくから2人は楽しんどいで。」

「ありがとうございます、ティアさん。」
「・・・ありがと。」
「サヤがお礼を言ってくれるなんて！！　これは頑張らなきゃね。」
そういって、相手の集団に突っ込み圧倒的な力で蹴散らしていく。
「じゃあ、ティアの行為を無駄にしないためにもいこっか。」
「そうですね。」
男たちの断末魔が聞こえるなか2人は去っていた。
それからデートを再開し、日が暮れるまで遊び、最後に海に来ていた。
「今日は楽しかったですか？」
「もちろん。久しぶりに楽しめた。」
「それはよかったです。」
「それにしても、なんで突然で、デートなんてやろうと思ったの。」
デートという言葉が恥ずかしかったのか少し言葉を濁す。
「学園にきてから、いろいろ大変そうでしたから息抜きですよ。」
「そっか。ありがとうエルー。」
「気にしないでください。私こそサヤとデートできて楽しかったですから。」
「だから、デートっていう言葉を使わないで／／／／」
「どうしてですか？」
「デートって好きな異性同士がすることでしょ／／／／」
「前にも言ったじゃないですか。愛さえあればそれはデートですよ。」
「も、もう。そうやっていつもからかって／／／／」
「本当にそう思いますか？」
「エルー？」
「本当に私がからかうために言っていると思いますか？」
一歩沙耶に近づく
「そ、それは。」
「私は本気ですよ。本気でサヤを愛しています。」

さらに一歩近づく
「で、でもエルーは知ってるでしょ。私のこと。」
「サヤが死なないっていうことですか？　そんなの関係ありません。」
さらに一歩
「お願いエルー、今のままでいて。それがお互いの為だよ。」
「違いますよ。それはサヤのためであっても私の為ではありません。」
「お願い、今が一番幸せなんだ。私はこれ以上望まないから、もう止まって。」
最後の一歩で止まった。
「サヤはそれでいいんですか？　最後の最後で現実から逃げて、本当にいいんですか？」
「いずれ私は取り残される。だから、ここまででいい。」
「それなら、私に不死の呪いをかけてください。」
「エルー、冗談でも言っていいことと悪いことがあるよ。」
「私はサヤの苦しみはわかりませんが、喜びなら分かち合えます。サヤにはともに永遠を生きてくれる人がほしいんですよね。」
「そんな人いらないと言ったら嘘になる。けどその呪いはエルーにはかけない。この苦しみは誰にも味あわせたくないから。」
「私は許しませんよ。1人で苦しむ沙耶を見るのは嫌だと言ったはずです。だから私に呪いをかけてください。」
「駄目。これだけは譲れない。」
「そうですか。では無理矢理にでも譲ってもらいます。」
そう言うと、沙耶の唇を奪った。
「んっ！！」
突然のことに驚く沙耶、だがエルーは沙耶を離さないように抱きしめ唇をふさぎ続ける。
そして、唇が離れ
「どういうつもり？」

いまだ混乱から抜け出せず、怒気を含ませ問い詰める
「言ったじゃないですか。無理矢理譲ってもらうって。」
「こんなことしても、私は決して譲らない。」
「そうですか、ならもう一度。」
先ほどより強く唇を押しつける。
そして数秒押しつけ唇を離す。
「はぁはぁ・・・・」
「私をサヤの物にしてください。」
「駄目・・・それだけは・・んっ・・」
否定しようとするサヤを無理矢理黙らせる。
「ぷはぁ・・・お願い・・・・もうやめて。私を揺らさないで。」
「いやです。」
沙耶の瞳が揺らぎ、逃げようとする沙耶を抱きしめ再び唇をふさぐ。
「んっ・・・・・ふっ・・・はぁはぁ」
息を荒げる沙耶、しかし再び唇をふさぎ、何度も繰り返す。
「はぁはぁ・・・・」
「サヤ、私に呪いをかけてください。私は永遠にサヤと共に在り続けます。」
「いや・・・駄目だよエルー・・・・お願いもう止まって。」
泣きながら懇願するが
「そうですか。ならサヤが呪いをかけてくれるまで続けます。」
「おねが・・んっ・・・・」
最後まで言葉を言わせず唇をふさぐ。
「お願いエルー・・・・私にエルーを殺させないで。」
時間を殺された者は、生き続けるのではなく、在り続けるだけ。
エルーを殺したくない一心で、自分の願いを否定する。
「いやです。私はサヤの心を守り続けます。そのために私を呪ってください。」
「エルーは一度私を救ってくれた。それさえあれば私は潰れないで済むから！！　お願い止まって。」

「サヤは罪の重さに潰れなくても、孤独の寂しさに潰れるます。だから私が側にいて心を守り続けます。」
そう言って再び唇をふさぎ、さらに舌をねじ込む。
「んぅぅ・・・・ふぁ・・ん、んぁ・・・んむ・・・」
沙耶の口内を蹂躙し、沙耶から抵抗の意思を削り取ろうとする。
「お願い・・止まって・・私ならどうしたっていいから、それだけは許して。」
泣きながら許しを請うが
「絶対に許しませんよ。サヤが一人で傷つくなんて絶対に。」
そして再び口内を蹂躙する。
「ふっ・・・んぁ・・・ぴちゃ・・・れろ・・・」
沙耶は5分以上攻め続けられ、抵抗の意思をはく奪され、なすがままになっていた。
「はぁはぁ・・・・もうだめ・・・これ以上は・・・」
「それなら私を呪ってください。」
「エルーのこと大好きだから・・・・・エルーにこの苦しみを与えたくない。」
「そんな自己犠牲の自己満足では私は止まりません。」
「違うわたしは・・・んっ・・・」
「少し黙っていてください。今のサヤからは何も聞きたくありません。」
沙耶に何も言わせず攻め続け、服を脱がせる。
そして、唇をふさいだまま、全身を攻める。
「んんー・・・ふっ・んっ・・んぐぅ・・・・はぁ・・・」
体中が火照り、与えられる快楽に何とか耐えようとする沙耶。
しかし、エルーがそれを許さず、絶えず快楽を与え続ける。
そしてついに
「んん・・・ぴちゃ・・・ちゅっ・・・んんんんんん!!」
限界が訪れ達してしまう。
「はぁ・・・はぁ・・はぁ」

息を乱す沙耶に
「サヤ、私に呪いを。」
「エルー、・・・このままでいよう。一緒に鍛錬して、一緒にご飯食べて、一緒に本を読んで、たまにエッチなことして、そんな平凡で幸せな生活を送ろう。」
沙耶の最後の抵抗の言葉がエルーに届く
「サヤ、今ここで呪いをかけなければ、私は死にます。」
首にナイフを当て、最後の通告を行う。
「お願い、エルー。怖いの、エルーが変わってしまう気がして、呪いをかけたエルーが私から離れて行きそうで。」
「私は何があろうとサヤから離れません。」
「エルーのことは信用してる。でも、それでも心の底ではやっぱり怖くて信用できないだよ。お願いエルー、もう許して。」
これまで生きてきた人生は沙耶の心を確実に蝕んでいた。
それが、沙耶の最後にして最大の歪みであり、最初に負った傷でもあった。
「サヤ、私のことを信用しなくてもかまいません。私はただサヤの為にあり続けたいだけですから。」
「どうして？　どうしてそこまでしてくれるの？」
もう何度訊ねたか分からない質問。
その問いに、
「それは、サヤのことが好きだからですよ。」
変わらぬ答えを出す。
「うっ・・・ぐす・・」
「サヤ、私を永遠にそばにおいてください。」
「絶対・・・ひっく・・・ずっとそばにいてくれる？」
「約束します。だれが邪魔しようとも絶対にサヤのそばに居続けます。」
「エルー・・・・・」
「サヤ・・・・・」

唇を重ね、ここに誓いという名の呪いを授かった。

第３１話（後書き）

いちゃいちゃシーンが書きたかっただけなのに・・・・・

第３２話

誓いのキスを交わした二人は
「サヤ、立てますか？」
「腰が抜けて・・・・」
「それでは、運びますから背中に乗ってください。」
「ありがとう。」
このようなやり取りをした後、寮に帰った。
部屋に着くとそこにはティアが待っていた。
「おかえり。どうだったデートは？」
「／／／／／／／／」
「どうしたのサヤ？　そなに顔を真っ赤にして？」
「今日、サヤと私が恋人になりました。これもティアさんがあそこで身代わりになってくれたおかげです。本当にありがとうございます。」
「エ、エルー！！／／／／」
「へ～。よかったじゃん。おめでとうお二人さん。」
「ありがとうございます。」
「変に思わないのか？」
「普通だったら変に思うけど、サヤとエルーだし。」
「どういう認識をしてるんだ。」
「ん～。ぱっと見エルーがサヤに猛アッタクかけてるように見えるけど、実際はサヤがエルーにべったりって感じかな。」
適当にやっているように見えて、よく見ているティアが評価する。
「そんなふうに見えてたのか。」
「でも、よく見ないと分かんないと思うよ。たぶんわかるのは私ぐらいじゃないかな～。」
「なぜティアだけに分かるんだ？」
「それは、私が２人の友達だからだよ？」

「そうですよサヤ。ティアさんは私たちの友達なんですからそれくらいわかってもらわないと困ります。」
「エルーって実は私のこと嫌い？」
「そんなわけないじゃないですか。私たちは友達なんですから。」
「そうだよね。友達だもんね。」
ほんとに嫌われてないか内心びくびくしている中
「友達・・・・」
「どうしたんですかサヤ？」
不意に沙耶が呟いた。
「もしかして、今更友達じゃないとか言わないよね。それは流石にへこむよ。」
「いままで、友達なんて存在エルー以外いなかったから、エルーは特別だったし、どういうふうに付き合えばいいかわからなくて。」
「そんなの今までどうりでいいんだよ。サヤがいきなりべたべたしてきたら逆に気持ち悪いし。」
「なっ！！　そうか、今までどうりでいいんだな？」
驚いた後不敵な笑みを浮かべる。
「あれ？　地雷踏んだ？」
「心配するな、いままでどうり適当にあしらってやる。」
「前言撤回したいんですけど？」
「却下だ。」
「いいじゃん！！　せっかく友達だって認めてくれたんだから、少しくらいデレなさいよ。」
「お前が今までどうりでいいと言ったんだろうが！！」
「だから前言撤回って言ったじゃん！！」
「却下しただろうが！！」
お互いにギャーギャー言い合い、お互い気が済んだのか冷静になってきた
「そういえば何故ここに？」
「私が明日から総合科に転科すること伝えようと思って。」

「はぁ！！　なぜ転科する必要がある。」
「2人がいるから。」
「そんな理由で・・・」
「いいじゃないですかサヤ。友達が同じクラスにいることはいいことですよ。」
「あぁ～、でも私もしかして邪魔だったりしない？」
「私は気にしませんよ。」
「そんなことといちいち友達同士で気にするな。」
「・・・サヤが初めて友達って言ってくれた。」
「いちいち言葉に出すな／／／／」
「もう、恥ずかしがって。でも嬉しいよ。私も2人以外友達なんていないから。」
「では、ティアさんも明日から一緒に登校しましょう。」
「もちろん。他にもいろいろくっついて行くから覚悟しといてね。」
部屋からは楽しそうな声が3つ聞こえていた。

それからティアは自室に戻り再び二人きりなった。
「エルー準備はもういいの？」
「はい。このままじゃずるずる引きずっちゃいそうですから。」
「わかった。」
「ではお願いします。」
あのとき実際には時間を止めていたわけではなかった。
時間を止めてしまうとそれ以上どうしようもできなくなるので、万全の状態で後悔がないようになってから止めようということで、先延ばしにしていた。
そして、今エルーの時間が終わろうとしていた。
「じゃあいくよ。」
そういうと沙耶がエルーを凝視する。
「終わったよ。」
「もうですか？」

「やるといっても、ちょっと能力使うだけだから。」
「そうなんですか。これでずっと沙耶のそばにいられますね。」
「うん。でも本当によかったの？」
「何度も言わせないでください。私にとってサヤはすべてといってもいいくらいなんですから。」
「ありがとう。一応本当に効いているかどうか試すから手を出して。」
そう言われ、手を出す。
そして、出された手をナイフで軽く切る。
すると、すぐさま傷がふさがり、何もなかったかのような状態に戻った。
「大丈夫みたいだね。」
「これはすごいですね。」
痛みだけ感じて、すぐに治ることに戸惑う
「すぐ慣れるよ。これで、睡眠も食事もとる必要はないけど。」
「睡眠はともかく食事はしますよ。」
「分かってるよ。」
「それはよかったです。それよりサヤ、今日は私とサヤが恋人になった記念日ですよね。」
「う、うん／／／／」
「それなら、抱かせてください。」
何のひねりもなく、率直にとんでもないことを頼むエルー
「そんなのの駄目に・・・・いいよエルー。そのかわり優しくしてね／／／／」
一度拒否しようとするが、一転して受けることにするサヤ。
「本当にいいんですか？」
あっさりと受けてくれたことに驚く
「うん。私もエルーに抱かれたいから／／／／」
「そうですか。では遠慮なく。」
二つの影が重なり、艶やかな嬌声が響き渡った。

おまけ

沙耶たちの部屋から自室に戻ったティア。
ティアはあまりもので1人で部屋を使っているため、戻っても誰もいない。
「それにしてもほんとにあのサヤを落とすとは、流石だねエルー。」
まさか本当に付き合うことになるとは思っていなかったティア。
「でも、お似合いだよお二人さん。なら2人の友達として祝福してあげないとね。幸せになりなよ。」
1人で2人の幸せを願う。
「よし。私はあの二人を邪魔するやつらを叩きつぶそう。もしかしたらあの事がばれちゃうかもしれないけど、それでも初めての友達の幸せを守るために。」
そして1人決意を固めたのであった。

第３３話

エルーが沙耶から呪いを受けた日から数日が過ぎていた。
エルーは最初は体の変化に戸惑っていたが、数日もすれば慣れていつも通りの生活を送っていた。
そして予告通りティアが総合科に転科し、いつも三人で過ごしていた。
また、学園長の予想通り沙耶たちに戦闘の申し込みが殺到した。
もともと2人だけどもかなり多かったが、戦闘科の2年生十数人を1人で倒したティアが加わることで、2年生だけでなく3年生までも挑むようになっていた。
それによって、生徒会や先生がたびたび出はり止めていたが、学園の外でもこのことが起き対応ができなくなった物は、正当防衛を主張しすべて沈められた。
流石に限界だと思った学園長は三度目の交渉を行うため沙耶たちを呼び出した。
「何度も呼び出してごめんなさい。」
「謝るくらいなら最初からやらなければいいのではないですか。」
「流石サヤ、学園長にそんな言葉を言えるとは。」
エルーはサヤの性格を知っているし二度目ということもあり落ち着いていたが、初めてのティアはびっくりしていた。
「耳が痛いすが、最近あなたたちの周りで起こっていることは流石に見逃せないもので。」
「分かっているならそれなりの対処を施してはどうですか。」
「こちらにも限界があり、これ以上は抑えきれません。悪いとは思いますが三人には戦闘科に転科していただきます。」
「お断りします。そちらが今までやってきたこと、私たちの被害を考慮しているんですか?」
「それは百も承知です。しかし、こうでもしなければさらに被害は

増える一方です。」
「それこそ分かり切ったことです。それでもどうにかするのが学園長の仕事ではないんですか？」
「どうしても納得してくれませんか。」
「当然です。」
「後ろ２人は？」
「サヤがいるところに私はいます。」
「２人がいるなら、私はそこでいい。」
三者ともに転科する気は無く、学園長も頭を抱えていた。
「用がないならこれで失礼します。」
「待ちなさい。では、どうすれば転科してくれますか？」
「何をしても転科なんてしませんよ。でも、この状況を抑えることならできますよ。」
「それは本当ですか。」
動揺を抑え、冷静になり聞き返す。
「はい。もうすぐ歓迎会がありますよね。そのときに上級生が模擬戦を行うはずです。そこで私たちが圧倒的な力を示せば挑んでも無駄だと思い、少なくとも今よりは減るでしょう。」
「確かにそのとおりですが、ただでというわけにはいきませんよね。」
「当然でしょう。私たちがそこまでする必要はありませんから。」
「何が望みですか？」
「そうですね。私からは閲覧禁止の書庫の解禁と非常時に私の言うことは可能な限り従うことの２つです。」
「書庫の方はいいでしょう。２つ目の非常時とは？」
「クレンド王国とアトラス王国の間に戦争を起こそうとした男が、ここにも現れるかもしれません、その時の対応を任せてほしいんです。」
「・・・・いいでしょう。しかし、納得できない場合は従わないということでいいですね。」

「それで十分です。」
「他の2人は何かありますか?」
「私は2人と一緒の部屋で暮らしたい。」
「それはいいですね。私たち三人で暮らせる空間の提供でお願いします。」
「わかりました。あなたたち三人に森の中に土地を貸します。そこに家を建てさせますからそこに住んでください。」
「ありがとうございます。」
「これで帰りにはサヤの出迎えが。」
「そんなものはない。」
「ちょっとくらいは乗ってよ。」
「それではこの条件でいいですね。」
「いいですよ。では歓迎会の時はそれなりの相手を準備してくださいね。そうでなければ見せしめになりませんから。」
そう言い残すと三人は部屋から退出した。
「はぁ〜。これからどうなるやら。」
ここ最近溜息が絶えない学園長であった。

それから数日後、家に移り住み、禁書庫から借りてきた本を読み過ごしていた。
もちろんその間も申し込みが絶えることはなく、時には返り討ちにしていた。
「そういえば二人とも寝なくて大丈夫なの?」
「今更それを聞くか。」
「たしかにそうですね。」
「まぁいいじゃん。それでどうなの?」
「私たちは基本的に寝る必要はない、詳しいことは話せないけど、これはティアが信用できないからというわけではないから安心しろ。」
「それって、初めて会った時に見せたあれに関すること?」

「そうだ。」
「分かった。じゃあこれ以上は聞かない。」
「助かる。」
「そういえばティアさん、あれだけの強さを持っていてなぜ追われてたんですか？」
「それは・・・」
「すみません。言いたくなければ言わなくてもいいですよ。」
「ううん。大丈夫。あれはね私が親から売られて魔力を殺す魔具をつけられてたからなんだ。隙を見て逃げ出したけど流石に魔力が使えないのは厳しくて、1人二人なら何とかなったんだけどあれだけの人数だったから逃げてたんだ。」
「そうだってんですか。」
これ以上は聞いてはいけないと思い話を終えようとするが
「ちなみに売られた理由は私が特別な力を持っていたから。」
「もういわなくてもいいですよ。」
「いいよ、もう割り切ったことだから。サヤと戦った時、炎の魔法を受け止めたよね。あれが私の能力。炎ならどんなものでも支配下できる、そして人族ではありえない程の膨大な魔力を恐れて売られたんだ。」
「そうだったんですか。」
「でも同情はいらないよ。2人が友達でいてくれればそれでいいから。」
「当然だ、私がそんなことで同情などするもんか。」
「そうですね。下手な同情は逆に迷惑になりますからね。」
「さすが、私の友達。これが普通の人だったらうっとしい目で見られるからね。」
平和な日常を送り、ついに歓迎会が訪れる。

おまけ

禁書庫から借りてきた本は封印されているものが多かったが沙耶の前にそんなものはいみをなさず、次々と封印を解除していく。
「これは使えそうだな。」
1冊の魔導書を熟読しているとき
「サヤ、ちょっといいですか。」
「なに？」
「これを見てほしいんですけど。」
エルーが開いているページは魔具の生成方法だった。
「これがどうしたの？」
「ティアさんに助けてもらったお礼をしようと思いまして、ティアさんの能力を考えるとこれは使えそうだったので私たちで作ってお返しをしましょう。」
「確かにこれはティアにはぴったりだし、私たちならこれをさらに強化して作れるね。わかった、じゃあさっそく作ろうか。」
そして、ティアの為に世界で1つしかない剣が誕生した。

第３４話

「にぎやかだねー。」
サヤ、エルー、ティアの三人は歓迎かが行われている学園内をうろうろしていた。
「へぇ～。自作の魔具まである。」
学園の生徒が作った魔具や武器などが売られ、新入生だけでなく在校生も楽しめるイベントとなっており、たくさんの人でにぎわっていた。
「それで、歓迎のイベントはいつ始まるの？」
「一時間後。」
「相手はどんな方でしょうか？」
「生徒会レベルの相手だと思うよ。」
「そんなのに勝てんの？」
「私は問題ない。」
「私も大丈夫だと思います。」
「どこからその自信が・・・」
「サヤからの贈り物がありますから。」
「どんなの？」
「それは秘密です。」
「ちぇ、わかったよ。」
これ以上は聞いてはいけないと察したティアはそこで話を打ち切る。
「ティア。」
沙耶がティアに向け一本の剣を投げた。
「っと。なにこれ？」
「私とエルーで作った魔具だ。あの時のお礼をしてなかったからな。」
「気にしなくていいのに。でもありがとう。」
「ふん。その魔具の能力は・・・」

そして、歓迎会が行われる闘技場へと向かった。

会場は満員で、最近噂でもちきりの3人を見てみようと大勢いの生徒や先生が集まっていた。

「うわ～。すっごい人。この中で戦うの、緊張するな～。」

言いながらも余裕を見せるティア。

「まぁ、私たちはいろいろと噂になっているから仕方ありませんよ。」

緊張などせずいつもの調子でいるエルー。

「暇人ばかりだな。」

いつものように毒づくサヤ。

そして、いよいよ歓迎会という名の見せしめが始まる。

「新入生のみなさん、歓迎会を楽しんでいらっしゃいますか？　これからイベントの一つとして在校生代表と新入生代表の模擬戦を行いたい思います。」

学園長が開会を宣言する。

闘技場から歓声がわきあがる。

「では、在校生代表から、戦闘科3年、アンリー・バレル。」

有名な生徒なのか、紹介があった後会場が湧く。

「同じく戦闘科3年、ランド・ツェッティ。」

会場の男たちから、熱い声援が送られる。

「そして最後に戦闘科3年、生徒会役員、カイン・アトラス。」

紹介があった瞬間、会場の盛り上がりが最高潮に達し、女生徒からの黄色い声や男子生徒の声援が上がる。

「そして新入生代表、総合科1年、ティア・ノート。」

総合科の生徒なのが驚きなのか会場が静まる。

「同じく総合科1年、エルー・ツェッティ。」

総合科ばかりなのが気に入らないのか会場から不満の声が湧く。
いくら有名だとはいっても顔を知らない生徒がほとんどであり、ほとんどの生徒が噂の人だとは分からない。
「同じく総合科1年、サヤ・カミナギ。」
在校生が有名なのに、3人とも総合科の生徒が出てきたことにより会場が静まる。
しかし、今更やめるわけにもいかず、模擬戦を始めようとするが
「待ってください!!」
静まった会場から1人の男が舞台に現れた
「何でしょうか?」
「なぜ、新入生代表が俺じゃなく、そこの女なのですか!!」
現れたのは、エルーに敗北したジーク・フォードであった。
「普通なら上位3人が選ばれるべきでしょう。」
「確かにそうですが・・・」
いきなりの乱入者に再び湧く会場。
「そういうわけだ。そこの女さっさと消えろ。」
「こっちだって、はいそうですかってわけにはいかないのよ。」
「ふん。恥をかく前にさっさと消えろ。」
「言うじゃん。学園長、私とこいつ、どっちが模擬戦に出るか決めるために、ちょっと時間をいただけないでしょうか。」
「いいですが、どうやって決めるつもりですか?」
「そりゃ強い方が出るにきまってます。そういうわけで上がってきなよ。」
「後悔するなよ。」
両者が舞台に上がる。
「では、始め。」
学園長が戦闘開始の合図を出す。
「馬鹿な女が。」
そういうと雷を身に纏わせる。
レベルの高い魔法がでたことで会場がさらに湧きあがる。

「あの女にはやられたが、今度は負けん。」
そういって魔法を発動するため詠唱を始める。
「敵を前に詠唱なんて余裕だね。」
「お前程度にこの雷は破れん。」
「いったね。」
ティアが一瞬で距離を縮め、力任せに殴った。
「がっ!?」
ジークは信じられない物を見たような眼になりながら舞台の外まで吹き飛ばされ、自慢の雷の壁も一撃で貫かれた。
「時間をとらせてすみません。模擬戦を始めましょう。」
会場が一瞬静まるが、大歓声がわきあがる。
「では、在校生代表、アンリー・バレル。」
名前を呼ばれ、女子生徒が舞台に上がる。
「なかなかやるじゃない。面白い戦いになりそうね。」
「余裕ですね先輩。その調子で油断しといてください、一撃で終わらせてあげますから。」
「1年が言うじゃない。その減らず口いつまで続くか見ものね。」
「では、始め。」
戦闘開始の合図が上がり、先手はティアだった。
「フランジュベル」
いきなりの詠唱破棄の中級魔法、炎の剣を振りかざしアンリーに斬りかかるが
「ウォーターキューブ」
アンリーも詠唱破棄の中級魔法で炎の剣を鎮火する。
「あなた、炎が得意なの？　それじゃあ私には勝てないわよ。」
不敵な笑みを受かべ、勝利を確信する。
「私の得意な属性は水、炎じゃ勝てないわよ。」
するといきなりティアが笑い始める。
「何がおかしいの？」
不快な表情で尋ねる。

「いやぁ、すみません。まさかそれだけのことで勝ったつもりでいる先輩がおかしくて。」
「もうその減らず口は聞き飽きたわ。もう眠りなさい。スプレッド。」
水の濁流がティアを押しつぶそうとするが
「この程度じゃ眠れませんよ。」
炎の膜をまとい水を蒸発させる。
「それじゃ行きますね先輩。」
不敵な笑みを浮かべ、沙耶からもらった剣を抜いた。

第35話

ティアが抜いた剣は刀身が燃えるように赤い両刃のロングソード。
「そんな剣でどうするつもりなのかしら？」
「これは私の友達からもらった世界に1本しか存在しない私専用の魔具、覚悟はいい先輩。」
「ふん。1年が作った魔具程度で私を倒せるとでも思ってるの。」
「当然だよ。なんたって私の友達は最強なんだから。」
沙耶とエルーを最強と評し、その友達でいられることを誇りに思い堂々と宣言する。

「まったく恥ずかしい奴だな。」
「いいじゃないですか。あれがティアですよ。」
「負けたら承知しないぞ。」
舞台の外では2人が友達の勝利を願っていた。

「いい加減黙らせあげる。　母なる海よ、慈悲深き内に潜めし牙を現わせ、ダイタルウェーブ」
アンリーが大量の水を生み出す。そして、海の津波を引き起こしティアを押し流そうとするが
「灼熱に染まれ、レヴァンティン。」
剣の名を呼び、燃え上げるような赤い刀身が、灼熱の紅色に染まる。そして、剣から灼熱の炎を放ち、海を一瞬にして蒸発させる。
「なっ！！」
上級魔法が一瞬にして蒸発させられ、驚愕に体を硬直させる。
「どうしたの先輩？、もしかしてこの程度で私を黙らせることができると思ったの？」
ティアはこの程度というが、実際アンリが放った魔法は水の精霊の眷族の者でも使える者が少ないレベルの魔法である。

「そんな、こんなことがあり得るはずがない！！　母なる海よ、慈悲深き内に潜めし牙を現わせ、ダイタルウェーブ」
目の前で起きたことを否定するように再び海を出現させる。
「こりないなぁ。まぁいいか、バーストウイング」
沙耶と戦った時の紅蓮の翼を広げ空に飛びあがる。
沙耶とエルーが1日中炎の魔力をつぎ込み続け、作った本人たちさえも触れたら燃えてしまう程の剣。しかし、ティアの持つ特異な体質がそれを制御し、炎の魔法ならどんなものでも詠唱が必要なくなり、また剣の魔力は指輪と同じように固定され、剣の魔力を開放しただけでも上級魔法すら燃やしつくす。
「神すら焼きつくす魔の業火よ我に従い、我友の為に燃え続けろ、レヴァンティン」
紅蓮の翼を纏い、灼熱の剣を掲げ、空に浮かぶティアが誓いを宣言し友から授かった魔剣の名を呼ぶ。
友を守るためなら、神すら塵さえ残さず燃やし続ける業火を海に放つ。
その威力は魔法で最強とされる精霊魔法さえ凌駕する。
ちっぽけな人が生み出した海など炎が触れる前に蒸発し、空気を焼かれ窒息したアンリーが倒れる。
後に残ったのはドロドロに溶けた舞台と空に紅蓮の翼を纏うティアだけだった。
「しょ、勝者、ティア・ノート」
誰もが予想しなかった展開に、闘技場が静まりかえる。
「お疲れ様です。」
「この剣のおかげだよ。ありがとね2人とも。」
「当然だ。私とエルーが作ったものだからな。」
照れているのを隠すために顔をそむけて、憎まれ口をたたく。
「まったく素直じゃないなぁ。」
静まりかえった闘技場のなかで3人だけは普段通りの会話を交わしていた。

そして、次の対戦者は
「在校生代表　ランド・ツェッティ。」
エルーの兄であるランドであった。
「お兄様ですか、では私が出ます。」
「いいの、エルー？」
「はい。それにあちらにはサヤと戦いたい人がいるみたいですから。」
カインが沙耶を睨みつけている。
「分かった。じゃあよろしく。」
「頑張ってね。」
2人からの声援を受け舞台に上がる。
「新入生代表はエルー・ツェッティ。」
名を呼ばれ2人は舞台の中央による。
ちなみに舞台は丸ごと入れ替えられている。
「エルー、棄権しろお前とは戦いたくない。」
「それは私も一緒です、ですが私もサヤの為に引けません。」
「そうか。ならもう何も言わない、良い戦いにしよう。」
「はいお兄様。」
2人が背を向け距離を開け
「始め。」
戦闘開始の合図が上がり、兄妹の戦いが始まる。

第３６話

戦闘開始の合図と同時にランドが距離を縮めようと前に出る。
対してエルーは魔弾を撃ち距離を取ろうとする。
「ほう。やるなエルー。」
「この程度で感心されてもなめらているとしか思いませんよ。」
一度立ち止まり言葉を交わす。
「そうか、ではそろそろ行くぞ。」
「いつでもどうぞ。」
ランドは手に魔力を込め再び距離を縮めようと前に出る。
再び魔弾の嵐を撃つが、今度はかわすのではなく拳で打ち消していく。
「魔法殺しは健在のようですね。」
魔力を一点に集中し魔法を弱体化させ、強化された拳で打つ消す。
強靭な肉体と類稀なる戦闘センスがあってこそできる力技、故にランドは魔法殺しという別名で呼ばれていた。
どんどんと距離を縮められショートレンジまで接近された。
しかし、エルーも負けずに近距離からの射撃で打ち消す暇を与えず魔弾を連射する。
「諦めろ。それでは俺は倒せん。そして、この距離なら強力な魔法を使えないだろう。」
「私も負けられないんですよ。」
「そうか、ならもう終わらせてやる。」
魔弾の連射をかいくぐり、クロスレンジまで持ち込まれ銃の射程外になってしまい、ランドの一撃がエルーを襲う。
「なめないでください。」
しかし、とっさに銃を上に投げ拳の方向をそらす。
「まさか、クロスレンジでも戦えるとは。」
驚いてはいるが決して手を休めることはなく攻め続ける。

「どの距離でも最低限は戦えますよ。」
ランドの拳を、かわし、方向をそらし、捌いていく。
「しかし、これでは時間の問題だな。」
何とか捌いてはいるが目に見えて押されていた。
「そのための仕掛けは打ってます。」
バックステップで後方に飛び距離を置こうとするが、ランドはそれを許そうとせず追撃する。
「かかりましたね。」
エルーの影から黒い鎖が飛び出しランドを拘束しようとする。
「なっ!!　いつの間に!!」
落ちてきた銃を掴み、銃口を向けながら
「一度止まった時ですよ。お兄様相手に何の仕掛けもなしでは厳しいですから。」
黒い鎖に拘束されているランドに容赦なく魔弾を撃つ。
「だが甘いぞ!!」
鎖を無理矢理引き千切り魔弾を打ち消す。
「なかなかいい作戦だったが、もう少し鎖の強度を上げておくべきだったな。」
あの鎖は魔力を封じ込める効果をもっており、身体強化もできない状態で拘束から抜け出したランドは人外の馬鹿力を持っていた。
「やはりこの程度では無理でしたか。でも十分です。」
「ほう。まだ策があるか。」
「はい。それでは始めますね。」
エルーが魔弾を撃つと同時に、空間から魔法が飛び出した。
先ほどの会話中に、可能な限り魔法を設置し魔弾と同時にランドへと襲いかかる。
いくら、魔法殺しの異名をもつランドでも、足を止められる。
「我闇は世界を侵食し、誰もその闇からは逃れられない。世界の光を消しさり開けない夜は始まる、アブソリュートダークネス」
闘技場を覆うように闇が噴き出し、闇がランドを押しつぶそうとす

るが、
「はあぁ！！」
魔力を全開に拳で開けない夜を祓う。
そして、設置された魔法をすべて捌きエルーに接近しようとするが、そこにエルーの姿はなく
「いくら強靭な肉体といっても、人体である以上弱点はあります。」
後頭部に銃口を押しつける。
「まいったな。まさかここまでやるとは。」
敗北を認め両手を上げる。
「私が守りたい人は、世界すら敵に回しかねない人ですから、お兄様1人に負けるわけにはいきません。」
「そうか・・・・では幕を引け。」
「はい。」
そして、引き金を引き後頭部に魔弾を受けたランドは前に倒れる。
「勝者、エルー・ツェッティ。」
兄弟対決はエルーの勝利で幕を閉じた。
「お疲れ様。」
「設置式って結構難しいのによくもあの一瞬であれだけ仕込めたね。」
「2人と手合わせしてると正攻法だけでは勝てませんから、嫌でもああいった小細工は得意になりますよ。」
ティアの圧倒的な火力や沙耶の変幻自在な攻撃を見て勝つために考え抜いた戦闘法である。
「次はサヤの番ですか。気おつけてくださいね。」
「そうだね～。相手も何やら気合入ってるっぽいし。」
「2人が勝ったのに私だけ負けられないよ。」
2人の声援を受け、舞台に上がる。
「在校生代表、カイン・アトラス」
予想外の戦いばかりから新入生の評価がかわり、面白い戦いがみれるとも思い観客が大いに盛り上がる。

「新入生代表、サヤ・カミナギ」
再び最初の盛り上がりを取り戻した闘技場に2人の言葉交わされる。
「ようやくだ。ようやくてめぇと戦える。」
「私はあなたとは戦いたくなんてありませんでしたよ。」
望んでいた戦いに興奮しているカインと、冷静に状況を観察する沙耶。
「今日こそどちらが上かはっきりさせてやる。」
「それはこちらのセリフです。誰に喧嘩を売ったのか分からせてあげます。」
そして、両者ともに背を向け距離をあける。
「開始。」
戦闘開始の合図と同時に、両者が前に踏み込んだ。

第37話

戦闘開始と同時にお互いが前に飛び出す。
カインの音速を超えた抜刀を魔力を込めた愛用のナイフでそらし、一気に懐に潜り込みナイフで突き刺そうとするが、カインは足を振り上げ沙耶を蹴り飛ばそうとする。
沙耶はそれに対しバックステップで後方に飛び投擲用ナイフを袖口から投擲する。
しかし、すべて弾かれ再び接近する。
沙耶もそれに応じ、もう一本ナイフ取り出し攻撃をしのぐ。
この時点ですでに観客の7割は何をやっているか見えていなかった。

「とんでもないスピードだね。流石は生徒会ってとこ?」
「サヤは身体強化が使えませんからね。瞬間的に魔力を纏って差を埋めてますから、技術ではサヤが上ですね。」
「でも、そろそろ限界かな。」
「サヤのことですからなにかしら手を打ってるでしょう。」
「まぁ、あのサヤが簡単に負けるとこなんて想像できないしね。」
「あたりまえですよ。サヤが負けるはずありません。」
沙耶が負けることをまったく心配していない2人は、舞台で戦っている沙耶の姿を捉えていた。

「どうした。もう終わりか。」
「そんなわけありませんよ。油断してると後悔しますよ。」
沙耶が刀を受け止め、靴に仕込んでいたナイフで斬ろうと後方に回転しながら飛ぶ。
「っち!!」
それを紙一重でかわすが
「サンダースピア、狂乱」

すかさず雷の槍で貫こうとする。
「サイクロンエッジ」
襲いかかる槍を前にカインは刀を鞘に収め、回転しながら抜刀する。
刀に魔法を乗せ竜巻を起こし、雷の槍を打ち消す。
「そろそろ本気でいくぜ。」
「そうですか。私もそろそろ終わりたいので本気でいきます。」
カインが構えた瞬間、カインの姿がぶれ、沙耶に斬りかかる。
「っつ！！」
とっさにナイフを十字に構えるが、衝撃で吹き飛ばされる。
「どうした？　まだ6割のスピードしか出してねーぞ。」
「敵を前におしゃべりとは余裕ですね。アーススパイク、挟撃」
地面がカインを挟み込むように盛り上がり、棘のついた壁で押しつぶそうとするが
「こんなもんか？」
刀を一振りし、土の壁が剣筋に沿って傾く。
「俺の勝ちだ。」
刀を沙耶に向け勝利宣言をする。
「あなたの目は節穴ですか。私はまだ立っていますが。」
「上等だ。すぐに終わらせてやる。」
残像を残すスピードで沙耶に迫る。
「出来ればこれは使いたくなかったんですが、仕方ありませんか。」
刀が沙耶を切ろうとするが、そこに沙耶はいなかった。
「どこを見てるんですか？」
沙耶はカインの後ろから声をかける。
「てめぇ、何をした？」
「あなたが見えなかっただけでは？」
「そんなわけがあるか！！」
再び斬りかかるが、そこに沙耶はおらず空を切り、その隙に沙耶がナイフで両断しようとするがギリギリのところでかわす。
「まさか、本当に・・・」

「だから言っているじゃありませんか。あなたが遅すぎるんですよ。」
「はは・・・ははははは、いいぜ俺に遅いなんて言ってきたやつはお前が初めてだ、その言葉後悔するなよ。」
カインがさらにスピードを上げ、残像すら残さないスピードで距離を詰め光速の剣閃を放つ。
「後悔なんてしませんよ。固有制御3倍速。」
沙耶もさらにスピードを上げる。
そのスピードは、エルーやティアなど一部の人間がギリギリその姿を追える程、一般の観客は何が起きているのかまったくわからない。
「このスピードに着いてきたのはお前が初めてだ。さらに上げていくぞ。」
「上等ですよ。固有制御4倍速。」
カインは脳のリミッターを外し人の限界を超える動きで沙耶に迫る。
対する沙耶は自身の空間の時を速める空間干渉の魔法を使いカインと渡り合う。
お互い身体への反動はかなりの物だが、カインはそんなものをものともせず斬りかかる。
沙耶は痛みは残るがすぐさま回復しカインの攻撃を捌き反撃の機会をうかがう。
「すべてを巻き込み斬り裂け、ソニックエッジ」
「荒ぶる自然の猛威を、ヴォルッテクス」
光速で放たれる、居合に魔法を乗せ闘技場ごと斬り裂こうとする。
沙耶は闘技場ごと吹き飛ばす大嵐をおこす。
闘技場は荒れ、学園長をはじめとする先生が結界を張り闘技場を守っていた。
「ははははは!!　これだ!!　これこそ俺が望んでいた戦い!!　全力を尽くしてもなお喰らいついてくる相手を倒す!!　まだだ!!　まだまだ喰らいついてこい!!」
「何をいうかと思えば、喰らいついて来るのはあなたの方ですよ。」

1秒間に十数回の斬撃を放ち、その一撃一撃に魔力を込め闘技場を守る結界をも斬り裂こうとする。
沙耶は2本のナイフですべて捌き、魔法で反撃する。
お互いがぶつかり合う度、血管が破裂し血が舞い散る。
「そろそろ終わりにします、固有制御5倍速」
沙耶が限界まで速度を上げ、沙耶が移動するたび衝撃波が生まれカインに襲いかかる。
「まだだ!!　最高の戦いをそう簡単に終わらせるかよ!!」
カインは本能に任せるまま、体を酷使する。
そして、沙耶の最高速度で迫るナイフをすべて捌き、反撃する。
反撃を受け後方に飛ばされた沙耶に向け最後の一撃を放つ
「我一撃は光を超え、空間すら切り裂く、ディメンションエッジ」
空間ごと切り裂く超光速の一撃を放ちその場に倒れる。
「世界は我が命に逆らえず、世界は我が命により姿を変える。ディメンションルーラー」
沙耶が禁書庫から見つけた魔導書より会得した魔法は2つ、1つは固有制御、もう1つは空間干渉系魔法の最上級魔法、空間を自在に変化させる魔法。この魔法でカインの一撃を別方向へと捻じ曲げる。
最後に立っていたのは沙耶だが勝利の合図は、学園長が結界の維持で動けず告げられることはない。
沙耶が魔法を上空に放ち勝利をアピールする。
そして
「私たちに挑みたいやつがいたら今すぐ降りてこい。」
静かに殺気を放ち、観客の生徒を脅す
「いないなら今後私たちに干渉するな。」
そういうと、3人は舞台裏に消え、後に残ったのは静寂だった。
こうして歓迎会が終わりを告げた。

第３７話（後書き）

読み直したら、沙耶の口調がかなり変わっていた・・・・

第３８話

歓迎が終わった後、沙耶たちに挑む生徒は１人もいなくなり学園側もようやく落ち着き、沙耶たちも今までどうりの平穏な生活を送っていた。

「寝るな。」

沙耶がティアの頭をはたく

「いっつ～。なにすんの！！」

「授業中に寝るお前が悪い。」

「いいじゃん別に、退屈なんだもんこの授業。」

前で教えている教師に聞こえる声でしゃべっていた。

「ほう。そうか、退屈なのかノート。なら退屈にならないよう課題を出そう。」

「すみません。退屈じゃないです、真面目に受けますから勘弁してください。」

「なに遠慮するな、真面目に受けたいならさらに追加してやる。」

ティアが肩を落とし落ち込む、

「自業自得だな。」

さらに沙耶が追い打ちをかける。

「カミナギお前もだからな。」

「や～い。人を馬鹿にするからだ。」

「もとはと言えばお前が寝てたからだろう！！」

「お前ら２人廊下で頭冷やしてこい！！」

教室から追い出される。

「今日の鍛錬の時覚えてろよ。」

「こっちのセリフだよ。」

そして１日の授業が終わり３人で家に帰っている途中

「あ、あの・・」

声をかけてきたのはここの生徒で小柄な少女だった。

「だれ？」
「さぁ。」
「どこかで会ったような・・・」
「みなさんひどいです。」
完全に忘れらていたことにショックを受ける少女。
特にエルーから忘れられていたのが致命的になっていた。
「レイン・シーファです。」
「だれ？」
「さぁ。」
「ここまで出てるんですが・・・」
「・・・・・・」
なにも言わず膝をついているレイン。
流石に不憫に思ったのか3人が立ち直らせようと
「ええと、レインさん？　元気出して！！　影が薄いのも個性だよ。」
ティアが励まそうとするが、逆に落ち込んでしまう。
「この馬鹿、逆に落ち込ませてどうする。　落ち込むな、最近刺激が強いことが多かったからちょっと忘れてるだけだ。」
「いいんです。私影薄いですから・・・」
もやは立ち直りは不可能と思われたが
「あぁ！！　私と1回戦で戦った人です。」
「いいんです。どうせ私なんて・・・・」
やっぱり落ち込んだままだった。
それからなんとか立ち直らせ話を聞く。
「それでどんなご用件でしょうか。」
代表してエルーが対応することになり、ようやくレインが口を開く
「実はお願いがあるんです。」
「拒否する。」
「確かにめんどいよね。」
後方2人がさっそく拒絶の意思を表す。

「後ろの2人は気にしないでください。それでお願いとは？」
2人をスルーして話を進める。
「エルーって最近サヤの毒舌が移ってない？」
「・・・・・・」
「最初会った時って、もう少し態度が柔らかかったような気がするんだけど。」
「・・・・私のせい？」
静かに落ち込んでいる沙耶に気付かず話を進める
「私を強くしてください。」
「拒否する。」
「めんどくさい。」
「2人とも!!　どうして強くなる必要があるんですか。あの時戦った感じだとレインさんの実力はかなり上だと思うんですが。」
「私の一族は水の眷族なんです。そして私は眷族の直系で一族を守らなきゃいけないんです。だから強くなりたいんです。」
「3年間戦闘科で過ごせば強くなれるのでは？」
「それでも強くなれると思いますが、3年生よりも強い3人に鍛えてもらえればもっと強くなれると思います。だからお願いします。」
懸命に頼み込むレインだが
「私たちがやってるのはただ手合わせしてるだけですよ。それに、私たちは魔具を使って実力を底上げしてるだけですから、実際の実力はあまり変わらないと思いますよ。」
「確かに私とエルーの魔法はほとんど指輪の魔力を使ってるからな。」
「へぇ～そうなんだ。私は魔力には自信があるけど、あの時勝てたのはレヴァンティンのおかげだからなぁ」
「そういうわけです。急を要するものではないのでゆっくりと頑張ったほうがいいと思いますよ。」
やんわりと断ろうとするが
「ぐす・・」

突然泣き始め、3人ともおろおろしている。
「ど、どうしたんですか？」
慌てて事情を聞こうとするが
「いえ、なんでもありません・・ぐす・・・失礼します。」
泣きながら去ろうとするレインを流石にほっとけるほど薄情にできていないエルーは
「レインさん、もしよかったら私たちの鍛錬を見に来ませんか？」
レインを呼び止め、とりあえず鍛錬の様子を見せようとするが
「エルー本気？」
「水の眷族の一族っていうぐらいだらほっといても大丈夫なんじゃない。」
エルーと違い、身内以外にはどこまでも冷たくなれる2人に
「サヤ駄目ですか？」
まず沙耶から陥落させようとする。
「い、いや、別に駄目じゃないけど。」
あっさりと陥落
「よかったですねレインさん。許可が下りましたよ。」
「あれ？　私の意見は？」
「諦めろ。ああなったらもう手遅れだ。」
「エルーって私の扱い酷くない？」
「ティアさんの意見を聞かなくても2対1で可決なので聞く必要がありません。」
「うわ～ん。エルーが虐めるよ～。」
沙耶に抱きつき、あからさまな嘘泣きをする。
「離れろ！！」
「いいじゃん。ちょっとくらい。」
力ではティアが上なので引き離せずにいると
「ティアさん、私のサヤになにをやってるんですか・・・・」
気付いた時には時すでに遅く、黒い笑みを浮かべたエルーがそこにいた。

「え～と・・・許して欲しいなぁなんて思ってるんですが。」
「前にいいましたよね。次はありませんよって・・」
「そんなこと言われたような・・・・・」
瞬時に逃げようとするティアに、エルーは容赦なく魔弾を降らせる。
「ぎゃ～!!　死ぬ!!　エルー落ち着いて!!」
「私からサヤを奪おうとするからです。」
「もうしません!!　しないから許して!!」
魔弾を交わしながら許しを請うティアに向かい聞く耳を持たずに魔弾を撃ち続ける。
「ぷっ。」
レインが噴き出し、魔弾が止まる。
「すみません。仲がいいなぁって思いまして。」
「・・・次からは許しませんよ。」
「肝に銘じておきます。」
ようやく移動し始める４人、そしていつもの場所へと向かう。

おまけ

鍛錬する広場に向かう途中
「それにしてもサヤ、エルーはサヤの嫁なんだからちゃんと抑えてよ。」
「無理だ。」
「そこをなんとかするのがサヤでしょ。」
「私だってなんとかしたいんだが、最近毎晩エルーが／／／／」
「だぁ～!!　そんな新婚夫婦の初々しい会話を聞きたいんじゃない。そんなにラブラブならちょっと頼めばいいじゃん。」

「う、うるさい！！　お前が変なことしなければいいだけだろう／／／」
「ちょっと抱きついただけで殺されてたまるか！！」
「私なんて毎晩気絶するまでヤられるんだぞ／／／／」
「だから、あんたらの惚気話なんて聞きたくない！！　私がいいたいのは少しはエルーを抑える努力をしろってこと！！」
「だから無理だと言ってるだろう！！　あんなことまでされたら逆らう気なんて出るか！！／／／／」
「どんなことされたらそこまで順応になんのよ！！」
「恥ずかしくて言えるか！！」
どんどんヒートアップしていく2人だった。

第３９話

広場に着き最初に誰と誰が手合わせするか話しあっていた。
「私はレインさんを見ているので２人でお願います。」
「わかった。」
「ＯＫ」
流石にこの場で本気を出すわけにはいかないので、レヴァンティンは置いている。
「始め。」
先手はティア、力任せに代用の剣を振り下ろす。
沙耶はナイフに魔力を通し、ティアの攻撃を受け流し剣の攻撃範囲より内側に潜り込みナイフの柄で殴ろうとするが、ティアは剣を離し掌で受け止め反対の手で沙耶を掴みなげようとする。
「せいっ！！」
「甘い！！」
袖に仕込んでいるナイフを投擲する。
しかし、紙一重のところで沙耶の手を離し離脱する。
「くっそー。後ちょっとだったのに。」
「こちらのセリフだ。あと少しで刺さってたのに。」
ティアは落とした剣を拾い、再び沙耶に振り下ろす。
「何度やっても無駄だ。」
「ほんとかな～。」
剣を地面に叩きつけ、衝撃と共に地面を陥没させる。
その衝撃に動きが止まる。
「そこ！！」
「ぐっ！！　この馬鹿力め。」
ナイフで受け止めるが、衝撃までは殺せず後方に飛ばされる。
沙耶は体を回転させ木の側面に着地し、そのままティアに突撃する。
ティアの剣が叩き落とそうとするが、ナイフを投擲しそれを防ぐ。

そして体を回転させ回し蹴りを放つ。
遠心力と魔力を纏った蹴りは、代用の剣など容易に破壊する。
「剣を破壊するなんて卑怯だ。」
「武器破壊など戦闘の基本だ。」
「レヴァンティンなら壊れないのに・・・」
負け惜しみぶつぶつと漏らしているティアに
「負け惜しみは見苦しいぞ。」
容赦なく毒舌を浴びせる
「もう1回勝負だ!!」
「いいだろう。何度でも返り討ちにしてやる。」
2人が再びぶつかろうとした時
「そこまでですよ。」
エルーが間に入り両者に銃口を向け止める。
「ちぇっ、わかったよ。」
「わかった。」
渋々武器を収めるティアとあっさりと武器を収める沙耶。
「どうでしたかレインさん?」
「すごいです。魔法を使わずあんな戦いができるなんて。」
「あんなことができるのはサヤぐらいですよ。」
「ティアさんもすごいです。どうやったらあんなことできるんですか?」
「力の限り振り下ろす。」
「というわけでここにいてもあまり参考になりませんよ。大きな魔法は使えませんから、魔法重視の戦いをするレインさんにはあんまり意味はないと思いますけど。」
「エルーさんはどんなふうに戦うんですか?」
「私は魔弾で牽制しながら、罠を張ったり、即興の魔法などで足止めして大きな魔法で倒すといったやり方です。基本的にはミドルレンジです。やれと言われればどの距離でもたたけますが1番得意なのはミドルレンジです。」

「エルーさん、私に戦い方を教えてください。」
「私の戦い方は難しいですよ。大きな魔法については問題ないと思いますが、即興の魔法と牽制する何かが必要ですし、なにより罠は経験を積まないとうまくいきませんから。」
「で・でも・・」
また泣きだすレイン
「泣かないでください。レインさんはレインさんなりの戦い方を探せばいいんですよ。急がないで自分に合うやり方を見つけることから始めてください。」
「・・・はい。」
「ではティアさん、相手を頼めますか？」
「もちろん。」
こうして鍛錬は続きレインは、同年代とは思えない動きに魅入っていた。
そして、一通りの鍛錬が終わり帰ろうとする。
「では、私たちはここで。」
「寮に住んでないんですか？」
「はい。私たちは離れにある家に3人で住んでいます。」
「お邪魔しては駄目でしょうか？」
「駄目だ。見せられないものも結構あるんだ。」
「確かにあれ見られたらちょっとまずいね。」
「そういうわけです。流石にそれは許可できません。」
「そうですか・・・・」
「では、また逢いましょう。」
レインと別れ帰宅する。
「また来ると思う？」
「たぶんな。」
「エルーから見てレインってどうなの？」
「そうですね。魔法のセンスはかなり高いと思いますよ。でも、戦闘経験が少ないですね。最初に戦った時もすぐに私から目を離して

ましたから。」
「ふ～ん。素質はあるんだ。」
「3年間戦闘科で過ごせば生徒会クラスの実力者になるんじゃないでしょうか。」
「私はあまり近づかせるのは反対なんだが。」
「なぜですか？」
「1人許すと、また次と続いて厄介なことになる。」
「確かにそんな感じなりそうだね。それでレインが強くなったらなおさら。」
「そんなことをすれば戦闘科の意味がなくなるからな、悪いとは思うがあまり干渉してくるようであれば突き放す必要がある。」
「なんとかならないんですか？」
「やけにレインに肩入れするね？」
「レインさんの気持ちがよくわかるんですよ。守るために強くなりたいって私もずっと思ってますから。」
「愛されてるね～。」
「うるさい！！　あいつのことだけどやろうと思えばやれないことはない。」
「本当ですか！！」
「でもあまり使いたくない方法だけど。」
「どんな方法ですか？」
「教えてもいいけど約束して、これっきりにするって。何度もこの手を使えば学園側が干渉してくるから。」
「わかりました。」
「それじゃ・・・・・・」
レインを身内に加えようと1つの作戦を伝えた。

おまけ

家に帰りつくとティアが
「ほんとにレインをこっちに引き込むつもり？」
「エルー次第だな。」
「私はあまり賛成できないなぁ～」
「それは私もだ。」
基本的に人を信用していない２人は新しい仲間を迎えることに難色を示していた。
「それでも、エルーが迎えるなら私も歓迎すつもりだ。もっともレインがこちらに来る前提があっての話だが」
「確かにエルーの人を見る目は確かだし・・・・」
「こちらに引き込むといっても一緒に住むわけじゃない。そう深く考えるな。」
「う～ん。悪い子じゃないとは思うんだけど・・・・・」
まだ悩んでいるティア。
「ちなみに作戦の成功率はどれくらいだと思う？」
「８割程度だな。」
「よし！！　２人が認めるんなら私も認める。」
「私たちが認めるからって認める必要はないぞ。」
「私が信用している２人が信用するんなら大丈夫。」
「そうか。」
新しい仲間を迎えることを認め、作戦の見直しを行う。

第３９話（後書き）

すみません。前回に残り五話くらいで第三章が終わると書いていましたがまだまだ終わりそうなりません。

第４０話

次の日、予想通り授業が終わるとレインは3人についてきた。
「レインさん、一応聞いておきますが何の御用ですか？」
「鍛錬の見学に行こうと思ってるんですが、やっぱり迷惑ですか？」
「そんなことはありませんが、私たちについてくるつもりならできるだけこのことを広めないでほしいんです。」
「わかりました。」
そしていつもの3人にレインがいつもの広場に向かう。
そこには先客がいた。
「何か用ですか？」
「相変わらず癇に障るやつだ。」
カインが一人で広場に立っていた。
「それで文句を言うつもりできたならお帰り願いたいのですが。」
「違ぇよ。悪かった。」
カインが頭を下げて謝罪した。
「いろいろと迷惑をかけた、出来ることな何でもやる。」
「そうですか。ではこれからここに近づかないでください。」
「わかった。」
「では、さようなら。」
「また戦ってくれよ。」
「サヤがまともなこといった！！」
「サヤ、浮気は駄目ですよ！！」
「気が向いたらお相手しましょう。」
以外とまともなことをいった沙耶に詰め寄る2人
「まさか、夜の営みに満足してないんですか、なら今夜は・・・」
「落ち着いてエルー、今でも十分だから。」
「なに言ってんだあいつら？」
「あの2人付きあってるんだよ。」

「はぁ？　あいつら女だろ。」
「エルー曰く、愛さえあれば問題ない。」
「なんじゃそりゃ。」
最後に呆れて帰っていった。
「ティアさん、本当にあの2人付き合ってるんですか？」
「ティアでいいよ。ほんとだよ、ときどきだけど遮音の結界張り忘れてサヤの嬌声が聞こえるときあるから。」
「そ、そんな女の子と同士で・・・／／／／／」
レインには刺激が強すぎたのか顔を真っ赤にしている。
そんな中2人はというと
「サヤ今晩は寝かせませんよ！！」
「お願いエルー落ち着いて！！」
「大丈夫です。私に任せてください、きっと満足させてあげますから！！」
「お願いだからあれ以上激しくしないで！！」
「そうとなれば、いろいろと準備を・・・・」
「戻ってきてエルー！！」
それからエルーが落ち着くまで10分以上かかった。

「すみません。取り乱しました。」
ようやく落ち着いたエルーが謝罪する。
「まぁ、サヤのことだからしょうがないけど次からは頑張って抑えてね。」
「／／／／／／／／」
暴走している時にエルーがいろいろなことを口走り顔を赤くしているサヤ。
「善処はしますが、サヤのことに関して落ち着けるとは思いません。」
「愛されてるね～。」
「う、うるさい／／／／」

「女の子同士で・・・・／／／／」
いろいろとカオスな空間だった・・・・

そしてようやく鍛錬を開始し、今はサヤとエルーが手合わせをしていた。
「レイン、ここまでして強くなる必要あるの？」
「それはどういうことですか？」
「レインの一族って水の眷族なわけでしょ、一族を守るなら他にも強い人っているんじゃないの。」
「私が直系の一族のお話はしましたよね。精霊の眷族の一族は代々直系の人が長を務めるんですが、私の両親には精霊を呼び出せるだけの力がないんです。そして、分家の方が長を務めると言い始めてシーファ家は今混乱しているんです。だから、私が強くなって一族を治めなきゃいけないんです。」
「なるほど。そんな事情があったの。」
さして興味がなさそうにいう。
「はい。ですから迷惑かもしれませんが、私を強くしてほしいんです。」
「そういうことならやめといた方がいいよ。」
「なぜですか？」
「私たちって基本的に身内には甘いけど、敵には容赦ないから。もしレインが身内になったらレインに害を与えるやつを皆殺しにしかねないよ。特にサヤはそういうのには特に厳しいから。」
「サヤさんが・・・」
「新入生同士の戦いでサヤとエルーはトップになったから戦闘科に転科させられそうになったんだけど、その時エルーを巻き込んだ学園長にサヤが切れて学園の教師を過労死寸前まで追いやった後、散々な要求を飲ませてようやく許してやったぐらいだよ。ちなみに今私たちが住んでいるのところも要求を飲ませて作ってもらった家な

んだ。」
「・・・・・・・・・」
「それでも私たちに関わろうとするなら私は止めないよ、むしろ歓迎する。」
「私は・・・・」
「すぐに出る答えじゃないから今すぐに答えなくてもいいけど、いずれ出さなきゃいけないから今のうちに考えておいた方がいいよ。」

そうしている内に手合わせが終わり、次はサヤとティアが戦っていた。
「ティアさんに何か言われましたか？」
「サヤさんが学園にいろいろとやったって本当ですか？」
「はい。サヤは総合科で新入生最強の肩書きを掲げて上級生の注目を集め、無理矢理戦闘を挑んできたところを先生方に止めさせたり、正当防衛ということで返り討ちにして学園側に借りを作ったりしました。」
「エルーさんはそれを止めなかったんですか。」
「はい。私たちはすべてを守ろうなんてことしません。自分の周囲を守るだけで精一杯ですから、なので敵には一切容赦はしません。もし、学園がサヤの敵になるのなら私とティアは学園を滅ぼすつもりでいきます。」
「・・・・・・・」
「私たちに関わるということはそういうことです。正直レインさんが私たちに関わることについては反対意見が多いです。あの２人は想像もつかないくらい重いものを背負ってますから基本的に人を信用してないんですよ。だからこそ身内に害なす者に一切容赦がありません。」
「エルーさんは怖くなかったんですか？」
「最初はもちろん怖かったですよ。最初にサヤに会った時は、１０匹以上のホワイトウルフに囲まれていた時でした。突然サヤが現れ

て1匹残らず一瞬で殺しましたからね。それでも、今ではサヤは私の最愛の人です。そして、そのサヤが認めたティアさんだからこそ信用できるんです。」

そして、サヤとティアの手合わせが終わり、次はティアとエルーの番が回りサヤが戻ってきた。

「サヤさん。私が関わることに反対ですか？」

「反対だ。でもエルーが認めるなら私たちも認める。」

「そうですか。」

「2人から聞いたと思うけどお前が私たちの身内に入れば、全力で守る。そして敵は容赦なく叩き潰す。私たちは正義を語るつもりはないし、やったことの責任をだれかに押し付ける気もない。この前の学園との対立の時だって客観的に見れば学園側が正しかった。それでもエルーが納得していないものを無理矢理迫ることは許せなかった。私たちは私たちの意思で敵を潰す。仲間だからじゃない、すべて自分がやりたかったからやったんだ。だから、私たちの仲間になったからって戦いたくなければ戦わなくてもいい、そのかわり私は戦う、たとえ守りたい人が拒絶しようとも私がやると決めたら嫌われようともやり遂げる。」

「・・・・・・・」

「だから正義感や義務感で強くなろうと考えているなら、私たちに関わるのやめた方がいい。必ず後悔する。」

「私は・・・・・」

「今すぐに答えろは言わない、そのかわり覚悟しておけ。私たちに関わったから、私たちにやられたと周りからは理解されかねない。最悪世界を敵に回すこともあるかもしれない。」

そして、鍛錬が終了しレインと別れ家に帰った。

「サヤ、レインになに言ったの？　相当落ち込んでたみたいだけど。」

「私たちに関わるなら、世界を敵に回す覚悟をしておけと言った。」
「それはまたすごい脅しだね。」
「しかし、それを知らないで私たちには関われないだろう？」
「まぁそうだけどさ。私も世界がサヤとエルーの敵になったら世界を滅ぼすし。」
「それでも関わってくるなら迎えてやるつもりだよ。」
「来ると思いますか？」
「どうだろうね。」
レインに3人の在り方を教え込み、その日は終わった。

第４１話

ｓｉｄｅ　レイン

沙耶たちと別れ寮に帰り、１人暗い部屋で蹲っていた。
「私はどうしたいんだろう？」
沙耶たちから話を聞き、全員に共通すること
『敵には一切容赦をしない』
その言葉がレインにずっと引っ掛かっていた。
「私は本当に一族を守りたいのかな？」
生まれた時からそうであれと教わって生きてきたレイン、確かに一族は守りたい。
しかし、時間は流れ直系の血筋は弱体化し、分家とはいえ精霊を呼び出せる者もいる。
なら、その人たちに任せた方がいいのではないか？
思考がずっと同じところを回り、なにを信じればいいのかすら分からなくなっている。
泣きだしそうになった時、沙耶の言葉を思い出した。
『私たちは私たちの意思で敵を潰す。仲間だからじゃない、すべて自分がやりたかったからやったんだ。』
誰に強要されたわけでもない自分自身から生まれ出た本物の感情。
それ比べ両親とはいえ他人から強要された作り物の感情。
『私たちは正義を語るつもりはないし、やったことの責任をだれかに押し付ける気もない。』
再び思い出される沙耶の言葉。
たとえ守る為に人を殺すことになろうともその罪を押し付けず背負っていける強さを持つ沙耶、守る為に仕方がないと免罪符を掲げ罪を背負うことから逃げるレイン。
考えれば考えるほどに自分が嫌になってくる。

「うっ・・・ぐすっ・・・ひっ・・・」
今のレインには沙耶たちがまぶしすぎて直視することすらかなわない。
そして、自問自答を繰り返す。
私はどうして戦っいてるんだろう?
両親からの期待に応え、一族を守っていくため?
それは本当に私が望んでいるもの?
あの3人が持っているものはあんなにもまぶしいのに、どうして私のものはこうもくすんで見えるのだろう?
私が本当に守りたいものは?
答えの出ない問いに考え苦しむ。
『たとえ守りたい人が拒絶しようとも私がやると決めたら嫌われようともやり遂げる。』
そして再び蘇る沙耶の言葉。
自分が思ったことを誰に咎められようと、守ろうとしている相手に拒絶されようとも成し遂げるといった沙耶。
それならば自分は?
自分の意思を表に出すのが怖くて、責任を負うことが怖くて、両親の言いなりなってずっと逃げきた。
再び繰り返される答えの出なかった自問自答。

私はどうして戦っているんだろう?
「違う。」
そもそも戦ってすらいない。
ただ逃げていただけ。

両親の期待に応え、一族を守っていくため?
「違う。」
直系に生まれ、重い責任から逃れたい一心で両親に従っていただけ。

それは本当に私が望んていたもの？
「違う。」
逃げるためにずっとそう思い込んでいただけ。
あの３人が持っているものはあんなにもまぶしいのに、どうして私のものはこうもくすんで見えるのだろう？
「当たり前だよ・・・・」
自分の望みをかなえるために世界すらも敵に回す沙耶たちと両親すら敵に回したくなくて逃げ回って自分の望みを持とうとすらしなかったレイン。
私が本当に守りたいものは？
「私が守りたいものは・・・・・」
目に光が宿り、決意を胸に部屋を飛び出し、沙耶たちのもとへと走る。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

その頃沙耶たちはいつもの通り各々自由に行動していた。
沙耶とエルーは本を読み、ティアは魔具の制作を行っていた。
そんな中に、
「みなさん！！」
突如レインが家の前で叫んだ！！
「どうしましたレインさん。」
扉を開け、３人が外に出てくる。
「いったいどうしたの？　そんなに急いで。」
「ここは立ち入り禁止だ、標識が出ていなかったか？」

「すみません。どうしても聞いてほしいことがあるんです。」
先ほどまでまぶしすぎて直視できなかった3人を見つめる。
「いいだろう。言ってみろお前の答えを。」
沙耶が生半可な答えでは許さないと目で伝える。
「私は強くなって一族を守っていかなければいけないとずっとそう教えられ生きてきました。私もそれが正しいことだと、私の望みだと思っていました。でもそれは違いました。」
直系に生まれ、周囲からの期待に潰され自分を保てない弱者であった自分を振り切るように今までの自分を否定する。
「周囲からの重圧、そして両親からの期待に押し潰されて借り物の望みを自分の望みと思いこみ、自分の望みを持つことが怖くて逃げ回ってただけでした。」
自分の弱さを独白する。
「だからこそ私は強くなりたい。本当の自分の願いの為を叶えるために。」
そして弱さを振り切り、強さを求める。
「お前の願いは？」
「一族を守りたい。誰からも強要されず、自分の意思で、世界を敵にしても守りたいんです。」
作り物の願いを本当の願いにするために、いつか本当の願いをかなえるために世界を敵に回しても戦い抜く強さを求める。
「サヤ・カミナギだ。」
「えっ」
「私はティア・ノート。」
「私はエルー・ツェッティです。」
「「「ようこそ私たちの家に」」」
「レイン・シーファです。よろしくお願いします。」
誰も入ることが許されなかった家に、入ることを許され涙する。
「明日からレインも鍛錬に混ぜるから準備をしておけ。」
そう言い残し、家の中に戻っていく。

「よかったね。サヤが名前で呼ぶのはその人のこと認めた証だから。」
「おめでとうございます。これから頑張ってくださいね。」
「はい。では失礼します。」
「どこ行くの？」
立ち去ろうとするレインを呼び止める。
「寮に帰ろうと思ってるんですが。」
「私たちが認めたんですからレインさんも今日からここの住人ですよ。」
「そうそう。今頃サヤが手を打ってるから戻らなくてもいいよ。」
「でも・・・・」
「いいんですよ。部屋は余ってますから、それに強くなるならここにいた方が何かと都合がいいんです。」
「禁書庫から持ってきた魔導書とかもあるしね。」
「ではよろしくお願いします。エルーさん、ティアさん。」
「前にも言ったでしょ、ティアでいいよ。」
「私もエルーでいいですよ。」
「はい。改めてよろしくお願いします。エルー、ティア。」
こうして新たにレインが仲間に加わった。

第４２話

レインが沙耶たちの仲間に入った翌日、沙耶は学園長室に来ていた。
「というわけです。レインは私たちの家に住むことになりましたので手配の方をお願いします。」
「そう簡単に言われましても、何度も例外を認めていると学園の規則が乱れます。」
「だから今回限りです。この件を認めていただくなら今までのことは水に流してくれて結構です。」
「・・・・分かりました。しかし次はありませんよ。」
「交渉成立ですね。」
「それで私たちがやることは？」
「退寮届の受理と私たちの家で住むことを黙認してくれれば結構です。」
「いいでしょう。」
「それでは失礼します。」
「・・・・はぁ。今年の新入生は疲れますね。」
今年に入って胃薬が手放せなくっている学園長であった。

そして放課後、いつもどおりに広場に向かい鍛錬を行っている。
現在はティアとエルーが戦っており、ティアの馬鹿力を上手く捌き、所々で魔弾を撃っている。
「レイン、とりあえず退寮届は出しておいたからここに住みこめ。最低限どの距離でも戦えるように教えるから覚悟しておけ。」
「はい。１つ聞きたいんですがいいですか？」
「なんだ？」
「どうやって禁書庫の本の封印を解いたんですか？　私が見てもさっぱりだったんですが。」
「詳しくは言えないが、私の能力で解除した。」

「すごいですね・・・・・」
そうしている内にエルーがティアに銃口を押し付け終わっていた。
「くっそー、あの時ああしていれば・・・」
「そこに移動しても罠がありますよ。」
「最近エルーの罠がえげつない。」
「そうでもしないと勝てないんですからしょうがないです。」
「まぁいいや。それで次は誰がやるの？」
「私とレインがやる。」
「ええ！！」
予想外の言葉に驚くレイン
「実戦に勝る経験はない。それに今の段階の実力を見ておきたい。魔法は使ってもいいから全力で来い。」
「はい。」
「んじゃ、始め。」
ティアが開始の合図を出す。
「先手は譲ってやる。」
「ではいきます。アクアレーザー」
水の塊が何本も沙耶に迫るが、狙いが直線すぎて簡単にかわされてしまう。
かわしきった後、ナイフを投擲する。
「ウォーターキューブ」
水の塊でナイフを防ぐ。
「相手から目を離すな。」
しかし、後ろからナイフを突き付けられレインの敗北が決まった。
そして3人が集まり
「はたから見てレインはどうだった？」
「魔法の制御と構築スピードは及第点で６０点です。」
「１点に集中しすぎ２０点。」
「狙いがちょっと甘すぎますね２５点です。」
「そう？　あれはないでしょう、どうぞよけてくださいって言って

るもんじゃん、私なら15点。それにナイフを防ぐために無駄な魔力を使いすぎ、5点。」
「たしかに、あの程度なら魔法を使う必要すらありませんからね。それに簡単に背後を許しすぎです5点。」
「平均して21点。」
「もっと頑張りましょうですね。」
「・・・・・・・」
酷すぎる評価に膝をつくレイン。
「まぁ最初ならこんなものだろう、心配するなエルーだって最初から強かったわけじゃない。」
「そうですよ。私なんてサヤから鍛えてもら前なんて中級魔法で限界でしたから。」
「エルーさんがですか?」
「私は貴族ですから別に戦う必要はないんですけど、サヤがいますからね、無理に頼み込んで鍛えてもらったんです。」
「どれくらい前から鍛錬を行っているんですか?」
「半年くらい前でしょうか?」
「たぶんそのくらい。」
「半年でそんなに強くなれるんですか!!」
「いや。エルーは特別、もともと魔力の制御が上手だったからそれに見合う魔力を魔具で補ったから急激に強くなっただけで、残りの接近戦は相手から距離を置く程度。魔具を外せばレインでもまともに戦える。」
「そうなんでうすか・・・・」
「それにエルーは、罠を張ることや戦況を見極めることが得意だったから私たちと戦えてるだけだ。」
「そういうことです。私もまだまだなんですよ。」
「そのまだまだに負けた私って・・・」
「だからレインはまず自分に合った戦い方を見つけるところから始めろ、それでも最低限はどの距離でも戦えるようにはなってもらう

が。」
「はい。頑張ります。」
「まずはクロスレンジから、相手は私がするから好きに打ち込んでこい。」
鍛錬を再開する沙耶とレインに
「エルーもう1回勝負しよう。」
「いいですよ。私も負けられませんから。」
こちらも再開する。
終わった時にはボロボロになって疲れ切ったレインと余裕たっぷりの3人の姿があった。

おまけ

鍛錬が終わり、家に帰りついた3人は相変わらず各々やりたいことをやっていた。
そんな中、まだこの家のルールに慣れていないレインがおろおろしていた。
「あのー、私はなにをすればいいんでしょうか？」
「好きなことやっててていいよ、そこらへんの本を読んでもいいし、禁書庫から借りてきた本を読んで新しい魔法を覚えててもいいし、でも料理は駄目だよ。あれはサヤとエルーの仕事?だから。」
「はぁ。ところでティアはなにやってるんですか？」
「私は魔具作ってんの。これでも手先が器用だからね、禁書にはいろいろ書いてあるから。」
「今どんなの作ってるんですか？」
「魔力を拡散させる腕輪。」
「どうしてそんなものを？」
「サヤとエルーが作ったこの剣、レヴァンティンっていうんだけど威力が加減してもシャレにならないから少し威力を抑えるためにね。

」
「そんなにすごいんですか？」
「私以外が触れると触れたとが溶けるよ、それに模擬戦で出した炎は出力でいうと3％くらいだから。」
「あれで3％ですか・・・・」
「サヤが作るものは常識を超えてるからね～。でも使い勝手が悪いってことが欠点かな。」
「私も魔具の作成手伝っていいですか？」
「いいよ。作りたい物とかあったら言って、珍しい材料を使うのは流石に無理だけどサヤに相談すればある程度は何とかなるから。」
「わかりました。」
なんだかんだで上手くやってる2人だった。

第４３話

レインが沙耶たちの仲間になって１カ月が経過しようとした。
そんなある日
「来週から中間テストが始まるから、きちんと勉強しておくこと。以上解散。」
相変わらず適当なミシェルがＨＲを終わらせ、生徒は部活やらなにやらで教室から出ていく。
もちろん、沙耶たちもその例からもれることなく教室を出て、レインと合流しいつもの広場へ向かう。
ちなみにレインは総合科に転科せず戦闘科にいる。
経験を積ませるため３人が総合科への転科を許可しなかったためである。
「そういえば２人とも中間テストの内容知ってる？」
「はい。」
「当然。」
広場へ向かう途中ティアが口を開きテストのことについて尋ねる。
「どんな内容なの？」
「知らないんですか？　授業中に先生がいってましたよ。」
「そんなこといってたっけ？」
「大丈夫なのティア？」
レインはこの１カ月でだいぶ砕けた口調になっている。
「ちなみに内容は・・・」
「全科目の筆記試験と戦闘に関する実技試験の２つ。」
「全科目って・・・・」
「国語、古典、数学、地理、歴史、政治、魔法論理、戦闘論理の７科目だ。」
「・・・・・・・・」
「自業自得だ。」

「お願いしますサヤ様勉強を教えてください。」
「日ごろお前が寝てるから悪い。」
「お願いします、もう寝ませんから。」
「いいだろう、しかし今度寝たらどうなっても後悔するなよ。」
「ありがとうございます。」
「それならこれから1週間、早めに鍛錬を切り上げましょうか。」
「私はいいですよ。」
「ありがとおぉ～。」
感激に涙を浮かべるティアであった。

広場に着くとさっそく鍛錬を始める。
組み合わせは、沙耶とティア、エルーとレイン。
沙耶とティアはいつも通り実戦形式でやっているが、エルーとレインはクロスレンジからショートレンジで戦っている。
鍛錬に参加して1カ月でエルー相手ならようやく10分以上持ちこたえれるようになっていた。
魔法の方も構築スピードが上がり、魔法ありなら沙耶やティアとも少しは戦えるようになったがまだまだ5分以上持ったことはない。
最初に比べると格段に進歩はしたが、まだ自分の戦い方を見つけていないレインは伸び悩んでいた。
それぞれ、戦い始めてから15分以上経過しエルーとレインたちはエルーが抑え込んで勝利していたが、沙耶とティアはまだやっていた。
「エルー次は魔法ありでやらない？」
「いいですよ。」
そして再び戦い始める2人、レインは魔法を連発するがエルーは最小限の魔法と動きで捌いていく。
反撃に魔弾を撃たれるが、前とは違い水の壁を作るのではなく部分的に水の塊を作ったり、見極めてかわすが、移動しながらの魔弾の弾幕に魔法の乱射を受け攪乱される。

「っつ、アイストルネード」
一度状況を立て直すためにレインを中心に氷の竜巻を巻き起こすが
「甘いですよ。」
しかし、移動しながら少しずつ設置し待機させていた魔法を一気に発動させ全方向から魔法が襲いかかる。
あっさりとレインの魔法は打ち消され、銃口を向けられる。
「負けました。」
「まだまだだね～。」
「守りはそこそこできるようになったが、攻めはまだまだだな。」
いつのまにか観戦していた2人が感想を述べる。
「体勢を立て直そうとしたのは良かったけど、相手が悪かったね。私やサヤなら1度引いてたけどエルーはそこらじゅうに魔法設置していくからなぁ。」
「エルー相手に守りに入った後は時間の問題だからな。」
「2人とも酷いですよ。」
「どんな戦いかたが私に合ってるんだろう。」
「そろそろ、レインの魔具を考えるか。」
「そうですね。いい加減素手やナイフでは厳しいでしょうし。」
「でもどんなのにするの？　サヤやティアみたいに魔力に問題があるわけじゃないし、私みたいな特殊な能力があるわけでもないし・・・」
「それは後々考えることにしよう。それよりティア勉強の方はいいのか？」
「ああ!!　帰ろう!!　帰って勉強しなきゃ!!」
「それでは帰りましょうか。」
それから帰宅し沙耶によるスパルタ教育を受け疲れ果てティアは寝てしまった。
深夜になり、レインが沙耶とティアの部屋を訪れ、ノックをしようとした時

「エ、エルー、ちょっと待って／／／／／」
「いいじゃない、最近はご無沙汰だったんだから。」
「最近って3日前にしたでしょ／／／／／／／」
「3日も前よ。」
「まｔｔ・・・んっ・・・・ぴちゃ・・・・れろ・・」
強引に舌をねじ込み、沙耶から抵抗の意思を奪い服を脱がしていく。
そんな様子を扉の隙間から覗いていたレインは
（ほんとにあの2人こんなことを・・・／／／／／／）
用事は明日にしようと引き返そうとした瞬間、足音を立ててしまい
「・・・・ぷはぁ、そこにいるのは誰ですか。」
エルーに聞かれてしまい、逃げだそうとしたがティアはもう寝ているので逃げても明日にはばれてしまうと思い観念して
「ごめんなさい、覗くつもりじゃなかったんだけど・・・」
「レインさんでしたか、少し待っていてください。」
数分後
「どうぞ、入って結構ですよ。」
そういわれ中に入ると、顔を真っ赤にして睨んでいるサヤと穏やかな笑みを浮かべているエルーがいた。
「こんな夜になんの用だ。」
恥態を見られ恥ずかしいのか、怒ったような声で尋ねてくる。
「サヤ、レインさんは1カ月前に来たばかりですから仕方ありませんよ。」
「ごめんなさい、今後気おつけます。」
エルーとティアにはそれなりに砕けた口調になってはいるが、いまだに沙耶には敬語で話している。
沙耶は敬語で話さなくてもいいと言ったがレインの中で沙耶は神格化されているのでそういうわけにはいかず、いまだに敬語だった。
「もうちょっとだったのに・・・・・・」
「なにかいいましたか？」
「なんでもない！！　それで用件は何だ。」

「私の魔具についてなんですが・・・・」
「そのことか、いろいろ考えてはいるんだが、なかなかレインにあうものが思いつかない。」
「それでこれは私の希望なんですが・・・・・」
「なるほど、それなら禁書に載っていたな。」
「はい。でもそれを使いこなすには魔力が圧倒的に足りないんです。」
「わかった。近いうちに私たちと同じ指輪を渡す。」
「ありがとうございます。」
「しかし、本当に制御できるのか？　その魔法は禁書に載っている魔法でも最上級の難易度の魔法だろう。さらにその魔法を応用してようやく形になるものだ。」
「私は水の精霊の眷族の直系です。必ず制御して見せます。」
「そうか。なにがなんでも制御して見せろ。」
「はい！！　それでは失礼します。」
次の日から、レインは魔導書を読み１つの魔法を習得しようしていた。

おまけ

レインが部屋から去ると
「さて続きをしましょうか。」
そういって沙耶を押し倒す。
「今夜はもういいでしょ／／／／／」
「もう少しのことろで止められて我慢できないくせに。」
「それは・・・／／／／／」
「サヤって無理矢理されるのが好きなの？」
「ち、違う／／／／」
「なら・・・・・」

いきなり沙耶の下着の中に手を突っ込み触れるとそこはうっすらと濡れていた。
「～～～っ／／／／／／／」
「これはなに？」
濡れている手を見せつける
「／／／／／／／／／」
恥ずかしすぎて目を強くつぶる沙耶に
「体は正直だね。」
耳元で甘く囁きかけ、再び服を脱がしていく。
「だ、駄目。レインに聞かれちゃう／／／／」
「大丈夫、遮音の結界を張ったから。」
「で、でも・・・・」
「もういいでしょう。我慢しないで素直になりましょう。」
「ひっ・・あああああ／／／／／」
沙耶の嬌声が暗い部屋に響き渡った。

第４４話（前書き）

第四章学園編下が次回から始まります

第４４話

レインが沙耶の部屋を訪れ1週間がたち、ティアは中間テストで赤点補習を回避した。
沙耶とレインはクラスでトップ5に入り、レインは戦闘科でトップの成績を修めていた。
そして、中間テストが終わった数日後いつも通り広場に向かい鍛錬を開始する。
そして、鍛錬が終ると家に戻り各々やりたいことをやっていると
「レイン、魔法の制御は順調か？」
「制御は何とかなりそうなんですが、魔力量が問題です。」
「そうか。ちなみにレインの魔力量はどれくらいなんだ？」
「だいたい3万くらいです。」
「それなら大丈夫か。レイン遅くなったがお前専用の魔具だ。指輪の魔力では厳しかったから、これにした。」
そうして渡されたのは水色の扇だった。
「これは？」
「それはティアのレヴァンティンと同じようなもので、名はフヴェルゲルミル、神界に存在する極寒の国ニヴルヘイムの中央にあったとされる泉から取った名で、水の魔力を込めた扇だ。もっともレヴァンティンのような魔力は込めていないが、その魔力を使えばあの魔法を使用することができるだろう、他にも接近された時無詠唱で水の魔法を放てる、それに武器としても使える。」
「本当にこんなものいただいていいんですか？」
「それを作ったのはティアで、魔力を込めたのは私とエルーだ。せっかく作ったんだ使ってくれ。レイン以外膨大な水の魔力を制御できない。」
「本当にありがとうございます。」
涙ぐみながら感謝する

「お礼なら2人にもいってやってくれ、特にティアは勉強で忙しい中作ってたんだ。」
「はい。今からいってきます。」
レインはお礼を言うために2人を探しに行く。

それから1カ月何事もなくいつもどうりの生活を送っていた。
そして
「2週間後、ルクセント学園で文化祭が行われる。外部からの客もかなり来るからな生徒として恥ずかしい行動をしないようにしてくれ。」
いつもと変わらず適当にやっているミシェル。
1人の生徒が挙手して質問する。
「1年生はなにかやるんですか?」
「いや、やりたいならやってもいいがその時はきちんと申請してからやるように。基本的に1年生は見て回るだけだ。」
それからしばらく教室がざわめくが
「もういいか? じゃあ今日は終わり。おつかれさん。」
1日の授業が終わりいつもの通りレインと合流し広場へと向かう。

「・・・・・・」
「サヤ、なにか考え事ですか?」
広場への移動中にエルーが尋ねる。
「うん。今度の文化祭の時厄介なことが起きるかもしれない。」
「厄介なこととは?」
「いつもは外部からの客なんて入ってこないこの島に、唯一外部から入ってこられる文化祭の時、もしかしたらやつが来るかもしれない。」
「それは本当ですか?」
「それは厄介だね。」
「???」

なんのことかわからないレインは話についていけずにいるが、そんなことはお構いなしに話は続く
「やつの目的はいまのところ分かっているだけで2つ、1つ目は国同士の仲を悪くさせること、2つ目は北の魔大陸の結界を維持しているクリスタル。」
「なにそれ？」
「これは国家機密の話だが、3つの国とこの学園のどこかにはクリスタルがあるらしい。」
「それがどうして目的の1つになるの？」
「正確にはわからない、けどクリスタルを狙っているのは間違いないと思う。」
「サヤがそういうんだったらそうなんでしょ。」
「もしやつが来たら協力してほしい。」
「当たり前です。私がサヤの頼みを断るわけありません。」
「私もサヤの頼みは断らないよ。」
「私はよくわかりませんが協力します。」
「ありがとう。」

そして広場につきいつも通り鍛錬を行う。
最初はサヤとレインの組み合わせで、残りの2人が観戦し感想を述べる。
「アクアレーザー、追尾」
水の塊が何本も襲いかかり、沙耶が1度かわしても方向を変え追ってくる。
背後から追ってくるが、沙耶は振り返らずレインとの距離を詰める。
それに対しレインはフヴェルゲルミルを振るい氷の槍で迎撃するが
「固有制御2倍速」
一気に加速した沙耶を捉えることはできずに距離を縮められるが
「まだです！！」
再びフヴェルゲルミルを振るい大量の水で押し流し、背後から襲い

かかるアクアレーザで挟撃しようとする。
「いい攻撃だがまだ甘い。フランジュベル」
炎の剣で前方の水を蒸発させ、レインに詰め寄りナイフで一閃するが
「くっ！！」
フヴェルゲルミルで防ぎ、アクアレーザーの到着までの時間を稼ぐ
「っち！！」
アクアレーザーが間に合い沙耶に襲いかかるが、横に飛びギリギリのところでかわす。
すかさず魔法を放ち追撃するが
「固有制御3倍速」
レインの目に捉えられないスピードで詰められナイフを首にあてられる。
「負けました。」
「今日は結構持ったんじゃない。」
「そうですね、もう少しで一撃与えられそうでしたし。」
「あの挟撃はなかなかだったね。」
「それに十分に早い一撃を防いだこともよかったです。」
「私も3倍速まで上げるとは思ってなかったよ。」
「これも、皆さんのおかげだよ。」
1か月前とは比べ物にならないほど強くなったレインだが
「それでもまだ、1勝もできない。」
「そう簡単に負けるわけにはいかないからねぇ。」
いくら波状攻撃を仕掛けても圧倒的な火力で無効化してくるティア
「そう簡単にはいきませんよ。」
どれだけ攻撃しても簡単に捌かれ、罠に誘いこむエルー
「1か月でそこまで強くなれれば十分だ」
先ほどのようにどのような攻撃を仕掛けてもかわしてくる沙耶
1か月程度ではこの3人に勝てるわけがなかった。
「でも同年代の戦闘科ではかなり上の方にいるんじゃないの？」
「上というより、たぶんトップだよ。ティアみたいに火力がある人

なんていないし、エルーみたいに上手に戦える人もいないし、サヤさんみたいなスピードがある人もいないから、ちょっと物足りない感じかな。」

毎日この3人の相手をしているので生徒会レベルの相手でなければ、てこずることがなくなってきており

「私も総合科に転科しようかなぁ」

「調子に乗るな。」

沙耶がレインの頭をはたく

「これからは魔法を使わず接近戦だけで戦え、それなら意味のある授業になるだろ。」

「はい、わかりました。」

「しかし、レインはなんでサヤにだけ敬語なの?」

「私だっていってるんだがレインがどうしてもって聞かないんだよ。」

「サヤさんの言葉で私は目が覚めたんです、だからサヤさんは私の恩人なんです。そして恩人には敬語を使うのは当たり前です。」

「なるほどそうだったんですか。レインさん1つ注意しておきますがサヤは私の物ですから尊敬するのはいいですけど、それ以上は駄目ですよ。」

「それは大丈夫、だって私は・・・・・」

少し顔を赤らめながらティアの方を見る

「えっ!!」

熱っぽい視線を向けられ、驚くティア。

「それなら問題ありません。レインさんも頑張ってください。」

「うん。」

「待って、ちょっと待って。嘘だよね、私はノーマルだからそんなこと言われても困るだけだから。」

家にいるときはたいてい沙耶とエルーは本を読んでおり、ティアと一緒にいることが多くなり、なんだかんだでレインに優しいティア、極めつけには沙耶とエルーの同性カップルの存在がレインをそっち

の道に立たせていた。
「大丈夫だよティア。」
「そっか、そうだよね。私の勘違いだよね。」
「私はティアが応えてくるまで待つから。」
「・・・・・・・・」
無言で固まってしまったティアを熱っぽい視線で見つめていたレインだった。

おまけ

扇を作ってもらったことに対しお礼を言おうと2人を探していたレイン
「どうしたのレイン？」
そこにティアが声をかけ
「ティア、これ本当にありがとう。」
「どういたしまして。」
「どうしてこれを作ってくれたの？」
「ん？　そりゃレインが困っているみたいだったから。」
「そんな理由でテスト勉強で忙しい中作ってくれたの？」
「テストとレインどっちが大事かって言われたらレインだからね。あんまり気にしなくていいよ私がやりたくてやったんだから。一言お礼を言ってもらえればそれで十分。」
レインの頭をなでながら言う。
頭をなでられながら熱っぽい視線でティアを見つめる。
「どうしたの？」
「な、なんでもない！！」
「そう？　じゃおやすみ。」
いまだ心臓の鼓動が激しく高鳴っている胸を抑えて
「ティア・・・・・」

愛しの人の名前を呼んだ。

第４５話（前書き）

第四章学園編下
再び魔王が動き出します

第45話

side　ジーク

現在戦闘科の授業が行われジークも参加していた。
ジークは戦闘科の1年生ではトップクラスの実力を持っており、2年生と戦っても問題なく戦えていたが沙耶たちの存在により戦闘科トップクラスの肩書はあまり意味をなさず、先の一軒で圧倒的な実力の差を見せつけられいらついていた。
（くそ、あいつらさえいなければ。）
そしてジークの出番が回り、今日は模擬戦を行う授業で成績トップのレインと戦うことになっていた。
試験では直接戦うことがなく、レインの実力を知らないのでなぜレインがトップなのか疑問に思っていたジークにとって、この機会は自分がトップだと思い知らせるいい機会だと思っていた。
「始め。」
戦闘開始の合図が上がりジークは雷を纏い
「サンダーランス」
小手先調べに雷の矢を放つが、レインは簡単によけ接近してくる。
「ライトニングボルト」
雷の中級魔法を無詠唱で放ち、雷弾をいくつも放ちレインを迎撃するが
最小限の動きと部分的な水の壁でかわしきり接近を許してしまう。
「はっ！！」
フヴェルゲルミルでジークに直接攻撃をするが
「無駄だ。」
雷の壁に阻まれ攻撃は通らない。
「これが雷の壁ですか。」
「そんな攻撃では俺の雷は破れん。ライトニングボルト」

近距離からの雷弾を放つが、レインはすぐに距離をとりかわす。
「終わりにしてやる。空に浮かびし雷雲よ、天雷の裁きを・・・・・」
天より降り注ぐ回避不可の雷を放とうとするが
「隙ありです。」
詠唱中に再び接近し直接攻撃を加えようとする。
「無駄だ。サンダーボ・・・がっは。」
今度はフヴェルゲルミルで打撃を与えるのではなく、掌で衝撃のみを相手に与える鎧通しで攻撃し見事に雷の壁を通り過ぎジーク本体にダメージを与えた。
「くそ、ライトニングボルト」
詠唱が邪魔されとっさに距離を置くために雷弾を放つが、狙いが甘くなり、エルーからの容赦のない攻撃を毎日受けているレインはすべてかわし再び鎧通しで攻撃を加える。
「がはっ!!」
肺の空気をすべて吐き出させ、集中力がきれ纏っていた雷が消え扇をジークに向ける。
「そこまで、勝者レイン・シーファ」
決着がつき舞台を降りていくレインを倒れたまま見ていた。

授業が終わり1人帰っている
(くそ、なんで今年はこんなにも強い奴ばかり、1つ上の学年だったら・・・)
たび重なる敗戦はジークのプライドを傷つけ最近はいつもイライラしていた。
そしてそこに
「少年、力がほしくないか?」
悪魔の誘惑がジークに囁きかけられた。

side out

文化祭1週間前と迫りサヤは学園長室を訪れていた。
「今日はなんの御用ですか？」
「この島に北の魔大陸の結界を維持しているクリスタルはありますか？」
「・・・なんのことでしょうか？」
「今度の文化祭、それを狙う輩が出てくる可能性があります。知っているなら場所を教えてほしい。」
「それは、2国間に戦争を引き起こそうとした者ですか？」
「はい。それにここで騒ぎを起こせば警備の問題が指摘され3国共に責任の押し付け合いが発生し戦争まではいかなくても、お互いの不仲を引きをおこすことはできます。」
「わかりました。場所は・・・・・・」
「このことを知っている人は他にいますか？」
「副学園長だけです。」
「当日は何人か不自然に思われない程度に警備を敷いてください。」
「わかりました。あなたたちはどうするつもりですか？」
「もしかしたらクリスタルは思い違いかもしれないので、文化祭を見回ろうと思います。」
「そうですか。一応生徒会も見回ることになっていますので生徒会のリストを渡しておきます。」
「ちなみに今その場所はどうなってるんですか？」
「私が張っている結界と、常時張り付いている警備用のゴーレムがいます。」
「ということはなにかあればすぐにわかるということですか？」
「そうなります。ゴーレムは時間稼ぎ程度の強さは持っているので、異変があればすぐに駆け付けられると思います。」
「わかりました。これを持っていてください。」
「これは？」
「私たちが作った魔具です。遠くにいてもそれを持っている者同士

なら会話ができる物です。緊急時に使用してください。」
「本当にあなたたちは何者なんですか？」
「ただの学生ですよ。ではこれで失礼します。」
沙耶が去った後
「ただの学生がこんな物作れるわけないでしょう。」
机から胃薬を取り出したが、すでに空だった。

エルー立ちと合流しいつもの広場へ向かう途中
「それでどうだった？」
「協力は取り付けた。後は本番で相手がどう出るかで臨機応変に対応する。」
「ちなみに相手はどう出てくると思いますか？」
「囮を使って注意をひいてその隙にってところかな。」
「そこまで警戒しないといけない相手なんですか？」
「あれはやばい。かなり頭が切れる上に人を上手く乗せて自分は一切手を出してこない狡猾な相手だ。」
空気が重くなり会話が減る
「そういえば私、フォード君を魔法なしで倒したんですよ。」
「へぇ。あの雷の壁をねぇ、私は一発だったけど結構硬いんじゃなかったっけ？」
「私の魔弾では無理でした。手加減はしてましたけど。」
「サヤさんに教えてもらった衝撃だけを通す攻撃で昏倒させて勝ちました。」
「あれを使えるようになったか、成長したな。」
「ありがとうございます。」
珍しく沙耶から褒められ、満面の笑みを浮かべるレイン。
「む・・」
ちょっと不満げなティア
「どうしたんですかティアさん。」

「なにが？」
「一瞬顔をしかめませんでしたか？」
「気のせいじゃない？」
「そうですか。」
文化祭まで残り1週間を切り、各々決戦の日に向け準備を行う。

おまけ

日課の鍛錬が終わり家に帰って来た4人。
いつも通り本を読み始める2人と、今日はどうしようか悩むティア。
「ティア、今日は魔具の研究しないの？」
「う～ん、今作りたい物あんまりないからなぁ。とりあえず禁書を適当に漁るか。」
「私も一緒にいい？。」
「別にいいよ。」
そして禁書を読んでいると
「ティアこれなんてどう？」
本のページを見せるために近づいてくる。
「ど、どれ。」
（意識するな、意識すな、意識するな！！）
レインの気持ちを知って以来できるだけ意識をしないように接しているが、こうまで接近されると嫌でも意識させられる。
「これなんだけど？　どうかしたのティア？」
「な、なんでもない。」
「そう？」
「これは材料を集めるのが大変だし、特殊な加工が必要になるから今は厳しいかな。」
「ティアって魔具のこと詳しいね。」
「唯一と言ってい趣味だからね。」

「私も勉強しようかな・・・・」
「いいんじゃない、知っておいて損はないから。ちなみにあの2人は私並みに詳しいよ。」
「どうして？」
「あの2人はジャンルなんて関係なしに本を読むから、それでいろいろな知識をえてるらしいよ。」
「へぇ～。私が勉強するとき教えてくれる？」
「もちろん。」
「ありがと。」
笑顔でお礼を言われ、顔に血が昇るのが分かる。
（落ち着け、落ち着け私。私はノーマル、ノーマルだ。あの2人が所構わずいちゃつくから変に意識してるだけだ。）
なんだかんだで沙耶とエルーに毒されているティアだった。

第４５話（後書き）

ティアとレインのカップルを成立させるべきか・・・・

第４６話（前書き）

活動報告にいろいろと訂正と報告を載せておりますので見てください。

第４６話

文化祭まで残り3日となり、島中に露店や宣伝のための看板が立て掛けられにぎわっていた。
その裏で沙耶たちは当日どう回るか考えを巡らせていた。
「おそらく相手は人が多いところで騒ぎを起こすはずだ。そして、そちらに注意を向けている時に目的地に向かうとはずだから、レインはまず騒ぎを起こしたところを鎮めてくれ。一応生徒会にも協力要請はしてあるから1人では無理だと思ったら協力して鎮めてくれ。」
「はい。」
「エルーとティアは怪しい人物を探すために、島を回っててほしい。騒ぎが起こったらその場にいってレインがその場にいなかったら2人のどちらかが抑える。レインがいた場合は2人ともまず私に連絡、そしてその場で指示を出す。」
「わかりました。」
「ＯＫ～。」
「そして私が学園長とクリスタルの前で待ち構える。一応当日はこういう編成でいこうとおもってる。なにか質問はある？」
「私たちが怪しい奴を見つけたらどうすればいい？」
「とりあえず尾行して、それが本物だったらすぐに連絡すること。」
「私はどこにいればいいんですか？」
「レインも騒ぎが起こるまではエルーとティアと同じようにしてくれ。」
そして作戦会議が終了し
「相手は頭が切れるだけじゃなく、かなり強い可能性もある勝てないと思ったらすぐに逃げること。」
そして、それぞれ来たるべきに向け最終調整を行う。

次の日沙耶は再び学園長室を訪れていた。
「学園長。警備は誰にするか決めましたか？」
「戦闘科の先生を何名か選びました。」
「そうですか、生徒会役員で私たちより強いと思われる人はいますか？」
「そうですね、会長と副会長ならあなたたちと互角以上にやれると思いますよ。」
「それはティアが本気でレヴァンティンを使ってもですか？」
「それは流石に厳しいと思います。あれは私かミシェル先生でギリギリ防げるかどうかというレベルですから。」
「わかりました。それとこれは私たちの当日の行動です。」
「レインさんで大丈夫なのですか？　いくら１年戦闘科でトップとはいえ相手はまだどれほどの実力かわからないのでしょう？」
「レインには私たちが作った魔具を持たせてます。それに禁書に載っている魔法も使えるようになっています。下手な生徒会役員より強いですよ。」
「そうですか。あなたは私たちのところに潜伏しているとしていますが、正直あなたが強いとはいえ、私たちと比べるとかなり劣ります。ここはティアさんがいいのでは？」
「わかっています。しかし私も奥の手を隠してますから心配なく。」
「それならいいでしょう。それでは当日はよろしくお願いします。」
「こちらこそお願いします。」
そしていよいよ決戦の日を迎える。

文化祭当日、港からたくさんの人が上陸し島は人で賑わい、いつもは学生と少数の先生や繁華街に住む人たちしかいないこの島に、生徒の親や他の学校の生徒など人の数はいつもの１０倍以上になる。
それだけの人が集まれば、多少のトラブルはつきものであり生徒会や先生方はそれらを治めるためにあちこちに走り回っていた。
「しかし、ほんとにすごい人だね～。」

「世界中から集まりますからそれは仕方ないですよ。」
「みんな準備はいいか？」
「もちろん。」
レヴァンティンを持ち答えるティア
「私も大丈夫です。」
フヴェルゲルミルを持ち答えるレイン
「必ず捕まえて見せます。」
様々な武器を隠し持ち答えるエルー
「よし、じゃ作戦通りいったん解散する。みんな無事で家に帰ろう。」
そして、４人は解散し各々作戦の通りに行動を開始する。

ｓｉｄｅ　魔王

人々が文化祭を楽しんでいる時、魔王は１人それを眺めていた。
そこに１人近づいてきた
「準備はいいか？」
「はい。いつでも大丈夫です。」
「そうか、あの少年は？」
「あの少年は今待機させています。騒ぎを起こそうと思えばいつでも行けます。」
「この学園にはサヤ・カミナギという少女はいるか？」
「いますが、それがどうかしたんですか？」
「そうか、やはり彼女が私の敵か。」
「お言葉ですが、あれは多少強いとはいえあなたどころか私にすら敵いませんよ。」
「彼女を甘く見ない方がいい。彼女がいなければ今頃クレンド王国とアトラス王国は戦争をしている。」
「わかりました。これが学園の地図と警備の配置です。」
「これなら作戦に問題はないな。彼女は今どこにいる？」

「あれは目的地に潜むそうです。」
「なるほど。少し作戦を変更する、お前は・・・・・」
「了解しました。では私は行きます。」
そして人ごみ紛れ姿が見えなくなった。
「さぁ、どうでる私の敵。」
魔王の不敵な笑みとともに発せされた言葉は人々の喧騒にかき消された。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第47話

side　レイン

レインは賑わう島を1人回っていた、同年代の友達など沙耶たち以外に存在しないので誰にも声をかけらる事もなかった。
そして午後を回りいったん休憩をしていた。
「午後からのイベントは・・・・」
人が多く集まりそうなイベントがどこかで行われていないかチェックする
「体育館でのライブと闘技場でのトーナメント、講堂での発表会か。どこにくるんだろう。」
大まかに3つに目星をつけティアとエルーに連絡をして1度集合を呼び掛ける。
『わかった、場所は?』
「広場の喫茶点。」
『いますぐいく。』
「次は・・・エルー」
『どうしました?』
「一度集まりたいんだけど」
『そうですね。場所は?』
「広場の喫茶店。」
『わかりました。』
通信を切って5分程度で2人とレインのもとに集まり、午後からの行動について話し合う。
「午後からはこの3つが大きなイベントだから、騒ぎを起こすならここのどこかと思うんだけど。」
「たしかにその確率は高いですね。」
「一応サヤに確認しとうか。」

「では私が連絡します・・・・・・サヤ、今大丈夫ですか？」
『どうしたの？』
「実は・・・・・・」
これまでのことを説明し
『わかった、それでいこう。場所は3人で話し合って決めて。』
「わかりました。」
『気おつけて。』
通信が終わり
「サヤ、なんていってた？」
「その3か所でいいそうです。場所は私たちに任せると言ってました。」
「そっか、じゃあ私は体育館に行く。」
「私は講堂に行きます。」
「私は闘技場だね。」
話がまとまり再び解散し、レインは闘技場に向かっていく。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

サヤは学園長と他数名の先生とクリスタルがある洞窟の前で待機してた。
その中には、学園ナンバー2のミシェルもいた。
「どうでしたか？」
「今のところ異状はないそうです。」
「そうですか。本当に来るのでしょうか？」
「可能性は高いと思われます。アトラス王国では、その男がクリスタルに近づいた可能性が非常に高い。」
「わかりました。警備を続けましょう。」
（私の予想だとそろそろのはずだが・・・）

ｓｉｄｅ　エルー

エルーは解散した後講堂に向かい、講堂内になにかないか探していた。
「仕掛けている物はありませんか。なにか起こすとしたら直接ということですね。それではこちらは仕掛けを打っておきましょう。」
あらゆる場面を想定し、それに対応するように仕掛けていく。
「これでなにかあっても大丈夫でしょう。他の2人は無事だといいんですが。」
そして、講堂の発表会を聞くために続々と人が入ってくる。
そこで何もしかけられていないか目を光らせていた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　ティア

ティアも解散した後体育館に向かい、体育館内に入ったがもうすでに人がかなり入っており仕掛けを見つけ出すのは難しくなっていた。
「まずいなぁ～。なにか仕掛けられていたら防ぎようがない。」
ライブというだけあって人がかなり入ってきており身動きがかなりとりにくく、対応が難しくなっている。
「それでも、なんとかするしかないか。」
無駄かもしれないがなにか仕掛けがないか人ごみのなか探索する。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　レイン

レインもすぐに闘技場に向かい、なにか仕掛けがないか見て回って

いた。
闘技場には出場する選手や観客がすでにかなりの数きておりこちらも仕掛けを探し出すのは困難になっていた。
「ここで騒ぎ起こすとしたら・・・・・」
騒ぎを起こす場面を想定するが、審判や緊急時の為に先生が何名か滞在しており、ここで騒ぎ起こそうものならすぐに捕まってしまうという結論に達してしまう。
「でももしかしたら・・・・・」
1つの可能性を想定し準備を行っていた。

side out

side 魔王

魔王は1人で高い建物の屋上で学園祭を見下ろしていた。
「そろそろか。それでは始めようか私の敵、止められるものなら止めてみるがいい。」
そういうと1匹のドラゴンが上空から現れ開幕の合図を告げた。

side out

ドラゴンが上空から現れるところを沙耶は学園長たちと一緒に発見していた。
「あれは!!」
「あんなものまで出してくるとは・・・」
驚く学園長とまだまだ想定内で落ち着いている沙耶。
そして先生の1人が
「学園長、生徒と一般人を避難させなければ!!」
「わかっています。あのドラゴンは私が喰い留めますから、先生方

は避難の指示をお願いします。」
「駄目です。ここでここの守りをなくすことは相手の思うつぼです。」
「しかし、あれを放っておくわけにはいきません。」
「それなら「私たちが行きます。」・・・・」
沙耶の言葉をさえぎり、ミシェルが声を上げる。
「私と先生方が力を合わせれば、避難する時間くらい稼ぐことができます。学園長は引き続きこの場の守護を行ってください。」
「・・・わかりました。よろしくおねがいします。」
「はい。ではいきましょう。」
ミシェルを筆頭に他の先生も続き、この場に残ったのは学園長と沙耶だけだった。
「どうかご無事で。」
学園長が祈りをささげている中、沙耶は
「みんな、もうすぐその場所でなにか起こる可能性が高い。警戒を怠らないように。」
「なにをいってるんですか、囮はあのドラゴンでは?」
「いえ、あれは囮の囮です。ドラゴンという強力な手札を切ることで注目させ、避難しているときに各場所を襲撃する。これで警備の問題が発生し各国の不仲を引き起こし、その混乱に乗じここを襲撃するつもりでしょう。」
「それなら、その場所はどうするつもりなんですか?」
「そこには私の仲間がすでに到着しています。」
「あなたたちが強くても、相手はドラゴンを出してくる程の者ですよ。生徒レベルでどうにかできることじゃありません。」
「あの3人は、それぞれとっておきの切り札を持っています。ティアのレヴァンティンを見たはずです。他の2人もあのレベルの切り札をもってるので大丈夫です。」
「・・・すみません。取り乱しました。」
「それに、いざとなったら私が行きます。」

ドラゴンが現れ１０分後、それぞれの場所で戦いが始まった。

第４８話（前書き）

４４話でレインの魔力量を5万としていましたが3万に訂正します。

第４８話

ｓｉｄｅ　エルー

上空にドラゴンが現れ講堂にいた人が慌てて避難しているとき、出口に魔物が現れた。
「なんでこんなところに魔物が！！」
「助けてー！！」
「逃げろー！！」
突然の魔物の出現に慌てる人たちを
「みなさん下がってください。」
前もって仕込んでいた魔法を発動させ魔物を駆逐していく。
そして、沙耶からもらった簡易式結界を発動させる。
膨大な魔力を込めた結界で１度しか使用できないが、その防御力はドラゴンのブレスさえも防ぎきる。
「皆さんそこから決して出ないでください。」
エルーが指示し慌てていた人たちは落ち着きを取り戻す。
「さて、ではいきましょうか。」
ここからはエルーの独壇場である。
前もって仕込んでおいた魔法を一斉に開放し魔物の群れを蹂躙していく。
「闇よ、我元に収束せよ。汝は絶望となり世界の終焉を。終焉の闇よ刹那の絶望を示せ、ダークネスノヴァ。」
そしてとどめの闇の上級魔法を放ち、闇が魔物の死骸ごと飲み込んでいき殲滅した。
「ここは、囮にすらなりませんね。本命はどこでしょうか？　とりあえずサヤに連絡をしましょう。」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　ティア

同時刻体育館から避難しようとした人たちは出口に待ち構えた魔物たちに驚き、再び体育館に入るが人が多すぎて身動きが取れずにいる。

そこでティアは

「入口から離れて！！」

ティアが叫び入口の方に向かっていくが、混乱している人々の声でかき消される。

「それなら・・・・」

その場から上に跳び、紅蓮の翼を広げ

「フレイムボム」

大きな音と爆風で周囲の目をこちらに向け

「入口から離れて！！」

ティアの言葉が届き、入口から離れていく。

そんなことをやっている間に魔物は体育館に侵入しようとするが、

レヴァンティンを一振りし骨すら残さず焼きつくす。

「灼熱に染まれ、レヴァンティン」

レヴァンティンの魔力を開放し魔物を一瞬にして殲滅し、後には何も残らない。

「こっちは囮かな？　いや囮の囮？　とりあえずサヤに連絡しよう。」

体育館の人々はあまりの出来事に固まっていた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

２人からの連絡がサヤに届く。

「わかった。２人ともうすぐ生徒会が来ると思うから、生徒会が

きたら1度こっちに来て。」
「どうなったんですか？」
「大丈夫です。体育館と講堂は大量の魔物が現れたそうですが、エルーとティアが撃退してけが人はいないそうです。」
「そうですか、では闘技場は？」
「まだ連絡がきません。後10分して連絡が来なかったらエルーかティアを向かわせます。」
「まさか、こんなことになるなんて・・・」
「学園長、なにかあるのはこれからです。正直攻撃がぬる過ぎる。」
「しかし、あの2人がいなかったらどれほどの被害が出ていたことか。」
「あの2人だけで制圧できたんです。おそらく闘技場の制圧はてこずると思います。」
「それなら、誰かを向かわせた方がいいのではありませんか。」
「2人がいなかったら、あの場を治める人がいません。それに生徒会もそろそろ向かうはずです、なによりレインはそう簡単には負けませんよ。」
島の混乱が静まりつつある中、闘技場からはいまだに騒ぎが静まっていなかった。

side　レイン

エルーたちと同時刻、闘技場からも避難を始めていた。
そして避難している先にはジークが立っていた。
「ははは、逃げまどえ！！」
ジークがいきなり逃げている人たちに向け攻撃を放ってくる。
「させない。」
それを間一髪で防ぐ。
「今のうちに逃げて！！」

周りには魔物がいるがトーナメントに出場していた生徒や、先生が協力し魔物を倒していく。
「どういうつもり？」
「ふん。俺の力を見せてやろうと思っただけだ。」
「馬鹿なことを言ってないで、今すぐやめなさい。」
「誰に向かって命令している。」
再び攻撃を再開してくるが、すべてレインが防ぎきる。
「生意気な。死ね、サンダーボルト。」
「っ！！」
無詠唱のサンダーボルトをフヴェルゲルミルの魔力を開放しなんとか防ぎきる。
レイン個人ならもう少し楽に防げるが、無差別に放たれた物を防がなくては他の人に被害が及びそれは相手の目的を果たしてしまうことになるので可能な限り防いでいた。
「どうだ！！　これがあの方からもらった力。俺が最強だ！！」
「おしゃべりとは余裕だね。」
接近し鎧通しで昏倒させようとするが、近づいた瞬間雷が迎撃してくる。
それを前に近づくことができずに後退する。
「無駄だ！！　お前程度が俺の前に立つな。」
先ほどより威力の高いサンダーボルトを降らせる。
（くっ、間に合わない！！）
範囲が広すぎて防御が間に合わず、逃げている人に当たろうとするが別の雷が相殺する。
「なにをやっている、ジーク。」
「よう、兄さん。」
そこにセシル・フォードが現れる
「今すぐ攻撃をやめ投降しろ。」
「いつもいつも見下しやがって・・・・気にくわねぇんだよ！！」
以前とは比べ物にならない威力の雷弾を撃ってくる。

「くっ。」
魔王により強化されたジークはセシルの実力を超えダメージを与えていく。
「そこまでです。」
レインがそういうと氷の壁が現れジークの攻撃を防ぐ
「邪魔をするな！！」
レインに向け雷弾を撃つがすべて氷の壁に阻まれる。
「無駄だよ。世界に水が存在する限りその程度の攻撃は通らない。」
ジークの周りを氷の矢で囲む。
「なめるな！！」
ジークは自身にまとっている雷を開放し氷の矢を破壊するが
「終わりだよ。」
再び氷の矢が現れジークを貫く。
これがレインが習得した禁書の魔法、あらゆる水を操り支配する、アクアマスター。
大気中の水分を凝固しどこからでも氷を作り出していた。
「があああああ！！」
手足を貫かれ、咆哮を上げながら無差別に魔法を乱発するが
「無駄だよ。」
ジークを囲むように氷の壁を展開し、攻撃を防ぐ。
「あああああああああ！！」
突然ジークの体が光だし氷の壁を破壊する。
「なっ！！」
ジークの体が異形と化し傷がふさがっていく。
「セシルさん、あれはいったい。」
「分からないがあれを放っておくのはまずい。」
「なら、少し強引ですが止まってまらいます。」
一瞬にしてジークを氷漬けにするが、ジークの上空が黒い雲に覆われていく
「あれは精霊魔法！！」

セシルが驚き叫ぶ。
そして、雷が氷を砕き、雷の精霊ヴォルトが召喚された。

第４８話（後書き）

第４章終了時に幕間を書こうと思っていますが、なにか書いてほしいものがありましたら応募をお願いします。
いまのところ考えているのは

1. エルーの兄妹と沙耶との絡み
2. ティアとレインの近状
3. カインの悩み

の３つを予定しています。
一般の方からでも応募できますのでよろしくお願いします

第４９話

ｓｉｄｅ　レイン

ジークがヴォルトを召喚し、極太の雷を落とす。
それをセシルがなんとか受け流すが、すくなからずダメージを負ってしまう。
「まさか、あれほど強力なヴォルトを召喚できるなんて・・・・」
精霊魔法によって呼び出される精霊は人によって異なり、呼び出される精霊の総称に名前を付けている。
「セシルさん、あれをどうにかできますか？」
「かなり厳しい。僕も精霊魔法は使えるがあれほど強力なヴォルトは呼び出せない。」
「・・・それなら私が呼びます。時間を稼いでください。」
「君は精霊魔法を使えるのか？」
「いままでは使えませんでしたが、今なら使えると思います。」
「・・・分かった。長くても５分は持たない。」
「十分です。」
そしてセシルはジークに向かっていく、もちろんジークは迎撃にヴォルトの雷を落とすが、セシルもヴォルトの加護を受けているので雷魔法の耐性は高くなんとか持ってはいるが、威力があまりにも大きすぎるためかなり苦しそうにしている。
「水の精霊よ我呼びかけに応えよ。」
その間にレインは詠唱を始め精霊魔法を成功させるため無防備になっている。
なんどもレインを雷が襲うがすべてセシルが防ぎきる。
「生命の根源にして、生命に潤いと災いを与え、世界を満したまえ。水を司りしウンディーネよ我呼びかけに応じその姿を現わせ！！」
詠唱が終わり、レインの周りに水が渦巻く。

「セシルさん、引いてください！！」
セシルが引くと同時に、大量の水がジークに迫る。
対するジークも雷を放つが、純粋な水に電気は通らず無効化されジークを包み込み窒息させようとするが、電熱で蒸発させる。
「がああああああ！！」
無理な魔力酷使にジークの体から血が流れ始める。
しかし、ヴォルトはいまだ消えず極太の雷を何本も降らせる。
「ウンディーネ、ヴォルトを消して！！」
その声に応えるようにウンディーネは水で雷を防ぎヴォルトの３６０。全方位に水の槍を出現させ一斉に貫く。
ヴォルトの体に何か所も穴をあけヴォルトを消しさる。
「ありがとう、ウンディーネ。」
お礼を言うと、美しい女性の姿をしたウンディーネがほほ笑み消えた。
「セシルさん大丈夫ですか？」
「ああ、なんとかね。それよりジークの拘束を・・・・」
そういってジークの方を見ると、原型が分からないほど異形化が進み、さらに攻撃を放ってくる。
「ジークやめるんだ！！」
セシルの呼びかけに応えることなく攻撃を続けてくる。
「死んでも恨まないでね。」
再びジークを氷漬けにし、動きを止める。
そして、酸欠で気絶したと思われるタイミングで氷を溶かす。
「ジーク！！」
セシルが駆け寄りジークの脈をとる、なんとか生きてはいるがおそらくこの先まっとうな人生は送れないほどに体の損傷は激しく生きているのが奇跡みたいな状態だった。
「とりあえずサヤさんに連絡を・・・・」
こうして、３か所とも制圧を終えた

side　out

他の2人から10分程度遅れてレインからの連絡が入る。
『サヤさん、闘技場にいた人は全員避難させましたが、ジーク・シーファが敵の仲間だったみたいで、その攻撃で数名怪我を負っています。ジーク本人は敵から処置を受けているみたいで魔力が増加していましたがなんとか抑えました。処置の副作用かわかりませんが人の原形をとどめていないほど異形と化してます。』
「わかった。レインはこれからエルーとティアと合流して、こっちに向かってくれ。」
『分かりました。』
通信を切ると、学園長に状況を説明する。
「闘技場は被害は出たものの死者は出てないそうです。ジーク・シーファが敵に寝がえり襲いかかってきたそうですがレインが撃退しました。しかし、敵からなんらかの処置を受けており副作用で人の原形をとどめていないそうです。」
「そうですか。ここの生徒が・・・・」
「とりあえず3人ともここに集めています。3人が来たら私はドラゴンの方に加勢に行きます。」
「その必要はないわよ。」
突然声が聞こえ振り向くとそこにはミシェル先生が立っていた。

side　エルー

エルーは講堂前に待機し生徒会役員を待っていた。
「遅くなりました。けが人はいますか。」
「いえ、けが人はいません。敵も見える限りでは殲滅しました。なので避難の方をお願いします。」

「わかりました。あなたも早く避難を。」
「私にはまだやるべきことがありますのでこの場をお願いします。」
そういうと、結界を解き沙耶の方へと走り出す。
島にはまだ魔物が少し残っており、その魔物を一掃しながら進んでいく。
前方に魔物群れを発見し魔法で殲滅しようとするが、その前に灼熱の炎が魔物を焼きつくし跡形もなく消え去った。
「この炎は・・」
「エルーもサヤのところに向かうとこ？」
「はい、ということはティアさんの方にも生徒会が来たんですね。」
「うん。とりあえずサヤのとこに急ごう。」
「そうですね。」
再び走り出そうとした時
「待って!!」
レインが後ろから追い付いてくる。
「レインさん無事だったみたいですね。」
「うん。エルーたちに合流して来いって指示を受けた。」
「よし、それなら行こうか。」
今度こそ沙耶のもとに走り出そうとしたが
「悪いが、ここで止まってもらおう。」
急ぐエルーたちの前に魔王が立ちふさがる。

第５０話

突然戻ってきたミシェルが沙耶の言葉を再び遮りこちらの方に向かってくる。
「あのドラゴンは交戦の末、どこかに逃げて行きました。」
そして、ミシェルが学園長に報告する。
「他の先生方は？」
「ドラゴンが逃げた後、避難の援助に向かいました。」
「そうですか、無事でよかったです。」
「ドラゴンが逃げてくれて助かりました。あれ以上戦っていたら流石に全員無事というわけにはいかなかったでしょうから。」
「これであとはここを守り切れば私たちの勝ちですね。」
「はい。もう一息です。頑張りましょう。」
ようやく戦いの終わりが見え、気合を入れる学園長とミシェル先生。
しかし、沙耶は
「ミシェル先生、それで私を騙せたと思っているんですか？」
まだ戦いは終わらないと、ミシェルに疑いの目を向ける。
「なんのことだ？」
「そう何度も私を騙せると思っているなら心外だな。どうせどこかで聞いているんだろう。」
「だから何を言っている。」
「そうですよカミナギさん。ミシェル先生がいなければドラゴンを退けることができなかったんですから、もしミシェル先生が敵に内通しているとしたらドラゴンを退けさせなどしないでしょう。」
「確かにもともとの作戦ならそれで十分だったはずです。しかし、私がいたから作戦を変更した、違いますかミシェル先生？」
「ふっ、確かにあの方が言った通りお前が１番の問題だったか。」
口に笑みを浮かべ本性を現す。
「ずいぶん評価されているようだな。」

「あの方が唯一危惧していたよ。それと「私の敵」とも言っていた。」
「なぜあなたが・・・・」
あまりの展開についていけない学園長。
「私はもともとこの時の為にここに潜り込んでいた、いわばスパイというやつですよ。作戦の成功のためには世界でも有数の実力を持つあなたが邪魔だったんです。」
「そんな・・・・」
もっとも信頼していたミシェルに裏切られショックを受け呆然とする学園長。
「カミナギ、どこで気付いた?」
「先生の中にスパイがいることはもともと想定していた。決め手はドラゴンに対する対処の時だ、あの時私が行こうとした時、お前は私の言葉をさえぎり自分が行くと進言した。それに先生を連れていくともいっていたな、だがそれはおかしい。ティアの魔剣の威力をあそこにいた人は知っていたはずだ。そして私はそれに準ずる物を持っていると前もって伝えておいたにもかかわらず自分が行くと進言した。あの場面での最善策は私が行くことだったはずだ。そんなことは誰でもわかるはずだ。だからこそその行動をさせないために私の言葉をさえぎった。違うか?」
「いや、まったく違わないよ。よくもそこまで推理を展開できたものだ、流石はあの方の敵だな。」
「さて、おしゃべりはここまでだ。拘束させてもらおう。」
「簡単にやらせると思っているのか?」
沙耶の言葉に不敵に笑み構える。
「もちろん力ずくで押さえつける。」
「お前程度の実力じゃ無理だ。」
「こちらには学園長がいる。」
「その学園長は使い物になるのか?」
「侮らないでください。いくらあなたといえど私はこの学園の学園

長です。生徒の為にあなたを野放しにはしません。」
ショックから立ち直り、膨大な魔力を漂わせる。
「流石に学園長相手では荷が重い。切り札を切らせてもらおう。」
ミシェルが一枚の札を取り出し、そこに魔法陣が浮かび上がりドラゴンが召喚された。
「さて、終幕と行こうか。」
この戦いの第2ラウンドが幕を開けた。

side　エルー

ミシェルがドラゴンを召喚し沙耶たちと交戦を始めたのと同時刻3人は魔王と対峙いしていた。
「急いでいるので道をあけてくれませんか。」
「だから言っているだろう。君たちをここから通すわけにはいかない。流石にドラゴンを使っているとはいえ君たちが加われば厳しいからな。」
「お兄さんって何者？」
「魔王とでも呼んでくれて結構だ。」
「ずいぶんな名前ですね。」
3人が戦闘態勢をとる。
「掛かってきたまえ。」
その言葉と同時に、ティアがレヴァンティンを振り下ろす。
しかし
「大した威力だ、流石にあれを受ければ私でもまずいだろうな。」
空間を曲げ魔剣から放たれた炎を別の方向に捻じ曲げる。
「ディメンションルーラーを無詠唱ですか。実力は本物のようですね。レインさん、サヤに連絡をしてください。」
「させんよ。」
魔王が黒い炎を放つ

「私を無視するな!!」
ティアが黒い炎を受け止め、そのまま魔王に返す。
しかし、空間を曲げられ魔王に届かない。
「サヤさん、敵のボスみたいな人がこちらにいます。かなりの実力者です、応援をお願いします。」
「応援を呼ばれたか、なら応援が来る前に殺してしまうとしよう。」
「そう簡単にはやられませんよ。」
エルーが設置していた魔法を一斉に解き放つ。
しかし、空間を曲げられよけられる。
「あれは厄介だね。どうするエルー。」
「レインさんのあれなら通るでしょう。レインさんお願いします。」
「わかった。」
時間を稼ぐために再び魔王に攻撃を再開する。
対する魔王も強力な魔法を嵐のごとく放ってくる。
「灼熱に染まれ、レヴァンティン」
灼熱の業火ですべての魔法を打ち消し、魔王に迫る。
「無駄だ。」
やはり空間を曲げられ届かないが
「これならどうですか?」
魔王が立っているところから土の槍が襲いかかり、さらにその槍から炎が噴き出す
「この程度がどうかしたのか?」
しかし、あっさりと破壊される。
「さてそろそろ終わりにしようか。」
再び嵐のような攻撃が再開されようとした時、魔王が氷漬けにされた。
「今です2人とも!!。」
このタイミングを待っていたかのように一斉攻撃を仕掛ける。
エルーは今度こそすべての魔法を使い、ティアはレヴァンティンの魔力を街を破壊しすぎない程度に開放し魔王を覆い尽くす。

そして、煙が晴れ
「まさか、ここまでとは予想外だったよ。」
戦いはまだまだ終わらない

第５１話

ミシェルがドラゴンを召喚し、また自身も学園長には及ばないとはいえ世界有数の実力を持ち長く続くと思われた戦いはレインが連絡をする前に集結していた。
無傷で立っている沙耶と学園長、肉塊となり果てたドラゴンと驚愕に動けなくなっているミシェル。
「な、なにをした！！」
普段国を挙げて討伐するはずのドラゴンが召喚した1分後に死んでいる状況に恐れ、声を荒げる。
「言ったはずだ。ティアの魔剣と同格の切り札を持っていると。」
何事もなかったように答える。
「ふざけるな！！　いくらあの魔剣といえどドラゴンを簡単に殺せるはずがないだろう！！」
「誤解しているようだが、あの魔剣の威力はあの試合で見せた物じゃない、ティアが本気でやればこの島1つくらい簡単に焦土になる。」
「そ、そんな馬鹿な・・・・」
「さて拘束させて・・・どうした？・・・・・分かった、すぐに行く。」
もはやミシェルのことなど眼中になく次の行動の準備をしている。
「学園長、少し行ってきますのでこの場を「なめるな！！」黙れ。」
ミシェルが魔法を放とうとするが、ミシェルの魔力をすべて殺しもう2度と魔法を放てなくする。
自身に流れる魔力がすべてなくなりひざから崩れ落ちるが沙耶はまったく気にせず
「エルーたちのところに行ってきます。ミシェル先生はもう魔法が使えないので拘束しておいてください。」
「あなたはいったい・・・・」

ドラゴンを一瞬で殺し、世界有数の実力をもつミシェルをも一瞬で無力化した沙耶の非常識ぶりに言葉が出ない学園長。
「それでは・・・・」
先ほどまで学園長の前にいた沙耶が消える。
そして、学園長とミシェルが取り残される。
「彼女はいったい・・・・」

学園長のもとから離れ、エルーたちがいるところへ空間を殺しながら進んでいく。
（ようやく姿を現したか、奴だけは必ず殺す！！）
さらにスピードを上げ、エルーたちのもとへ急ぐ。

ｓｉｄｅ　エルー

エルーたちの一斉攻撃を受けなお余裕を見せる魔王。
「本当に予想外だ、君たちはサヤ・カミナギのオプションだと思っていたのだが、私に傷を負わせるほどの者とは・・・・やはりここで死んでもらおう。」
先ほど戦っていたときとはケタ違いの魔力を漂わせる。
「あれはまずいですね。」
「レヴァンティンを全力で開放する？」
「この島が焦土になりますよ。」
「ならどうする？」
絶望的な実力差を前にしても冷静でいる２人に
「私が精霊魔法で対抗する。詠唱の時間を稼いで。」
「へぇ～。レインって精霊魔法使えるようになったんだ。」
「今日使えるようになったばっかりだよ。」
「それでは私も切り札を切ります。行きましょうかティア。」
「ＯＫ～。」
魔王が攻撃を始め、ティアがレヴァンティンで対抗し、エルーが魔

法で罠へと誘導し拮抗するがエルーでは火力が足りずあまりダメージを与えられない。
「この程度ならよける必要すらないな。
「そうですか。ならこれならどうですか。」
エルーが新し銃を取り出し、黄金の弾丸を放つ。
あまりの魔力量にとっさに空間を曲げようとするが効果が現れず肩を撃ちぬく。
「ぎりぎりで避けましたか。次は外しませんよ。」
この黄金の弾丸こそエルーの切り札であり、１度に制御できる魔力は最高でも２万程度で、火力不足を補うために開発した黄金の弾丸、名をティルヴィング。
一発にレヴァンティンの魔力の１割である５００万を込め、封魔の魔法を刻み込んだ魔法殺しの弾丸。
普通に販売すれば弾１つで白金貨１０枚はくだらない代物を連射し、魔王を追い込んでいく。
そして
「・・・ウンディーネよ我呼びかけに応じその姿を現わせ!!」
詠唱が終わりウンディーネがその姿を現す。
「これってかなり上位の精霊じゃないの?」
「本で見た限りではかなり上位の精霊ですよ。」
「やるね～。」
「サヤがくるまでもうひと頑張りですよ。」
ウンディーネが現れレインも攻撃に参加しさらに追い詰めていくが、いまだに余裕を持っている魔王。
魔王が放った闇をエルーが打ち消し、ウンディーネが水の槍で魔王を貫こうとする。
「精霊魔法まで使えるとは、認識を改めよう。君たちが私の敵だ。」
水の槍を炎弾で蒸発させ、風と地の上級魔法を同時に放つが、ティアがそんなものは関係ないとばかりに魔力を開放し魔法を飲み込み魔王に迫る。

同時にレインが魔王の体を氷漬けにし動きを封じる。
しかし、魔王も一筋縄ではいかず瞬時に氷を砕き、空間を屈折させ炎を別方向に流す。
「っち！！　時間切れか、この勝負はまたの機会にしよう。」
そういうと上級魔法を連発し、それを打ち消す頃にはすでに魔王の姿はなかった。
「逃げられましたか」
「とんでもない相手だったね。」
「疲れた・・・・」
エルーとティアは平気な顔をしているが、レインは1日に魔力は減っていないとはいえ精霊魔法を2度も使い疲れ果てていた。
それから１０秒くらい後に
「みんな無事か！！」
沙耶が最初からそこにいたかのように姿を現した。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

沙耶はできるだけ急いでエルーたちのもとへ向かおうとしていたが、空間を殺していく移動法は直線にしか進めず、建物が邪魔して予想外に時間を取られていた。
その間にも戦闘音は激しさを増していく。
「無事でいてくれ。」
みんなの無事を祈り、駆け抜けていく。
そして、エルーたちの姿が見え
「みんな無事か！！」
すでにそこには魔王の姿はなくなっていたが
「逃げられましたが全員無事ですよ。」
全員が目立った怪我をしていないことを確認すると、張り詰めていた緊張が解ける。

「よかった。ところで敵は？」
「少し前まで戦ってたんだけど、かなり強かったよ。私たち3人とレインの精霊を相手に互角に戦ってたから。」
「レヴァンティンはどれくらいの出力を出した？」
「1割くらいかな、これ以上出すと焼け野原になっちゃうから。」
「1割とまともにやっていたということは相当な魔力量だな。」
「ちなみに自分のことを魔王と名乗っていました。」
「魔王か・・・」
「こちらの方はこれ位です。そっちはどうでしたか？」
話しを区切り、沙耶の方の状況を聞く
「こっちはミシェル先生がスパイで、ドラゴンを召喚してきたが両方とも無力化してきた。今は学園長に任せているところだ。」
「ドラゴンを無力化って・・・・」
あまりにも非常識なことをさも当然のように言っている沙耶の常識を疑うが
「レイン、サヤならそれくらいできて当然だよ。なんたって私たちのリーダーなんだから。」
「そう・・・だね。サヤさんならそれくらいできても不思議じゃないです。」
さらにレインの中で沙耶の評価が上がった。
「サヤ、これからどうするつもりですか？」
「とりあえず学園長のところに・・・・」
言葉の続きを言おうとした瞬間、学園長がいた方角で大きな爆発が起きた。

第52話

side　学園長

沙耶がエルーたちと合流した時同刻
「ミシェル先生、あなたが「あの方」と呼ぶ者の目的は何ですか？」
「そんなもの教えるわけないだろう。」
魔力を殺され、学園長に拘束され最後まで口を閉ざしているミシェル。
「しかたありません。カミナギさんが来るまで待ちましょう。」
「あなたともあろう方が生徒頼りとは落ちたものだな。」
「なんとでも言ってください。彼女なら信用できます。」
ミシェルの挑発を軽く流す学園長。
それから、しばらく沈黙が流れ、突如ミシェルが悲鳴を上げた
「あああああああああああ！！」
「どうしたんですか！！」
慌てて様子を見てみると、ミシェルの体から魔法陣が浮かび始め、
次の瞬間大爆発が起きた。
学園長はとっさに障壁を張るが威力を殺しきれず吹き飛ばされる。
「っく・・・いまのはいったい・・・」
爆発の衝撃で体中に傷を負い、命に別状はないもののとても動ける体ではなかった。
そして、そこに魔王が現れる。
「ご機嫌はいかがかな学園長先生。」
動けない学園長を見下ろす魔王。
「あなたが・・・・・」
「あの女は最後には役に立ってくれたようだ。最初から捨て駒にするつもりだったが、ああも簡単に突破されるとは・・・おかげで彼女たちを殺し損ねたよ。」

「あなたは・・・ここでとらえます。」
ボロボロの体に鞭を撃ち、立ち上がる学園長。
「悪いが彼女たちがいつ戻ってくるかわからない状況であなたにかまっている暇はない。目的のクリスタルを破壊したらすぐにでもこの島から出ていきますよ。」
魔王は学園長に向け魔法を放つが、たとえボロボロでも世界最強クラスの魔法使いである学園長は障壁で防ぐが、その隙に魔王はクリスタルがあるところまで移動していた。
「や・・らせ・・・」
学園長が最後に見たのは魔王の魔法でクリスタルが破壊されるところだった。

side out

爆発が起きた後すぐに沙耶たちは学園長のもとへと向かったが、そこにはボロボロの学園長と、無残に破壊されたクリスタルの残骸だけだった。
沙耶はすぐに学園長に回復の魔法をかけ傷を癒す。
絶え絶えだった息が穏やかになり、傷がふさがっていく。
「サヤ、まだあいついると思う?」
「いや、目的を果たした後ここに残る必要はないだろう。」
いつでも戦えるように構えていた3人の力が抜ける。
「しかし、なにがあったんでしょうか?」
「それは学園長から聞くしか「うっ」大丈夫ですか?」
意識を取り戻した学園長にとりあえず無事か聞く。
「すみません。あなたが忠告をしてくれたのに守れませんでした。」
「過ぎた事をいっても仕方ありません。いったいここで何があったんですか?」

「ミシェル先生が突然叫びだし、様子を見ようとしたら魔法陣が浮かび上がり爆発しました。とっさに障壁を張ったんですが威力を殺しきれずボロボロになりました。そこにこの事件を起こしたという男が現れ、抑えようとしましたが傷が深く気絶してしまいました。」
悔いるように在ったことを話す学園長。
「そうですか・・・・」
詰めの甘さを悔やむ沙耶に
「サヤ、すべて自分のせいだと思うのは思い上がりですよ。」
エルーが厳しく指摘する。
「そうだよ。私たちが魔王を倒せればクリスタルを破壊させずに済んだんだから。」
「そうですよ。サヤさんだけの責任じゃないです。」
励ましの言葉を告げるティアとレイン。
「・・・・ありがとう。」
そう呟くと、思考を切り替える。
「学園長、クリスタルは破壊されましたがけが人はほとんど出ていません。最低限の目的は果たしましたが、いまだ混乱しているところがあります。なので早く行って治めましょう。」
沙耶が学園長に手を差し伸べる
「あなたたちには何とお礼を言ったらいいか・・・・」
学園長が沙耶の手をとりたちあがる。
「とりあえず学園を治めてください。」
「報酬として、欲しい材料があるんだけど。」
「不謹慎だよティア。」
三者三様の言葉を述べ、学園の混乱を治めに行く。

ｓｉｄｅ　魔王

すでに島から離れ、別のところに移動していた魔王は
「さて、仕掛けておいた物を発動させるか。」
魔王の足元に魔法陣が浮かび上がり、収束しはじける。
そして、クレンド王国とアトラス王国のクリスタルが破壊される。
「もう少しだ、もう少しで私の望みがかなう。残るはカルーンのクリスタル。」
次なる標的を定め魔王は動き出す。
「来るがいい私の敵たちよ、今度こそ雌雄を決そうではないか。」

side out

あれから、島中を回り残っていた魔物を倒し、島の混乱を治めていった。
誰も沙耶たちがやったとは思わずすべて学園長がやったと思っていたが、実際は傷が癒えたとはいえ満足に戦えない学園長の代わりに沙耶たちが魔物を殲滅していた。
そして、
「みなさん怪我はありませんか？　敵の首謀者は私が倒しました。もうこの島に脅威を及ぼす者はいません。このような事件が起きましたが学園祭を再開します、みなさん楽しんでください。」
沙耶たちの行動が早かったおかげで、一部を除き被害が少なくすぐにでも学園祭を再開することができ、最初は戸惑っていたもののすぐに元のにぎわいを見せていた。

そして、沙耶たちは学園長室を訪れていた。
「ありがとうございます。あなたたちのおかげで再び学園祭を行うことができました。」
「このことに恩を感じでいるならお願いがあるんですが。」

「なんでしょう？　私にできることならなんでもやりましょう。」
「私たちをカルーンの代表に紹介して欲しいんです。」
「・・・・・分かりました。しかし、いますぐにというわけにはいきません。２週間待ってください。」
「わかりました。それと私たちはカルーンに向かうと思います。その間休学させて欲しいんですが。」
「それは構いませんが、他の方もよろしいんですか？」
沙耶が当然のように言ったが、一応確認する
「当然です。」
「もちろん。」
「大丈夫です。」
その問いに３人とも即答する。
「わかりました。他の方はなにかありますか？」
「この戦いで消耗した分を補給したいので、材料をいただけませんか。」
魔王との戦いでティルヴィングをかなり使ってしまったエルーが要求する。
「構いませんが、材料でいいんですか？」
「他の人が作ると、時間がかかりすぎますから。」
指輪の魔力の合計の４万と沙耶とエルーが一度に込められる合計の７千を３秒に１度込めて約５分程度で出来るからこそ量産できるが、たとえ学園長クラスの魔法使いが１０人集まっても１日に１個作れる程の物であり、普通の人が作ろうとすると１ヶ月に１個作れるくらいなのでお金も時間もかかる。
「私も材料かな、いろいろ試したいこともあるし。」
「私もそれでいいです。」
ティアとレインも魔具の材料を要求する。
「わかりました。欲しいものがあったら連絡をください。出来る限り用意します。」
「では早速ですが、ここに書いてある物を。」

「こんなものでいいんですか？」
エルーが要求している物は、普通の店でも扱っていてそれほど高価でもないものだった。
「魔力を封じ込めるにはその材料が1番ですので。」
「これなら明日にでも用意して送ります。」
「私たちは、欲しいものができたら連絡します。」
レインが代表して言う。
「わかりました。皆さん本当にありがとうございました。」
再びお礼を述べ、沙耶たちは学園長室から退室する。
長かった戦いが終わり、次なる舞台へと進む。。

第５２話（後書き）

第四章学園編下終了です。
次回からは第五章カルーン編の前に幕間です。

資料設定3

人物

レイン・シーファ

性別　女

年齢　１５歳

身長　１５３ｃｍ

体重　？？？

イメージ　直視の魔〇の使い魔の猫

性格

これといって特別なものは持っておらず、普通の女の子。
沙耶たちの影響で身内に甘く敵には容赦がなくなってきている。

能力

ウンディーネの加護

ヴォルトの加護が水属性になったもの

備考

シーファ家はウンディーネの眷族の直系であり、レインの祖父が現在の当主。
しかし、レインの両親は精霊魔法を使うことができなかったのでレインにすべてを託している。
魔力量は3万程度でこの年なら優秀。
沙耶たちの仲間になってからティアのことが気になって仕方がない様子。

ジーク・フォード

年齢　１５歳

身長　１６８ｃｍ

体重　６４ｋｇ

性格

プライドが高く、自分より強い者を嫌っている。
兄であるセシルもその例には漏れない。

能力

ヴォルトの加護

備考

魔力量は3万程度で、1年生の中ではトップクラスだったが沙耶た

ちがいたのでトップにはなれず、その結果魔王の誘いに乗ってしまう。
異形化した時、生命力を魔力に帰ることで一時的に魔力量を2倍にするが副作用で今後大きい魔法は使えなくなっている。

学園長

性別　女

年齢　???

身長　１６５ｃｍ

体重　???

性格

基本的に温和で他の先生からの人望も厚いが年の話をされると見境なく暴れる。

能力

なし

備考

世界で最強クラスの魔法使いであり弱いドラゴンなら1人でも倒すことができるほどの実力。

魔力量は３０万以上あり、ミシェルの３倍以上ある。
ちなみに名前は考えていません。

魔王

性別　男

年齢　？？？

身長　１８３ｃｍ

体重　６９ｋｇ

イメージ　〇線上の魔王の魔王

性格

目的のためならどんな手段でも使い、かなり頭が切れる。
自分以外は使い捨てとしか思っておらず、ミシェルも使い捨てられ人間爆弾にされた。

能力

空間掌握

空間干渉系の魔法を使用する際、無詠唱で使うことができ魔力消費も抑えられる。

備考

本編におけるラスボス的存在であり、沙耶の能力にも大体の予想がついているので沙耶の前には姿を現さない。
魔力量は１０００万以上と人が許容できる魔力量を超えている。
魔王の正体と目的は本編が進む連れて明らかにするつもりです。
（ちなみに沙耶は〇線上の魔王のヒロインの宇佐美〇ルを意識しています）

武器

レヴァンティン

沙耶とエルーが1日をかけて魔力を込めた魔剣。
魔力量は５０００万を超え時間を殺されているので壊れることも魔力が減ることもない。
全力で魔力を放てば星すべてを焦土にできるほどの威力。
しかし、ティアの能力があってこそ使えるもので、沙耶やエルーを含め他の人が触ったら触れた部分が溶ける。

フヴェルゲルミル

ティアが形を作り、沙耶とエルーが魔力を込めて作られた扇。
魔力量はレヴァンティンの1割程で５００万程度。
これもウンディーネの眷族だからこそ扱える代物で、普通の人が使おうとしてもあまりの魔力量に暴走してしまう。
名前の由来は本編の通りで、北欧神話のニヴルヘイムの中央にあり

世界樹の根がある泉の名前。

ティルヴィング

本来は北欧神話に登場する魔剣で、黄金の柄狙ったものを外さず鉄も簡単切ることができるものだが、この物語では膨大な魔力を込めた魔弾として登場する。
能力としては魔法を無力化、少しだが追尾能力ももっている。
魔王は肩を貫かれただけだったが、本来ならドラゴンでさえも貫かれたところから魔力の余波で大穴があく。

第５３話

学園祭が無事に終了した数日後、沙耶たちは普通に学校に通いながらカルーンでの戦いに備え鍛錬を行ったり、魔具の開発を行っていた。

そんなある日、エルーがランドに呼び出された。

「お見合いですか・・・・」

「ああ、先日の学園祭の時のお前の活躍を見ていたクラスメイトが紹介してくれと言ってきてな、相手はアトラス王国の伯爵家の子息だ。見た目も悪くないし、生徒会の人間で成績も優秀だ。」

「すみませんがお断りします。」

1秒も考えることなく即答する。

「いいじゃないか、彼氏なんていないだろう。合うだけでもいいから合ってみろ。」

即答にめげずに説得を続けるランド。

「彼氏はいませんが、好きな人ならいますのでお断りします。」

「なに!?　それは誰だ!!」

「お兄様も知っている人ですよ。」

「まさかカインか？　確かにいい男だが倍率が高いぞあいつは。」

「違います。」

「それならセシルか？　あいつも相当もててるから難しいぞ。」

「違います。」

「それなら誰だ?」

ついに降参して答えを聞こうとする。

「サヤです。」

「・・・・・あいつ男だったのか?」

あまりにも予想外な答えに見当違いな勘違いをする。

「女の子ですよ。　愛に性別は関係ありませんん。」

困惑しているランドに堂々と言い放つ。

「落ち着けエルー。お前は男と触れ合う機会がなかったから勘違いしているだけだ。その勘違いを正すためにも1度会ってみろ。」
しかし、ランドは認めず再び説得を開始する。
「お父様とお母様は納得してくれましたよ。」
「・・・・・・・とにかく会え。明日学校に来い、そいつも来てるから。」
「だから・・・・はぁ。」
エルーの話を聞かず言うだけ言って去っていたランド。
「どうしましょうか・・・・・」
1人どうするか悩むエルーであった。

それから家に戻り沙耶たちに相談する。
「お兄様の頼みなので断りづらいんです。サヤが恋人だといっても信じでくれませんでしたし。」
「そりゃそうだよ。私だって実際見たからこそ信じられたぐらいなんだから。」
「ランドさんの目の前でキスすれば信じてもらえるんじゃない。」
「サヤが恥ずかしがってできませんよ。・・・サヤどうかしましたか?」
こういうとき真っ先に解決案を提示してくれる沙耶が黙っていたので見てみると、いろいろな感情がごちゃ混ぜになり困惑していた。
「どうしたのサヤ?」
「具合でも悪いんですか?」
流石に様子がおかしいと思ったティアとレインも声をかけるが、なにも聞こえていないのか困惑したまま動かない。
そしてようやく、沙耶がしゃべり始めた。
「エルー・・・・その人と付き合っちゃうの・・・・・」
泣きそうな声で呟くような小さい声で言う。
「そんなわけないですよ!!　私はサヤ一筋ですから。」

突然泣き出しそうに聞いてくる沙耶を驚き落ち着かせようとするが
「・・・ぐす・・で、でも・・・合ってみたら・・・ぐす・・・・
好きになっちゃうかもしれないし・・・・」
かなりのネガティブ思想になっていてどんどん悪い方向に向かって
いく。
「サ、サヤが・・・・・」
「まるで恋する乙女に・・・・・」
いつもの凛とした沙耶からは想像がつかない状態に信じられないも
のを見たように固まってしまう2人。
「落ち着いてくださいサヤ。私はずっとそばにいますから。」
「・・・・ひっく・・・ほんとに・・・」
「もちろんですよ。私はサヤと誓ったじゃないですか。」
「・・・うん。」
ようやく落ちいたと思ったが、今度はエルーに甘えるように抱きつ
く。
「エルー・・・・・」
「ふふっ、甘えん坊ですねサヤは。」
エルーも沙耶の背中に手を回し抱きしめ返す。
このだだ甘な展開にティア離れていたが、レインは刺激されティア
を熱っぽい視線で見つめ
「ティア・・・・」
「エルー!!　結局どうするの!!」
このままではまずいと思い、この状況を打開するため話を元に戻す。
「そうですね・・・・とりあえずあって断ってこようと思います。」
答えはしているが沙耶を抱きしめたまま放さないでいる。
沙耶は沙耶でエルーのぬくもりに酔いしれていた。
「ティア・・・・私・・・」
レインが目を覚まさないことに貞操の危機を感じ
「相手が納得しなかったら!!」
誤魔化すように大きな声でエルーに尋ねる。

「穏便に済ますことができなかったら力ずくで分かってもらおうと思いま・・・どうしましたサヤ？・・・・ふふっ、いいですよ・・・・」

普段人前では積極的な行動を見せない沙耶がエルーにキスを迫り、それをエルーは喜んで受け、目の前で熱いキスシーンが展開する。

「・・・ん・・・ぴちゃ・・えるぅー・・・・」

「・・・ぺろ・・・・ん・・・・さやぁ・・・・・・」

キスがエスカレートしていき目の前で舌をからめ合いお互いうっとりとした目でキスを続ける。

「ティア・・・私たちも・・・・・」

レインが熱にうなされ様な目でティアに迫ってくる。

「落ち着けお前らー！！」

「一応沙耶にもついてきてもらいましょう。」

あれからティアの声で正気を取り戻し、沙耶はそのことを思い出し顔を赤くして俯き、エルーは初めて沙耶から求めてきてくれた行為を邪魔され不機嫌になり、レインはせっかくのチャンスを逃し悔しがっていた。

「それなら大丈夫そうだね、明日頑張ってねー。」

貞操の危機を回避し、お気楽ムードで言うティア。

「はい。では明日お願いしますねサヤ。」

「わかった。」

こうして次の日を迎える。

第５４話

この日は学校は休みで校舎には部活動で登校している生徒しかおらずほとんど人がいなかった。
そんな中、屋上にて沙耶たちはランドが連れてきた男と対峙していた。
「エルー、こいつが紹介したいと言っていた男だ。」
ランドに紹介され1歩前に出てくる
「俺の名前はレオン・マルクス、戦闘科の3年で君のお兄さんのクラスメイトだ。」
外見はかなり整い、身長も高い、見た目だけなら普通の女の子なら一目惚れしていただろうがもちろんエルーはさっさと帰って準備をしたいと思っていた。
「ご存知かもしれませんが、エルー・ツェッティです。こっちは私の恋人のサヤ・カミナギです。」
話を終わらせるために恋人として紹介するが
「聞いているよ。エルーちゃんは男と付き合ったことがないんだろ、試しでいいから俺と付き合ってくれないか。」
しかし、ランドが何か吹き込んでいたせいであまり本気ととらえられず告白される。
「お断りします。私はサヤ一筋ですので。それに、私より弱い方とお付き合いするつもりはありません。」
エルーもきっぱりと断るが
「それは俺がエルーちゃんより弱いってことか？」
「そう言っているつもりでしたが、間違いがありますか？」
「確かにエルーちゃんは強いが俺はこれでも生徒会役員の1人だ。ランドと戦っても負けない。それでも俺より強いって言うのか？」
「先ほどからそう申し上げています。それとちゃん呼ばわりはやめてください、不愉快です。」

沙耶の高圧的な話し方を模倣して、相手を怒らせようとする。
「それなら俺が勝ったら付き合ってくれるのか？」
レオンが挑発に乗り勝負を挑んでくる。
「かまいませんよ。」
「それなら闘技場でやろう、審判は、ランド頼めるか。」
「これも妹の為だ。引き受けよう。」
こうして闘技場に向かおうとするが
「ちょっと持ってください。」
突然サヤが呼び止める。
「サヤ？」
「どうかしたか？」
2人が振り向き、それぞれの反応を示す
「エルーは私の物だ。だれにも渡さない、それでも奪うというなら私を倒してからにしろ。」
先ほどからのエルーに対するなれなれしい態度に激怒し戦いの相手を変えようとする。
「俺はそれでもいいけど、エルーちゃんはそれでいい？」
「私より沙耶の方が強いので問題ありません。」
こうして、沙耶とレオンがエルーを賭けて闘技場に向かった。

「勝負の方法は降参を認めるまで、または俺が戦闘不能と判断した場合とする。」
「わかった。」
「わかりました。」
沙耶はナイフを持ち構え、レオンは槍を構える。
「開始。」
合図と同時にお互いが踏み出し、先手はレオンが取る。
「確かカインに勝ったやつだろ。どんな卑怯な手を使ったかは知らないが1年生じゃ俺には勝てないぜ。」

レオンは歓迎会の時の戦闘の時学園内を巡回しており実際に見ていないのでカインが負けたことを調子が悪かったか何かと納得していた。
「・・・・・・・・・・」
「どうした？　そんなもんか？」
レオンの槍は十分に速く正確に沙耶を突いてくるが
「こんなものか・・・・・」
「なに？」
次の瞬間槍が折られ、レオンは地面にたたき伏せられていた。
「がはっ！！」
「2倍速にもついてこられない程度で生徒会役員とは人選を間違えているな。」
なにが起こったかわからず、動かない体で沙耶を見上げる。
「な、なに・・・をした・・・」
「槍を負った後、水月に一撃入れただけだ。あの程度のスピード、エルーなら簡単についてこられる。」
沙耶は天才的な戦闘センスを持っており、この世界に来てからそれまでなかった経験を積み、さらに沙耶に追い付いてくるエルーたちとの鍛錬でその才能を開花させていた。
「そこまで。」
戦闘開始から1分もたたずに決着がつき
「ではこのお話はなかったことでよろしいですね。」
しっかりととどめを刺し沙耶のもとへ向かう。
「おつかれさまです。」
「ありがと。」
手をつなぎ帰ろうとする沙耶たちに
「殺してやる・・・・この俺に恥をかかせやがって俺の親父は伯爵家だぞ！！　どんな手を使ってでも殺してやる！！」
隠していた本性が現れ、感情をむき出しにする
「落ち着けレオン！！」

「うるせぇ!!　邪魔するならお前も殺すぞ!!」
ランドでも手がつけられないほど暴走しているレオンに
「エルーの周りの人に危害を加えるつもりならあなたの家を没落させます。」
サヤの冷え切った言葉が場に響き渡る
「そんなことできるわけねぇだろうが!!」
「私はアトラス王に個人的な面識がありますし、借りもあります。そしてその子息であるカインにもです。それだけでは流石に没落はできないでしょうからクレンド王、ルクセント学園の学園長にも協力してもらいましょう。それでも駄目なら私の作った魔具をちらつかせれば確実でしょう。」
沙耶の脅しに凍りつくレオン
「では早速手紙を出しましょうか。早ければ今週中にでもあなたの家は没落するでしょう。」
「まってくれ、俺が悪かった。だからそれだけは許してくれ!!」
「条件があります。今後一切私たちの前に現れないでください。」
そう言い残すとその場を去ろうとする。
「あっ!!　お兄様これでサヤのこと認めてくださいますよね。生徒会役員を瞬殺、いろいろな方面にも顔が利く、それに総合科での成績もトップクラス、なにより私が愛していますから。」
「はぁ。わかった。お前たちの仲を認める、サヤくんエルーを頼む。」
「私の命に掛けてもエルーを守ります。」
今度こそ沙耶たちはその場を去り、仲間が待つ家に帰った。

家に戻り、残っていた2人にあったことを説明する。
「予想通りの結果で安心したけど、エルーの家族に認めさせて結婚でもするの?」
「けっ、結婚／／／／／／」

「もちろんしますよ。クレンド王国では同性婚は認められていませんけど、お父様が認めさせてくれると言っていましたし、サヤがいれば国王にも顔が利きますから。」
「流石エルー、とんでもないことをさらりと言う。」
「結婚かぁ・・・・」
レインが呟き、ティアが寒気を感じる。
「ティア、あの「用事を思い出したからちょっと行ってくる!!」」
待って!!」
ティアが飛び出しそれを追っていくレイン。
「いっちゃいましたか・・・・ところで・・・サヤ?」
「エルーは好きだけど結婚はまだ早い気がするし、でもこの場合どっちがお嫁さんなんだろう? やっぱりお嫁さんがいいなぁ、エルーに抱えられてそれから・・・・」
結婚という言葉に沙耶が暴走しぶつぶつと呟いてた。
それを聞いたいたエルーはたまらずに後ろから抱き締める。
「エ、エルー////」
「私はサヤがお嫁さんになってくれる方が嬉しいですよ。私の前だけ可愛いところを見せてくれるお嫁さんになってください。」
「・・・・うん////」
顔を赤くしながら首をかすかに縦に振る。
そんな沙耶の態度にかすかに残っていた理性が消え沙耶を押し倒す
「駄目だよエルー、ティアたちが帰ってきたら/////」
「いいじゃないですか、私たちがラブラブなところを見せてあげましょう。」
「せめて部屋にもど・・ん・・・・」
キスで言葉を遮られ、さらに舌を口内に入れられすぐに抵抗の意思を奪われてしまう。
「・・・・んっ・・・・はぁ・・・・ぴちゃ・・・ふぁ・・・えるぅ・・・・」
「・・・ぺろ・・・・・はぁ・・・・・んぅ・・・・さやぁ・・・・・

」
すっかりキスに夢中になり舌をからめ合い、とろんとした表情で見つめ合う。
「・・・・んはぁ、サヤいいよね。」
「んっ・・・・でも今日はキスしながらがいい／／／／／」
「今日のサヤは積極的だね。」
「だって・・・エルーがお嫁さんにしてくれるって言ってくれてとき・・・・・その・・・すっごく嬉しかったから／／／／／／」
最後になるにつれて消えそうな声でぼそぼそと言う沙耶に
「絶対に幸せにしてあげます。だから、ずっと側にいてくださいね。」
「うん。」
そして、再びキスを始め行為が終わった時はすでに日が暮れていた。

おまけ

外に飛び出したティアとレインは、扉の隙間から沙耶とエルーを見ていた。
「上手くいったみたいだね。」
「とっさに思いついた作戦だったけど上手く行ってよかった。」
あの時2人きりにさせてあげようと一瞬でアイコンタクトを済ませ、自然に家から出ることに成功していた2人。
そして、中の2人がこれから行為に及ぼうとしていた
「流石にここからは覗いちゃまずいね。」
「これからどうするのティア？」
「う～ん。あの2人って1度始めたらなかなか終わらないからなぁ、

適当にぶらつこうか。」
「じゃあ繁華街にいこう、いろいろ見たい物もあるし。」
「いいよ。」
なんだかんだでティアとレインも2人きりの時間を楽しんでいるのであった。

第５５話

ランドが持ってきた事件から次の日、次は兄ではなく姉がエルーのもとを訪れた。
「久しぶりエルー。」
「お久しぶりですお姉さま。」
エルーの姉であるメリルもエルーに劣らない美貌を持っておりツェッティ家は美形ばかりの家系であった。
「そっちがランドが言ってたエルーのお嫁さん？」
「はいそうです。私のお嫁さんのサヤ・カミナギです。」
「エ、エルー、恥ずかしいよ／／／／／」
今日は普通どおりに授業があっており廊下にも人通りが多い中堂々とした発言をするエルー。
「サヤもいい加減に慣れてください。これからもっと多くの人に挨拶するんですよ。」
「で、でも／／／／／」
いつの間にか結婚することが決定している２人に
「仲がいいわね。うん。これなら大丈夫、私もあなたのことを認めるわエルーをよろしくね。」
「は、はい。こちらこそよろしくお願いします。」
ツェッティ家全員に許可をもらい完全に嫁確定のサヤ。
「ほんとはもうちょっと早く会いに来たっかたんだけど、いろいろ忙しくって。」
「相変わらず研究熱心ですね。」
「メリルさんは何の研究をしてるんですか？」
「魔法と魔具の研究よ。」
「お姉さまは、日常生活を豊かにするためにいろいろな魔具の開発に携わってるんですよ。」
「そうなんですか、ではこれを見てくれませんか。」

そう言って差し出したのは、学園祭の時に使っていた連絡用の宝石だった。
「これは？」
「遠くにいる相手と話ができる魔具です。」
「よくこんな物作れたわね・・・どうやって作ったのか教えてくれない。」
「いいですよ。最初は・・・・・・・・」
魔具についての説明をすると
「なるほど・・・・それならこれをこうした方がいいわね。」
「確かにそれなら魔力の効率が上がってより遠くまで通話ができますね。でもそうすると・・・・・」
「それを解決できれば製品化できるわね・・・・サヤさん今日研究所に来ない？　あなたならいろいろな意見が出そうだし。」
「サヤでいいですよ。別にかまいませんが私みたいなものが邪魔していいんですか？」
「邪魔なんてとんでもない、これのを作った人を邪魔もの扱いなんて誰もいないわ。」
「わかりました。それならもう1人連れてきてもいいですか、そっちもこれの開発に携わってるので。」
「もちろん。それじゃ放課後にね。」
約束を取り付け去って行ったあと
「楽しそうでしたね・・・・」
少しむっとした表情で話しかける
「メリルさんみたいな専門の人の話を聞けたからね。」
「そうですか・・・・」
「エルーも一緒に行くよね？」
「私も気になることがありますからついていきます。」
「どうしたのエルー？　ちょっと怒ってるみたいだけど。」
「なんでもありません。」
そう言って教室に戻るエルーは今夜は一晩中どうやって愛でようか

考えていた。

それから放課後、ティアとおまけでレインまで付いてくることなり、結局沙耶たち全員がお邪魔することになった。

「失礼します。」

「よくきたわね。」

研究所を訪れるとメリルが出迎えてくれたが、後ろでは他の研究員が忙しそうにいしていた。

「こっちがあれの共同開発者のティア・ノートでこっちがその連れのレイン・シーファです。」

「歓迎するわ。さっそくで悪いんだけど今日話した問題について意見を聞きたいから会議室に来て。」

それから会議室で他の研究員と熱心に話し合う沙耶とティア。

知識としてはエルーもだいたいは分かるのだが実際に開発に携わっていないので、飛び交う意見を聞いているだけだった。

そして会議が終わり

「2人ともありがとう。あなたたちのおかげで通信がとても便利なるわ、もしよかったらここで働かない？　あなたたちなら素晴らしい研究者になれるわ。」

沙耶とティアを勧誘しようとしたが

「駄目です！！」

エルーが大声で否定する。

そこにいた人は突然の叫びに驚きエルーに注目する。

「お姉さまサヤは私の物です。だから勝手に勧誘しないでください！！」

エルーが叫びながらサヤの前に行き抱きしめる。

「エ、エルー／／／／／／」

「サヤもサヤです。昨日はあんなに側にいてって言ってたのに次の

日になったら自分から行こうとしないでください！！」
「エルー・・・・メリルさんすみませんがそのお話はお断りします。私はエルーの側にいられればそれでいいんです。」
「そ、そう。」
いきなりの展開に動揺を隠せないメリルに対しティアとレインは慣れたもので、またかといった表情で見ていた。
「ごめんねエルー。でも私はずっとエルーのそばにいるって誓ったから、これからもずっとそばにいるよ。」
「絶対ですよ。私はずっとサヤの側にいたくてあの誓いを立てたんですから。」
「うん・・・・・エルー今夜／／／／・・・・・」
「わかっていますよ。サヤが誘ってくれなくても今夜は一晩中可愛がるつもりでしたから。」
「／／／／／／／／」
「サヤ・・・・・」
「エルー・・・・・」
抱き合い2人だけの世界に入ってく
「あの2人っていつもああなの？」
妹の変貌ぶりに驚きながらも尋ねる
「今日はまだましな方ですよ、昨日は私たちの前で舌を絡めてましたから。」
「変ったわね・・・・」
遠くを見るような眼で呟いた。
「ところでサヤは諦めるとしてあなたはどうする？」
「そうですね・・・・」
どうしようか考えている途中に
「ティア、もしもここで働くつもりなら今夜・・・・・」
感情のこもっていない目でティアに告げる。
「わかった、いかないから、落ち着いてレイン。」
その目に後ずさり、結局話を断る

「そう、気が変わったらいつでも言ってね。」
こうしてエルーの姉との会合が終わった。

第５６話

学園祭から一週間後の休日の日ティアとレインは報酬としてもらった物で魔具の作成を行っていた。
「レイン、あれとって。」
「これ？」
「それそれ。・・・よし完成。」
完成した物はエルーが使っていたティルヴィングだった。
「これって前のとどう違うの？」
「前のは魔力を封じ込めてたから当たっても漏れだした魔力の余波と直撃でダメージを与えてたけど、今度のは封じ込めた魔力を弾の周囲に螺旋状に放出しながら発射されるから、かわそうと思っても放出された魔力でダメージを与えられるようにしたんだ。それに追尾機能も性能を上げておいたからエルーの腕なら確実にダメージを与えられるはずでしょ。」
「よくそこまで改良できたね。」
「メリルさんからいろいろと教わってきたからそれをヒントにしただけだよ。」
「すごいなぁ。私もやっと知識は付いてきたんだけど難しい専門的な知識はまだまだだからなぁ。」
「あと１年も勉強したらこれくらいできるようになるよ。」
「そっか。じゃあ今日も勉強教えてね。」
「もちろん。」
それから黙々と作業をこなしていた２人だが、突然レインが
「あのさティア、突然だけど私のことどう思ってる？」
「・・・・大事な仲間かな。」
「・・・・そっか。変なこと聞いてごめんね。ちょっと疲れたから部屋に戻ってるね。」
レインの顔は笑ってはいたが目に涙を浮かべ部屋から出て行った。

それから何かを振り払うように黙々と作業を続け、材料が尽きるまで作り続け気付いたころには日が暮れていた。
「ティア、ティルヴィングの改良に成功したか？」
「もちろん。前のやつより格段に性能が上がってるよ。」
「そうか。ところでレインは？」
「・・・・疲れたから部屋に戻ってる。」
一瞬の沈黙からなにがあったかだいたいの予想がついた沙耶は
「それでよかったのか？」
「なんのこと？」
「とぼけるな。レインのことだ。」
「やっぱりサヤには隠せないね。でも、サヤならわかるでしょう。私たちみたいな人は簡単に人を信用できない。」
「・・・・・・・・・・・・」
「サヤを信用できたのは私と同じ傷を持ってるって思ったからだよ。私は裏切らない友達が欲しかった、エルーを信用できたのはサヤが信用してたから。レインも信用はしてるけど、これ以上は無理。たぶんこれ以上はサヤでも無理だと思う。」
「そうか、それならいい。」
「やっぱり、なにも言ってくれないんだね。」
「私からなにか言っても慰めにしかならないだろう。」
「厳しいなぁ。いっそ罵ってくれれば楽だったのに。」
「それなら一言だけ言ってやる。私は今でもエルーのことをすべて信用できているわけじゃない。だから時々エルーがどこかに行ってしまうんじゃないかって怖くなる。それでも側にいてほしいから、こ、恋人同士なんだ。」
「恥ずかしいなら言わなきゃいいのに。」
「うるさい。」
「でもそれならエルーから離れた方が楽になれるんじゃないの？」
「・・・・何度もそう思った。でも、それよりエルーがいなくなる方が怖い。私が生きていて初めて好きになった人だから、初めて

すべてを信じれそうな人だから、初めて私を愛してくれた人だから。」

「そっか。サヤと私は似てるけど違ったんだね。サヤは最初から誰も信じていなかった、でも私は子供頃は優しい両親と仲のいい友達だっていた。でもこの力が徐々に表に出てきてからすべては変わっていった。両親からも友達からも怖がられて何度も裏切られた。私はサヤと違って人の優しさを知ってる、だからこそ裏切られことが怖い。あの痛みを二度と味わいたくない。」

「私はその痛みは分からない。私は最初から周りは敵ばかりだった、だから人を信じることが怖い。私にとってそこからは未知の領域だ、なにも見えないし、なにもわからない真っ暗闇、そこを歩いていくことが怖い。それでもその怖さよりエルーを失うことが怖い。」

「サヤなら答えをくれると思ってたけど、違ったんだね。私はどうすればいいのかなぁ・・・・」

「結局、自分で答えを見つけるしかないんだよ。」

「ほんとに厳しいよサヤは、それ以上に優しい。エルーがいなかったら惚れてたかも。」

「私は臆病なだけだよ。だから真っ暗闇を歩いて行ける勇気がなかったんだ。」

「そっか。なら私は傷つくのが怖くて立ち止まってるのかなぁ。」

「私にはティアの痛みは理解することはできない、それでも私はティアの友達だ。相談くらいには乗ってやる。」

「やっぱり優しいよサヤは、私には嫌われてでもその人の為に、なんてできないよ。」

「それはティアが裏切られる痛みを知ってるからだ。私はそれを知らないからな、だからできてるだけだよ。」

「なら、私はこの痛みを乗り越えなきゃいけないよね。いつまでも立ち止まってたらサヤたちの横で歩いて行けない。」

「私からはもう何も言えない。これ以上はティアが出すべき答えだ。」

「分かってる。ありがとねサヤ。」
「これくらいの相談ならいつでも乗ってやる。私とティアは似ている、だからこそ頑張れとは言わない、ティアが思った通りに行動すればいい。少なくとも私はそれを咎めはしない。」
そう言って沙耶は部屋を出て行った。
「ほんとにサヤは優しいなぁ、サヤの友達になれてほんとによかった。・・・だからこそいい加減にこの痛みを乗り越えないとサヤに顔向けできないや。」
そう言って部屋を出てレインがいる部屋へと向かった。

第57話

「レイン、いる？」
あれからレインの部屋を訪れ、ノックし反応を見る
「なに？　今日は具合が悪いからご飯はいらないってサヤさんに伝えておいて。」
あからさまに入室を拒絶してくる。
「レイン、入るよ。」
しかし、扉開け入室する。
そこには布団にくるまったレインがティアに背を向けて丸まっていた。
「今日は1人にして、今日は調子が悪いから。」
レインの言葉を無視しレインに近づき、背中合わせで座る。
「お願いティア、今日は1人にして、すぐにいつもの私に戻るから。」
「聞いてほしい話があるんだ。」
「今日変なことを聞いたことは謝るから、もうティアのこと諦めていつもの私に戻るから、お願いだから今日だけは気持ちの整理をさせて。」
涙声が混じり、背中越しにでも震えていることがティアに伝わる。
「最初はねレインが私たちの中に入ってくるの反対だったんだ。でも、サヤとエルーが認めたから、だから私も認めることにしたんだ。」
「・・・・・・・・・・」
沈黙するレインをよそに話をつづけるティア
「それはね、私がレインを認めなかったらサヤとエルーが私から離れていくのが怖かったから、だからレインに優しく接した。私はもう友達を失いたくないから。」
静寂が支配する部屋にティアの声だけが響き渡る。

「でもね、いつからかレインも大切な友達になってた。レインが私に好意を持ってるって知った時は結構嬉しかったんだよ。でも、レインが望む関係になってしまうのが怖い。私は弱いから、今度裏切られたら今度こそ壊れちゃうと思う。だから、こんな関係をいつまでも続けていられればいいと思ってたんだ。」

「知ってたよ。ティアが信じてしまうことが怖いんだって。」

そして今度はレインが話し始める。

「私はね、両親も近くにいた人もみんな親切にしてくれた。でもそれは私が一族の直系で後継ぎになるからだと思ったんだ。だからみんな優しくしてくれる、そう思ったら急に怖くなった。もし私があとを継げなかったらみんな態度が変わってしまうんじゃないかって。だから私は両親やみんなの期待にこたえるように優等生を演じてきた。そうして本当に他人と向き合うことから逃げてきた。」

お互いのすべてをさらけ出すように自分のことを話続ける。

「でもティアたちと出会って、私は変われた、自分自身の意思を持てた。だからその恩返しの為にティアをその恐怖から助けたかった。最初はただそれだけだった、ティアを助けてくれるなら誰の手でも借りて助け出すつもりだったんだよ。でもいつからか私が助けたいって思い始めた、ティアは私だけの力で助け出したいって思って、気付いたらティアのことが好きになってた。」

「それは始めて誰かの為になにかをしたいって気持ちを勘違いしてるだけじゃないの？」

「最初はそう思った。でも、ティアの近くにいると心臓が痛いくらいに高鳴ってどんどんティアが欲しいって気持ちが膨らんできた。だから私はティアが好きなんだよ。」

「レインは変わったね、出会ったころに比べてほんとに強くなった。自分の弱さと向き合ってそれに勝った。サヤも暗闇の中を歩き始めて、エルーだって貴族のお嬢様だったのにサヤの為にあそこまで強くなった。でも私はまだ立ち止まったまま。」

「私にはティアがどんな苦しみを持っているかは分からないよ。そ

れでも私はティアを愛してる。」
「ねぇレイン、そっち向いてもいい？」
「いいよ。」
ティアがレインを後ろから抱き締める。
「あと一歩踏み出すことが怖い、たった一言で私はこの痛みを乗り越えられるのに、心が拒絶する、体が震えだす。」
レインを抱きしめていたティアの体が震え、その震えがレインにも伝わりティアの手に自分の手を重ねる。
「もしね、もしティアが私の気持ちを受けっとってくれたら私は絶対にティアを逃がさないよ。逃げようとしたって鎖で雁字搦めにして閉じ込める。だからもし私を選ぶつもりなら覚悟してね。」
「レインってエルーに似てきたね。」
「ずっと応援してくれたんだもん。いろいろと教わってきたから。おかげですっごく嫉妬深くなっちゃった。」
それからしばらくの間、ティアはレインを震える体で抱きしめ続けた。
またレインもその間ティアの手に重ね、ティアの決断を待っていた。
「・・・レイン・・・私は・・・・」
ティアの体の震えが強くなり、言葉を出すことでさえも苦しくなる。
それでもレインは止めずにティアの答えを待つ。
「私は!!・・・・・」
最後の一言がですに同じところを何度も繰り返す。
「ティア、私はね逃げたティアを鎖で雁字搦めに縛って閉じ込めた部屋で一生ティアと一緒にいるよ。」
遠まわしに、絶対に離れないとティアに伝える。
「私は・・・私は・・・・レインを・・・」
レインの小さな体を壊れるくらいに強く抱きしめる。
それでもレインはそれ以上なにも言うことはなく答えを待ち続ける。
「レインを・・・・・愛してる。」
その言葉を告げた瞬間ティアの体から力が抜けレインに寄りかかる。

「ティア・・・・・さっきの言葉本当？」
「私が冗談で言える言葉じゃないよ。」
「じゃあもう一回言って。」
「レイン、愛してる。」
再びレインに愛の言葉を送る。
「ティア！！」
レインは振り返り愛しい人を抱きしめる。
「ちゃんと聞いたからね、今更撤回しても遅いよ、絶対に離してあげないから。」
「うん。私が逃げようとしたらずっと捕まえててね。」
ティアとレインの顔が自然と近づき口づけを交わした。

第５８話

ティアの告白から翌朝、一緒に部屋から出てきた2人を沙耶とティアはいつもどおりに待ち構えていた。
「おはよう（ございます）。」
「「おはよう。」」
朝の挨拶を交わし、大事な親友に報告をする。
「サヤ、エルー、私たち恋人同士なったから。」
それを聞いた2人は
「おめでとうございます。」
「そうか。」
2人なりの祝福をした後、自然とレインはエルーのところにこれからのことを聞きに、ティアは沙耶に詳しい報告をするために別れた。
「よかったのか？」
「うん。いつまでも立ち止まっていられないし、なによりレインのこと好きになっちゃたから。」
「それならいい。おめでとうティア。」
「ありがとう。まだ歩き始めたばかりで立ち止まっちゃうかもしれないけど、その時はまた相談に乗ってね。」
「もちろんだ。」
「2人とも今日は学校があるから早く食べよう。」
レインからの呼びかけに応じ、毎朝のように4人一緒に朝食をとりいつもどおりに登校した。
それからレインと別れ、総合科の教室に向かいいつもどおりに授業を受け、何事もなく終わるかのように思われたが、いきなり学園長からの呼び出しがあった。
それを受け4人で学園長室を訪れた。
「なにか用ですか？」
「たびたびすみません。今回は現在の状況と頼みがあって来てもら

ったんです。」
「聞きましょう。」
「では現在の状況から、まずカルーンの代表への紹介ですが、これは予定通り来週にはカルーンに渡れます。ですが、カルーンの方々は最後のクリスタルということで私が紹介したといっても信用してくれるかどうか分かりません。」
「カルーンでの行動に支障がなければ問題ありません。」
「次に現在の国同士の状況ですが、アトラス、クレンド両国はカルーンへ兵の派遣をしようとしましたがカルーンがそれを拒否しました。今は差別も少なくなりましたが、完全にというわけにはいきません。それで身内同士の争いになってはどうしようもないといというのが理由です。」
学園長からの報告を受け、やはりこうなったかと渋い顔をする沙耶。
「これは報告と頼みになるんですが、現在3つのクリスタルが破壊されたことにより結界の力が弱まり瘴気が漏れ出し、魔物たちが活発になっているそうです。それだけなら国の警備団が制圧すればいいわけなのですが、やっかいなことにその中にドラゴンも含まれているそうです。さすがに古龍種は問題ないようですが、知性がないドラゴンが各地で暴れ被害が出ているそうなんです。そこで、あなたたちにそのドラゴンを制圧してほしいんです。私も要請がありましたが今この学園から離れるわけにはいきませんのでその代わりにお願いできませんか。」
「状況によります。」
「場所は現在要請が来ているところは2か所です。1つはクレンド王国、1つはカルーンです。ドラゴンの種類は、ブラックドラゴンとアクアドラゴンです。この2体は現在暴れているドラゴンの中で最も強いドラゴンです。」
「それでカルーンに貸しを作ることはできますか?」
「問題なくこの要請に応えれば大きな貸しになり、カルーンで動きやすくなると思います。」

「分かりました。その依頼お受けします。」
「ありがとうございます。カルーンへの出発は明日になってますのでよろしくお願いします。」
「クレンド王国への出発は？」
「両方受けるつもりですか！！」
「こっちには４人いますから二手に分かれれば問題ありません。」
「わかりました。クレンド王国は今夜出発です。あなたたちには貸しを作ってばっかりで申し訳ありません。」
「それなら１つ作成してほしい物があります。」
「なんでしょう？」
「私の新しい武器なんですが・・・・・・」
「しかし、私だけの魔力では足りませんよ。」
「魔力は私が供給します。なので制御だけしてくれれば結構です。」
「わかりました。これはいつやるつもりですか？」
「できれば今夜にでも、クレンド王国にはティアとレイン行ってくれるか？」
「ＯＫ～。」
「分かりました。」
「ではまた今夜。」
そう言って部屋を後にした。

そして夜になりティアとレインの見送りをしていた。
「それじゃ、いってくるね。」
「いってきます。」
「２人とも気をつけてくださいね。」
「大丈夫だって、そっちこそカルーンに行くんだったら気おつけてね。」
「もちろんだ。」
別れのあいさつを交わし、ティアとレインを見送る。

見送った後、学園長のもとを再び訪れる。
「準備はいいですか？」
「必要な材料は揃えておきました。あとは魔力を流すだけです。」
「ではこれを。」
沙耶は一発のティルヴィングを差し出した。
「相変わらずとんでもない物をさらにと出してくれますね。なんですかこの魔力量はこれ一発でドラゴンでも仕留められますよ。」
「それはエルーとティアが作った物ですよ。」
「・・・・・考えるだけ無駄ですね。これなら行けるでしょう。」
そういってティルヴィングの魔力開放していき、その膨大な魔力を制御していく。
５００万もの魔力量を制御している学園長は、流石は世界最強クラスの魔法使いだった。
そして、１つの工程が終わり次の工程に移っていく。

そして魔具が完成したのは次の日の朝だった。
「我ながらとんでもない物を作ってしまいましたね。」
出来た物を見て、驚愕する。
そこにあった物は１組の双剣、先日倒したウインドドラゴンの牙を膨大な魔力で変形させ鍛え上げ、さらにウインドドラゴンの血を凝固させて作った宝石を埋め込んで完成した翡翠色に輝く双剣。
魔力を込めれば風による刃を生み出し、持っているだけで風を操ることができる魔剣。
「ところでサヤ、これの名はどうするんですか？」
「この双剣の名はフレズベルク。」
北欧神話において世界樹の梢に住んでいるとされ、根元にいるニーズヘッグと対をなす存在フレズベルク。世界のあらゆる風を起こしたといわれる鷲の名。
別名「死体を飲み込む者」。
死を与える沙耶の相棒となるべき魔剣

またニーズヘッグの別名は「嘲笑する虐殺者」。
人を使い捨て、目的の為にどんな手段でも笑いながら行う魔王を追い詰めるために作り出された魔剣。
ティアのレヴァンティンやレインのフヴェルゲルミルとは違い、フレズベルクに込められた魔力は風を操ることのみに作用し、風の刃は魔力を込めることで発生するので膨大な魔力が込められていても制御することができる。
「こんなもの作ろうとしたら本来なら数１０年はかかる代物ですよ。本当に常識知らずな人ですねあなたは。」
「褒め言葉として受け取っておきます。では私たちはカルーンへ向かいます。」
「よろしくおねがします。無事に帰ってくることを祈っています。」
そして沙耶とエルーは部屋を出て港へと向かっていった。

第５８話（後書き）

本編が終了したら、なにかの作品とクロスさせて続編を書こうと思っていますが、なにかいい案がある方は教えてください。
感想とともにお待ちしております

第５９話

ｓｉｄｅ　ティア

島を出港しブラックドラゴンが暴れているクレンド王国へ向う船の上で

「レイン、ブラックドラゴンって強いの？」

「古龍種を抜いたら、１番凶暴で危険な奴だって聞いたことがある。」

「どうやって戦う？　レヴァンティンって他に人がいるところじゃ使い勝手が悪いんだけど。」

「私が動きを封じるからその隙に一撃で仕留めるってのが１番じゃない。」

「相手はドラゴンでしょ。そんなのを止められる？」

「前だったら無理だったけど今はフヴェルゲルミルとウンディーネがいるからなんとかなると思う。」

「そういえばあの魔法ってさ、・・・・・したりできる？」

「やろうと思えばできると思う。でもよくそんなこと思いついたね、そんな使い方思いつかなかったよ。」

「一応、それは私の得意分野だから。」

「向こうに着くまで練習しておこうかな。」

「それがいいんじゃない。最悪の場合はレヴァンティンで焼きつくせばいいけど、出来るだけ被害は抑えたいし。」

「じゃあ今から部屋で練習してくる。」

「私は邪魔にならないように、船の中を適当に回ってるからなにかあったら連絡して。」

「ティア、練習の前にキスしてほしい。」

エルーに影響されどんどん大胆になっていくレイン。

初めて会った時のような内気なレインの面影がどんどん薄くなって

いる。
「こ、ここで／／／／／」
「ダメ？」
ティアを上目使いで見つめるレイン。
「駄目じゃないけど・・・・」
「じゃあ、んっ・・・・」
レインが目を閉じ、ティアからのキスを待つ
ティアは周り誰もいないことを確認して、レインにキスする。
数秒唇を重ね、離れる。
これがエルーなら舌を入れて数分間続けるが、まだそこまでは染まっていないので唇を重ねるキスだった。
それでもレインは目をとろんとさせ、顔を緩ませる。
「じゃあ行ってくるね。」
緩んだ顔のまま部屋に戻るレインを見送るティアは顔を真っ赤にしていた。
「うぅ、最近のレインは無防備すぎるよ。このままじゃほんとに押し倒しちゃうかも／／／／／」
何度か沙耶とエルーの情事を見たことがあるティアはある程度の知識がある為、レインを愛でたいという欲求が最近のレインの大胆さのせいで強くなっており、今のように無防備にされていると理性が切れてしまいそうになっていた。
「はぁ～。船の中をぶらぶらしよ。」
頭を冷やすために船を見て回るティア、学園がある島からクレンド王国がある大陸まではだいたい3時間程度かかることもあって船の中には簡単な店や飲食店なども存在しており、時間を潰すためにそれらを見て回っていた。
見回り始めてから2時間程度経過し、なにか食べようと飲食店に向かう途中に
「そこの君、暇なら俺たちと遊ばない？」
いかにも軽そうな男たち数人がティアに声をかけてきた。

ティアはかなりの美少女であり、こういったことはこれまでに何度もあっているので対応には慣れており
「いや。」
きっぱりと拒絶しその場を去ろうとする。
しかし、
「いいじゃん、1人じゃつまんないだろ。」
ティアの肩を掴み立ち止まらせる。
気安く触れてきた男の手を掴み背負い投げの要領で床にたたきつけ、何事もなかったかのようにその場を後にしようとするが、
「下手に出てりゃ調子に乗りやがって・・・」
経験上このようなパターンは何度もあり、全員叩き伏せないと分からないタイプだと思い面倒だが叩き伏せようと思い振り返るが、そこには氷漬けになった哀れな男たちと怒気をみなぎらせているレインがいた。
「気安く私のティアに触れるなんて、本来なら殺しても許さないところだけど船の中だから氷漬けで許してあげる。」
全身を氷漬けにされ、なにも聞こえてはいないだろうと思われる男たちに捨て台詞を残し
「ティア!!」
ティアのもとに駆け寄る。
「もう練習の方はいいの?」
「実際に効くかは試してみないと分からないけどたぶん大丈夫だと思う。それより、ティアは無防備だよ。ティアはすっごく美人なんだから気おつけないと。」
「別に襲いかかられても返り討ちにするから問題なんだけど・・・」
「それでも!! ティアに触れていいのは私とサヤさんとエルーだけなの!!」
「落ち着いてレイン。」
「私言ったよね、すっごく嫉妬深いって、それと同じくらい独占欲も強いから知らない人がティアに触れたら駄目!!」

滅茶苦茶に思っていることを言っているが、それでもティアは
（やっぱりレインなら私を捕まえておいてくれる。）
ということを思っているあたりティアもかなり重症だった。
「レインちょっとこっちに来て。」
いまだ怒りが収まらないレインを人気のないところに連れて行き
「まだ話はおわ、んっ！！・・・・」
いきなり唇を奪い、１０秒くらいしてから離れる。
レインは熱にうなされたように目がとろんとなり、焦点があっていない目でティアを見つめ
「ティア、どうして？」
「いきなりレインにキスしたくなったから、駄目だった？」
首を左右に振り、否定する。
「よかった、それじゃなにか食べに行こうか。」
当初の目的通りなにか食べに行こうとするが、レインがティアの腕を掴みティアを止める
「もう１回・・・・」
瞳を潤ませ、赤くなった顔でもう１度キスを迫る。
「いいよ。」
再びキスを交わすが、ここにきてティアの理性が切れ舌をねじ込んだ。
「んっ！！」
突然のことに驚くレインだが、ティアは遠慮なくレインの口内を蹂躙していく
「・・・・れろ・・・・・ちゅ・・・んっ・・・・・・ぴちゃ・・・・・」
「・・・ふっ・・・・・・・んぅ・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・」
１分以上キスを続け、唇を離す。
「苦しかった？」
「ふぁ・・・・」
いまだキスの余韻から抜け出せないでいるレインに再び舌を絡める。
抵抗はなくレインの表情は蕩けており、キスがもたらす快楽に酔い

しれ自分から下を絡めるようになっていた。
「・・・・ぺろ・・・・んぅ・・・・・れいん・・・・・」
「・・・んんっ・・・・はぁ・・・てぃあぁ・・・・・」
痙攣するレインを抱きしめ、さらに激しく口内を犯していく。
それから数十分間休むことなくキスを続け、
「んっ・・・・んんんんっ！！」
ついに達してしまうが、それでもティアはレインを抑えこみキスを続ける。
「んっ・・・・ふっ・・・あっ・・・んあ、ぴちゃ・・・・」
「はむ・・・・ずっ、ちゅ・・・ぺろ・・・・ぴちゃ・・」
いまだ余韻が抜けきっていないレインを責め続ける。
レインは思考を剥奪され、与えられる快楽に溺れてなすがままになり、それから船がクレンド王国に着くまで続けられ何度も達してしまった。
クレンド王国に着くとようやくレインを開放する。
「・・・はぁ、レイン大丈夫？」
レインの息は荒く、目の焦点はあっておらず、ティアの支えがなければ立っていられない状態だった。
「はぁ・・・・はぁ・・・てぃあのばかぁ」
ティアに寄りかかり、ようやく思考が回復していく。
「ごめんね、レインがあまりにも可愛かったから我慢できなくなっちゃった。」
「ばかぁ・・・・」
最後にそれだけ言うと、眠ってしまった。
「お休みレイン。」
そんなレインを背負ってクレンド王国に上陸した。

第６０話（前書き）

すみません突然の残業で更新が遅れました

第６０話

クレンド王国に上陸後、あまり時間に余裕があるわけでもないのですぐにドラゴンが暴れているところまで案内しても追うとするが
「君たちみたいな少女がドラゴン退治なんて無謀だ、悪いことは言わないから帰りなさい。」
学園内では無敵の強さを誇るティアでも、普通に見ればただの少女であり、とてもドラゴンを倒せるとは思ってもらえなかった。
「どうするティア？」
「場所だけどもわかればいいんだけど。」
「それなら・・・・・」
レインが再び案内の人に話しかけ、すぐに戻ってくる。
「ドラゴンが暴れてる場所はここから南西に３０ｋｍぐらいだって。」
「・・・どうやったの？」
あまりにもあっさりと情報を聞き出してきたレインに方法を尋ねると
「ちょっとお金を渡しただけだよ。」
「レインが・・・あの純粋だったレインがどんどん汚れていく。」
ちなみにこのことを教えたのは沙耶で、レインは沙耶から当初の目的がうまくいかないのなら妥協し最低限の目的を果たせと教えられ、そのためには賄賂も有効な手段だと教わっていたので使える手段は使っていった。
「でも、３０ｋｍもどうやって移動する？　歩いて行ってたんじゃ日が暮れちゃうよ。」
「そこは任せて。」
ティアは外に出るとレヴァンティンを抜き、紅蓮の翼を出現させる。
「レイン、しっかり捕まっててね。」
レインを抱きしめるように抱え紅蓮の翼を広げドラゴンが暴れているところまで飛んでいく。

約３０分後、冒険者のグループや国の軍隊が駐在しているところが見え、１度降り話を聞こうとするが、最初の通り危険だと言って通してくれなかった。
上空から見たところ、１０００人くらいの人たちがドラゴンを倒そうと魔法を放っている。
しかし、強靭な鱗に阻まれ足止め程度にしかなっていない。
「どうするティア？　あれじゃ無理矢理通ったとしてもドラゴンを倒す時に他の人を巻き込んじゃうよ。」
「こういうときはサヤに相談してみようか」
そういってメリルと改良を加えた通信用魔具を取り出す。」
『どうした？』
「軍の人が危ないからって通してくれなくて困ってるんだけど、なにかいい方法ない？」
『無理矢理通ったら駄目なのか？』
「ドラゴンと戦っている人がざっとみても１０００人くらいいるから引いてもらわないと巻き込んじゃうよ。」
『そこにＡランク以上の人がいないか？』
「たぶんいると思うけど、それがどうかしたの？」
『そいつを挑発して戦って一瞬で終わらせろ。それなら話は聞いてもらえるはずだ。』
「ＯＫ、やってみる。」
通信を切り、ここの代表者と思われる人に挑発する。
「いま子供と遊んでいる暇はない。」
しかし、取り付く島もなく追い返されるが
「子供相手に怯えてる人たちにドラゴンなんて倒せるんですか？」
しかし、レインがその場を継ぎ挑発を始める。
「なに？」
その反応を見逃さずに挑発を続ける。
「そんなに怖いのなら、後ろに下がっていた方がいいんじゃないですか。」

「ガキが調子に乗るなよ。」
「見た目だけで判断するなんて2流・・・・・いえ、三流のやることですよ。」
「いいだろう、そこまで言うのなら後悔するなよ。」
「私が勝ったら、１０分間兵を引かせてください。」
「ふん、そんなことはありえないがな。」
レインが代表者が連れてきた冒険者と対峙する。
「なんで俺がこんなことを・・・・」
あきらかにレインのことを軽んじてみている
「お譲ちゃん、怪我したくなかったらさっさと帰りな。」
「戯言はいいので早く構えてください。」
沙耶のような口調になり、相手を馬鹿にしたように挑発する。
その言葉に乗せられ、斬りかかってくるが、
「あああああああああっ！！」
突然苦しみ始め、その場に膝をつく。
「これでいいですか？　では約束通りいますぐ兵を引かせてください。」
「あ、ああ。」
本当に負けてしまうとは露ほどにも思っていなかったからか、反応が遅れる。
「これで周りを気にすることないねティア。」
「成長したねレイン。」
あまりに堂々とした態度に驚く。

それから１０分後、兵や冒険者は撤退してくる。
「約束通りに、兵たちを引かせたがいったいどうするつもりだ？」
「もちろんドラゴンを倒してきます。」
「無理だ！！　いくら強いからといっても相手はブラックドラゴンだぞ。それに今回のはかなりの大物で、下手をすればSランクレベルの相手だ、それをたった2人で倒すなど不可能だ。」

「だから１０分たって戻らなかったらあとはお願いします。」
それだ言い残すと、ティアがレインを抱え紅蓮の翼を広げ飛翔する。
駐留所からすぐにブラックドラゴンの姿を確認することができた。
全長１０ｍを超える巨体で、駐留所の方向に向かっている。
「さて、誰もいないしレヴァンティンで「ちょっと待ってティア。」
どうしたの？」
「ティアが考えてくれたあれ、さっき人には通用したけどドラゴン
にも通用するか試してみたいからちょっと待ってくれない。」
「ＯＫ、でも危なくなったらすぐに焼きつくすから。」
「うん。じゃあいくね。」
フヴェルゲルミルを広げ、アクアマスターを発動させる。
次の瞬間ブラックドラゴンが苦痛の声を上げ、その場で苦しみを紛
らわせるために暴れる。
「ドラゴンにも効果ありっと。ありがとうティア、もういいよ。」
アクアマスターで操れない水はなく、たとえそれが血液でも例外で
はない。
今レインはドラゴンの血液を気化させている。
気化した水分は体積が膨張し、血管を突き破ろうとし体中に激痛を
走らせる。
いかにドラゴンが強靭な鱗を持っていようとも、体の内部からの攻
撃には耐えられず、苦し紛れに黒炎を放つが
「灼熱に染まれ、レヴァンティン。」
神すらも焼きつくす魔剣の名を冠する魔剣より放たれた炎の前にそ
の程度の炎が通用するわけもなく灼熱の業火がブラックドラゴンを
襲う。
いかに強靭な鱗を持つドラゴンといえど、所詮は魔物、星すべてを
包み込み焼きつくすレヴァンティンの業火の前になすすべなくその
身を焼かれ、断末魔を上げ骨すら残らず焼きつくされた。
「さて、帰ろっかレイン。」
「そうだね。でも、もったいなぁ、ドラゴンの素材って高いのに。」

「あれでもかなり手加減したつもりだったんだけど・・・・・」

こうしてクレンド王国のドラゴンの討伐はたった2人の少女によって終わりを告げた。

第６１話

ティア立ちが旅立った翌日、沙耶たちも準備を終え船でカルーンに向かっていた。
「あちらは大丈夫でしょうか。」
「大丈夫だよ。レインも成長してるし、なによりティアが本気を出したら勝てる相手なんていないだろうから。」
「それもそうですね。ところでサヤ、先ほど連絡が入ってたみたいですが、なんだったんですか？」
「ドラゴンの討伐を指揮する人が子供だから相手してもらえないから、なにかいい案はないかって。」
「それでどう答えたんですか？」
「指揮下にある中で強い人を圧倒しろって言った。」
「なるほど。」
「こっちの方も、そんな展開になるかもしれないから同じようになるかも。」
「その時は、私がと言いたいですが、瞬殺するならサヤが適役ですね。」
「うん、その時は私がやる。この武器も試したいしね。」
沙耶の腰に下がっている翡翠に輝く双剣を指す。
「ドラゴンよりも巻き込まないように倒す方がやっかいですね。」
「私たちが持ってる魔具が反則だからしょうがないよ。」
本来魔具は魔力を込めるのではなく、魔法を刻み、所有者が魔力を流しその魔法の効力を発動させるのが通常の魔具である。
レヴァンティンやフヴェルゲルミルのように魔力を込めただけなら、その魔力が尽きてしまえばただの武器になってしまう。
しかし、サヤの能力のおかげでその欠点を解消し、膨大な魔力を自由に操れるようになることで通常の魔具の性能を遥かに上回る魔具になる。

そして、沙耶が持つフレズベルクは2つのハイブリットのような魔具で、風を操るという魔法を刻み、また剣自体に魔力を込めることで沙耶の魔力量では起こせないような魔法を使うことができる。
「フレズベルクの能力でどんなことができるんですか？」
「それは見てからのお楽しみで。」
「意地悪ですね。そんなサヤにはこうしちゃいます。」
そう言って沙耶にキスをする。
沙耶も拒むことどころか、自分から舌をからめ始める。
そんな沙耶にエルーは驚くがすぐに主導権を握り、沙耶を愛でていく。
「・・・・っはぁ、最近は積極的ですね。」
「私だってエルーのことが好きなんだから／／／／／／　それに、最近エルーの温もりが欲しくてたまらないだ。」
「・・・・・・そうですか。では、部屋に行きましょうか。」
「うん／／／／／」
顔を赤らめ、ほほを緩ませ幸せそうな表情を浮かべる沙耶と違い、どこか怪訝な表情を浮かべるエルーだった。

それからカルーンに着くぎりぎりまで交わり、沙耶は動けなくなるまで攻め続けられ、上陸するときはエルーに抱えられながら船から降りた。
そして、沙耶が動けるようになるまで回復したら、早速、依頼を終わらせるためドラゴンが暴れているところへ案内してもらった。
もちろん、最初は案内してくれなかったのだが、沙耶が少し話をしただけで快く引き受けてくれた。

そして討伐隊が駐留しているところまで案内してもらい、状況を確認しようとするが、そんな必要ないほど疲弊していた。
討伐隊の人たちは少なからず怪我を負っていて、中には瀕死の重体になっている人もおり、すでに限界なのは誰の目から見ても明らか

だった。
「どうしますか？」
「ここの人たちには悪いけど好都合だよ、これで他の人を巻き込む心配をしなくて済む。」
「わかりました。では早速行きましょうか。」
「うん。」
駐留所を後にし、ドラゴンが暴れ、戦闘音が上がっている地点に急いだ。

そこではギルドのパーティと思われる人たちがドラゴンと戦っていた。
たった数人でドラゴンと渡り合えるということは相当高レベルの冒険者だが、相手は生物の中で最強と呼ばれるドラゴンであり、流石に相手が悪く満身創痍だった。
そこに、沙耶とエルーが現れ、邪魔なので引くように頼むが
「君たちこそ早く逃げろ、あれは君たちみたいな女の子が戦える相手じゃない。」
案の定聞いてもらえず、逃げろと言っていく。
そんな話をしている内にドラゴンが踏みつぶそうと足を振り下ろすが
「人が話している時に攻撃とは礼儀を知らないのか。」
沙耶がフレズベルクを腰から抜き、ドラゴンの足のそばで立っていた。
「いったい何を・・・・・・」
「話は後です。さっさとどこかに行ってください。正直に言って邪魔です。」
沙耶がフレズベルクを振ると、突風が吹き荒れ冒険者たちを吹き飛ばす。
「さて、これで巻き込む心配はなくなった。」
そういうと沙耶がフレズベルクに魔力込め振りぬき、風の刃でドラゴンを切り裂く。

フレズベルクは羽のように軽く、どんな剣より鋭い。
放たれた風の刃は容易にドラゴンの鱗を切り裂き鮮血を舞わせる。
しかし、相手はアクアドラゴン、近くの水から魔力を吸い上げ傷を癒し、沙耶に直系５ｍ以上の水弾をいくつも放つが
「無駄だ。」
世界のすべての風を吹かせたといわれるフレズベルク、その名を持つ双剣より吹く風が水弾の軌道をすべて変えてしまう。
この風こそフレズベルクの真の能力、どんな攻撃でも風の壁が軌道を変え所有者を守る風の鎧。
「サヤ、もういいですか？」
「うん。もう充分に試せた。」
そういうとエルーが銃口をアクアドラゴンに向け、必滅必中の名を冠する黄金の弾丸、ティルヴィングを撃つ。
ティアが改良したティルヴィングは螺旋状に魔力を放ちながらアクアドラゴンに向かい、着弾した瞬間、大きな風穴を開ける。
いかに水辺が近くにあろうと、体の半分を吹き飛ばされた体では治癒は不可能であり、そのまま力尽きた。
「さて帰りましょうか。」
「そうだね。」
呆然としている冒険者のそばを通り過ぎ、来た道を帰った。

第６２話（前書き）

時間が取れたので今日は２話目の投稿です

第62話

学園長から受けたドラゴン退治が無事終了し、全員家に戻っていた。
「やっぱりこの家が一番落ち着くね～。」
「私もそう思う。」
ティアとレインが3日ぶりの我家を堪能している時、
「エルー・・・・」
沙耶が顔を赤くしながら俯き、エルーの袖を引っ張る。
その行為に無言で答え、部屋に向かっていく沙耶とエルー。
「あの2人本当に仲がいいよね。」
「サヤ？」
「どうしたのティア？」
「・・・・・・・・・・・・・」
その問いに答えることなく、沙耶とエルーが去っていた虚空を見つめ、険しい表情を受けべていた。

それから、沙耶とエルーが戻ってきたが、ずっと手を繋いでおり片時も離れることがなかった。
レインもさすがに変に思ったが、きっと気のせいだろうということで納得していたが、ティアは険しい表情を崩さず沙耶とエルーを見つめていた。

そしてその夜、ティアはエルーを呼び出した。
「エルー、本当にサヤのことを思っているなら、今の関係をやめて前の2人に戻って。」
「・・・・・・・・・・・・・」
突然エルーに別れろというティアにエルーはなにも言わない。
「なにも言わないってことは、今のサヤの状態がどれほど悪いか分かってるんだよね。いや、私でもわかったんだからエルーが分から

ないはずがない。」
「それでも私はサヤの側にいたいんです。」
「どうして!!　このままじゃ遠からずサヤの心は壊れる、それにエルーだってそんな沙耶を見ているのはつらいはず!!　それに、サヤと一緒にいたいだけなら今の関係じゃなくてもいいじゃん!!」
」
「それでも私はサヤの心を守りたい。」
「サヤの心を守るなら、なおさら別れるべきだ!!」
「・・・・・・・・・・・・・・」
「エルーがそのつもりなら、私がサヤに直接言ってくる!!」
そう言うと部屋を飛び出し、沙耶のもとへと向かった。
そんなティアをエルーは黙ってみていることしかできなかった。

「サヤ!!」
部屋を勢い良く開き、サヤの目の前まで歩いていく
「どうした、そんなに興奮して?」
「サヤ、エルーと別れて。」
「な、なにを言っている」
「今のままじゃ沙耶は壊れる。手遅れにならないうちに、元の関係に戻って。」
「だから何を・・・・・・・」
「サヤ、気付いてる?　今震えてること。」
特に寒いわけでもないのに、沙耶の体は震えていた。
「これは・・・・・」
「エルーが傍にいないからだよね。」
図星を指摘されなにも言えなくなってしまう。
「サヤがエルーのことを好きだっていうことは分かってる。だから未知の暗闇を歩いていることも、でもサヤはその暗闇の中でなにを信じて歩いてるの?」

ティアの言葉になにも答えることができず、震える体を抱え丸まっていた。

「なんの景色も音もない、なにもわからない暗闇でサヤの心を支えているのは、”エルーを信じたいから”だよね。でもエルーを信じたいから暗闇を歩いているのに、その心を支えるのは”エルーを信じたいから”、そんな矛盾を抱えた心で暗闇を歩いていけるわけがない。だから、エルーがどこかに行ってしまわないように、心の支えを疑わないで済むようにずっとエルーを離さなかった、そうだよねサヤ？」

ティアの鋭い指摘を受け体の震えがさらに大きくなる。

「今震えているのはエルーがいないからだよね。たった数分離れただけで心の支えが折れかかってる。今はエルーが傍にいればいいかもしれない、でもそのうちエルーが傍にいても信じきれなくなる。そこまで行ってしまったらサヤの心は完全に壊れてしまう。サヤは私の親友で私を後押ししてくれた、だからサヤの心を壊させないためにもここでエルーと別れて。」

「・・・いやだ・・・私は、私はただエルーと一緒にいたいだけなんだ。」

ようやく絞り出すように答えるが

「サヤは弱くなったね。前のサヤだったら問題なかったかもしれない。なにも見えなくても、歩いている感覚さえなくても歩き続けられたかもしれない。でもそれは持たざる者の強さ、失うものも奪われるものもないからこそ持てた強さ。でもサヤは大切なものを手に入れてしまった。今のサヤに暗闇を歩いて行ける強さはない、エルーを大切に思うからこそサヤは弱い。」

「うっ・・・・・・・あ・・・・・・」

震える体を抱きしめ、涙を流し始める。

「・・・・・サヤ。」

そこにエルーが現れる。

「エルー・・・・・・」

「エルー、私はたとえ2人から嫌われることになってもこの思いは曲げない。それでも聞かないっていうなら力づくで引き離す。」
「私はサヤが求める限り、沙耶の傍に在り続けます。」
「そう。それならサヤはどうするの？　不確かなもの、いや存在するかも分からない物を頼りに暗闇を歩いて行くの？　一生その暗闇にとらわれるかもしれないのに。」
「いやだ・・・もう歩きたくない・・・もう何を信じていいのか分からない・・・・・」
サヤが抱えた歪みはいまだ消えておらず、最後の最後で沙耶を苦しめた。
大切なものを持っても、それを信じることができず信じようとしても暗闇にとらわれ自分が何を望んでいるのかさえ分からなくなる。
大切なものを信じるために暗闇を歩いているのに、その暗闇で信じられるものは大切なものを信じたいという気持ちだけ、いつまでも見えないゴールにその気持ちは摩耗し擦り切れてしまう。
「サヤはすごいよ。矛盾したものを支えにこれまで歩いてきた、それはたぶん誰にもできないことだと思う。だからもう休もう、無理をしてその暗闇を歩く必要はないんだから。」
ティアが救いの手を差し伸べる。
その手を取ろうとした時
「サヤ、今更私のことを完全に信用してほしいとは言いません。いえ、こんなことを言ったからこそ今までサヤを苦しめていたのかもしれませんね。だからこそこれだけは信じてください、あの時誓った想いだけは本物だと。」
ティアの手を掴もうとした沙耶の手が止まる。
「たとえサヤがその手を取っても、あの誓いを果たします。」
沙耶がエルーの方を向く
「私はサヤにすべてをゆだねてほしいです。でもサヤは信じることが怖いんですよね。それならサヤ自身を信じてください。あの時誓った時の想いを、今まで積み重ねてきた思い出を。」

「私はあの時、エルーがずっと欲しいと思った。ずっと傍にいて、私のことを好きでいて欲しかった。」
体の震えが収まり、目に光が宿る。
「私があの時、信じなくてもいいといったから、優しいサヤは私の想いに応えるために暗闇を歩くことにしたんですよね・・・・・・・本当は私も怖かった。サヤは私のことを絶対に信用してくれない、だから最初から希望を持つことを諦めたんです。私もどこかでサヤのことを信じ切れてなかったのかもしれません。それでも私はサヤの傍にいたい、あの時誓った想いだけは嘘偽りのないものです。」
「サヤ!!　また自分を苦しめる気なの!!　今のサヤじゃ、あの暗闇の絶望には耐えられないよ!!」
再びエルーのもとに行こうとする沙耶を必死に止めるが
「ティア、ありがとう。ティアが気付かせてくれなかったら本当に心が壊れていた。でも、私はもう1度戦う。」
「それなら、なにを支えに戦うつもりなの？　それを教えて。」
生半可な答えでは納得しないと表情で訴えてくる
「私は私を信じて戦う。私がエルーのことが好きだという想いは真実なんだから。」
沙耶の中で1番大きな感情、それだけはなにがあっても揺らぐことない誓い合った感情。
たとえどれだけ時間が経とうとも、決して消えることのない絶対的な想い。
「・・・・・・・・・そっか。分かった。今回はそれで納得してあげる。」
「ありがとう。私はみんなが思ってるほど強くない、だからティア、私がくじけそうになったら助けてくれ。」
「もちろん。親友を助けるのは当たり前だよ。」
「ティアが親友でよかった。」
「私もだよ。・・・エルー、今回はサヤが立ち上がったから見逃すけど、次にこんなことがあったら全力で引き離すよ。」

「わかっています。」
「それなら・・・・」
一旦息間をおき
「絶対に2人で幸せになること、これだけは約束して。」
「はい。ティアさん、本当にありがとうございます。これからも友達でいてくださいね。」
「こっちこそ、ずっと友達だよ。」
こうして沙耶は再び暗闇の中を歩きだす、今度は確かなものを支えに、かすかに見える光を目指して。

第６３話

沙耶が立ち直った次の日の朝、沙耶は全員が集まる朝食の場で
「ティア、レイン、聞いてほしい話がある。」
「なに？」
「なんですか？」
「私の隠していることについてだ。」
沙耶が持っている力を打ち明けようとしていた。
「無理して話してくれなくてもいいよ。」
「いや、２人には聞いてほしい。」
「わかった。」
「私が隠していた力は、死を与えるものだ。」
あまりにも予想外な言葉に２人が絶句する。
「この力で殺せないものは私を除いて存在しない。２人が持ってる魔具も私が魔具の時の流れを殺しているから、魔力を消費しても殺された時間まで戻り、魔力も元に戻ってるんだ。」
その言葉に対しての２人の答えは
「流石サヤ、それでこそ私たちのリーダーだよ。」
「私もう何が起こっても驚きません。」
このことを聞いて怖がられてしまうのではないかという沙耶の不安は、ティアとレインの前にはまったくの杞憂だった。
「でもそんな力あるなら、なんであんまり使ってないの？」
「それは、人を殺すために使わないってエルーと約束してたからだ。」
「そうだったんですか。」
「それと私とエルーは不老不死だ。私たちは自身の時の流れを殺している。だから頭を吹き飛ばされようと死にはしない。」
「それで全部？」
「ああ、これが私のすべてだ。私たちは永遠を生きる、いずれ２人

とは別れることになるだろうけど2人のことは絶対に忘れない。」
「その心配はいらないよ。レヴァンティンがある限り私だって老化ぐらい抑えられるから、ずっと親友でいてあげる。」
「私もフヴェルゲルミルの魔力を使えば老化を抑えてずっと一緒にいれます。」
「ありがとう。」
沙耶の力のことを分かっていて沙耶の側にいようとする人は今までにエルーしかいなかった、それで十分に幸せだったがさらに2人、永遠をともにしてくれる友がいることに涙があふれる。
「わわ、どうしたんですかサヤさん。」
「最近のサヤ泣いてばっかりだね。」
「うるさい・・・・・・2人ともこれからも私と一緒にいて、私を支えてくれ。」
「もちろん。」
「私も微力ながら頑張ります。」
即答してくれる2人にまた涙があふれる
「ほんとに・・うぅ・・ありが・・・ぐす・・とう。」
泣きながら感謝する。
「2人ともあんまりサヤを泣かさないでください。サヤのすべては私の物なんですから。」
「昨日はエルーも泣かせたくせに。」
「私はいいんです。サヤは私の物で、私はサヤの物ですから。」
「朝から惚気ないでよ。」
「羨ましいんですか?」
「そんなわけないでしょ。」
「そうだよ、ティアには私という恋人がいるんだから。」
そういってティアに抱きつく
「こ、こらレイン離れて／／／／」
「どうして恥ずかしがるの?　船ではあんなに激しく求めてくれたのに／／／」

顔を赤らめながら爆弾を投下する。
「へぇ。ティアさん、どんなことをしたんですか？」
エルーが極上の笑みを浮かべ、続きを聞こうとする
「そ、そんなこと言えるわけないでしょ／／／／／」
慌てて答えるティアだが
「ティアがね私がもう駄目だって言ってるのに、なんどもなんども
「うわあああ／／／／／」」
レインが暴走しあったことを暴露しようとする。
「ティアさんって意外と獣だったんですね。それで、どんなふうにレインさんを襲ったんですか？」
「人気のないところに連れていかれて、それで壁に押さえつけ「エルーごめん！！　お願いだからもう許して！！」」
「いいじゃないですか、好きな人を襲ってしまうのは仕方ないことですよ。さぁレインさん続きを。」
「私はエルーみたいに堂々とできるほど羞恥心を捨ててない／／／／」
そんなティアの叫びもむなしく、レインの暴走は止まらない。
「うん／／／　3回くらいイっちゃた後に服を全部脱がされて、それから体中を「レイン！！　私が悪かったから、お願いだからもう止まって／／／／／／」」
「ぷっ。」
いつものにぎやかな日常を目の前に、泣いていた沙耶が噴き出してしまう。
「ようやく笑ってくれましたね。サヤは笑顔が1番なんですから、あんまり泣かないでくださいね。」
それまでティアをからかっていたエルーがすぐにサヤのもとに駆け寄り、抱き寄せる。
「うん／／／　私はエルーが好き、この気持ちを信じていつか私のすべてをエルーに捧げるから待っててね／／／／」
「はい。私もサヤのすべてを手に入れるために頑張ります。」

そして二人の顔が近づき、唇を交わす。
それをはたから見ていたティアは
「どうして、朝っぱらからあんなにだだ甘な雰囲気が出せるんだろう？」
唇を離すと沙耶はエルーの胸に顔をうずめ、そんな沙耶をエルーは愛しそうに撫でる。
そんな、当たり前だった風景を見て笑みを浮かべるティア。
「絶対幸せになってね。」
そう呟くと
「私たちも幸せになろうね。」
「レ、レイン／／／／」
キスができる距離まで顔を近づけられ、思わず後退してしまうティア。
「私たちもキスしよ。」
赤くなった顔に潤んだ瞳でおねだりしてくる。
「うん。私たちもあの2人に負けないくらい幸せになろうね。」
「嬉しい／／／」
ティアとレインもキスを交わし、幸せいっぱいといった顔で抱き合う。
ティアとレインも沙耶とエルーのことを言えないくらい、バカップルであった。
当たり前の日常を過ごしていた沙耶たちだが、事態は急変を迎え新たな舞台の幕が開ける。

第６３話（後書き）

次回から第五章カルーン編です

第６４話（前書き）

第五章カルーン編開幕です

第６４話

学園長と約束した期日まで残り３日となった日、急に学園長から呼び出された。
「どうしたんですか？　いきなり。」
学園長室を訪れ待っていたのは、緊張した空気を放つ学園長だった。
「先日、魔物の大群がカルーンを襲い、首都の周り以外、ほぼ壊滅まで追い込まれました。他の両国も応援を送りましたが数が圧倒的すぎて大した効果が得られなかったそうです。」
衝撃的な報告を前にしても沙耶は冷静さを失わずに質問する。
「そんな大群が来るまでどうして気付けなかったんですか？」
「おそらく、５０年前の魔王との戦いのとき使われていた、北の大陸との移動に使われていた魔法陣が復活したからだと思います。クリスタルが残り１つとなり、封印が弱まったところをあの男が復活させたんだと思います。」
「まだ北の大陸の結界は壊れていないんですか？」
「なんとか保っている状態です、しかし、それでも魔法陣は起動されてしまったのであまり意味がないですが。」
「カルーンへの紹介はどうですか？」
「やはり行くつもりなんですね。すでにカルーンとの連絡は途絶えています。なので、今カルーンがどういう状況かはっきりとは分かっていません。それでも行くつもりですか？」
「はい。魔王だけはなにがあっても殺します。」
「分かりました。カルーンへの紹介はもうできません。もしカルーンの代表たちに会えたら私の紹介状を渡してください。少しは役に立つはずです。」
「ありがとうございます。」
「私にできるのはここまでです。私の力だけではあなたたちをカルーンに連れていくことすらできない。本当に申し訳ありません。」

「これは私たちがやりたいからやることです。貴女が謝る必要などありません。」
「では、あなたたちの無事を祈らせてください。」
「失礼します。」
「ご武運を。」

沙耶たちは家に帰り、これからのことを話し合おうとするが
「サヤさんお願いがあります。」
レインが話を切り出してくる
「一族のことか？」
「はい。私の一族を守るために力を貸してください。」
「そんなもの決まっている。」
一旦間をおき
「当然、私たちの身内に手を出したことを後悔させてやる。」
沙耶が不敵な笑みを浮かべ、大胆不遜に言い放つ。
「私の彼女を傷つけた罪は重いよ。」
ティアが静かな怒りの炎を燃え上がらせる。
「サヤの言うとおりです。私たちの仲間に危害を加える輩は生かしておきません。」
エルーがいまだ見えぬ敵に殺気を向ける。
「みんなありがとう。」
最高の仲間たちの存在に心の奥が暖かくなる。
「私たちにはあまり時間がない、早速カルーンに向かって、レインの一族の安全を確保し、奴を殺す。」
沙耶が殺意をみなぎらせ、いまだ見えぬ魔王を殺す決意をあらわにする。
「でもどうやって、カルーンに渡るの？」
「それはもう考えている。それよりカルーンについたら2手に別れたい。一方はレインの一族を守るため、一方は魔王の手がかりを集めるために中央へと向かう。」

「私はレインの方に行く。」
「私はサヤについていきますよ。」
2人が同時に即答する。
「よし、なら30分後ここに集合、準備を怠らないように。」
そういうと4人は各々戦闘の為に準備を始める。

side　レイン

レインは学園長の話を聞いて、一族が滅びているのではないかという不安にとらわれ集中を乱していた。
(落ち着け、落ち着け、きっと生きてる、きっと生きてる)
一族が生きていること思おうとするが、どうしても不安がぬぐいきれない。
そこに
「レイン。」
ティアが現れ、そっとレインを抱きしめる。
「大丈夫。きっと私が助けてあげるから。」
ティアに抱きしめられ、先ほどまでの不安が消えていくのが分かる。
「うん。きっと大丈夫だよね。」
「私たちのリーダーはあのサヤだよ。なにがあっても負けたりしないよ。」
「そうだね。それにエルーもティアもいる。きっとどうにかなる。」
「レインもいるよ。レインは強くなったんだから、強くなったレインの姿を一族のみんなに見てもらわなきゃ。」
「うん。絶対助けて見せる。」
それから、しばらく抱き合い離れる
「ありがとうティア、おかげで落ち着いた。」
「いいよ。レインは私の彼女なんだから、慰めてあげるのは義務だよ。」

「うん／／／／」
「レイン、頑張ろうね。」
「うん。」
決意を胸に、戦場へと旅立つための準備を再開する。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

沙耶は解散してから、持っていくための武器や道具の確認を行っていた。
（きっと何か裏があるはず。あの魔王がこんな単純なことをするはずがない。）
仲間を傷つけられ憤りながらも冷静さを失わず、状況を分析する。
（私たちがいる限り、いくら北の大陸の結界を解いたところであまり意味がないはず、ということはカルーンは囮で狙いは私たちをおびき寄せる為か、国を餌にするとは相変わらずふざけたやつだ。）
カルーンに行くことが罠だと分かっていても決意は揺らぐことはない。
「サヤ、準備の方はどうですか？」
「大体終わったよ。そっちはどう？」
「大丈夫です。」
「エルー、最初に言っておくけど今回ばかりは約束を守るつもりはないよ。魔王だけは必ず殺す。あいつがいる限りこの世界に安寧は訪れない。」
「分かっています。でもその罪は私たち４人の物ですよ。」
「うん。もう１人で背負ったりはしないよ。」
「必ず勝ちましょう。」
「うん。」

そして集合の時間になり

「みんな準備はいいか？」
沙耶がみんなに呼び掛ける
「いつでもいけます。」
多くの魔具を身に隠し返事をするエルー
「もちろん。」
世界を焼きつくす魔剣を持ち返事をするティア
「大丈夫です。」
世界の水を操る扇を持ち返事をするレイン
「いくぞ。今度こそ決着をつける。」
最後に沙耶が必勝の宣言を行い、最後の舞台へと向かう。

第６５話

戦いの地へと赴くため沙耶たちは海岸まで来ていた。
「ティア、レインを抱えて飛べるか？」
「もちろん。」
紅蓮の翼を広げレインを抱える。
「エルーは私につかまって。」
フレズベルクの魔力を解放し、風を操り体を浮かせる。
「ティア、私のそばから離れるなよ。」
そして、空間を殺し一瞬で目視できるところまで移動する。
エルーは2度目だったので驚きはしなかったが、ティアとレインはなにが起こったか分からず慌てていた。
「サヤ！！今何やってるの！！」
「説明は後だ、まだまだ行くぞ。」
それから、わずか3分程度でカルーンの大陸が見え、海岸には魔物の群れが見えた。
「サヤどうする？」
「無駄な時間を過ごしている暇はない。とりあえず着陸するぞ。」
空から魔物がいないところに着陸し、状況を確認する。
「レイン、ここがどこだかわかるか？」
「ここは大陸の最北端です。私の一族が住んでる村はここから南西に１００ｋｍぐらいで、首都は南に７００ｋｍぐらいです。」
「それじゃ作戦通りに二手に分かれる。なにかあった場合はすぐに連絡をくれ。」
「ＯＫ・・・レイン、カルーンってこんなに魔物がいるの？」
「そんなわけないでしょ。」
「これは少し骨が折れそうですね。」
沙耶たちを魔物の群れが囲んでいた。
その数は１００体では収まらない程だった。

「ティア、レイン、よく見ておけ、これが私の力だ。」
沙耶が力を解禁した時、そこは戦場ではなく処刑場。
沙耶の認識上にある者は、首に枷をはめられ、ギロチンの刃を待つばかりの死刑囚。
そして、執行人たる沙耶が斬首の刃を振り下ろす。
「死ね。」
その一言で、眼前に広がっていた魔物の群れが一瞬で肉塊となり果てた。
「これが、沙耶の本当の力・・・・・」
「すごい・・・・・」
魔物の群れの中には、最強種であるドラゴンや、それに匹敵する魔物もいたが沙耶の前には等しく無力であった。
「ティア、レイン、そっちは任せた。」
その光景を前にしても、動揺の欠片もない沙耶とエルーを見て、呆けていたティアとレインが冷静な思考を取り戻す。
「任せて。そっちも任せたよ。」
ティアが再び紅蓮の翼を広げ、レインを抱えて飛び立った。
「エルー、私たちも行こう。」
「はい。」
沙耶も空間を殺しながら、カルーンの首都を目指す。

ｓｉｄｅ　魔王

魔王は転移の魔法陣を開放した後、その規格外の力を見せ魔物たちを従え、カルーンを襲わせていた。
カルーンを壊滅させるのも時間の問題かと思われたが
「来たか。」
北の魔物たちの反応が一気に消えたことで沙耶たちが来たことを理

解する。
「罠だと分かっていてなお挑んでくるか。いいだろう、今度は全力で相手をしてやろう。」
魔王が獰猛な笑みを浮かべ、その場から姿を消す。
こうして、魔王との3度目の戦いが始まる。

side out

沙耶とエルーは、空間を殺し音速を超える速度で首都に向かっていた。
目の前に障害物があっても、空間ごと殺し、なんの障害にもならず、見かけて魔物はすべて殺していた。
「サヤ、首都についたらどうするつもりですか？」
「とりあえず現状把握、もしかしたらエルーに戦ってもらうことになるかもしれない。」
「そうですか。いろいろと準備をしておいて正解だったみたいですね。」
「いろいろ作ったけど、全部使えるの？」
「問題ありません。私はみなさんのように究極の一を持っているわけではありませんから、手数で補います。」
「そっか、それじゃスピードあげるよ。」
フレズベルクで風を起こし、風でスピードを上げ、1度に空間を殺す量を増やし移動量を増やし、首都まで急ぐ。
首都までにいくつかの町や村があったが、どこも酷い有様でとても人がいる雰囲気ではなくなっていた。
その光景を見ては静かな怒りを燃え上がらせるが、それでも冷静さを失わずに前に進んでいく。
そして30分後、沙耶たちは首都の前にたどり着いた。
流石にまだ首都までは魔物の侵略は進んでいなかったが、首都の人

たちからは活気がなくなり、悲壮感に包まれていた。
しかし、そんなことを気にしているわけにもいかず、カルーンの代表者たちが集まる中央に向かっていった。

ｓｉｄｅ　ティア

沙耶たちと別れた後、紅蓮の翼で空からレインの故郷へと向かっていた。
沙耶がいないので空間を殺した移動法は使えなかったが、それでも空からという点と、紅蓮の翼の性能のおかげでかなり速い速度で進んでいた。
空を飛んでいる魔物と合うこともあったが、レインの魔法とティアの翼で瞬殺し、レインの故郷へと急ぐ。
「レイン、あとどれくらい？」
「もうすぐ・・・・・見えた。ティアあそこ。」
レインが指をさしたところは、今まさに魔物の侵略を受けているところだった。
精霊魔法や水の上級魔法を放ってはいるが、数が多すぎて徐々にだが押され始めていた。
そして、村に侵入されようとした時、その魔物たちは氷漬けになり絶命する。
「みんな大丈夫！！」
レインの声に、村のみんなが驚く。
「レイン様、なぜお戻りなったのですか！！　ここは危険です。いますぐ学園に戻ってください。」
「心配ないよ。私は前までの私とは違う。」
レインがフヴェルゲルミルを振るい、魔物たちを水の槍で串刺しにし押されていた、前線を押し返す。
「今のうちにみんなの避難を、避難が終わったら門を閉じて。」

レインの言葉に従い、前線で戦っていた者たちが戻り門を閉じる。
「レイン。」
そこには、レインの両親がいた。
「お久しぶりです、お父さん、お母さん。」
「何故戻ってきたんだ!!」
「私はこの村を守るために戻ってきました。」
「その気持ちは嬉しいが、お前がいなくなったら直系の血族が途絶えるんだぞ!!」
心配するところはそこなのかと思うティアだったが
「そんなことはどうでもいいんです。今更直系なんて関係ありません。それに私にはまだ一族をまとめていくだけの力はありません。」
言いなりだったレインは、沙耶たちとの出会いから強くなり自分の意見を持つようになり、今までの弱い自分を振り切り、両親の期待にはこたえられないとはっきりと伝える。
「なにを言っている!!　眷族の一族は代々直系が村を治めると決まっているんだぞ!!」
「お父さん、いい加減に目を覚ましてください、直系であるお父さんより族長に相応しい人は他にいます。本当にこの村のことを思うなら、私ではなくその人たちにこの村を任せるべきです。そして、私が今よりもっと強くなれてから族長と認めてもらってからでも遅くありません。」
「それは・・・・・」
レインの言葉に、なにも言えなくなってしまう。
「お父さん、時代は変わるんです。いつまでも過去にこだわっては前に進めませんよ。」
「レイン・・・変わったな。ちょっと前までは私たちの言うことは何でも聞いていたのに。」
「私の仲間のおかげです。」
「分かった。　族長のことは後で村のみんなと話し合おう、とりあえず今は村を守ることが最優先だ。」

「レイン、話は終わった？」
タイミングを見計らい話しかける。
「うん。」
「あなたは？」
「私はティア・ノートっていいます。今から私が外の魔物を一掃してきますので、絶対に門から外に出ないでください。」
「無茶だ！！　あの量は1人でどうこうできる数じゃない。」
「お父さん、大丈夫だよ。ティアは強いから。」
「しかし・・・・・」
迷っている内にティアは門を飛び越え、外に出る。
「本当に大丈夫なのか？」
「大丈夫だよ。ティアは私の恋人なんだからあの程度の敵には負けないよ。」
「恋人？」
ティアがレインとの関係をはっきり告げないようにしていたが、レインはちゃっかりと恋人として親に紹介していた。

第６６話

ティアが村の外に出て最初に見たのは、村の人に死体だった。
それも１人や２人ではなく、何人もこの村を守るため戦い死んでいった者たち。
その姿を見て、ティアは逆に冷静になった。
しかしそれは、嵐の前の静けさでしかなかった。
「灼熱に染まれ、レヴァンティン」
レヴァンティンを一振り、それだけで魔物の群れの半数以上が骨も残さず消え去った。
「人間にしては、なかなかの炎じゃない。」
本来なら先ほどの一振りですべての魔物を焼きつくすはずだったが、１体の魔族がティアの炎を防いでいた。
「魔族まで出てくるなんてね。」
魔族、それは知能を持つ魔物のことを指し、その力は１体で学園長と同等かそれ以上の力を持つ。
「でも、その程度じゃまだまだね。ダークストライク」
魔族の女が黒炎の弾丸を放つ、その数は１００を超え容赦なく降り注ぐ。
ティアもレヴァンティンで相殺するが数が多すぎて追いつかず防戦になってしまう。
ティアの周りにはいくものクレーターが作られ、そこにあった死体まで巻き込んで破壊する。
隙を見て、レヴァンティンの炎を魔族に放つが
「だから無駄よ。あの男が言っていたからどれほどかと思ったらこの程度なのかしら。」
「あの男って魔王のこと？」
「そう自分で言ってたわね。確かにあの強さは魔王に相応しい強さだったわよ、その魔王が警戒する相手だから私もそこそこ警戒して

いたんだけど運が悪かったわね。私相手じゃなければその炎で倒せたかもしれないけど私相手に炎属性の攻撃は通じない。」
魔族の女の言うとおり、レヴァンティンの炎を放っても、まったくダメージを与えらない。
「そろそろ終わりにしましょうか・・・・なにがおかしいの。」
ティアの攻撃でダメージを与えられない状況でティアは笑っていた。
「ごめんごめん、ちょっと前にいたんだよ、貴方と同じように炎属性の攻撃じゃ倒せないって言ってた人が。」
「それで、それがどうしったっていうの!!」
今確かに自分が有利な状況にいるのに、余裕を崩さないティアに苛立ち声を荒げる。
「あの程度の炎がレヴァンティンの全力だと思っていることがおかしくて・・・・・・」
その言葉に魔族の女が切れ、
「もう終わりにしてあげる、メテオレイン」
上空から炎を纏った隕石がいくつもティアをめがけ降り注ぐ。
「シンモラの錠、第3解放。」
レヴァンティンの解放の言葉を告げ、レヴァンティンを振るう。
先ほどとは比べ物にならない、炎が隕石をすべて焼きはらう。
「そんな・・・・・」
あまりの威力を目の前に、驚愕に目を開いてしまう。
「まだ第3解放だよ、あれでもまだまだレヴァンティンの炎は全力じゃない。」
ティアは普段、強すぎるレヴァンティンの威力を制御するために枷を付けている。
その枷がシンモラの錠、北欧神話においてレヴァンティンを持ち、神々を倒してきた炎の巨人スルトの伴侶であり、レヴァンティンの保管者であるシンモラがレヴァンティンを保管する時9つの頑丈な錠をしたといわれている。
その名の通り、ティアの持つレヴァンティンにはシンモラの錠によ

って9つの封印が施されており、普段は1つしか解放していないが、ティアが思えばいつでも解放することができる。
「レインの、私の恋人の村を襲ったことを後悔させてやる。」
ティアの中の静かな怒りが燃え上がり、それに応じレヴァンティンの炎が収束していく。
友の為に燃え続けると誓った魔剣が咆哮を上げる。
「吼えろ、レヴァンティン」
収束された炎が放たれる、それはまさしく魔剣の咆哮、超高密度の炎が莫大な音と共に魔族と魔物を一掃する。
炎が止むとそこには、なに1つとして残っておらず、眼前に広がるのはレヴァンティンによって焼きつくされた荒野だけであった。
そして、音を聞きつけレインを先頭に、村の人たちが外に出てくる。
「レイン終わったよ。」
「御苦労さま。」
当然のように言葉を交わす2人とは違い、いままで苦しめられていた魔物たちがたった1人の少女がすべてを倒した事実に信じられないといった顔をするが、先ほどまでいた眼前に広がる魔物群れがどこにもおらず、結果的には信じるしかなった。
「本当にありがとうございます。貴女が来てくれなかったら今頃この村は滅びていたでしょう。」
村の代表と思われる人が代表して感謝の言葉を述べる。
「いいよ。レインの故郷だったから助けただけだから。今までレインに親切に接していてよかったね。」
村の人たちはこれ程レインに感謝したことがないだろう、それと同時にレインに危害を加えようものならどんな末路をたどるか一瞬で想像がついてしまう。
「それじゃ私は残りの魔物を殲滅してくる。」
「恥ずかしながら、私たちの中にまともに戦えるものはいません。貴女が行ってしまわれてはこの村を守る者がいない。」
「大丈夫だよ。レインがいるから。」

「いくらレイン様が直系の一族といっても、貴方のような力は持っていません。」
「レインは私の仲間の1人だよ、半端な力じゃ私たちの傍に入れないよ。」
そこに、先ほどの音に引き寄せられ上空から魔物が現れた。
「ちょうどよかった。レイン頑張って。」
「あの程度に頑張って言われても・・・」
あの程度といっても、魔物はワイバーン、ドラゴンの亜種だがその力は一流の冒険者でなければ戦いにすらないらない力を持っている。
しかし、レインは沙耶たちとの鍛錬のおかげで成長し、なによりフヴェルゲルミルを持つ限りワイバーン程度には後れをとることはない。
扇を開き、アクアマスターを発動させる。
ワイバーンの群れの血を蒸発させ動きを止め、氷の槍で貫き10秒もたたずにすべてのワイバーンを墜落させる。
「これでわかったでしょ。」
なにが起こったか理解できなかったが、ワイバーンが墜ちていく姿を見てレインの力は自分たちの想像以上のものだと理解する。
「それじゃレイン、あとはよろしく。」
「すぐに戻ってきてね。」
紅蓮の翼を広げ、魔物を殲滅するために空へと駆け上がる。
村の人たちは今までの常識を疑いたくなるような光景ばかりを目にし、これは夢でないかと思っていた。
実際にアクアマスターは10秒で数値にして3万以上の魔力を消費し、世界最強レベルの学園長でさえも100秒以上持つことはない。
そんな魔法を自由自在に操りワイバーンを一掃したレインに先ほど紅蓮の翼を広げ飛びあがったティア。
本来バーストウイングは本来上級魔法に当たるのだが、それを無詠唱、さらに魔物を一掃する圧倒的な力。
普通の人ならこれを聞いたとしても冗談にしか聞こえないだろうが、

実際に見てしまったので否定することもできない。
「レイン、お前の仲間は何者なんだ？」
「私とティアは意外と普通ですよ。後2人いますけど、そっちの2人はさらに常識を外れてます。特に私たちのリーダーの人はティアでさえもなにもせず無力化されます。」
レインの言葉を否定したいが、あの光景を見てしまっては完全に否定できずにいた。
「今、その人たちがこの事件の収拾に向けて動き出しています。私たちもこの辺りの魔物を一掃したら、そっちの方に行くつもりです。もう少し待っていてください。」
国が数日で追い詰められるほどの事件を、たった4人で解決できるわけないと思う半面、なんとかなるかもしれないと思ってしまう村の人であった。

第67話

沙耶たちはカルーンの代表者たちが集まっている中央の会議場を訪れていた。
「現在会議中により立ち入り禁止です。」
警備の人に止められてしまうが、そんなことを気にしている場合ではないので瞬時に意識を刈り取り、会議場へ乗り込む。
「な、なんだね君は。」
突然の乱入者に驚く代表者たち
「私はルクセント学院の生徒です。学園長から手紙を預かって参りました。」
紹介状を渡すが、登場の仕方が派手すぎていまだに会議場はざわめいている。
そして紹介状を読み終わり
「君たちが怪しいものではないと分かったが、流石にクリスタルの位置を教えるわけにはいかない。」
「そっちの方は今はいいです。それより黒いマントで体を覆っている黒目黒髪の男を見かけませんでしたか。」
「いや、そんな話は聞いていない。」
「そうですか・・・・・」
予想していたとはいえ何の情報もなしに魔王を探し回るのは効率が悪すぎるため、今後の活動を考えていたところ
「君たちはいったい何をするつもりだ?」
「この事態を引き起こした魔王と名乗っている者を殺しに来ただけです。」
「国1つを滅ぼそうとしている存在を君たちが倒せると?」
「信じてもらう必要はありません。ここにきたのは少しでも情報を集めるためです。」
突き放すような沙耶の態度に、代表者の一部が憤るがそんなことを

いちいち気にする程沙耶は繊細にはできていないため無視する。
「君たちはこの事態を収拾できるのか？」
「私たちの他にあと2人いますが、そっちはシーファ一族の救援に向かわせています。おそらくもう方は付いているでしょう。私たち4人が全力で収拾しようと思えば2日で収拾できます。」
「それなら、この事態を収拾してもらえないだろうか。もちろん礼はする。」
「お断りします。私たちはカルーンがどうなろうと興味はありません。それにそんなことをすればまた逃げられてしまう。」
カルーン側の要望を一蹴する。
「それなら・・・「敵襲です！！」」
警備の人が慌てた様子で会議室に駆け込み叫ぶ。
そして、その報告に会議室が混乱する。
「落ち着け！！」
一部の人が事態を治めようとするが、不安が不安を呼び泣いている人もいれば、訳の分からない叫びをあげる人もいた。
そんな中沙耶が
「黙れ！！！！」
沙耶の一喝で会議場が静まる
「代表者のあなたたちが混乱してどうする！！　今あなたたちがやらなければいけないことを見失うな！！」
混乱していた人たちが沙耶の言葉で正気を取り戻すが、それでも敵の手が首都にまで及んでいる事実はどうしようもなく、この状況でなにをどうすればいいのか分からなかった。
「交換条件だ。この場は私たちが何とかします、その代わりクリスタルの位置と魔王の情報を集めてもらいます。」
沙耶の提案に会議場が本来の役割を果たし始めるが
「あまり時間はない、あと3分で決めてください。」
その言葉に代表者の意見はすぐにまとまった。
「分かりました。その条件をのみます、あとはお願いします。」

その言葉を聞くと沙耶とエルーは会議場から去っていた。

会議場から出ると状況を聞き出し瞬時に判断する
「エルーは反対側から魔物の殲滅をお願い。」
「分かりました。」
短い返事を返すと
「固有制御3倍速」
エルーが沙耶が使っていた固有制御を使い限界を超えた速度で街の外に急ぐ。
それを見届けた沙耶も
「固有制御3倍速」
人の限界を超える禁呪を使い、反対の方向へと走る。
すでに魔物は街の中まで侵入し、街を破壊しながら人を襲っていた。
「死ね。」
沙耶は自分が使える能力をフルに活用し、魔物の殲滅と住民の救出を行う。
死の宣告で魔物を殺し、フレズベルクの風で住民たちを守る。
圧倒的な力で戦場を駆け抜ける姿はまさに戦神、5分もせずに街の中にいた魔物たちを一掃する。
そしてその場を、街の警備に任せ街の外に急ぐ。
街の外に出るとそこには千を超える魔物群れが存在していた。
ここにそれだけの数が存在しているということは、ほとんどの町や村が滅ぼされたということ、自分の無力さに噛みしめるが沙耶は瞬時に冷静さを取り戻し、目の前の魔物を一掃すべく魔物の群れを見る。
「死ね。」
その言葉で千を超える魔物はすべて死んだ。
そして認識外にあった魔物の残党を殲滅するため、戦場を駆け巡る。

ｓｉｄｅ　エルー

エルーが走った方向にも魔物は街の中まで侵入していた。
その魔物たちに愛用の魔具から魔弾を撃ち、仕留めていく。
しかし、街の中では死角が多く銃では殲滅に時間がかかってしまうため、新しいエルーの魔具を発動させる。
発動させた魔具はエルーの腕輪、名はグレイプニル。
北欧神話において、神と巨人、秩序と混沌の戦争、世界の終焉といわれる、ラグナロクまで魔狼フェンリルを縛りつけていた紐。
その名の通り腕輪から目に見えないほど細い、糸とも言っていい紐を出現させ街中に張り巡らせる。
張り巡らせた紐は追尾機能を持っており、触れたら最後、そこらじゅうに張り巡らせた紐が襲いかかり解体する。
障害物が多いところでその真価を発揮するグレイプニルはエルーの卓越した状況把握能力と繊細な魔力コントロールがあってこその物であり、紐は指輪が壊れない限り無限に出すことができ、１本１本に魔力が込められ簡単には切れない。
グレイプニルで街の魔物を一掃すると、街の外に出る。
そこにはやはり千を超える魔物が蠢いており、障害物がない外ではグレイプニルはあまり効果が発揮されず、かといって魔弾では時間がかかるため、さらに新しい魔具を出す。
「これはあまり使いたくなかったんですが仕方ありませんか。」
エルーが持っているのは小さな宝石だった。
「ヘイルダム。」
北欧神話においてラグナロクの時ロキと相打ちになった光の神の名。
その名を呼ぶと、宝石が白く光り、魔法陣が浮かび上がる。
それを魔物の群れに向かい投げつける。
すると半径１００ｍの円型の魔法陣が出現し、その円を囲むように光の壁が現れ魔物たちを閉じ込める。
そして次の瞬間、膨大な光の奔流が地面の魔法陣から天に上るよう

に流れ始め魔物たちを一掃する。
この魔具は、ルミナスサークルという魔法を刻み１０００万を超える魔力を封じ込めレヴァンティンと同じ封印を施した宝石で、名を呼ぶとその封印が解け数秒後ルミナスサークルが発動される。
本来のルミナスサークルではそこまでの規模はないのだが、１０００万を超える魔力を込めた宝石から一気に魔力が流し込まれ大規模な魔法を発動させる、単発式広範囲殲滅用魔法爆弾。
これが、魔具ヘイルダムの正体であり、１つ作るのに1時間以上かかるため作るのにも手間がかかり、なにより半径１００ｍという広範囲に効果が及ぶため使い勝手があまり良くないのだが今回は逆に幸いし１０００を超える魔物をほぼ殲滅した。
「あとは残党の駆逐ですね。」
残った魔物を駆る為に、愛用の魔具を取り出し再び戦場を駆け巡る。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第６８話

ｓｉｄｅ　代表者たち

沙耶たちが去った後、沙耶たちに一縷の望みをかけ街を囲んでいる万を超える敵を高台から見ていた。
その光景には絶望しか湧かず、カルーンはもう終わりだと誰もが思っていたが、突然町の北の門の魔物の進行が止まり、それから数分後反対の南の門の方向から天に光の本流が昇っていき魔物が消滅した。
「なんだあれは・・・・・」
誰もがもう終わりだと思っていたこの状況下で、たった2人の少女が街を囲んでいる魔物を殲滅していく。
そして、突然西の門の方から地獄の業火すら生ぬるい、紅蓮の炎が魔物を焼く尽くし、東の門からは大量の水が渦巻き魔物たちを飲み込み、水の精霊が巻き込んだ魔物たちを水の檻に閉じ込め上空から隕石とも思えるほど巨大な氷の塊が降り注ぎ魔物たちを殲滅していく。
万を超える魔物たちをたったの２０分程度で殲滅したあり得ない光景に全員が信じられないといった顔をする。
「彼女たちはいったい・・・・」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

沙耶は眼前の魔物の殲滅を終えると街の外を回るように魔物たちを駆逐していった。
沙耶の力の前には敵の数が億を超えようと等しく無力であるが、認識でないと力が発揮できないので町の外を回りながら魔物たちを駆逐してく。

突然ティアから通信が入る
『サヤ、今首都のそばまできてるんだけどなにかすることある？』
「ちょうどいい、目の前にいる魔物を殲滅してくれ。」
『ＯＫ、レインと挟撃するからすぐに終わるよ。』
通信が切れると、隕石のような氷と、滝のような炎がそれぞれの方向から降り注ぎ爆音を立て大地を揺らす。
「あとは残党狩りだな。」
運よく生き残った魔物も沙耶たちに駆逐され１５分後殲滅が終了し、会議場に戻った。

会議場に戻る前に街の中央で一旦全員合流する
「村は無事だったか？」
「多少の被害はありましたけど、思ったより被害は酷くなかったです。」
「一応サヤにもらった結界は張っておいたよ。」
「あれなら数日は持つだろう。」
情報を交換しながら会議場に向かう。
早めの処置が幸いし街はあまり被害を受けておらず、住民も無事だった。
「それで今からどうするの？」
「とりあえずクリスタルの位置を把握して、魔王を待ち構える。」
「これだけ暴れられてクリスタルは大丈夫なの」
「分からないが、今はそれしかない。」
情報が圧倒的に足りず後手に回るしかない状況で次善の策をとるしかない沙耶たち。
そうしている内に会議場までたどり着く。
「あの場は私たちが処理しました。約束通りクリスタルの位置を教えてください。」
約束の報酬をもらいうけようとするが
「君たちはクリスタルの位置を知ってどうするつもりだ？」

「もちろんクリスタルを守りに行きます。」
「それなら教えることはできない。」
カルーン側は約束を反故する。
「どういうつもりですか？」
それでも冷静に沙耶は聞き返す
「今君たちにここを離れられては次の襲撃のときに耐えられない。クリスタルの位置を知っている者は私たちしかいない。そうなれば君たちはここに留まるしかない。」
「カルーンの代表ともあろう方々が約束を反故するつもりですか？」
「なんといわれようと民には変えられない。」
どうあっても沙耶たちを引きとめようとするが
「そちらがそう出るなら、カルーンは私たちが滅ぼします。」
あの沙耶がやすやすと相手の思惑にはまるはずもなく、とんでもないこと言い出す。
「なっ！！」
予想外な反応に会議場がどよめく。
「今滅ぼしても、魔物がやったと勘違いしてくれますからね。そちらが情報を渡してくれないというなら、あなたたちに利用価値などありません。」
冷たく言い放つ沙耶
「クリスタルと引き換えに国を滅ぼすつもりか！！　いったい何人の人がいると思っている！！」
沙耶の言葉に一部の人が反発するが
「なにを言っているんですか、クリスタルが破壊されたら北の大陸の結界が完全に破壊されカルーンだけでなく、他の２国にも被害が及ぶ。どっちを取るかと言われたら滅びかけのカルーンより他の２国をとる方が当然の選択でしょう。それに、他の２国からの応援を素直に受けておけばここまで深刻な事態にはならなかったはずです。」
沙耶の正論に反論できず黙ってしまう。

「それでどうするつもりですか？」
沙耶が再び選択を迫るが
「サヤさん、カルーンは私の祖国です。お願いしますこの国を助けてくれませんか。」
そこでレインがカルーン側を援護する。
「私からもお願い、レインの祖国がこのまま滅んでいくのは見過ごせない。」
続いてティアがレインに着く。
「・・・・・・・・・私が駄目だと言ったら。」
「その時は素直に諦めます。一族を救えたのはサヤさんのおかげです。私はサヤさんの指示には従います。」
カルーンの代表者たちはこれで駄目ならもう終わりだと分かっているため、レインに最後の望みを託す。
「・・・・・・・・・今回だけだぞ。」
身内には厳しくなれない沙耶が折れレインからの頼みを受理する。
「ありがとうございます。」
レインが顔をほころばせお礼を言う。
「もちろんタダでというわけにはいかない。この先もいいように利用されるわけにはいかないからな。」
「はい。そのあたりはサヤさんにお任せします。」
「ということです。レインに感謝するんですね、レインがいなければこの国は終わっていた。」
代表者の方を向き、お前たちの為じゃないという意味を込め再び交渉を始める。
「本当にありがとうございます。」
その言葉に込められた意味を理解したのか、下手に刺激しないよう言葉を選びながら謝礼を述べる。
ここで交渉に失敗すればカルーンは間違いなく滅びる。
文字通りその肩にはカルーンの運命を背負っていた。
「この街には数日間程度の食糧はありますか？」

「避難している人の数にもよりますが、おそらく大丈夫だと思います。」
「では、この街を結界で囲みます。強度はドラゴンの群れが襲ってきても問題ないくらいになっていますのでこれを張れば大丈夫でしょう。」
「それはどうやって張るのですか？」
「これを発動させればそれで終わりです。」
沙耶が取りだしたのは、エルーが学園祭の時、学生たちを守る為に使っていた簡易式の結界を張ることができる宝石を４つ取り出した。
「もちろんタダで譲るわけにはいきません。それ相応の対価をもらいます。」
「しかし、本当にそれでこの街を守れるのですか？」
「信じてもらえなければこれでこの話は終わりです。」
「わ、分かりました。その対価はなんですか？」
必死に食い止めるカルーンの代表者。
「クリスタルの位置と魔王の情報を集めることは先の一件の報酬です。それとは別の報酬を用意してもらいます。」
「その報酬とは？」
「この宝石１つ１つに１０００万を超える魔力を込めています。それを封じ込めるためにもかなり上級の宝石と処置を施している魔具です。これら４つを買い取ってもらいます。それにこれから必要となる物を譲るわけですから、この街にある物をいくつかもらっていきます。」
沙耶から提示された条件は聞いた限りでは厳しくないものだが
「その魔具の値段は？」
「１つ白金貨１００枚です。」
日本円に直すと約１億円、４つで４億円。
かなり高額と思われるが、ドラゴンでさえも破れない強度に数日以上持続できる結界を誰でも使うことができる魔具にしてはこれでも安い方であるが、疲弊しているカルーンにそんな余裕があるわけも

なく
「そんなお金いますぐには用意できません。後払いというわけにはいきませんか。」
「あなたたちの先ほどの対応を見てそれを信じろと言いたいんですか？」
的確に追い詰めていく沙耶
「ではどうすれば？」
「それを考えるのがあなたたちの役割なのでは？」
「お金ではありませんがこれを。」
そう言って取り出してきたのは、煌びやかな装飾が施された腕輪だった。
「これはカルーンに代々伝わる腕輪です。これを売れば提示された金額に届くと思います。」
「いいでしょう。では結界を起動します。結界を解くときは魔具を壊してもらえば結界を解けます。」
そういうと沙耶が４つの結界を同時に発動させ４つの結界は相乗効果により比類なき強度の結界を展開する。
「ちなみにこの結界は内からは出ることができますが、外から入れません。なので他の避難者が来たときは中の人が手を出して中に招き入れてください。」
「分かりました。それではクリスタルの位置ですが、この街から北西の方向に３００ｋｍ程行ったところにある霊山の頂上にあります。霊山が結界を張っているので山には入れないようになっていますが今はどうなっているか分かりません。」
「分かりました。では通信用魔具を渡しておきますので魔王の情報があったらこれで伝えてください。」
魔具を渡すともう用はないと踵を返し会議場を後にしようとする。
「本当にありがとうございます。」
最後に謝礼を受けると会議場を後にし、クリスタルが祭られている霊山へと向かった。

第６９話

現在沙耶たちは首都を出発しクリスタルがある霊山に向かっていた。
「ねぇサヤ、まだクリスタル無事だと思う？」
「可能性としては半々だ。カルーンを襲ったのはクリスタルよりも私たちをどうにかするためという理由の方が強いはずだ。」
「じゃあ、クリスタルを守る必要ってあるの？」
「正直クリスタルが破壊されようがいまさらだ。それでも向こうは可能な限り破壊したいだろう。転移の魔法陣があるとはいえ封印状態の大陸から呼び出すのはかなりの負担になってるはずだ。」
「ふ～ん。・・・お客さんだね。」
沙耶たちの道を遮るように魔物の群れが現れる。
「何度来ても同じだ。」
沙耶が力を使い、魔物に死を与えようと瞬間、背後から魔族が襲いかかってくる。
「無駄だ！！」
瞬時に反応し魔族を殺すが、死んだ瞬間体に魔法陣が浮かび上がり、沙耶を除く全員を転移させた。
「くっ、相変わらず自分以外は駒扱いか！！」
再び魔物の群れに向き合い死を与え、通信用魔具を取り出し連絡を取ろうとする。
「みんな無事か！！」

ｓｉｄｅ　エルー

エルーたちが跳ばされたのはカルーンのどこかと思われる荒野だった。
状況を確認しようとした瞬間に沙耶からの連絡が入る。

『みんな無事か！！』
「はい。特に被害はありませんが、どこかに跳ばされてしまったようです。」
『よかった。』
「これから、そっちに向かいます。沙耶は先にクリスタルのところまで行ってください。」
『わかっ』
沙耶からの返事が帰ってくる前にエルーたちを漆黒の剣が襲う。
かろうじて交わすことに成功するが通信用魔具が破壊された。
「いきなりな御挨拶ですね。」
戦闘態勢を取り攻撃を放った来た方を見る。
「礼儀を知らない田舎者でね。多少の無礼は許してくれ。」
そこには黒いマントで体覆った魔王が立っていた。
「いきなり攻撃してきて無礼とはよほど田舎から来たらしいですね。」
「そのことは謝ろう。しかし、サヤ・カミナギだけは君たちの中でも要注意なのでね。彼女の前に君たちから倒させてもらおう。」
「この前の戦いを忘れたんですか？」
「いや、確かに私1人では君たちを相手するには少々骨が折れる。なので少々応援を呼ばせてもらった。」
魔王が指を鳴らすと、魔族やドラゴンなどの強力な魔物が現れる。
「それで勝ったつもり？」
ティアがレヴァンティンを振り魔物たちを焼きつくす。
「いくら数を揃えたからってこれじゃ意味ないよ。」
「分かっているとも。だからこそ仕掛けを打っておいた。」
再び指を鳴らすと、魔物がティアに襲いかかる。
だがレヴァンティンの炎の前に一瞬で塵となる。
しかし、
「そこだ。」
魔王の1言でティアの背後から魔族が現れる。

「っ！！」
襲いかかった魔族をぎりぎりで焼き払うがティアの手からレヴァンティンが弾かれる。
それをシーファの村で現れた魔族が拾う。
「よくもあの時はやってくれたわね。」
あの時、魔王がギリギリのところで転移させたがそれでも完全にかわせず所々酷いやけどを負っていた。
「君たちは確かに強い。だがそれは魔具のおかげだ。それさえ取り除けばたいした脅威ではない。」
魔王は的確にティアたちの弱点を突いてくる。
魔具を持てばそれこそ世界最強と言っていいほどの強さを発揮するが、魔具がなければ学生レベルの実力しかない。
「あはははは！！　死ね、死ね、死ね、死ね、死ね！！」
魔族がレヴァンティンの魔力を使い力任せの攻撃を放ってくる。
沙耶が作る魔具は魔力が込められているだけなので、基本的に誰にでもその恩恵を受けることができる。
しかし、それはあくまで基本であり、その基本から大きく外れたレヴァンティンは違う。
「ぎゃあああ！！」
レヴァンティンを使っていた魔族が突然悲鳴を上げる。
「レヴァンティンは私の為だけの魔具、私以外が触れたらその業火は持ち主をも焼きつくすんだよ。」
沙耶が作る魔具は、持つ本人が扱える魔力の限界の魔力を込め作られる。
しかし、レヴァンティンだけは完全に限界を超えた魔力を込められた物であり、ティアの特異体質があってこそ扱うことができるティア専用の魔具。
それは、炎属性が得意な魔族だろうが例外はなくレヴァンティンを持っていた腕が溶けレヴァンティンが再びティアのもとに戻る。
「今度こそ死ね。」

腕を抑えている魔族に無慈悲な炎が襲いかかり今度こそ塵も残さず消え去った。
「甘かったね。サヤがその程度の策に何の対策もしてなかったと思ってたの？」
レヴァンティンの切っ先を魔王に向ける。
「確かにまだ甘く見ていたようだ。まったくどこまでもてこずらせてくれる。」
ティアがそうしている間にエルーとレインが他の魔物たちを殲滅していた。
「これであの時の状況と同じだね。」
「やはり君たちは私自身で殺すしかないようだ。」
「やるつもり？」
「いや、今はやめておこう。そもそも君たちは囮で、私の狙いは１人なった彼女だ。」
「私たちも倒せないのにサヤを倒せると思ってるの？」
「どうだろうな。」
沙耶の力を知っているにもかかわらず余裕の笑みを浮かべる。
「では、私はこれで失礼しよう。」
「させると思う？」
それぞれ魔具を魔王に向ける。
「君たちの相手はこいつらにしてもらう。」
再び魔物の群れが現れ、魔王を隠すように襲いかかってくる。
すぐに殲滅するが、すでにそこには魔王の姿はなかった。
「さっきのあいつの言葉、どう思う？」
ティアが先ほどから疑問に思っていることを口に出す
「沙耶の体の時間の流れは止まっています。なのでどれだけ攻撃を受けようとすぐに回復するので絶対に死にはしません。」
「魔王はそのこと知らないんじゃないの。」
「でもなにか嫌な予感がする・・・・とりあえずサヤに連絡しよう。」

「とりあえずサヤのもとに向かいましょう。」
ティアが通信用魔具を取り出し、サヤに連絡を取る。
つながったと思った瞬間
『無事か！！』
大音声で叫ばれ、ティアが耳を押さえていた。
「大丈夫だよ。それより魔王が沙耶を狙ってるから気をつけて。」
『分かった。とりあえず霊山まで来てくれ、そこで一旦合流しよう。』
「ＯＫ」
通信を切ると
「沙耶は無事でしたか！！」
エルーが身を乗り出してくる。
「大丈夫みたい、とりあえず合流したいから霊山まで来てって。」
「では、早く行きましょう。」
エルーたちは魔物の死骸できずいた山を背に霊山へと向かった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第６９話（後書き）

沙耶についての報告がありますので、活動報告をご覧ください。

第７０話

「よかった。」
ティアとの通信を終えとりあえずみんなが無事だったことに安心する。
「行くか。」
思考を切り替え霊山へと向かう。
（それにしても私を狙っている？　確かに私は魔王にとって排除したい存在だろうが、生半可な手では私を排除できないのはよく知ってるはずだ。それに気になるのは私を孤立させたことだ。私が１人の時のみ使える手段でもあるのか？）
思考に没頭しながらも、襲いかかってくる魔物には冷静に判断し確実に死を与えていく。
しかし、突然背後から衝撃が走る。
「ぐっ！！」
しかし、背後にはなにもなく、次なる衝撃が左右から走る。
「っ、くだらない小細工をしてくれる。」
「姿が見えなければあの力は使えないようだな。」
姿が見えない中、男の声だけが響く。
「お前が魔王か？」
「いや、私は魔王からの刺客とでも言っておこう。」
「魔王はどこにいる？」
「教えるわけがないだろう。そもそもここで死にゆく者になにを教えても無駄だ。」
姿が見えない男の攻撃が再開するが
「無駄だ。　その程度の攻撃でフレズベルクの風の鎧は破れない。」
フレズベルクを抜き風の鎧を展開する。
「っち、いったん引かせてもらおう。」
何度か攻撃を試みるもすべて風の鎧で受け流され沙耶に届かず、無

駄だと思いこのことを報告するために逃げようとするが、
「ここまでやって逃げられると思うなよ。」
「姿が見えない私相手になにができる！！」
「こうするんだよ。」
次の瞬間、姿が見えなかった魔族の姿が見えるようになる。
「な、なにをした！！」
突然、姿が見えるようになり慌てる魔族
「お前のセリフをそのまま返してやろう、ここで死にゆく者になにを教えても無駄だ。」
セリフを言いきると、魔族はすでに死んでいた。
「無駄な時間をとってしまった。少し急ぐか。」
そしてなにもなかったかのように霊山へと走り出す。
先ほど沙耶がなにをやったかというと、沙耶の力を使い沙耶が認識した声の持ち主の魔法を殺しただけである。
沙耶の力は沙耶が認識さえできればその力は適用され、例え姿が見えなかろうが、そのものが発する音やその物に触れさえすれば認識することができ殺すことができる。また、完全に認識できなくても距離を指定してその範囲の生命を殺せばどれだけ巧妙に隠れようと意味はなく、誰であろうと沙耶の力からは逃れることはできない。
「ここか・・・・」
沙耶の目の前にそびえ立つ霊山を見上げる。
「まだ来てないか・・・・」
周りを見回してみるがエルーたちはまだ到着しておらず、どうするか悩んだがとりあえずクリスタルの安否を確認するために霊山を登っていく。
「結界が解除されてる。クリスタルは絶望的だな。」
霊山に張られている結界が存在せず、すでに何者かが立ち入った後だということは誰が見ても明らかであった。
しかし、山頂にはクリスタルがいまだ存在し、１人の男がクリスタルの前に立っていた。

「おまえか？」
沙耶があらゆる思いを込め尋ねる。
「ああ、私が魔王だ。」
余裕の笑みを浮かべ堂々と魔王と名乗る。
「早速だが死ね。」
これ以上話すことはないと、力を発動させ魔王を殺そうとするが
「悪いがここに存在している私は幻覚だ。いくら君の能力が強力であろうとこれでは殺せまい。」
流石に幻覚を認識したところで、幻覚自体は消すことができるが実際の魔王を殺せるわけではない。
「こんな悪趣味なことをしていったい何の用だ？」
「1度君とは話がしてみたかったのだよ。かと言って君の前にのこのこと姿を現わせばすぐに殺されてしまうのでね、こういった仕掛けを用意させてもらった。」
「私は話すことなどない。」
沙耶は魔王の提案を一蹴するが
「嫌われたものだな。まぁいい、サヤ・カミナギ、いや神凪沙耶、君も別の世界から来た存在なのだろう？」
「なっ！！」
流石に予想外の言葉が飛び出し動揺する。
「やはりそうだったか。君がどういう経緯でこちらに来たかは知らないが、私はこの世界の魔王に呼ばれたのだよ。」
「いったい何が言いたい。」
動揺から立ち直り、目的を聞こうとするが
「まぁそう焦るな、私が魔王に呼び出された時、すでに魔王は瀕死だったよ。そこで魔王は私の体をよこせと言ってきたがもちろん私は拒んだ。無理矢理体を奪うために魔王の意識が私の中に入ってきたが、私はそれを取り込みこの力を得た。」
沙耶はなにか言おうとしたが無駄だと思い黙って話を聞く
「私はもともと温厚な性格だったのだが、魔王の意識と混ざったせ

いか性格が少し変わってしまい、世界を滅ぼしてみたいと思うようになった。しかし、魔王は世界に敗れた、だから・・・・・」
「国同士を争わせようとした。」
魔王の言葉を遮り、続きを沙耶が言う
「その通り。計画は順調だったよ、君が現れるまでは。」
声質が変わり沙耶が身構える
「君が現れたおかげで計画はかろうじて成功しているものの、この先君がいては計画の成功はあり得ない。しかし、私は嬉しかったよ。やはり魔王に相対する勇者がいなくては物語として面白くないだろう。」
「物語なら魔王は勇者に倒されるはずだろう。」
「勇者が魔王に倒される物語も斬新でいいだろう。」
どこまでも余裕を持っている魔王に苛立ち
「戯言はもう十分だ。いつまでも隠れていては私は倒せないぞ。」
「それはどうかな。」
四方八方から魔族が現れ、沙耶に襲いかかるが
「何度やっても結果は同じだ。」
すぐさま力を使い殲滅するが、死体に魔法陣が浮かび上がる。
「これならどうかな？」
「何度も同じ手か通用すると思うなよ。」
瞬時に死体の存在を殺し、魔法陣を無力化するが一瞬、魔王から意識が離れる。
「かかったな。」
そして魔王が呟くとクリスタルが光だし閃光が沙耶の目を潰す。
「っち！！」
それと同時に大きな魔法陣が沙耶の足元から現れ、沙耶を中心に収束していく。
力で消そうにも目が見えなくては認識できず消すことができない。
「終わりだ。」
魔法陣が沙耶を捉えた瞬間沙耶の体が崩れ落ちる。

そして、クリスタルの中から魔王が現れる。
「いくら殺しても死なないなら、封じてしまえばいいだけの話だ。」
沙耶を見下ろし1人勝ち誇ったように呟く。
「これで私の勝ちだ。」
そういった瞬間、エルーたちが現れる。

第71話

side エルー

「遅かったな。もう終わってしまったぞ。」
倒れている沙耶を見下ろし、エルーたちに向かい勝ち誇ったように言う。
「ティアさん!! 落ち着いてください。」
いまにもとびかかりそうなティアを押しとどめる。
「サヤになにをしたんですか?」
ティアを押しとどめたが、エルー自身もいつ我慢の限界が来るかわからないほど憤っている。
「少し眠ってもらった、もっとも永遠に起きることはないだろうがな。」
魔王が言い終わった瞬間にティルヴィングを撃つが、魔王の魔法によって相殺される。
その光景にティアとレインが驚くが、エルーだけは冷静を保っていた。
「なにも驚くことはない。その弾の魔力を超える魔力をぶつけてやれば相殺くらいできて当然だろう。」
「そんな魔力をどこから出してるんですか?」
「私がクレンド、アトラス両国のクリスタルをすぐに破壊しなかった理由は2つある。1つは目的を悟らせないため、2つ目はクリスタルの膨大な魔力を利用するためだ。今ここにあるクリスタルは3つ分の魔力が込められている。その魔力を使えばあの程度の魔力などすぐに引き出せる。」
エルーは冷静ではいるが切り札であるティルヴィングを簡単に無力化され内心ではかなり焦っていた。
「さて、冥土の土産はここまでだ。そろそろ死んでもらおう。」

ただでさえ強力だった魔王の魔力はクリスタルのバックアップでさらに強力になりエルーたちに襲いかかる。
「エルー、引いて!!」
ティアがレヴァンティンで拮抗する。
「その炎にはてこずらされたが今度こそ終わりだ。」
「やれるものならやってみろ、シンモラの錠、第5開放。」
魔王の闇とティアの炎がぶつかり合い相殺される。
「第5開放の炎を相殺するなんて!!」
「その程度か、それならここまでだ。」
魔王が、あらゆる属性の魔法を膨大な魔力を込め放ってくる。
その一撃一撃にティルヴィングと同等の魔力が込められ、防戦一方になり徐々に追い詰められる。
そこで
「・・・・我呼びかけに応じその姿を現わせ!!」
先ほどから後方で詠唱していたレインが詠唱を終えウンディーネを召喚する。
「精霊魔法か、だが星の魔力の結晶であるクリスタルの力に拮抗できるかな。」
レインがウンディーネを召喚したと同時にアクアマスターを発動させ魔王の血液を蒸発させようとするが
「そのような小細工は無駄だ。私の体はすでにクリスタルと同化している。いまさらその程度ではどうにもならん。」
レインに向けて特大の闇の塊が放たれる。
「ウンディーネ!!」
それに拮抗するように水の塊を放つが、込められている魔力が桁違いであり闇に飲み込まれそのままレインをも飲み込もうとするが
「レインさん!!」
すぐにエルーが駆け付けティルヴィングで相殺する。
「ありがとう。」
「しかし、これはまずいですね。なんとかクリスタルを破壊できれ

ばいいんですが・・・」
クリスタルを狙おうにもディメンションルーラにより空間が曲げられ攻撃は届かず、ティルヴィングで撃ち抜こうにも魔王が相殺してくる。
「どうするのエルー。」
魔王の攻撃を相殺しながら尋ねてくるティア。
「ティアさん、レヴァンティンは最高でどこまで解放できますか？」
「第6解放まで、それ以上は周りすべてをまきこんじゃう。」
シンモラの錠をすべて開放すれば星の魔力を持とうが星そのものを焼きつくし魔王を倒せるが、エルーはサヤから呪いを受け、巻き込まれても大した問題ではないが生身であるレインはレヴァンティンの炎に耐えきれない。
「分かりました。ティアさん、レインさん、あなたたちの命を私に預けてください。」
「OK。」
「私も絶対にサヤさんを助けたい。」
2人がエルーを信じ命を預ける。
「ありがとうございます。では作戦は・・・・・」
「戦いの最中に相談か？」
作戦を離している最中も攻撃の手を緩めず、一撃で地形を変形させるような魔法を次々と放ってくる。
それをティアが作戦を聞きながらなんとか相殺していく。
「・・・です。早速ですが作戦を開始します。」
「相談は終わりか？」
「女性が話してる時くらい黙って待っていられないんですか？」
「前にも言ったが田舎者でね、そのような礼儀は持ち合わせていない。」
「そうですか。それなら1度死んで礼儀を学んできてください。ヘイルダム。」
エルーがヘイルダムを魔王に向かい投げる。

この範囲だとエルーたちをも巻き込んでしまうが、ディメンションルーラーで空間を曲げていようがその閃光は確実にクリスタルに届くが、そんなことを魔王が許すはずもなくヘイルダムが発動する前に破壊する。
しかし、ヘイルダムは１０００万という魔力が込められている魔具、いくら星の魔力を使えたとしても瞬時に破壊するほどの魔力を消費してしまい隙ができてしまう。
そこに
「シンモラの錠、第６解放。」
ティアがこの場で使用できる限界まで解放し、灼熱の業火を魔王に放つ。
魔王はすぐに空間を曲げ回避しようとするが、そこにレインがアクアマスターで氷漬けにし封じ、灼熱の業火が魔王を焼きつくすそうとするが
「先ほどの攻撃は危なかった。」
ぎりぎりのところで回避され無傷のまま立っていた。
しかし、エルーの作戦はまだまだ続く。
ティアが魔王に接近しレヴァンティンを振り下ろす。
ヘイルダムを相殺するために魔力を使い、先ほどの攻撃で完全に体勢を崩された魔王に触れたらあらゆるものを溶断する防御不可の刃が迫る。
「もらった！！」
「甘い！！」
レヴァンティンの刃は魔王を両断するはずだったが魔王の瞬時の判断でかわすし左腕を溶断するにとどめ、隙だらけのティアに魔法を打ち込むが
「甘いのはそっちだ、フレズベルク」
ティアは魔王に迫る前、炎で姿を隠しサヤからフレズベルクを抜き取り魔王に接近していた。
そしてフレズベルクの風の鎧で魔王が放った魔王はすべて他の方向

に向かっていく。
「これで終わりだ！！」
ティアが魔法を放ち隙だらけになった魔王に斬りかかる。
今度こそレヴァンティンの刃が魔王を両断するが
「残念だったな。」
両断されたはずの魔王がティアの背後に現れ、ティアに魔法を放つ。
風の鎧で攻撃をかわそうとするが、同じ風の魔法で風の鎧を無力化
しティアに魔法を打ち込む。
「ぐっ！！」
風の鎧を相殺するコンマ数秒の間にレヴァンティンの炎を纏わせる
が、炎を貫通しティアに大きなダメージを与える。
「私はクリスタルと同化しているといっただろう。いくら私を両断
しようとクリスタルが無事ならなにをしたところで無駄だ。」
「作戦通り。」
ティアが傷を抑えながら、笑みを浮かべた。
「なに？」
魔王は完全にティアに集中しクリスタルに接近していたエルーに気
付かなかった。
とっさにエルーに魔法を放つがレインがそれを相殺する。
「これで終わりです。」
エルーがティルヴィングを至近距離でクリスタルに打ち込む。
ディメンションルーラで守られているが破魔の刻印を刻んだティル
ヴィングに無力化されその弾丸がクリスタルに打ち込まれるが
「いい作戦だったが見通しが甘かったな。」
「なっ！！」
ティルヴィングは確かにクリスタルを破壊したが、すぐに復元して
しまう。
「これも言ったはずだ。このクリスタルは3つ分だと、たとえ1度
破壊されても3度壊さなければ完全に壊れることはない。」
無防備だったエルーに魔法を打ち込み吹き飛ばす。

しかし、エルーの体はすぐに復元する。
「ほう。彼女のような存在がまだいたとは、だが君の力ではもうクリスタルには届かない。唯一私に拮抗していた彼女はすでに動ける体ではない。これで終わりだ。」
魔王が今まで最高の魔力を収束させる。
「楽しかったよ。だがこれでお別れだ。」
魔王がその手を振り下ろす。
エルーたちはこれまでかと目をつぶるがいつまでたってもその衝撃は襲ってこない。
恐る恐る目を開けるとそこには
「私の仲間が世話になったな。覚悟しろ魔王、ここがお前の最期だ。」
眠っていたはずの沙耶がエルーたちの前に立っていた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第７２話

「なぜ、なぜ立っている。」
エルーたちを完全に葬るはずだった圧倒的暴力の塊が星の魔力で眠りに着かせたはずのサヤに消され、初めての動揺を抑えられない魔王。
「簡単なことだ。お前が私に掛けた呪いを解いただけ。」
「ふざけるな!!　あの呪いはクリスタル１つ分の魔力を込めたものだぞ、いくら簡単な呪いだからといって魔力が足りるわけがない!!」
あまりにも不可解な現象に声を荒げる魔王。
「お前はまだ私の力を勘違いしている。私の力はあらゆるものに死を与える力。それは目に見える物体だけだはなく、目に見えない空気や空間すら例外はない。」
「質問に答えろ!!」
いつも余裕を絶やさなかった魔王が動揺を隠そうとせず怒鳴る。
しかし、沙耶はいつもの通り冷静さを保ち魔王の怒声をものともせず話し続ける。
「私が死を与えられるものは概念さえ例外じゃない。それが認識できれば私に殺せないものなどない、たとえそれが神と呼ばれるものでも。魔王これがなんだかわかるか?」
沙耶が見せたのは沙耶が初めて手に入れた指輪の魔具。
「魔力をためる指輪だろう、そんな指輪ごときに溜められる容量でクリスタルにかなうはずが・・・まさか。」
なにかに気付き言葉が途切れる。
「気付いたようだな。そうだ、指輪に込められる魔力の限界を認識できればそれを殺し限界を無くすことだってできる。そしてその指輪に常に魔力を込め続けていたんだ。」
沙耶はいくら魔力を使おうとすぐに全快する。

それを利用し、この指輪を買った時から常に魔力を込め続けていた。
その魔力量は１０億を超え、星が内包する魔力を軽く超える。
「そんな馬鹿な。」
「私にはこんな魔力は制御できないが、解呪なら話は別だ。ただ解呪の魔法に魔力をひたすら込め続ければいいんだ。流石に星の魔力だけあって解呪に時間がかかってしまったが、その時間をみんなが稼いでくれたおかげで、ようやくお前の姿を認識することができた。」
それはすなわち魔王の死を意味する言葉、その言葉を突き付けられ後ずさり
「しかし、いいのか？　私を殺すということはクリスタルを破壊するということ、そんなことをすれば世界中に被害が及ぶぞ。」
「だからどうした。そんなもの北の大陸ごと消滅させれば何の問題もない。」
魔王の脅しも沙耶には通じずついに魔王の最期の時が訪れる。
「今までお前には随分と世話になった。それもここまでだ魔王。」
「あああああ！！」
最後の悪あがきに手当たり次第魔法を放つが
「死ね。」
沙耶の死の宣告が魔王に下され魔王の命が終わる。
魔王が倒れたと同時にクリスタルが壊れ、北の大陸の結界が完全に解かれる。
しかし、転移の魔法陣さえ潰してしまえばほとんどの魔物は大陸を渡ることができないので、多少の被害はあっても大した変化はない。
「終わったか。」
沙耶が呟くと
「サヤ！！」
エルーが駆け寄り抱きつく。
「エルー。」
抱きついてきたエルーを抱きとめ抱擁を交わす。

「これで終わりなんですね。」
「うん。事後処理はいくつか残ってるけど、魔王は倒した。これでまたあの平穏な日々が遅れるよ。」
「はい。」
抱き合ってる2人を除いたティアとレインは
「よかった。」
ティアが傷を抑え沙耶が無事だったことに一息つく。
「ティア、大丈夫!!」
「ちょっとやばいかも・・・」
「今傷をふさぐから。」
レインがティアに駆け寄り傷を塞いでいく。
「ありがと、だいぶ楽になった。」
「ほんとに心配したんだから。」
涙目でティアに寄り添うレイン。
「でもあの時は、エルーを信じてやったことだから仕方ないよ。」
そんなレインを抱きしめながら言う。
「分かってるけど、あんまり無茶しないでね。」
「無茶しようにも、あんな敵そうそういないよ。」
この2人も戦いの終わりを祝福するように抱擁を交わす。

それから10分ほど経ち4人が集まる。
「帰ろう私たちの家に。」
沙耶の言葉にみんなが頷こうとした瞬間、沙耶が光に包まれる。
目を開けた時に映る景色は白い空間がどこまでも続く場所だった。
「ここは?」
沙耶が呟くと1人の女性が現れ
「ありがとうございます。あなたのおかげで世界は救われました。」
いきなり頭を下げる。
「は!?」
状況について行けず間の抜けた声を出してしまう。

「申し遅れました。私はこの世界を管理している者です。」
「待て、少し時間をくれ。」
「どうぞ。」
しかし、状況を整理しようにもいきなり連れてこられ、世界の管理者を名乗る女性がお礼を言う状況をいくら整理しようとしても無駄だった。
「とりあえず質問していいか？」
「はい。」
「ここはどこだ？」
「世界の狭間の空間です。世界に干渉しすぎると世界が潰れてしまいますのであまり使いませんが。」
「なぜ私を呼んだ？」
「1つは私が管理する世界を救ってくれたことに対するお礼です。2つ目は謝罪です。」
「謝罪？」
「あなたはこの世界に呼んだのは私です。今さらかもしれませんがすみませんでした。貴女がいなければこの世界は魔王に滅ぼされいました。」
「そのことは別に気にしてない。この世界に来れたからこそ手に入れた物がたくさんある。むしろこっちがお礼を言いたいくらいだ。」
「そう言ってもらえると助かります。実はもう1つあなたに話しておきたいことがあります。それはあなたに関することです。」
「私に？」
「ラグナロクを知っていますか？」
「北欧神話の神々の黄昏のことか？」
「はい。そのときオーディーンがフェンリルに殺されました。そのときオーディーンの力の欠片が数多ある世界に飛び散り人に溶け込んでしまったんです。それでも適合しなければ何の影響も及ぼしませんが、適合者は超人的な能力を得ます。あの魔王と名乗っていた人物もその1人でした。彼は魔王に体を奪われようとした時に覚醒

し魔王を乗っ取り、あれほどの力を持つことができたんです。」
オーディーン、北欧神話におけるアース神族の主神にして、戦争と死の神。
「その欠片が私の中にもあるのか。」
「はい。しかし、あなたは特別です。オーディーンの欠片を取り込んだところで人間の限界を超えることはありません。あなたはオーディーンの欠片を取り込みそれを変革させた。その時に得た能力があなたの力です。」
「なぜそんなことが？」
「詳しくは分かりません。これは推測ですが、オーディーンの欠片を取り込んだ時あなたは強く何かを思ったからだと思います。」
沙耶の脳裏に浮かぶのは地獄のような日々の中、擦り減っていく精神がそれでも人の根源にある生存本能が誰かの死を強く願った時の自分。
「あなたのその力は世界や本物の神さえ殺すことができる究極の力です。恐らくですがオーディーンでさえも。」
なにを言いたいのか沙耶の聡明な頭脳はすぐに理解し次の言葉を待つ。
「あなたはあなたを苦しめた世界やその世界を作り出した神に復讐することができます。あなたにはそれを行う力も理由もある。私の世界を救ってくたお礼に復讐の相手のところまで案内しましょう。もちろんあなたが望むならの話ですが。」
沙耶が元の世界で過ごした１５年間、絶望さえも感じさせないほど希望はなく、周りから見れば不幸としか思えなくともそれが本当に不幸か分からないような生活を強要した世界。
しかし沙耶の答えは
「いや、私は私が望んで殺した。その罪を世界にも神にも押し付けるつもりはない。私には傍で支えてくれる仲間がいる、だから復讐なんて必要ない。」
沙耶がこの世界に来て半年、いままで触れたことないものばかり触

れ、たくさんのことを教えてもらい、たくさんのものを貰ってきた。
沙耶の人生の中で最も大切な半年はあらゆる面で沙耶を成長させた。
「ここに呼んだのがあなたで本当によかった。」
最後にそういうと、白い空間が崩れ始め気付くと元の場所に戻っていた。
「どうかしたんですかサヤ？」
呆けていた沙耶に尋ねてくるエルー。
「なんでもないよ。」
「そうですか、では帰りましょうか。」
「うん。」
「２人とも早くー。」
向こうで叫んでいるティアのもとに２人で向かい、そして４人で４人が帰る場所であるあの家へと帰っていた。
（この世界は必ず守る。だから安心して見ていろ。）
沙耶が心の中でそう呟いた時
（ありがとうございます。）
世界の管理者を名乗る女性からお礼を言われた気がした。
こうして、半年間の長い戦いが幕を下ろし沙耶たちの物語は続いていく。

第７２話（後書き）

ここで本編は終了となります。
これからはその後の話です。
続編を書こうか迷っているので大体１０話前後くらい続くと思います。

第７３話

魔王との決戦から数日後、沙耶たちはいつも通り学園に通い平和な日常を過ごしていた。
しかし、あれだけのことをやらかした沙耶たちが放っておかれるはずもなく何度も学生にやらせる依頼とは思えないレベルの依頼が学園長のもとに殺到し、学園長の精神が日に日に擦り減っていた。
もちろん沙耶たちにそんな依頼を受ける理由などなく完全に無視を決め込んでいる為、この学園に乗り込み直接交渉をしようとする者もいるが、基本的に学生以外はこの島には入れずそれでも入ろうとしてくる相手にはやはり学園長が対応していた。
さらに対応してくる相手は各国の身分が高い者ばかりで無下に扱うこともできず学園長はついに我慢の限界を迎えようとしていた。
なぜ沙耶たちがこんなにも有名になったかというと、魔王を倒した後、流石にカルーンに魔物を残していくのはまずいということで丸１日をかけ魔物たちを可能な限り倒しそれをカルーンの代表者たちに伝えて帰ったためである。
そのため、沙耶たちの力が世界中に広まってしまい、このような状況となっていた。
そして、沙耶は学園長室に呼び出され
「おねがいします。この状況をどうにかしてください。」
すっかり胃薬が手放せなくなった学園長がげっそりとした顔で、もう限界という表情を浮かべ頭を下げる。
「めんどくさいのでお断りします。」
しかし、沙耶はそれを一蹴。
身内にはどこまでも甘いが、他人には血も涙もないような態度をとる。
そして、それだけ言うと立ち去ろうとするが、
「お願いです、待ってください！！」

必死の表情で沙耶を引き留める。
「放してください。読みたい本がたまってるんです。」
引き離そうとするが、沙耶はもともと力は弱いため引きはがせずにいた。
「本当に、本当に限界なんです。毎日のように伯爵家以上の貴族や、国の使者がやってくるんです。しかも、あなたたちがそんな態度をとるから出来るだけ穏便にことを済ませる為に細心の注意を払って対応してるんです。お願いします、このままでは精神が崩壊します。」
なりふり構っていられる状況ではなく、学園長という立場の者として相応しくない行動をしていると自覚しているが、そんなことよりも現状をどうにかするのが優先され沙耶を逃がさないように腕をとる。
「そんなにつらいなら学園長を辞めればいいじゃないですか。」
「そんなことができればとっくに辞めています。しかし、辞めようとしたら先生たちがみんなで泣いて止めてくるんです。「貴女が辞めてしまったらだれがあの子たちを抑えるんですか」と口をそろえ。」
「それは、そのすみません。」
まさか自分たちがここまで学園長を追い詰めていたとは知らなかったのでとりあえず謝る。
「だからお願いします。この現状をどうにかしてください。」
泣きそうな声で懇願する学園長に、自分たちにも非があり、流石に不憫に思った沙耶は
「分かりました。それで私はなにをすればいいんですか？」
仕方なく折れるが
「それを相談しているんですよ。」
「やっぱり帰ります。」
すべて沙耶がやらなければいけないと分かった瞬間、再び部屋を出ようとする。

「すみません！！　お願いですから一緒に考えてください。」
「それで私にどうしてほしいんですか？」
「とりあえず、あなたたちに依頼を持ってこないようにしてほしいんです。」
「私が直接断っていけばその内なくなるんじゃないんですか？」
「そんなことをすれば、結局私にどうにかして欲しいということになります。」
「以来の報酬を極端に上げるというのはどうでしょう。」
「相手は相当の大金持ちです。ある程度だったら出してきます。」
それからいくつか意見を出してみるが、どれもこの状況を打開できるものではなく
「帰っていいですか。」
「お願いします。見捨てないでください。」
いつまでも打開策が見えず、だんだん面倒になりやる気がなくなってきた沙耶。
それを学園長が懇願して頑張ってもらうとする。
「仕方ありません。切り札を切りましょう。」
「なんですかそれは！！」
「カルーンには国を救ったという貸しがあります。その貸しを使って黙らせます。クレンドにはエルーの家の力と、私がなんとか頼んで黙ってもらいます。そうすればアトラスだけが干渉しようとしても他の2国が圧力をかけるはずなので少しは落ち着くでしょう。」
「頼んだ方から言うのはどうかと思いますが、そんなことをして大丈夫なのですか？」
「カルーンは私たちに国宝を渡していますから、それを交渉の材料にすれば強くは出れないはずです。ツェッティ家はクレンド王国でもかなりの発言力を持っていますし、私は国王の命の恩人です。その両方から攻めれば問題ありませんよ。」
「そうではなく、それほど国政に関わっていいのかと聞いているんです。」

「それこそ今さらです。少なくとも私はクレンドとアトラスの会議に出席して両国の王から顔を覚えられるほどの発言をしています。エルーも公爵家の娘ですし、レインもカルーンの代表の孫です。」
「そうですか。本当にありがとうございます。最後にはいつもあなたたちに頼ってしまって申し訳ありません。」
「その度に報酬をいただいているので気にする必要はありませんよ。」
「そう言ってもらえると助かります。それで今度はどんな報酬を払えばいいんでしょうか？」
これだけのことを沙耶に任せてしまったからには並大抵のことでは済まないと覚悟していたが
「私たちに魔法を教えてください。」
「えっ！？」
意外な報酬に間抜けた声を出してしまう。
「私たちはほとんど魔具に頼った戦い方をしています。だから世界最高レベルのあなたから魔法を教えてもらいたいんです。」
「それは構いませんが、本当にそれだけでいいんですか？」
「はい。他のみんなには私から言っておきますので。」
「分かりました。ちょうどあと半月で夏期休校ですのでその時に可能な限りで私の技術を教えようと思います。」
「では交渉成立ですね。早速カルーンとクレンドに手紙を書きますのでそれをそれぞれの国に送ってください。」
「本当にありがとうございます。」
こうして学園を騒がせていた沙耶たちへの依頼はぷっつりと途切れ、学園長が喜んでいた。
それでも世界を救った英雄として学園内でも問題は尽きず胃薬はまだまだ手放せそうにない学園長であった。

第７４話（前書き）

文章が読みにくいとのことなので、アドバイス通りにやってみました。
特に不満がなければこの先もこの通りにやっていきたいと思います。

第７４話

学園長の問題が落ち着きを取り戻し、平和になった日常を過ごしていても沙耶たちはいつも通り鍛錬は欠かさず行っていた。

「へぇ～。学園長から魔法の特訓を見てもらえるんだ。」

「ああ。魔具がなかった時、私やエルーはともかく2人は少し危ないからな。」

会話をしながらも2人はお互いに手を休めることなく組み手を行っていた。

「よくもまぁ、毎回毎回面倒事に巻き込まれるねぇ。」

沙耶に鍛錬用の剣を振り下ろす。

「好きで巻き込まれてれるんじゃない。」

その剣を巧みにかわし懐に潜り込みナイフで一閃する。

「しかも、全部解決してるってとこがサヤって感じだね。」

素早く後方に飛び、すぐに沙耶に肉薄する。

「私としては面倒事は勘弁してもらいたんだがな。」

沙耶もティアに向かい駆ける。

「たぶん無理じゃないかなぁ。サヤってそういう巡りのもとに生まれてるから。」

剣を横薙ぎに一閃する。

「それを認識できたら殺してやるのに。」

剣より上に飛び、そのまま回転して足を振り下ろす。

「うっ、相変わらずちょこまかと。」

なんとか剣で防ぐが衝撃がティアに伝わる。

「ティアが大雑把過ぎるんだ。」

一旦体制を整え再びティアに向かっていく。

それからお互いにぎりぎりのところでお互いの攻撃をかわし、ティアは大きな一撃を、サヤは小さくても確実にダメージを与えようとする。

「そこまでです。」

ぶつかり合っていた2人がその言葉で戦闘をやめる。

「普通鍛錬でほんとに急所を狙ってくる?」

「そうしないと鍛錬にならないだろう。」

「そりゃそうだけど・・・・」

結局言いくるめられ納得してしまうティア。

「あれ?　レインは?」

「覗き見をしている輩を追い払いに行っています。」

「またか。」

沙耶たちが有名になったことで、それを一目見ようと鍛錬中に覗きに来る生徒や、その実力を見てみたいと挑んでくる生徒が後を絶たず、その度に追い払っているのだがなかなか減ることがなかった。

「どうにかならないのサヤ？」

「考えてはいるんだが、なかなかいい案が浮かばない。この場所は私たちだけの場所というわけにはいかない、それに挑んできたやつはある程度やってしまってもいいんだが、覗きに来ただけやつに大きな怪我を負わせたら問題になってしまう。」

「いっそ、学園長にどうにかしてもらったら？」

「できなくはないが、これ以上学園長に負担をかけると胃に穴があいてしまう。」

「困りましたね。」

「ほんとだね。」

3人が悩んでいるとレインが帰ってくる。

「みんなどうしたの？」

「この状況をどうにかしようと悩んでるんだけど、難しくて。」

「なるほど。あっ、サヤさん、サヤさんに会いたいって人が来てますけどどうしますか？」

「誰だ？」

「カイン先輩です。」

意外な人物の登場に３人が顔をしかめていた。

ティアとレインを先に帰らせ、とりあえず用件を聞こうと合うことにした沙耶はカインと対峙していた。

「それでいったい何の用件ですか？　２度と私たちに近づかないと約束したはずですが。」

「それは悪いと思っているが、相変わらず先輩に対する態度とは思えないな。まぁそんなことは今はどうでもいい。お前に頼みがある。」

「お断りします。」

要望を聞く前に即断し家に帰ろうとするが

「ちょっと待て！！　せめて最後まで聞いて行け。」

「貴方が私に頼みに来るということは、どうせ国からの用件でしょう。１つの国に妥協してしまえばなし崩しに他の国にもということになりますのでお断りします。」

「うっ、まぁその通りなんだが。でもこれは国というより父上個人

の頼みなんだ。
」
「それならなおさらですね。個人的な依頼なんて聞いていたら、その内クレンド王からも頼まれてしまいます。」
結論は変わらずそのまま帰ろうとする。
「だからせめて最後まで聞いてくれ。」
「はぁ。それならさっさと言ってください。」
このままでは埒が明かないので聞くだけ聞こうとする。
「俺と一緒にアトラス王国に来てくれ。」
カインがそういった瞬間木に張りつけられ
「なにか言い残すことはありますか？」
グレイプニルでカインを縛りつけ、いつでも解体できる状態でエルーが今までにないくらい殺気を放ちながら遺言を聞こうとする。
「ちょっと待て！！　いったい何のつもりだ！！」
慌てて叫ぶが
「それが遺言ですか。私からサヤを奪おうなんて死ぬ覚悟はしてきたんですよね。」
まったく止まる気配はなくカインの命がカウントダウンを始める。

「待ってエルー！！　流石に王子を殺したらまずいよ！！」

沙耶が必死に止めようとするが

「サヤを奪われるくらいなら、国1つくらい滅ぼして見せます。」

エルーは止まらず解体しようとする。

「私が好きなのはエルーだけだから、どこにも行かないよ！！」

「そうですね。すみません私としたことが少々取り乱しました。」

沙耶の言葉でようやく冷静さを取り戻しカインを開放する。

カインは少々取り乱した程度でなんの抵抗もできずに殺されそうになってはたまらないといいたげだが余計なことを言ってまた怒らせると厄介なので沈黙した。

「しかし、あなたは先ほどの言葉の意味がわかってるんですか？」

「そのままの意味だ。父上からお前を連れてきて欲しいと言われたから来てほしいと言ったんだが。」

それを聞いた沙耶は大きなため息をつく。

「貴方は馬鹿ですか。そんなことをやったら下手をするとそのまま結婚まで持っていかれるんですよ。」

「はあ！！　なんで俺が色気の欠片もないお前と結婚しなきゃならねぇんだよ。」

失礼極まりない言葉に

「ではこの話はお断りします。エルー帰ろう。」

「はい。」

すぐさま帰ろうとするが

「ちょっと待って!!　悪かった。だから頼む、父上とあってくれ。」

「あなたは本当に馬鹿ですか!!　そんなことをしたら周りからどういう目で見られるか少しはその頭を使ってください。」

「俺も王族だ。政略結婚ぐらい覚悟はしている。」

「私が嫌です。私は心に誓っている人がいるんです。」

「このままのこのこ帰れるわけねぇだろうが!!」

「それなら力ずくで帰ってもらいます。」

沙耶がフレズベルクを抜き、カインに斬りかかる。
しかし、カインも学生とはいえ世界の抑止力を作る為に建てられたルクセント学園の最高峰である生徒会の一員、瞬時に反応し受け止める。

「上等だ、俺が勝ったら父上にあってもらう。」

「私が勝ったら今度こそ2度と近づかないでくださいね。」

沙耶とカインの戦いが再び始まる。

第７５話

歓迎会の時の再現のようにお互いに我先ににと前へと踏み込む。
そしてお互いの刃が交差し、金属音が鳴り響く。

「お前とはまた戦いたかったんだ、まさかこんな形で叶うとは思っていなかったが今度は勝つ。」

「威勢だけはいいみたいですが、あなたではフレズベルクの風の鎧を破れませんよ。」

風の鎧を発動させカインの攻撃をすべて流す。

「っち、やっかいな。」

いくら攻撃しようとすべて風で別方向に流されその隙に攻撃され打つ手がないカイン。

「分かったでしょう。貴方は私に勝てません。素直に負けを認めてください。」

「はっ！！　言っておくが強くなっているのはお前だけじゃないんだぜ。」

カインがリミッターを外しスピードを上げ沙耶に攻撃してくるが

「どれだけ速く攻撃しようが無駄ですよ。」

「これならどうだ、ディメンションエッジ。」

「っ！！」

まずいと思いとっさに横に飛び回避する。

「これなら通じるみたいだな。」

空間そのものを切り裂くディメンションエッジには流石に風の鎧も効果はなく、それが勝機と見ると続けざまに放ってくる。

「しかし、いつまでも持たないでしょう。」

カインの体は一撃放つごとに体から血を噴き出している。

「その前にお前を倒せれば問題ねぇ。」

ディメンションルーラーを発動できればいくら空間を切り裂こうと空間を曲げてしまえるのでかわすことができるが、沙耶では無詠唱で発動することはできず、全力で回避に専念しないと攻撃が当たってしまうため詠唱を行えない。
それでも黙って攻撃を受け続ける沙耶ではなく

「サンダースピア、狂乱」

距離を置き雷の槍を放ち足を止め、カインの限界までの時間を稼ぐ

「エナジーブラスト、波導」

エネルギーの塊がレーザーとなりカインに襲いかかるが光速の抜刀でかき消される。

「シャドーチェーン、蛇曲」

影より現れる鎖が蛇のように曲がり、縦横無尽にカインに迫る。

「邪魔だ！！」

鎖を切り裂き、そのまま沙耶ごと両断しようとするが、鎖に邪魔され狙いが甘くなり簡単にかわされてしまう。

「ルミナスインパクト、貫通」

ルミナスインパクトは触れたところに衝撃を与える魔法だが、沙耶が放ったものは貫通しカインにも衝撃を与える。

この魔法は大した威力はないが、ぼろぼろなカインにはそれでも十分な効果があり少しずつダメージを重ねていく。

「固有制御４倍速」

そして、ダメージに少し動きが鈍ると逃げ回っていた沙耶が急にカインに斬りかかる。

「ぐぅ。」

なんとか防ぐが突然のことに体勢を崩されてしまう。

沙耶は体勢を立て直させる隙を与えず、何度も斬りかかる。

カインは無理矢理にサヤに攻撃しようとするが

「これで終わりです。」

それをかわし、フレズベルクに魔力を流し風の刃でカインを切り裂く。

「がああああ！！」

それでも沈まず、なお沙耶に迫ってくる。
しかし、それにも冷静に対応し満身創痍で動きが乱れているカインに隙あらば風の刃で容赦なく斬り裂く。

「これ以上やっていると死にますよ。」

沙耶が忠告をしても止まることはなく斬りかかってくる。
この時のカインは意識は薄く、ほぼ無意識で戦っていた。
体はすでにぼろぼろで体を酷使した代償として体のあちこちから血が噴き出す。
沙耶も禁呪を使っている代償として体に激痛が走るが、それをものともせずカインを倒すために双剣を振るい、舞う。

「あああああ！！」

最後の力を振り絞り、最速の一閃を放つが

「無駄ですよ。」

この時のカインにはすでにディメンションエッジを放つ力は残っておらず、風の鎧を破ることはできず、一閃を放った隙だらけのカインを沈める。

「ようやく終わったか。」

「ご苦労様です。」

流石に死なれては困るのでグレイプニルで止血し、魔法で怪我を治していく。

「一応、応急処置はしましたけどどうしましょうか？」

「私が勝ったんだから少し働いてもらう。起きてください。」

応急処置はしたがまだ動ける体ではないカインを容赦なく蹴り起こす。

「がっ、てめぇ。」

「私の勝ちです。これでもう2度と私に近づかないでください。」

「っち。分かったよ。」

「あと約束を破ったのでその分働いてもらいます。」

「な、なんだよ。」

「内容は・・・・・」

カインと戦った日から数日後、覗きに来る生徒がぷっつりと途絶えていた。

「まさか本当に解決するなんて、流石サヤ。」

「今回は運が良かった、都合良く生徒会が動いてくれたからな。」

あの後カインに覗きに来る人たちをどうにかしてもらう約束を取り

付け、カインが生徒会の力を使い約束を果たしていた。
カインは生徒会の力を頼みこんで使わせてもらったので、そのあと仕事に忙殺されていた。

「でもよくエルーがそんなこと言われて我慢できたね。」

レインが疑問に思い尋ねるが

「いえ、サヤが止めなければいまごろ戦争が起きてたかもしれません。」

「あの時は本当にやばかった。」

「エルーはやっぱりエルーだね。」

レインは気楽に言っているが、冗談ではなく戦争が起きるほどのことをやらかしそうになったエルーを止めなければならなかった沙耶としては思い出しただけで身震いしていた。
そして、そんなレインに少し思うところがあったのか

「レイン、今日は本気でやるぞ。」

「えぇ！！　今日は軽い組み手のはずじゃ！！」

「大丈夫だ。内容は変わらない。その変わり今日は徹底的にしごいてやるから覚悟しろ。」

「サヤさん！！　どうしてそんなに怒ってるんですか！！」

「気のせいだ。早く構えないと痛い目を見るぞ。」

言いながらレインに肉薄し、なんの構えもとっていなかったレインは簡単に投げ飛ばされる。

「きゃあああ！！」

「立て、まだまだこれからだぞ。」

それから立てなくなるまでレインは沙耶の相手をすることになり沙耶を怒らせないようにしようと心に誓ったレインであった。

第７６話

カインとの事件から１週間後、ルクセント学園は夏期休校に入り約束通り学園長から魔法の指導を受けていた。
その一環として、４人がかりで学園長に魔法のみで模擬戦を行ったが

「アクアスパイラル」

「フレアボルト」

ティアとレインが同時に中級魔法を放つが

「その年齢にしてはなかなかですが、制御が少々雑ですね。」

学園長はそこに立っているだけで２人の魔法を打ち消す。

「光よ、我元に収束せよ。汝は希望となり世界の開闢を。開闢の光よ永遠の希望を灯せ、　ルミナスノヴァ。」

「闇よ、我元に収束せよ。汝は絶望となり世界の終焉を。終焉の闇よ刹那の絶望を示せ、ダークネスノヴァ。」

その隙に詠唱を終わらせ、沙耶とエルーの持つ最強魔法を放つ。
光と闇の共演が学園長を飲み込もうとするが
「ラディス」

その一言で打ち消される。

「そこまでです。」

学園長の言葉で模擬戦が終了し、沙耶とエルーは指輪から魔力を使っていたので疲れてはいないが、ティアとレインは自分の魔力で戦っていたので肩で息をしていた。

「４人ともこの年ならかなり優秀ですが、それでも生徒会レベルの生徒と比べるとまだまだですね。」

魔具を持てば無双の強さを発揮する沙耶たちだが、魔法だけでは学園長に傷一つどころかその身に魔法をとどかせることすらできなかった。

「レインさんは魔力効率が悪いですね。」

「うっ。」

レインは戦闘時フヴェルゲルミルの魔力を使用する為、魔法を制御できれば魔力量は関係なかったので魔力効率が悪くなっていた。

「ティアさんはあまりにも制御が雑すぎます。威力は高いですがそれではすぐに魔力が枯渇しますよ。」

「それは。」

ティアは特異体質のおかげで魔法の制御はできているが、それでも普通の人から見れば制御できているのが不思議なくらい制御が雑だった。

「エルーさんは魔力制御はとても高いレベルですが、１度に使用する魔力が少々少ないですね。魔力の心配がないのなら制御限界の魔

力量を増やせば生徒会レベルでもやっていけるはずです。」

「はい。」

エルーは強力な一撃はティルヴィングやヘイルダムといった制御を必要としない物ばかりで、逆にグレイプニルや罠に使う即興の魔法などは精密な魔力制御が必要となる為、1度に使用できる魔力はあまり大きくなかった。

「サヤさんは全体的にバランスは取れていますので、後はそれを伸ばしていくだけです。」

「なるほど。」

たった1度模擬戦を行っただけで、それぞれの欠点を指摘できる学園長はやはり超一流の魔法使いだった。

「皆さんにはそれぞれ個別にカリキュラムを用意しますので、今日は今言われたことを意識しながら私に打ち込んできてください。」

「「「「はい。」」」」

それからティアとレインは魔力切れで倒れ、沙耶とエルーは日が暮れるまで魔法を放ったが学園長を一歩も動かすことはできなかった。

「では今日はこれまでにしましょう。お疲れ様です。」

「今日はありがとうございます。」

「約束を果たしただけなので気にしなくていいですよ。それに生徒

に教えるというのは久々なのでこちらも楽しんでいますから。」

「そうですか、では明日もよろしくお願いします。」

「はい。」

学園長が去った後、４人は家に帰りそれぞれ休息をとっていた。

「学園長ってほんとに世界最高の魔法使いだったんだね。エルーほどじゃないけど魔力制御には自信があったのに。」

「流石は学園長をやってるだけはあるよね。」

「ところで2人はずっと学園にいるのか？」

沙耶の言葉に意味が分かっていないような表情を浮かべるティアとレイン。

「私とサヤは1週間後、1度実家に帰るんです。」

「それなら私も村に帰ろうかな。」

「私は1人でお留守番かぁ。」

「なに言ってるのティア？　ティアも私と一緒に来るにきまってるでしょう。」

「えっ？」

さも当然のように言うレインに疑問の声を出すティア

「私お父さんやお母さんにティアのこと紹介しちゃったから、ティアも村に顔を見せに行かないと。」

「はぁ！！」

突然の事実に驚き

「レイン、私をどんなふうに紹介したの？」

恐る恐る、しかしどこか諦めたような声で尋ねる。

「もちろん恋人として。」

その言葉に膝をつき終わったという表情浮かべる。

「まぁ、頑張れ。」

同情したようにティアの肩に手を置く。

「もしかしてサヤも？」

「ああ。」

エルーの実家に行くということは、必然的にエルーの家族と再会するということになる。

「でもサヤってエルーの家族全員に認められてるからまだましだよ。」

羨ましがるように言うが

「それはそれできついんだぞ。」

サヤも何とも言えない表情を浮かべる。

「どうして？」

「下手をすれば、その場で結婚式を開かれかねない。」

すべてを諦め遠くを見つめながら言う。

「なんというか、お幸せに？」

自分と同じ境遇なのにもう結婚まで迫られている沙耶に同情しとりあえず祝福しておく。

「だからティアも頑張れ。」

「ありがとうサヤ、私も頑張るよ。」

2人は握手を交わしお互いに励まし合っていた。
そんな2人を見ていた残りの2人は

「あの2人なにをやっているのかな？」

「分かりません。それよりレインさん、実家に帰る日程は私たちと同じでいいですか？」

「大丈夫だよ。」

「そうですか。それでは学園長にも伝えておきますね。それと、レインさん頑張ってくださいね。」

「エルーも頑張ってね。」

「はい。とりあえず婚約は済ませておくつもりです。」

「私も頑張ろう。」

2人の決意に、沙耶とティアの背に悪寒が走っていた。

第77話

次の日も沙耶たちは学園長からの指導を受けていた。

「ではそれぞれのカリキュラムを言いますのでよく聞いておいてください。まずレインさんはこの指輪に魔力を込めてあの的を壊してください。」

「それだけでいいんですか？」

「やってみれば分かりますよ。」

そう言われてやってみるが、的に当たるとレインの魔法は簡単にはじかれてしまう。

「それにいくら魔力を込めて一定までしか込められないので、効率よく魔力を使わないとあの的は壊れませんよ。」

それから何度もやってみるが、まったく壊れない。

「あれってホントに壊れるんですか？」

びくともしない的に疑問を覚え尋ねるが

「では私がやってみますのでよく見ておいてください。」

学園長がレインに変わり魔法を放つと壊れるどころか、的が消し飛んだ。

「では頑張ってください。」

そう言われレインが再び用意された的に向かって魔法を放っていた。

「次にティアさん、あなたはこれを壊さないよう魔力を込めてください。」

ティアに用意されたのは白い玉だった。

言われた通りティアが魔力を込めると赤く変化しすぐに壊れてしまった。

その隣では学園長が白い玉を各属性の魔力を込めいろいろな色に変化させていた。

「頑張ってください。」

そう言い渡され再び魔力を込めるがやはり壊れてしまう。

それから、赤い玉の残骸がティアの足元に溜まっていた。

「次はエルーさん、あなたはこの宝石に込められた魔力を外に出さないように制御してください。」

そう言って渡された宝石には約１０万程の魔力が込められ、封を解くと魔力が外に溢れそれ宝石の魔力が空になってしまう。

「申し訳ありませんが、魔力は自分で込めてください。流石に魔力ばかりは私にはどうしようもないので。」

「分かりました。」

エルーも課された課題に何度も挑戦していく。

「最後にサヤさん、あなたは私と常に戦ってもらいます。あなたはこれといった欠点はありません。なので戦いの中で伸ばします。」

「分かりました。」

そういわれ沙耶が詠唱を始めると

「言い忘れましたが、詠唱なんて唱える暇はありませんよ。」

「っ！！」

学園長が詠唱中の沙耶に容赦なく魔法を放つ

「少々スパルタですが、ある程度の魔法は無詠唱で放てるようになってもらいます。」

「くっ。」

沙耶が無詠唱で魔法を放つが学園長は沙耶が放つ倍の魔法を返してくる。

「頑張ってください。」

日ごろの鬱憤を晴らすかのように魔法を放ってくる。

魔王ほどではないがそれでも世界最強レベルの魔法使い、手加減されていてもその威力はまさしく桁違いであり、それに拮抗するため

に自分の限界を伸ばしていく。

そして日が暮れ解散となったが、結局誰も課題をクリアすることはできず沙耶も手加減されている魔法を相殺するのでやっとだった。

「疲れた。」

家に帰るとすぐにティアがソファーに倒れこむ。

「私も。壊すどころか傷1つつけられなかった。」

魔法にはそこそこの自身があったレインだが、その自信が砕かれ落ち込んでいた。

「そう簡単にできては学園長から指導してもらう意味はありませんよ。」

家に帰ってからも与えられた課題を続けているエルーだがやはり抑えることができず流出してしまう。

「明日こそは。」

学園長にやられっぱなしということは沙耶にとって初めてことであり、次こそはと意気込んでいた。

それから数日間、それぞれ与えれた課題をやっていたが

「駄目だ〜。」

レインは傷は付けられるようになったものの、壊すには程遠く泣き

ごとを言いながらも続けざまに魔法を放っていた。

「・・・・・・」

ティアは集中するために目をつぶり魔力を込めるがすぐに壊れてしまう。
すでに５００個以上壊し、ついに

「うがああ！！」

ティアが切れがむしゃらに魔力を込めるがやはりすぐに壊れてしまい、投げ出そうかと思うが、何とか堪え魔力を込めていった。

「っ！！」

エルーは2万程度までなら抑えることができるが、それ以上になると抑えることができず無理に抑えようとすると魔力が宝石の中で暴走し一気に流出してしまう。
それでも諦めることはせず、黙々と取り組んでいった。

「スパイラルフレア」

「発動が遅いです。それに制御が乱れていますよ。」

沙耶は混合上級魔法までは無詠唱で放てるようになったが、連続でやろうとするとどうしても制御が乱れ、その度に学園長からの反撃が飛んでくる。
しかし負けず嫌いの沙耶の意地で喰らいついていった。

そして日が暮れ解散となり、家に帰るとすぐに各々課題に取り組む

ようになっていた。
しかし、それでも簡単にはいかず失敗を繰り返していた。

「ねぇエルー、これできる？」

この中で1番得意そうなエルーに話を振ってみる。

「試してみないと分かりません。1度やってみます。」

そういって的に向けて魔法を放つと的は簡単に壊れる。

「すごい。」

あれほどやってもできなかったことを一発で成功させてエルーにその一言しか出なかった。
しかしエルーは愛用の魔具が高密度の魔力を込めなければ高位の魔物に対してダメージを与えられないのでこういったことは得意中の得意だった。

「なにかコツとかないの？」

「そうですね、レインさんは魔力を込めるだけで、それを収束できていないから的を壊せないんだと思います。」

「なるほど。言われてみればそうかも。」

エルーの助言に納得し実践しようとすると

「レインさんはこれできますか？」

今度はエルーの課題をレインが試してみると、簡単に抑え込んでしまった。
もともと得意な水の魔力とはいえ５００万以上の魔力を制御しているレインにとってこの程度の魔力を抑え込むことは容易かった。

「エルーは逆に収束させすぎてるんじゃない？」

「確かにそうかもしれませんね。」

それから2人はあれこれ言いあいながらそれぞれの課題を助けあいながら取り組んでいった。
それを見たティアは

「ねぇサヤ、なにかアドバイスないかな？」

「そうだな・・・ティアは最初の出力が大きすぎるせいで後半調整しているから難しく感じているんだと思う。だから最初の出力を少し抑えて後半に余裕を持たせれば上手く行くと思う。」

「なるほど。ありがとサヤ。なんとか頑張ってみるよ。」

沙耶からのアドバイスをもらったティアは、沙耶のアドバイスを意識しながら課題に取り組んでいった。
沙耶はみんなの課題の様子を見て、自分の能力を伸ばすためにどうすればいいか観察し、自分を高めていった。

第78話

1週間後、沙耶たちは予定通りに帰郷することになり

「戻ってきたら、また指導をお願いします。」

この1週間、お互いにアドバイスをしながら課題に取り組み、いまだ達成はできないが少しづつ前に進んでいた。

「楽しみに待っています。」

代表して沙耶が学園長と挨拶を交わし、それぞれ船に乗り込み帰郷して行った。

沙耶とエルーがクレンド王国に着き、エルーの屋敷に向かい歩いていた。

「この道も久しぶりだね。」

「そうですね。学園に通うようになってから本当にいろいろなことがありましたから、本当に懐かしく感じますね。」

歩きながら過去を振り返り、思い出話に花を咲かせる。

「最初はエルーのこと苦手だったけど、友達になって恋人になって逃げだしそうになってまだ頑張ろうと思った。こっちに来る前までは考えもしなかったよ。」

「私も最初は怖かったですよ。いきなり現れて魔物を瞬殺するんですから、でも今は私の1番大切な人です。」

「エルーに出会えて本当によかった。エルーに合わなかったら道を間違えてたかもしれない。」

世界の管理者に与えられた復讐の機会、もしエルーに会えなかったら間違いなく復讐していただろうと思っていると

「それはありませんよ。サヤは誰よりも強くて優しいんですから、なにがあっても自分の為に周りを巻き込むことはしませんよ。」

沙耶の心が分かっているかのように否定する。

「私はそんなに強くも優しくもないよ。エルーたちに支えられてようやく立ち上がれたし、エルーたちを傷つける相手には容赦はしない。」

「サヤは強いからこそ脆いんです。優しいからこそ厳しいです。私にとってサヤはそんな存在で、私はそんなサヤが大好きなんです。」

その言葉で会話が途切れ沈黙するが、お互いにお互いの考えてることが分かり心地良い沈黙の中屋敷へと向かっていった。

そして沙耶たちが屋敷にたどり着くと

「「おかえりなさい。」」

ミレイナがエルーを抱きしめ、そのとなりでルドガーが微笑んでい

た。

「お久しぶりです、お父様、お母様。」

エルーが帰郷の挨拶を交わすと

「お久しぶりです、ルドガーさん、ミレイナさん。」

サヤも挨拶を交わす。

「いろいろ大変だったみたいだな。噂はこっちにまで届いているよ、そんな中エルーを守ってくれてありがとう。」

「いえ、エルーを護衛する約束でしたが、私が危険なところに連れて行ってしまいすみませんでした。」

「それでもエルーはこうして無事に帰ってきてくれた。それだけで十分だよ。」

「ありがとうございます。」

「さて、いい加減に屋敷に入ろう。話したいことが山ほどある。」

ルドガーがそういうと、エルーとミレイナも屋敷に入り、沙耶も本当に自分の家に帰ってきたかのような暖かさを感じていた。

「お兄様とお姉さまは帰っていないんですか?」

「あの2人も忙しいようでな、1度顔を見せに来たらすぐに学園に

戻って行ったよ。」

４人で食卓を囲み、学園でのことをルドガーたちに話す。
そしてサヤとエルーの関係を話したところで

「そうか、おめでとう2人とも。」

ルドガーは祝福してくれたが、ミレイナの顔がすぐれない。

「どうかしたんですかお母様?」

それを不審に思ったエルーが尋ねるが

「なんでもないのよ。おめでとうエルー。」

あからさまな作り笑いを浮かべるミレイナに

「エルー、サヤくん、今2人はカルーンを救った英雄だ。だからこそ、その戦力を国に留めておきたいという国としての狙いもある。ミレイナは2人がいいように利用されないか心配してるんだ。」

ルドガーがミレイナの気持ちを代弁する。

「大丈夫ですよお母様、私たちはサヤの指示のもと動きます。そしてサヤがそう簡単に利用されるほど甘くはありませんよ。」

「そうね。サヤちゃん、これからもエルーのことよろしくね。」

「はい。必ず守り通して見せます。」

1度目は依頼として、そして2度目は沙耶自身の意思でエルーを守ると誓う。

「湿っぽい話はこれで終わりにしよう。エルー、結婚はいつするつもりだ？」

「明日にでもと言いたいところですけど、どうしますかサヤ。」

「できれば卒業まで待って／／／」

沙耶も女の子なので結婚は嬉しいのだが、流石に学園に通っている間は恥ずかしいので待って欲しかった。

「サヤがそういうなら私は構いませんよ。」

「あら残念ねぇ、エルーとサヤちゃんの晴れ姿見たかったのに。」

「卒業までの辛抱ですよお母様。私だってすごく我慢してるんですから。」

結婚式の沙耶の姿を想像して悶えているエルーとミレイナ。

「サヤくん、こんな娘だがよろしく頼む。」

「こちらこそよろしくお願いします。」

婚約を交わし、後はクレンド王国の滞在期間中家族水入らずで楽しむはずだけだったが、沙耶の人生がそんなことを許すはずはなく、屋敷に着いた次の日新たな厄介事に巻き込まれる。

沙耶たちが屋敷に着いた日から翌日、沙耶とエルーは屋敷で朝食をとり、エルーとリゼンを観光していると、国の兵士たちが街を駆け回っていた。

「なにかあったんでしょうか？」

「嫌な予感がする。エルー屋敷に戻ろう。」

面倒後に巻き込まれる予感がした沙耶はすぐに屋敷へ避難しようとしたが、後ろから走ってきた少女がぶつかってくる。
ぶつかってきた少女は反動で倒れてしまい、その後ろからあきらかにまともな職業ではない輩が追いつき

「やっと見つけたぜ、観念しておとなしく捕まりな。」

「断る。」

沙耶の直感がこれ以上いると本当に面倒なことになると告げ、すぐに立ち去ろうとするが

「そこの2人、私を助けなさい。」

沙耶を掴み、命令してくると追ってきた者たちが

「っち、見られたからにはお前たちも一緒に来てもらおう。」

時すでに遅く、謎の少女を巡る厄介事に巻き込まれていた。

第７８話（後書き）

続編はテイルズオブシンフォニア　ラタトスクの騎士の二次創作にするつもりです。

第79話

いきなりの展開だが、悲しいことにこのような展開に慣れていた沙耶は冷静な思考で

「取引をしよう。私たちを見逃す代わりに、私たちはあなたたちに危害を加えず、このことに関して一切公言しない。」

少女を見捨てて、一切関わらないで済むようにしようとするが

「そんな口約束が信用できるか、それにお前たち2人も力ずくで捕まえてしまえばいいだけだ。」

沙耶の願いは通じず、逃がさないようにと囲まれてしまう。

「サヤ、どうしますか?」

すでにグレイプニルを張り巡らせ、サヤの一言で殺すことも捕縛することもできるようになっていた。

「こうなったら早く事態を収拾した方がいいか。エルー、全員逃がさないように捕まえて。」

沙耶の一言でグレイプニルが襲いかかり面倒事を運んできた者たちを全員捕縛する。

目に見えないグレイプニルに捕えられた者たちは、突然動けなくなり必死に抜け出そうとするが

「あまり動かない方がいいですよ。」

しかし、突然動けなくなり、恐怖に支配されている者たちにエルーの言葉は届かず、抜け出そうとした者たちの体中から血が噴き出す。それを見た者たちは顔を青くし、おとなしくなった。

「さて、いろいろと聞きたいことがある。正直に答えなければ5体を1つずつ落とす。」

目の前で見せつけられた血の惨劇を思い出し、首を縦に振ることしかできない。

「なぜこの子を追っていた?」

「おい、なぜ私まで動けなくする。」

沙耶が指をさした方には、視認不可のグレイプニルに捕縛され、不満の表情を浮かべる少女がいた。

「少し黙っていろ。お前にも後で聞きたいことがある。」

そんな少女を無視し、質問の答えを聞こうとする。

「そいつを連れてきたら金をくれるって言われたからだよ。」

「この子にそんな価値があるのか?」

「そいつはクレンド王国王位継承権第2位、レミリア・クレンドだ。利用価値なんていくらでもある。」

その言葉を聞いた瞬間、また国の問題に巻き込まれたのかと頭を抱

えたくなったが、早く解決しないとさらに厄介なことになると思った沙耶は質問を続ける。

「それを誰から聞いた？」

公爵家の娘であるエルーでさえ気付かなかったレミリアの正体を知っているということは、城に何度も出入りし、王族に近い存在だということ。
なので、おそらく何度か仲介されて聞いているはずなので、正体はつかめないと駄目もとで聞いたみたが

「ツェッティ公爵家の使いだと言っていた。」

この言葉を聞くまでは、適当に情報を聞き出し後は兵士にレミリアを保護させ関わらないようにするつもりだったが、その言葉はサヤの逆鱗に触れてしまった。

「そいつはどこにいる？」

「ま、街の離れだ、そこに王女を連れて来いって言ってたからな。」

沙耶が無意識に放っている殺気に、生きた心地がせずこれ以上怒らせないように正直に答える。

「エルー、拘束を解いて。」

エルーは沙耶の言葉に微塵の疑問を持つことなく解放する。
解放された側としてはすぐにでも逃げ出したかったが、沙耶が放つ殺気に足がすくみ動けないでいた。

「王女をそこに連れて行きそいつを誘き出せ、成功したらそのまま逃がしてやる。」

逆鱗に触れられ怒りに狂いそうになっても、冷静に考え王女を囮にして犯人を突き止めようとする。

「お、おい。貴様何を言っているのか分かっているのか！！　私は王女だぞ、その私を囮に使うだと、国家反逆罪で死刑にするぞ。」

いきなり捕まえられ、次には囮として使われる境遇に異議を唱えるが

「黙れ。お前が王女だろうが知ったことじゃない。そもそも私たちがいなかったらそのまま捕まっていたはずだ。助けた報酬として利用させてもらうだけだ。」

普段の沙耶なら王族や身分が高い者に対して敬語を使うが、狂いそうな怒りを抑えるのに精一杯でそんなことに余裕が回らなかった。
そしてレミリアは沙耶の雰囲気に黙ってしまう。
そんな沙耶をエルーだけがいつも通りに隣に立っていた。

それから街の離れにある小屋に王女を連れていき依頼主を待つ。
そして、数十分後、複数の人が小屋に入って行った。

「おお、でかしたぞ。待っていろルドガー、貴様も没落させてやる。」

中年の男が歓喜しているが、この小屋の外には殺気だけで人を殺せそうな少女がいることを知っている者たちは約束の金を受け取って

もまったく喜べずにいた。
しかし、それを知らない男は上機嫌に王女を連れ小屋から出ようとする。

「お前か、私の身内に手を出したらどうなるか思い知らせてやる。」

沙耶がフレズベルクを構え、小屋の前に立ちふさがるように立っていた。

「なんだ貴様は？　そこをどけ、私は忙しいんだ。」

沙耶を無視して通り抜けようとした瞬間、暴風が吹き荒れ立っているだけで精一杯になる。

「お前には2つ選択肢がある、1つはこの騒動を起こしたのは自分だと自首する、2つめはここで私に殺されるか、10秒待ってやる。選べ。」

一旦暴風が止め、答えを聞こうとするが

「答えは3つ目で、お前を殺すだ。」

護衛の数人が沙耶を囲むが

「後悔するなよ。」

そう呟き、再び暴風が吹き荒れ、沙耶の怒りに応じどんどん強くなり囲んでいた数人を容易く吹き飛ばす。

「な、何だお前は！！」

「お前も貴族なら、サヤ・カミナギという名に心当たりぐらいあるだろう。」

「お前があの英雄の。」

驚きに眼を見開き、同時にとんでもない相手を敵にしてしまいどうするか慌てて考えようとするが、

「なにを考えているかは知らないが、ツェッティ家に手を出した時点でお前は終わりだ。いますぐにでも殺しやりたいが、この騒動の後始末の為に殺さないでやる。その代わりお前が持つ地位、財産、権力、すべてを剥奪しやる。」

その言葉に膝をつき、呆然とする。
こうして事件は幕閉じた。

翌日、この事件を引き起こした貴族はすべてを取り上げられ牢獄に入れられた。
事件を引き起こした理由は、カルーンを救った英雄の娘を持ち、さらに英雄の1人である沙耶を家に向かい入れることで、さらに発言力を強めるルドガーを陥れるためだった。
そして、その事件を見事に解決した沙耶はクレンド王に呼ばれ

「レミリアを救ってくれたことに感謝する。また君には借りができてしまったな。」

「気にしないでください。私たちの為に法律を作ってくれたことに感謝していますから。」

沙耶の言葉の裏には法律を作った借りはこれで返したという意味が含まれ、釘を刺されたクレンド王は

「本当に隙がないな。どうだ、レミリアを嫁にもらって私の側近にならぬか？」

「お断りします。王女様には私よりふさわしいお相手がいることでしょう。」

「君だけは敵に回したくないな。」

「褒め言葉として受け取っておきます。」

一国の王にも一歩も引かず対話を進め、ピリピリとした空気が漂う

「私からはここまでにしよう。レミリアが礼を言いたいそうだ、ぜひ会ってやってくれ。」

「分かりました。では失礼します。」

退出すると、すぐに応接室に通され、そこにはレミリアが待っていた。

「とりあえず助けてくれてありがとう。」

対峙して謝礼の言葉を述べる。

「こちらこそ協力してもらいありがとうございます。」

「昨日と雰囲気が偉く違わないか？」

昨日の見る人を威圧するような雰囲気を漂わせた者とは思えない沙耶に聞いてみるが

「気のせいですよ。きっと昨日は誘拐されそうになって気が動転していたんでしょう。」

適当なことを言ってさっさと終わらせようとするが

「私はお前が気に入った。どうだ私の護衛として雇われないか？」

この国の王族はどうしても沙耶を手に入れたいのか、王の次は王女が勧誘してくる

「私なんかよりレミリア様に相応しい者がいますよ。」

「英雄と呼ばれるお前より相応しい者などいるわけないだろう。欲しい者は何でもくれてやる、なんだったら私をくれてやってもいい。」

とんでもないことをさらりと言うが、若干恥ずかしいのか顔が少し赤くなっている。

「王女が軽々しくそんなことをいうものではありませんよ。」

しかし、沙耶はあくまで冷静に断ろうとする。

「同性愛者だという噂は出まかせか？　これでも外見には自信があるんだが。」

「私にはすでに心に決めた人がいますので。」

そういいながらそんな噂が立っていることに軽く落ち込んでいた。

「どうしても駄目か？」

「申し訳ありませんが。」

ようやく解放されるかと思いきや

「それなら友達になってくれ。」

「は？」

「私はこういう立場だからな、なかなか外に出られないし友達というものもいないんだ。その点お前は城に自由に出入りできるし、年も近いからな。」

「それなら喜んで。」

沙耶はもうすぐ学園に戻り、どうせ会うことはないだろうと安易な返事をする。

「そうか、私も来年からルクセント学園に通うことになるから、その時はよろしくな。」

沙耶が先ほどのセリフを激しく後悔した瞬間だった。

第８０話

王女誘拐事件から数日経ち、学園に戻る日がやってきた。

「「いってきます。」」

「向こうでも元気で過ごしてね。」

「サヤくん、エルーのことをよろしく頼む。」

2度目の別れのあいさつを交わすと学園に戻る為に港へと向かった。
そして港へと向かう途中にレミリアが待っていた。

「学園に戻るなら一言くらい言ってもいいんじゃないか？」

「王族に軽々しく挨拶なんてできませんよ。」

「私とサヤの仲だ、そんなことを気にする必要はない。それにサヤならお父様からも認められているから気軽に尋ねてきても問題はないぞ。」

「あなた方が気にしなくても、周りの方からは不審に見られるんですよ。」

ただでさえ、沙耶が同性愛者という噂があり、その上王女のところに頻繁に訪れていたら厄介な誤解をされかねない。

「むしろ私としては望むところだ。英雄を手に入れられるならその程度気にすることじゃない。」

「私が気にします。それに私には心に誓った人がいますので。」

そういいながら隣にいるエルーを見る。

「それなら、そいつと2人で私のもとに来い。それならいいだろう。」

「私たちは平穏な生活を送りたいのでお断りします。レミリア様と一緒にいたら平穏なんてものは一生縁のないものになってしまいますからね。」

「まあいいだろう。しかし、友達にはなってもらうぞ。これは言質は取ったからな。」

「分かりましたよ。学園に入学された時にはお世話させていただきます。」

「それは来年が楽しみだ。それではしばらくお別れだな、元気でやれよ。」

「お気づかいありがとうございます。レミリア様もどうかお元気で。」

「その様付けはどうにかならないか？　サヤに様づけされると気持ちが悪い。」

「王族に対して失礼な言葉使いはできません。」

「最初にあった時は命令口調だったのにか？」

「なんのことでしょうか？」

「あくまでとぼけるつもりか、来年こそはその仮面をとってもらうから覚悟しておけ。」

レミリアと別れの挨拶済ませ、今度こそ港に到着しルクセント学園に向かう。

沙耶は船上でもなにかに巻き込まれるかと警戒していたが、そんなことはなく無事に学園に着き家に帰りついた。

そして扉を開けた瞬間

「サヤ～。」

いきなりティアが泣きついてきた。

「聞いてよサヤ。レインが故郷に行ってすぐに両親に合わせるとか言って、連れて行かれたと思ったら、そこに村の人全員がいてそんな中で対面だよ！！」

「落ち着けティア。とりあえず離れろ、エルーが怖い。」

「やっぱり1度サヤとは話し合う必要がありますね。」

エルーは笑顔だが目が全く笑っていない表情で沙耶とティアを引き離す。

「ティアー。あっ、おかえりなさい。」

レインが沙耶たちを出迎えると、ティアがおびえた表情になり、沙

耶はエルーを必死に説得していた。

「ところでレインさん、ティアさんとなにかあったんですか？」

「ええっとね、実は・・」

以下回想

ｓｉｄｅ　ティア

レインが村に着くと村の人々が出迎え、レインがなにか言うとすぐに全員がどこかに行ってしまい不審に思ったティアが尋ねると

「どうかしたのレイン？」

「なんでもないよ、とりあえずお父さんとお母さんのところにいこう。」

「やっぱり会うのか。」

「大丈夫だよ。２人ともいい人だから。それにいずれは会わなきゃいけないんだから、いつあっても同じだよ。」

「そうだね、よし、行こうレイン。」

覚悟を決めたティアが向かった先には、ティアが予想しなかった出来事が迎えていた。

「着いたよ。」

「ここがレインの家？」

レインに案内されたところは家というより集会場のようなところだった。

「さぁ上がって。」

「お邪魔します。」

とりあえず上がり、部屋に案内されるかと思いきや、案内された先には村の人全員が集められ、中央の道だけが空けられ、その先にはレインの両親が座っていた。

「えっと、レイン来るところ間違ってない？」

背中に冷や汗をかきながら、わずかな希望を持ちレインに聞いてみるが

「間違ってないよ。ただいまみんな。」

あっさりと希望を打ち砕かれ、レインは堂々と道の真ん中を歩いていく。

ティアもレインに手を引かれ、周りからの注目を集めながらレインの両親のところまで歩いていく。

「おかえりレイン。ティアさんでしたか？　あの時は本当に助かりました。」

「いえ、気にしないで下さい。」

好意的な態度にティアの緊張が緩むが

「さて、娘との関係のことですが、娘からは結婚を前提とした付き合いをしていると聞いていますがそれは本当ですか？」

その言葉が出た瞬間、周りの視線が一気にティアに集まる。
ティアは結婚までは言っていないが下手なことを言えない状況に、必死にこの場をやり過ごす為に考えていたが、さらにレインが爆弾を投下する。

「本当だよお父さん。私とティアは心だけじゃなくて体も交わったんだから。」

レインが顔を赤らめながらとんでもないことを言った
その言葉に村の人たちがざわめき、レインの父からは逃げ出したくなるような視線を浴びせられ、体中から冷や汗が止まらず頭が真っ白になった。

「ほう。どういうことか説明していただけるかな。」

ティアにとてつもないプレッシャーがのしかかり、いますぐに逃げようとしたがレインがティアを掴み逃がさないようにしているため逃げられず

「えっと、その、「お願いお父さん、私たちの関係を認めて。」」

上手い言葉が思いつかかなったティアにかぶせるようにレインがティアを追い詰めるようなことを言う。

「レイン、お前はいずれこの村を治める者だぞ。そのお前が同性と

結婚できると思っているのか？」

「それは承知の上です。それでも私とティア2人で必ずこの村を守って見せます。」

「いいだろう。お前たちの覚悟はよくわかった、幸せになレイン。」

「はいお父さん。」

ティアがなにも話せずに勝手に話は進みいつの間にかレインが涙ぐみ、父と抱擁を交わしていた。
そして

「ティアさん、いやもう私の義理の娘となるのだからティアくんと呼ばせてもらおう。ティアくん娘をよろしく頼む。」

「ティア、絶対に幸せになろうね。」

ティアに発言権はなく、レインの思う通りに話がすすめられ、その場から解放されたと思ったら村全体でティアとレインを祝い、主役であるティアとレインは村の一軒一軒を周り挨拶して周り、その挨拶が終わった後には

「ティア。」

「今度はな・・んっ。」

公衆のど真ん中で見せつけるように長いく口づけを交わし

「ティア大好き。」

幸せそうな顔でティアに抱きついた。
当然、周りには村の人が見ていて、冷やかしの言葉や祝福の言葉が投げかけられた。

「ははははは。」

そんな中ティアは乾いた笑い声しか出ていなかった。

side out

ティアがあったことを言い終わると、沙耶がティアの肩に手を置きなにも言わず首を横に振った。
まさかレインがそこまでするとは思っていなかった沙耶はティアに同情の念を抱かずにはいれなかった。

「その後にも、寝る時になったら周りに誰もいなくなって、次の日の朝には遠巻きに噂されるし、もう嫌だ。」

いつも明るいティアが本気で沈んでいた。

「ティアは気にしすぎだよ。」

「そうですよ。私とサヤは国中で噂されているんですから村の中くらいどうということはありませんよ。」

そんな中エルーとレインはいつも通りだった。

第81話

沙耶たちはそれぞれの故郷から学園に戻った後、再び学園長からの指導を受けていた。
沙耶以外は、帰っている時も課題に取り組んでいたが、やはり簡単には行かず思考錯誤を繰り返していた。
そして、指導が終わると家に戻り課題に取り組んだり、休んだりと平穏な日常を送っていた。

「エルー。」

「どうしたんですかサヤ？」

「今の魔銃を少し改良したいから少しの間貸してくれない。」

「それは構いませんが、どうして改良なんて思ったんですか？」

「エルーも扱える魔力が少しずつ増えているみたいだから、指輪の魔力だけじゃ足りなくなるかもしれないからティアたちみたいな魔具を作ろうと思って。」

「しかし、せいぜい４万程度が精一杯ですよ。」

「そこはシンモラの錠と同じものをつけて調整は効くようにしておくから大丈夫。それに今後は魔具に込められた魔力で魔弾を撃てるようにして、ティルヴィングも込められる仕様にするつもり。」

「それは助かります。ティルヴィング用の銃を持ち歩くのも意外と邪魔だったんですよ。」

「他に何か欲しい物ある？」

「そうですね、私も接近戦用の武器が欲しいと思っているので、ナイフや短剣のようなものがあれば嬉しいです。」

「分かった。改良には3日くらいかかると思うからそれまで楽しみにしてて。」

「はい。よろしくお願いします。」

沙耶はエルーから魔銃を受け取り、早速実験室に下りていき改良を始めていた。

そこにはティアの姿もあり、エルーの接近戦用の武器に着いて一晩中意見を出し合い、次の日、沙耶は疲れることはないので問題はなかったが、ティアは寝不足でその日まったく集中できずにいた。

「大丈夫ティア？」

「大丈夫じゃない。少し寝かせて。」

「しょうがないなぁ。サヤさん、ちょっとティアを家に送ってきます。」

「分かった。」

「行こうティア。」

「う～ん。」

ティアがレインに寄りかかりながら家に戻っていき、そのままレインが戻ってくることはなく、沙耶たちが家に戻った時げっそりとしたティアとつやつやしたレインがいた。

「サヤ、ちょっといい。」

「どうしたティア？」

「ちょっと魔具について話したいことがあるから実験室まで来て。」

「分かった。」

ティアに呼ばれ実験室に下りていくと

「サヤってどうやってエルーを抑えてる？」

「なにを言ってるんだ？」

いきなり訳の分からないことを言ってくるティア。

「最近レインが積極的すぎて体が持たない。今日だって家に帰った途端に襲われて、お願いサヤ、なんだかんだでエルーを抑えてるっぽいし、なにかいい方法ってない？」

切羽詰まった様子でたずねてくるティアに沙耶は

「諦めろ。」

その一言で切り捨て、エルーの魔具の改良と開発に取り掛かる。

「お願いサヤ、レインのことは好きだけど、どんどん大胆になってその内、学園内で襲われないか不安なんだよ！！」

「言っておくが、私だってエルーを抑えられているわけじゃない。昨日だって2人が寝ている間に・・・。」

語尾がどんどん小さくなり、顔を赤くしながら言う。

「それは何と言うかご愁傷さま。」

「だから私に相談してもあまり意味がない。そういうことはレインと直接話し合ったほうがいいはずだ。」

「そうだよね。今夜話してみるよ。」

自分で何とかしようと決意したものの、その後の展開を予想すると挫けそうになっているティアだった。

「ティア、そろそろ始めよう。」

「分かった。」

なにかを諦めたように作業に没頭し、気がつけば朝になっておりティアが予定以上に頑張ったため予定より早くエルーの魔具が完成した。

「エルー、これが言ってたエルーの新しい魔具だよ。」

沙耶がエルーに渡したのは金色と銀色に輝く銃と1本の短剣だった。

「その銃の名前金色の方がソル、銀色の方がマニ。そして短剣はギムレー。」

ソル、マニは北欧神話においてそれぞれ太陽の女神、月の神の名称。ギムレーはラグナロクの後にも残った場所であり、そこから新たな時代における人を受け入れた場所。

「ソルとマニはそれぞれ３００万くらいの魔力を込めて、シンモラの錠で調整できるようにして、ティルヴィングを込められるように改良した物。もちろんソルとマニは時の流れを殺してるからいくら魔力を使っても減ることはないから、そこの魔力を使って魔法を使えるようにもしてある。そしてギムレーはフレズベルクと同じように刻んだ魔法だけを込められた魔力で発動するようした物で、その魔法は自分の周りに視認不可な結界を張るラディス。結界の大きさは自分で調節できるし、出力を最大にすればレヴァンティンの第６解放でも防げる守護の短剣。」

「ありがとうございます。予定より早かったんですね。」

「ティアが一晩中手伝ってくれたから。」

「そうですか。では後でティアさんにもお礼を言っておかなければいけませんね」

エルーの新しい魔具を手渡した瞬間、沙耶とエルーを白い空間が包み込んだ。

「これは！！」

「なにが起こってるんですか？」

1度サヤが体験した空間が再び現れ、今度はエルーを巻き込み展開された。

「何度もお呼びして申し訳ございません。」

ずっとそこにいたかのように現れた世界の管理者。

「あなたは？」

初めて合うエルーはなにが起こっているか理解できずにいた。

「私はこの世界の管理者です。今回はサヤ・カミナギに頼みがあってきました。」

「お断りだ。」

取り付く島もなく即答で拒否するが

「実は、他の世界の管理者がオーディーンの欠片を取り込んだ人間をどうにかしてほしいとのことだったのであなたに頼みに来たんです。」

しかし、沙耶の言葉を完全に無視し話を進める。

「話を聞け、断ると言っているだろう。」

「本来、オーディーンの欠片を取り込んだところで人の限界を超えることができない以上神を超えることはできないのですが、どうやら特別な方法を使い世界を支配しようとしているようです。」

「だから話を「しかし、力の強い神が直接手を下そうとすると世界がその重さに耐えきれず世界は沈んでしまいます。そこで神をも殺せる力を持ちながら人間であるあなたに白羽の矢が立ったというわけです」殺すぞ。」

「すみません調子に乗りました。しかしこうでもしないと話が進まないと思った物ですから。」

普通の人が殺すと脅しても世界の管理者である彼女を殺すことなのできないが、沙耶なら話は違い抵抗する間もなく殺されてしまうので、素直に謝る。

「とにかく断る。そんな面倒なことに誰が首を突っ込むか。」

断固として否定の構えをとる沙耶に

「しかし、その世界を支配されてしまうと次はこの世界を支配しようとするかもしれませんよ。」

「可能性の話だろ。」

「はい。ですが巻き込まれ体質のあなたがいるんですよ。そうなると可能性はあると思いませんか？　それなら力をつけていない今のうちに倒しておいた方が後々楽だと思うんですが。」

否定したかったが今までのことを省みると否定できない沙耶。

「他に誰かいないのか？　別に私じゃなくてもいいだろう。」

しかし、それでも面倒事を避けたい沙耶は質問を重ねるが

「無理です。人間の限界を超えないとはいえ、限界ぎりぎりの能力を持つ相手です。それにオーディーンの欠片を持っている者は少なからず神に近づきますから普通の人間では絶対に敵いません。」

悉く打ち砕かれ、沙耶が行かなければならない状況に追い込まれる。

「しかし、私はエルーを守る必要がある。」

「では、そちらの方も一緒にお送りします。もちろん残りの2人も。」

「だが、私たちが突然いなくなったら世界が混乱するだろう。」

「そちらについては心配はいりません。今からお送りする世界と私が管理する世界は時の流れが違うので、向こうでの1月がこちらの1日となりますので。」

行きたくないため、言い訳を考えるがこれも悉く言い返され

「そのかわり何か報酬を用意しておけよ。」

「それは向こうの神に要求して下さって結構ですよ。」

最後の抵抗もむなしく、再び世界を救う旅が決定してしまう。

「それではお送りします。」

白い空間に魔法陣が浮かび上がり沙耶とエルーを包み込む

「それではよろしくお願いします。」

最後にそういうと沙耶たちはこの世界から消え、新しい世界へと跳ばされた。

第８１話（後書き）

続編の投稿はまだ未定です。
気長にお待ちください。

設定資料４（『死』を断定する少女終了時）

神凪沙耶（かみなぎさや）

性別　女

年齢　１５歳

身長　１５０ｃｍ

体重　？？？

外見　　イメージ的にはひ○らしのにぱー☆とか言う腹黒狸。

性格

今の世界で王族や貴族などという身分の高い者たちと交渉や腹の探り合いをしていたので、口調は高圧的、しかしエルーにだけは普通。身内に危害を加えようものなら世界を敵に回しても殺す程に容赦はなく、身内に対しては厳しくなれない。

能力

死の宣告

あらゆるものに死を与えることができる。

射程距離などはなく沙耶が認識できさえすればどんなものでも殺すことができる。

沙耶は自身の時の流れを殺しており、当時の体から時間が流れず固定されている。

故に全力で走っても全然疲れない。例えば何か食べても飲み込んで

しまえば消えてしまう。
また、概念すら殺すことができる。例えば剣で斬ろうとした時その剣の”斬る”という概念を殺してしまえば斬ることは不可能になる。
この能力で自身を殺すことはできず、また固定されているので、実質沙耶は不老不死。
しかし、この能力は手加減は一切できず殺すことしかできない。

エルー・ツェッティ

性別　女

年齢　１６歳

身長　１６０ｃｍ

体重　???

外見　某運命に出でくる、切れると髪が白くなり黒い笑みを浮かべる人

性格
沙耶と出会うまでは周りには自分を利用しようとする者ばかりで内気だったが、同年代の沙耶と知り合ったことから自分を表に出すようになり、沙耶を守りたいという一心で強くなった。
今では世界を救った英雄の１人。
独占欲が強く沙耶が身内以外と仲良くしているとすぐに嫉妬する。

ティア・ノート

性別　女

年齢　１５歳

身長　１６３ｃｍ

体重　？？？

イメージ　まじこ〇のワン子

性格

何事も深く考えないタイプ。
ただし、身内に害をなすものには結構容赦ない。
他人を信用できなかったが沙耶たちのおかげで少しはましになっている。
手先が器用で魔具に関しての知識が豊富なので魔具作成を趣味にしている。
あくまでも趣味なので専門家と比べると見劣りするが学生レベルだと最高レベル。

能力　炎の支配者

炎なら相手が放った魔法でもコントロールできる。
最高では精霊魔法でさえもコントロールすることができるが、眷族ではなく突然変異型なので精霊魔法は使えない。

レイン・シーファ

性別　女

年齢　１５歳

身長　１５３ｃｍ

体重　???

イメージ　直視の魔〇の使い魔の猫

性格

比較的おとなしかった性格だったが沙耶たちと過ごすうちに活発的な性格になり、沙耶の教えにより腹黒いところももつようになった。身内以外でティアにちょっかいを出した者はすぐさま氷漬けにし、ティアに対しても嫉妬全開で迫る。

能力

ウンディーネの加護

シーファの一族ならだれでも持っている能力。

効果は魔力量の増強、水属性魔法の強化、水魔法の耐性の強化などがある。

魔具

フレズベルク

北欧神話において世界樹の梢に住んでいるとされ、根元にいるニーズヘッグと対をなす存在であり世界のあらゆる風を起こしたといわれる鷲の名。
見た目は翡翠色の双剣であり剣に刻まれた魔法で風を自由に操れる。
また、魔力を込めれば風の刃を発生させることも可能。

レヴァンティン

北欧神話のおいてラグナロクの終焉時スルトが振るったとされる炎の剣であり、その炎は9つある世界を焼きつくしたといわれている。
見た目は黒い西洋剣であり、ティアが開放すると紅蓮色に染まる。
シンモラの錠によって9割以上は封印されているがそれでも魔物の群れを一撃で焼きつくす程の威力であり、ティア以外が触れるとその部分が溶け、防御不可の溶断の刃となる。

フヴェルゲルミル

北欧神界において、存在する9つの世界のうちの1つ、氷の国ニヴルヘイムの中央にあったとされる泉の名称。
見た目は水色の扇でこれといった能力はなく単に膨大な水の魔力を込め、沙耶が時の流れを止めた物

ティルヴィング

北欧神話において、オーディンの血を引く王、スウァフルラーメが

ドヴァリン、ドゥリンという二人のドワーフに作らせた黄金の柄で錆びることなく鉄をも容易く切り、狙ったものは外さない剣。
見た目は黄金の弾丸で魔力を螺旋状に放出する。
またあまり強力ではないが追尾機能も付いている。

グレイプニル

北欧神話において、ラグナロクまで魔狼フェンリルを縛りつけていた紐。
見た目は普通の腕輪だが、そこから視認不可の細い糸を無限に出すことができ、糸の１本１本を魔力を織り込んでおりそう簡単には切れない。
グレイプニルに触れると、別のところに張っている糸が襲いかかり拘束する。

ヘイルダム

北欧神話において、ラグナロクの時ロキと相打ちになった光の神の名。
見た目は少し大き目の宝石で、シンモラの錠で封印されており、解放すると込められた魔力が一気に刻まれた魔法に収束され半径１００ｍの範囲を光の壁で囲み閃光が飲み込む。
単発式広範囲殲滅用魔法爆弾。

ソル、マニ

北欧神話においてそれぞれ太陽の女神、月の神の名称。
見た目は金色と銀色の双銃でそれぞれに込められた魔力で魔弾を撃てる。
またティルヴィングを込めることができるようになっている。

ギムレー

北欧神話において、ラグナロクの後にも残った場所であり、そこから新たな時代における人を受け入れた場所。
見た目は普通の短剣で、視認不可の魔法障壁ラディスという魔法を刻んだものでギムレーに込められた魔力で障壁を張ることができ、大きさや強度は調節可能であり最大出力にするとレヴァンティンの第6解放まで耐えることができる。

シンモラの錠

北欧神話においてレヴァンティンを持ち、神々を倒してきた炎の巨人スルトの伴侶であり、レヴァンティンの保管者であるシンモラがレヴァンティンを保管する時9つの頑丈な錠をしたといわれている。
見た目は小さな宝石であり任意で段階的に解放することができる魔具。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9566n/

『死』を断定する少女

2010年12月5日11時39分発行